
くろやみ国女王

やまく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くわやみ国の女王

【Zマーク】

Z89110

【作者名】

やまく

【あらすじ】

いきなり「統治してください」ってアンタ・・・殴るわよ？ 家を焼かれ殺されかけ、恋人とも離れ離れになってしまったファム。助けてくれた銀色の精霊に案内され、彼女は地の果ての國の女王となる。

現在は毎週日曜日に【本編】もしくは【番外編】を更新しています。詳しくは活動報告をご覧ください。

序幕（前書き）

さわりです。

序幕

火の跡がまだ熱をもつてゐるようだった。

包帯を巻いていない方の手で触ると、肌の感覚はなかつた。

「どうぞ、こちらです」

「ちゃんと跡は残らないのよね？」

暗がりの中、先を歩く相手に向かつて声を投げかけた。

「もちろんです。ついでにお気に召さない箇所を整形する事も出来ますか」

「結構よ。これでも自分を氣に入つてゐるの。さあ、治療室へ案内して」

見た目も変わらない。何も変わらない。けれど私はここで新たに生まれかわるのね。

明けられた扉の先の、人工的な明かりが目に痛かつた。そして、暖かく優しい姿が脳裏によぎつた。

そんなに時間は経つてないはずなのに、ひどく懐かしく感じた。

「さよなら」

一筋の涙をふりはらい、彼女は一步を踏み出した。

序幕（後書き）

自分にハッパかけるつもりで書いて載せましたです。
ハッピーホンドなファンタジーを予定しています。

転がり込んで来た銀色と炎 1

それは「日前のこと」。

その時はとんでもない事でも、後になつて考へてみれば、ただの始まりに過ぎなかつたといつのは良くある話。なにがどう転ぶかなんて、誰にだつてわからない。私にだつてわからない。

「国をひとつ治めませんか?」

「はあ?」

いきなりそんな事を言われたら、誰だつて冗談だと思つわ。新手を越えてひねりすぎたキャッチセールスなんて、誰もひつからぬ。怪しそうなので無視して通り過ぎた。

バイトを終えて帰り道、まだいた。路地の角によりそつて、じつとりとこちらを見ている。

「あのう…国を…どうかと…その」

「いまどきもつとマシな話し方があるでしょ?」。アンタ野良精靈? 私になにか用?」

最初の勢いもなく、もじもじしている相手は精靈だつた。成人男性ほどの身長に、すすけた外套とこれまたボロいショールで頭を隠している。

言葉を喋るほどに高度なタイプがこんな街のど真ん中にいて、よく捕獲されなかつたものだわ。

「ワタシが精霊とわかるのですね、流石は国主さま」
そんな変な格好で平氣で街中にはいるのって、大抵精霊なんだけどね。

「国主ってどういふことよ？ とりあえずアンタうち来なさい。こだどこかの精霊マニア貴族に捕まるわよ」

人目もあるので、さつさと後をついてきなさいと先に歩き出す。

「つ、捕まるどどうなるのですか？」

「詐欺みたいな契約に縛られて使役されるか、分解されて人工精霊に改造されるんじゃない？」

「ひー！」

…ホントよく無事だったわね、コイツ。

「さつさと入んなさい」

「！」が国主さまのおうちですか」「そうよ、平民階級の区画の一階建ての家。愛すべきマイホームよ」

そして両親が幼い頃に死んでしまった私の唯一の居場所。

「ほいほい他人を入れはしないけれど、「精霊にはやさしく」とい

うのが我が家家の家訓なので、野良精霊を一階の食堂に案内した。野良は緊張しているのか、座ると縮こまつて大人しくなってしまった。

私は自分用にハーブティーを淹れて野良精霊の向かいに座った。

「なにか食べる？あとそのショール汚いから外してくれない？」

「し、失礼しました。食べ物は…結構です」

慌てて取り外されたボロショールの中から出て来たのは銀色だった。銀髪に、銀色の目しかついていない仮面がついている。仮面の鼻と口に穴がない以上、人間であるはずがない。

「銀色なんて初めて見たわ。それにアンタ、顔が無いなんてかなり古い精靈なのね」

「ありがとうございます…」

「この意味不明な返答はまさしく精靈ね。」

「で、私になんの用なの？」

「あの…あなたにワタシの国を統治して頂きたいのです。もう、土地の氣脈が流れなくなつて随分と経ち、崩壊の一歩手前なんです」

「…まったく話がみえないわ。それってどこの國よ」

「かつては暗病國あんびょうこくと呼ばれていました」

「めちゃくちや陰気くさい名前ね…」

とつぐに滅びた國の、頭が飛んじゃつた生き残り精靈かもしけないわ。私がどう説得して追い返そつかと考え始めたときに、玄関の呼び鈴が鳴つた。

「ああ！ もうヴィルがくる時間だった！ アンタここにいていいから、続きは後でね！」

慌てて私は部屋に行き、鏡で顔を確かめ（決めメイクではないのはこの際仕方ない）、お気に入りのワンピースに着替えて玄関に走る。食堂の銀色はもう視界に入らない。

「ヴィル！」

「こんばんはファム、ちょっと早くきてしまいましたか？」

「うん、待つてたわーさ、行きましょ」

ヴィルの腕に抱きついて外へ向かう。

「おや、今日はあなたの娘家に入れてくれないのでですか？ 楽しみにしていたのに」

「外でご飯を食べたい気分なのー五番街に気になるお店があるのよ

「またお酒が充実した居酒屋ですか？」

「そうよ。あなたの得意な高級酒は無いけどね。嫌かしら？」
笑顔で言つと、彼はくすぐったそうに笑いかえしてくれた。私は
彼のこのやさしい笑顔が大好きだった。

「いいですよ。また貴女のとつておきの飲み方を教えてください」
この時は、ヴィルと笑いあえるだけで私は幸せだった。ただそれだけ
でよくて、それ以上のものなんて欲しいと思つていなかつた。

それから美味しいお酒と美味しいご飯を食べて、笑いあつて、夜
の街を手をつないで歩いて…

「あなたにもつと触れてもいいですか…？」
かすれた声で耳元にささやかれて、私はどきどきしながらうなず
いた。

今考えるとそこへ向かつて誘導されていたとしか思えないタイミ
ングで遭遇した高級ホテルで、私たちは夢のようなひとときを過ご
た。

「次は五日後に迎えに行きますから、絶対に家についてくださいね」
そう言つて、ヴィルは私の手にやさしく唇を落とし、仕事があるか
らと先に帰つた。

一人残つた私は幸せな気持ちに浸りながら身支度をして、高級ホ
テルを出た所で軍警察に捕まつた。

転がり込んで来た銀色と炎 1（後書き）

話のペース早いかな？

ひとつの話をどれくらいの文字数にするか、さべつさべりです。

分かりにくい部分などあれば改善＆文章の追加をしますので、ご意見お待ちしています。

11/16：誤字修正

11/25：単語微修正

転がり込んで来た銀色と炎 2

連れて行かれた先は警察の建物ではなく、大貴族のものと思われる大きなお屋敷だった。

そこで表情も言葉もない軍の警察隊に囲まれて、見知らぬ貴族の中年男性が私を待っていた。金の刺しゅうの入った豪華な上着、でも黒い布で紋章の部分は隠されていた。

「君は今ヴィル氏とつき合っているのかね？」

「そうです…彼に、何かあつたんですか？」

私がそう言ひると中年男性は鼻で笑つた。相手を見下す、嫌な笑い方だつた。

「何も無い…いや、これからあると言ひべきか…。おじょつさん、君は彼がどの階級にいる者か知らんようだな」

知らない。私はヴィルが何者なのか知らなかつた。
街で偶然知り合つて、いつも街で待ち合わせたり、家に迎えに来てもらつて会つていた。

幸せすぎて、知ろうとも思わなかつた。

「知らないのなら知らんままでよろしい。だが事情があつてね、君と別れたいと言つて私に頼んで來たんだ」

言われた事の衝撃よりも、まず先に涙が出た。静かに、傷から溢れ出る血のようだ。

田の前にいる中年男性は明らかに上級貴族だつた。言う事にどれ

だけ真実が含まれていよつとも、とにかく私に彼と縁を切れと言つていることは理解出来た。

「かれと…ヴィルと話をさせて下せー。それで納得できれば、彼の元を去ります」

枯れた声で言いながら更に涙があふれた。靴のつま先に雲が落ちる音が聴こえた。けれど、歯を食いしばって目線は相手から外さなかつた。

脳裏には、「五日後に迎えに行きますから、絶対に家にしてくださいね」といつ、数時間前に聞いたばかりの彼の声が蘇った。

「残念ながらそれはできない。彼はもう君とは会わないと言つているんだ」

中年男性は例の笑い方をした。私は直感的に相手が嘘をついている事を知つた。

私にはまったく勝ち田が無かつた。今ここで反発すれば、脅しといつ名の危害が襲つてくる可能性が高い。私にも、彼にも。

「わかりました。もう会いません。それが彼のためになるのなら」「ものわかりが良くて助かるよ。しかしこの街にいる以上、どこかでばつたり会うかもしれないね」

目の前の中年男…もういいや、中年デブオヤジは、にやついた顔のまま召使いを呼び、封筒を握らせて來た。私は氣色の悪さに手を振り払いたいのを我慢し、震えた。

「手切れ金と、立ち退き金、それに国を出る旅券もサービスしておいた。君はまだ若いんだからどこへでもいくといい」
優しい口調でえらい侮辱をくれたものね。

私はそれから一言も発さずに、家に帰つた。分厚い封筒を持って。

家に帰ると銀色の野良精靈はいなかつた。

やはり勘違ひだつたのねと、一息ついて、封筒を食卓の上に置き

つぱなして、甘いハーブティーを飲んで、井戸に顔を洗いに行つた。

それから部屋着に着替えて、一眠りしようとベッドに入つたけれどまるで寝付けなかつた。

もやもやとしたものがまとまらなくつて、結局起きて田に焼けた壁紙眺めていると、窓の外に金色の小鳥が飛んでいた。

ヴィルの精靈だわ！

急いで窓を開けると、金色の小鳥は足で掘んでいた小箱を私の膝の上に落とした。

空けてみると、黒い石がはめこまれたペンダントと、手紙が入つていた。

“愛しいファム

このペンダントをいつも身につけていてください。危険から貴女を守ってくれるまじないをかけてあります。どうか無事で。五日後に待つていて下さい。絶対に迎えに行きます。あなたのヴィルより”

嬉しくつて、涙が出て來た。彼は知つてゐる。そして私を案じていてくれる。金色の小鳥が飛び去らないように押さえつけながら、私はあわててヴィルに返事を書いた。

“大好きなヴィル

ペンドントをありがとう！ 知らない貴族のおじさんと会つたわ。五日後に会うのは危ないかもしれないわ。あなたの身の回りにも危険が迫つていてるかもしない。お願ひだから気をつけて！ 愛するファムより”

慌てて書き上げた手紙と、身につけていた指輪をハンカチでくる

んでキスをひとつ落とし、金色の小鳥に持たせた。

「押さえつけてごめんね、急いでたの。また荷物運んでね」頭を軽くすると気持ち良さそうに田を細めて、金色の小鳥は開いたままの窓から飛び立って行った。

それから私は動き回った。

まずバイト先の花屋に行き、五日間のお休みを貰つて、帰り道に、パンやチーズに卵、干し野菜などの保存のきく食べ物を買い込む。それから家じゅうの大事なものをかき集めて、もしも早くにヴィルが来てくれた時にいつでも出かけられるよう、準備をした。

ひととおり思いつくことをやってしまって、とつておきのジャムをパンに塗つたものと、買つてきたプリン、バーラを効かせたホットミルクでお腹を満たして、これまたとつておきのヒッセンシャルオイルでボディマッサージに精をだした。

そしてベッドで深く眠つた。

ヴィルがくれたペンダントを握りしめながら。

転がり込んで来た銀色と炎 2（後書き）

まだまだ前哨戦。
導入部分です。

描写が少ないのも前哨戦で導入部分だからです。（キリッ

転がり込んで来た銀色と炎 3

最悪の寝起きだった。

まずは騒がしいな、と思い、目を開けると全てが真っ赤だった。
そして煙。

「火事だーーー！」

外からの声に、うちが燃えているのだと気付いた。

「中にはいるかー？」

「つーーー！」

慌てて叫ぼうとして、思いつきり煙を吸ってしまった。喉が切れるようなひどい咳き込みに耐えていると、また外から声が聞こえた。「この家の若い娘はもう逃げ出している。このまま燃え尽きても平氣だう」

私はここにいるわよ！　何言つてるのよ！

「でも万一といつことも…、そ、それに、延焼もあります！　はやく消火を！」

それからまたあちこちで炎が盛んになり、外の声は聽こえなくなってしまった。

私は急いで一階へ降りた。

意外な事に、一階の方がまだ燃えている部分が少なかつた。

慌ててまとめていた荷物を肩掛けの鞄に詰め込んで、私は裏口から外へ飛び出した。

裏庭は無事で、私が大事に育てていた花達も無事だった。思わずほっとした瞬間に、それはやってきた。

「あぶない！！」

声に驚いて見ると、一日前に見た銀色の精霊だった。

「つしろです！」

振り向くと、炎に包まれた家の一階が崩れてくる瞬間だった。

「… わま、國主わま、國主わま…」

「うん…」

「分かりますか？ 体に痛みを感じますか？」

「んー…」

「国主さま！ しつかり！ 体の感覚はありますか…？」

わんわんと響く声に目を開ければ、ボロショールをかぶった銀色精霊の人間味の無い顔がドアップに迫っていた。私を抱きかかえてくれているみたいだつた。

「痛いわ、体の右側全部が

「ちょっと間に合いませんでした。歩きますか？」

「このズレつぱりが… ホント、精霊ね…

「なんとか…、うつぐ、歩くわ…」

足は折れてないみたい。立つてみたけれど三歩ほどで倒れかけて、銀色精霊に抱き抱えられた。

「街の救急隊がすぐそこまで来ていますよ。呼んできますよ」

「おね、がい…」

裏庭の奥の方に座らされて、銀色の精霊は家の表へ向かつていつた。

ぼんやりした頭で見下ろすと、体の右半身がひどく焼けただれて
いるのが見えた。服なんか皮膚なんか分からぬけれど、赤くて黒
い…どうつとして…

「いたか」

見上げると、相手は救急隊ではなく絶望だった。

軍警察の制服。うつすら笑う男達。その後ろには焼け落ちていく

マイホーム。

アンタ達が私の家を焼いたのね。

「しぶとく生き延びたのか。悪いが、息の根を止めさせてもうつ
ああ、さよなら

「殺さないで。死体は見たくないの」

私は言った。

「見ずに済むや。すぐにな」

さよなら、我が家

「アンタの国に行くわ。だから私に死体を見せないで

「一体何を言つている?」

虚をつかれた顔をした制服の男達の背後にいる、銀色が答えた。
「かしこまりました。殺しません」

銀色の両手は鋭く変形して長い刃物のよくなつていて、今にも
目の前の人間の首を刈ろうとしていた。

「な、なんだこいつ！」

振り向いた制服の男達は人間ではないと気付いて動搖していた。

「ですが、かわりに」

銀色はそう言って、右手の指先をさらに細く、針のようになつて変形さ

せて素早く動かした。

男達は次々と倒れていった。

「脳幹に細工をしました。これでこの場所での記憶を封じました」「なかなか出来るじゃない。見直したわ」私は引きつる痛みに耐えながら、こちらへ向かつて歩いてくる銀色の精霊に向かつて微笑んだ。

「アンタの国、私の怪我治せる?」

「もちろんですとも。リハビリひとつせずに済みます。皺ひとつ残りません」

精霊の言ひ事はビームまでその通りなのか、いまいちあてにできないよね

銀色の精霊は私を抱えたまま、左手の指先を針のように細くして、私の首筋に突き刺した。

「一時的に痛みの感覚を止めました。いそぎましょ」「待つて、ペンドント…」

ヴィルがくれた、お守りが見あたらなかつた。

「先ほど一階で何かの光の術が発動していました。おそらくそれでしょう。国主さまが火につつまれても無事だったのはそれのおかけです」

そつか…もう役目を果たしてくれたのね。

役に立たなくとも手元にあって欲しかつたけれど、探す余裕もないわね…

「追つ手がくるかもしれない。急ぐわよ」

「はい国主さま」

「アーティスト、やつらさんであります」

転がり込んで来た銀色と炎 3（後書き）

ガイドラインを読んで、怪我の描画をひとつ抑えました。

もうもの設定やキャラクタの外見などについては、もう少しした
ら出します。

11/17 誤字修正

銀色の精霊は、焼け出された私と私の荷物を抱えて建物の屋根の上をひた走っていた。

なんでもない時にはこのリストのようにしなやかで、すばやい動きは楽しめたかもしれないけれど、今はいつ傷み止めが切れるかドキドキしながら大人しくしていた。

「これ、どこに向かっているの？」

「街の外です。そこに転移門を設置しました」

昨日いなかつたのはそれか…

「じゃあちょっと寝るわ…門までついたら起こしてちょうどいい」

「はい、ファムさま」

一度、街の外壁付近で異様に空高く飛び上がった気がするけど、眠くて覚えてないわ。

「ファムさま、着きました。転移門の前です」

「目を開けると、丘の上だつた。

私が寝ているあいだに銀色のが応急手当をしてくれたらしく、焼けただれた私の右足と右腕は包帯がきつちりと巻かれていた。痛みもかゆみも感じないけれど、感覚もない。右腕は動かない。

立ち上がって周りを見ると、さつきまでいた街はあるか、街を含めた都市全体が見渡せる場所だった。私が育った区画も見える。あ、

うちの火事の煙も…

しばらく風に吹かれながらその光景を田に焼き付ける。

「さあ、私を連れていきなさい」

「わざわざここへだつて行つてやるわよ。

ファムと銀色の精靈が街から消えて半日後…

ファムが会つた中年男性、れつきとした貴族でナールデン公爵といふのだが、彼は今汗をかきながら情報を集めていた。

「む、娘の生死はどうなつたんだ？ 病院には運ばれてないんだろう？」

「部下達の意識が戻らない事には…。しかし火災現場に大量の血痕がみつかつたそうで、おそらくは…」

「ううむ、ひとまず失踪扱いにしておくか…あの方が気付いて調べ始めるまえに書類は全て燃やしておくれよ！」

「それは興味深い、なんの書類ですか？」

「それはおまえ…ひつ…・あなた様は」

「あなたを拘束します。全て教えていただきますよ」

近衛兵達がナールデン公爵を取り囲んだ。

「連れて行きなさい。そうです、次は軍警察へ向かいます。すぐにです」

丘のふもとには小さなほこらがあつた。旅人がちょっと拝むかする程度の、白い岩を組んだ粗野なものだつた。

「これは妖精のほこらなんです。これの裏に転移門を作りました」

「妖精つて…アンタ知り合いなの？」

「昨日話しをつけました。場所をお借りしているだけですよ
妖精は見た事ないのよね。いつか会つてみたいわ。

ほこらの裏の地面には、手のひら大の白いすべすべした石が埋められていて、表面には複雑な文様が彫刻されていた。

銀色はしゃがんで文様の一部をせらたらと指でなぞると、立ち上がりつて私と荷物を両腕に抱え上げた。

「ではしばらく目を閉じていて下さい。転移に慣れないいうちはこれを齧かじついて下さい。いきます」

銀色の精霊が差し出して来たものは濃い緑色をした葉っぱだった。慌てて目を閉じてくわえてみる。

「まつず！ にっかいし辛いし、土みたいだし、なによこれ！」

「着きました」

「えつ」

田を開けるとそこは地の果てだつた。

見渡す限りかさついた大地。枯れていいるのかしづれているのか分からない草がまばらに生えている。空は土氣色した雲に覆われ、青

みがかつた風が吹いている。灰色の世界だつた。

「あ、あつという間なのね。さつきの葉っぱは何だつたの？」

「はい。先ほどの葉を噛むことによって、人間の意識を集中させ、
転移の失敗率を減らすことができます」

不味さに意識を集中させるつて……誰が考えついたのかしら。腹立
つわね。

「それではファームさま、まずは体の治療をしましよう」

そう言つて銀色の精靈は私と荷物を両腕に抱えたますたすと
歩いて行つた。

行く先に視線を巡らせると、巨大な鉄鉱石の固まりのよつなもの
がどーんと建つていた。

「我々が向かつているのがファームさまに座して頂く王城です」

「優雅さのかけらも無い無骨な建物ね。広そうなのは楽しみだけど
「城の中には他の国では失われた過去の文明の遺物や、施設が沢山
保管されています。それであれだけの大きさがあるのです。地上1
42階と、地下にも500階ほどあります」

「すごいのね……ホントにビックリよ……」

城の入り口にはあらたな精靈が立つていた。

背格好は私を連れて来たのと似ていたけれど、ボロ布ではない、
神官のように布で全身を覆うよつな、変わった服を來ていた。顔も
布がぐるぐる巻かれている。色はくすんだ白と銀だつた。

「やあ、おかえり。見事連れて来てくれたね。そして國主さま、よ
うこそ」

「ただいま戻りました」

「どうもごきげんよう、さあ細かい挨拶は後回しにして、さつと
私の怪我を治療してくれないかしら」

「これは…どうされたのかな」

布で巻かれた顔でも一応見えているらしく、銀色の精霊その2は私の様子に驚いていた。

そういえば、一度も鏡を見ていなかつたわ。私の顔、どんな事になつてているのかしら。

「出発直前に火事にあわれました。ぼろぼろになつてしまつたので体組織を崩さないよう、包帯で固定しています。半身の痛覚も止めています」

「それは大変だ。すぐ実験室…いやいや、治療室へ行きましょう」

「痛覚を止めての転移門の影響も確かめてみましょう」

「そうだね、記録を取つて検証してみよう」

「…いつら…ちゃんと治療してくれるのか不安になつて來た…」。

地の果てと雲つ空 1（後書き）

そして序幕のシーンにつながるのです。

「お加減はいかがですか」

「ええ、けつこうよ。腕も足も「じくようになつたわ。ところでこのジュース、味が変なんだけど」

治療室に案内されて、私は怪我の治療中。

といつても痛みも苦痛もなくて、

変な光を浴びせられたり、

変な音のする箱の中に入れられたり、
変な水槽に入れられてプチプチ音がする細かな泡に包まれたりと、
不思議なものばかり。

そして泡からでてみると、何故か着ていたぼろぼろの服がなくなり、火傷してただれている箇所は一面に泡が固まつてくつついいでいた。洗い流したかつたけれど、この泡が火傷した皮膚を作り替えてくれているらしい。

泡がとれるまでのあいだ、寝椅子の上で毛布にくるまって大人しくしていると、私を連れて来た方の精靈がグラスに入つたオレンジ色のジュースを持つて来てくれた。

「これはいま再生されている肉体のために必要な成分が入つていますので、普通のものとはちょっと違う味なのです。あのピッチャー一分すべて飲み干して下さいね」

見ると、寝椅子の横のテーブルの上にガラスのピッチャーがあり、バケツ一杯分はありそうな量のジュースが入つていた。

「うえー、舌がおかしくなりそつだわ」

「ファムさまの怪我についてですが、呼吸器官の炎症と広範囲の火傷と打撲、右腕は裂傷と数カ所の骨折、さらに足の指も三本ほど骨折していました」

「よく死なかつたものねえ」

足の指、折れてたのね。歩けたから気付かなかつたわ

「あと半日もすれば全て元の通りになりますよ、ファムさま」
元の通りになんてならないわよ。心の傷はまだぐじぐじって血が流れてる。

ヴィル、どうしているかしら。

でも、もう帰れない。帰ればまた中年オヤジに呼ばれ、今度こそ殺される。

マイホームは消し炭になっちゃつた。
ほりりと、また涙がこぼれ落ちた。

そして、怒りがこみあげてきた。

ふざけるんじゃないわよ！

私が一体何したつて言うのよ！ 好きな男といただけじゃない！
なのになんであんな蔑まれた目で見られて、家に火までつけられて！

大人しく引き下がつてろつての？ バカじゃないの？

私だつていっぱしの女よ？ 学も才能もない、平民だけど！
なめんじやないわよ！

国のひとつやふたつ、繁栄させてやろうじやないの！
腹が立つたら、ふつふつと氣力が蘇つて来たわ！

「やつてやるわよー 女王もまだか女帝だかしないけど、なつてやるわよー。」

私は叫びながら立ち上がった。

目の前の銀色の精霊たちは嬉しそうに手を叩く。

「「その意気ですフアムさま」

「それで、」Jijiは一体どこののよー。」

…結論からこうと、私はこの国を知っていた。

暗病国という不気味な名まえは知らなかつたけど。

それは子供の頃にきかされた昔話にでてきた、闇の国。子供が悪さをすると、連れていかれ、

病気になつた大人が最後、連れて行かれ、

悪い精霊が沢山いて、太陽が大地を照らすことがない、この世の最果て。

物語に出てくるほとんどの悪役や怪物が生まれたといわれる国。そう言い伝えられてきた、幻の国。

「大昔は栄えていたんです。でも瘴気が渦巻いて生き物はどんどん減つて行つたんです。精霊も随分減つて、いま稼働しているのはワタシたちだけになつてしましました」

「悪い印象と存在だけが世界に伝わつて残つてゐるのね…」

「こんなになんにも無いのに国だなんて…

「しかも、国民ゼロ…」

「えーと、一つほどあちこち放浪しながら生活している集団が確認されています」

それは国民というより原住民と呼ぶんじゃないの？

「国民どもかまともに生物も住めない土地で…それでどつ統治しろつてのよ。私、神でも聖人でもないわよ！」

「大丈夫です。この役目はファームさまにしか出来ません」

えらい自信ね。

銀色の精靈達に案内されたのはかなり広い部屋だった。

「こちらが王の間になります」

「大きな市場が開けそうね」

天井を見上げると、すごく高くて、なにか細かな装飾がされているけど、よく見えない。

内装はすべて同じ暗い色の大理石で作られているけど、良くなれて光っているのであんまり陰気くさくない。

感じるのは、莊厳さと静けさと、生氣の無さ。

「大きな窓が沢山あるのはいいことね。晴れたら気持ち良さやう」

「二〇〇年ほど毎日曇りです」

「…」

「ファームさま、こちらこどうぞ」

見ると、部屋の奥の壁際が三段ほど高くなつていて、その中心に椅子があつた。

部屋と同じ素材で出来ていて、まるで床から生えているようだつた。

ゆっくりと王座に座つてみると、全身がほわっと暖かくなるよつ
な感じがした。

「これでこの国の國主、王として認められました」

顔を布で巻いた銀色の精靈が言つた。

「え、今まで終わり？あつけないのね」

「認定されなければ座つた瞬間にショックで氣絶します」

顔が仮面で覆われた銀色の精靈がしれつと言つた。

「アンタ達、よくも説明無しで座らせてくれたわね…」

「即位おめでとうござります」

これからこんな風にイラッさせられ続けるのかしら、私。
しかも、いまだに裸に毛布一枚のままなんんですけど。

「これでこの国は瘴気が払われ、荒れた大地も復活するのです」「私は窓から空を見上げた。どんよりとした曇り空のままだった。

「払われてないみたいよ？」

「時間をかけて行われます。そのためにも、ファムさまには一日の大半をこの王座、最低でも王の間で過ごしていただきまます

「なんだよ？」

「この王の間はこの土地の瘴気を害のないものに変換し、王座に座る者がそれを昇華する仕組みを持っています。ファムさまの体はこの天地万物の氣脈にとても柔軟に出来てるのでこれに対応出来るのです」

「はあ、ソウナノデスカ」

うん。よくわからないわ。

「これについてはそのうち実践をおして理解していただきましょ
う」

「そうですね」

あ、コイツら説明投げたわね

私が空腹を訴えたので、話しの続きは食事をしながらこうことになつた。

といつても私一人が食べてるだけなんだけど。

王の間ほどではないけれど、これまた市場が開けそうな広さの食堂に案内されて、具無しコンソメスープと、私の荷物に入っていたパンとチーズを食べる。たぶん昼ご飯ね、これは。

ちなみに服は治療が終わるまであきらめたわ

「己の体の命脈だけでなく、気脈までも自由に扱える人間というのは本来ありえないのですが、時々生まれるのです」

「そんな事ができるなんて初めて知ったわ。聞くけど、時々生まれるなら他にも声かけた人いるんじゃない？」

私がスープを一口すすつて言つと、

「声をかけてもまともに相手してもらえず、ちゃんと話を聞いてくれた方はこの500年でファムさまだけでした。ファムさまはおやさしい方です」

仮面をつけた銀色その1（私を連れて來た方ね）が嬉しそうに言った。

あれでも500年頑張った結果なのね…アンタ

「しかもこの国と適合する属性の方はなかなかいないのです。その点、ファムさまばっかりです」

顔に布を巻いた銀色その2（城で待つていた方）が私を指差した。行儀悪いわよそれ。

「見事な闇色の髪で」

「黒髪つて、やっぱり闇とかなのね…」

たいして気にしてこなかつたけど、珍しいのよね。黒髪。私自身は目立てるから気に入っているけど。

「はい。ちなみに我々は闇の精霊です。人は属性色がそのまま体に出来ますが、精霊は性質と反対の色が現れるのです」「ややこしいわねえ」

「じゃあ、説明をまとめちゃうと、この国は土地とお城があるだけで、ほとんどの国として成立していない状態。そこに私が國主となって王の間でこの国の瘴氣を払つてわけね」「飯を食べて元気が出たので、今まで聞いた内容をまとめないと

ができたわ

「おおまかにまとめるとそなります。あの王座に座られた瞬間から、すでにこの国はファームさまのものとなつています」

「私の好きにしていいってこと?」

「そうです。過去の兵器を使えば世界に覇をとなえる」ともできますし、世界一の財を築くこともできますよ」

「なにそれ、世界を支配したって管理が大変じゃない。兵器なんて無骨だし、街も店もないんだからお金も必要ないわ」

私の望みは、ここが私のマイホームになることよ。

「でもそうね、せっかく生まれ変わったから、新しく名前をつけれるわ」「闇の国と、それに似合ひの黒髪の女王ー あたらしこ門田由ー。

「この国はこれから『くろやみ国』よー ちなみに、『くろやみ』は国字表記の“黒闇”を使わないでちょうどいいね」「どうしてですか?」「そのほうが可愛いじゃない」

「 「 …… 」 」

国旗は黒い、いつわらなんてどうつかしらへ。

地の果てと墨つ空 3（後書き）

ファムさん、悪ノリ開始。

国の名は漢字（＝国字）表記が一般的なのです・・・

2010 / 11 / 25 誤字修正

2011 / 05 / 30 数字表記修正

「アンタ達は個別に名前あるの?」

銀色の精靈たちはお互に顔を見合せた後、

「精靈同士でのよび名はありますが… といいます」

と、銀色その2が答えた。名前を発音してくれたらしいんだけど、

私には聞き取れなかつたわ。

「じゃあ私の配下として、人間に発音出来る名前を貰つてくれない?

「はい」

「よろこんで」

私は精靈達をしばらく眺めて、名前を決めた。

「まず私をここに連れて來た方がレーへン」

「はい」

レーへンがうなずいた。

「私を出迎えた方がベウォルクト」

「わかりました」

ベウォルクトがお辞儀をした。

「じゃあレーへンとベウォルクト、これからよろしくね」

そう言つて私が両手を差し出すと、レーへンとベウォルクトはずおずと握手してくれた。

あら、もしかして王さまが配下に握手求めるのって変だったかし

ら?

「ずっと気になっていたんですが、ファームさまは精霊についてお詳しいですね。ワタシをひと目で精霊と見抜かれましたし」

レーへンが言った。

「うちによく現れたのよ、精霊。だからいろいろ慣れちゃって。両親が精霊関係の仕事をしていたらしいの。一人とも私が子供の頃に死んじゃつたから詳しくは知らないけど」

そのうち調べようかと思つていたけれど、全部燃えちゃつたわ。
「だから属性とかのあんまり真面目な知識はないの」
まあ人間と言葉を交わせる精霊のほとんどがすつとぼけた性格しているつてくらいは知つてたけれどね…。

「ねえ、アンタ達人間の姿にはなれないの？ 仮面と布巻いた顔じや人形を相手していいる気分になるわ」

ベウォルクトがちょっとと考えてから答えた。

「じつはこの布の下は人間の姿なんです：大昔の人物の模造ですが」

「え、そうだつたんですか？」

レーへンが驚いた。

アンタも知らなかつたの

「もしかしてベウォルクトの方が年上なの？」

「我々には年齢の概念はあまりないのですが… そうですね、ワタクシの方がかなり古いです」

聞けば、ベウォルクトは数千年単位で、レーへンは千年ちょっとだそよう。

私がこの国の最年少ね。
ちなみに19歳よ。

「ワタクシは大昔の尊敬していた王の姿を借りています。ですが人の体はメンテナンスが面倒なので、こうして保存布で覆っているのです。もし『』覧になりたいのでしたら、数日お待ち下さい。準備しますので」

「今その布の下はどんな状態なのよ？」

「ずっと放置していたので色々溶けて癒着してます」

「聞かなきや良かったわ…」

「レーへンは？」

「ワタシは持つていません。人間と同じ外見を持つには、人間の手伝いが必要なのですが、ワタシが生まれた時はすでにこの国にはほとんどの国民がいませんでした」

「ちょっとうつむき加減でレーへンが言つた。

「ファムさま、レーへンの姿を創つてみませんか？ 王座での力の使い方の練習として」

ベウオルクトが突然言い出した。

「ワタシは実験台ですか。よろこんで！」

「なんで実験台で喜ぶのかしら…」

「では王座に座り、大まかで結構ですのでイメージして下さい。あとは王の間が補正してくれます。言葉に出すとさうに具体的になりますよ」

「わかったわ。ちなみに、アンタの希望はある？」

「私がレーへんに尋ねると、レーへんは両手を握りあわせて祈るようになつた。

「はい！ どうか筋肉隆々で、大熊と見間違えるような雄々しい猛者姿に」

「却下！」

「どうしてですか！」

「そんなの、むさくるしいじゃないのー。はい、決めましたー。細身の体格で銀髪が似合つ、顔の綺麗な青年！」

「わっ」

私がそう宣言すると、レーへンの全身が一気に黒くなり、それが溶け消えるようにして新しい姿が現れた。

肩先にかかる程度の流れるような銀の髪、中性的な輪郭にすらりとした鼻梁と薄い唇。白くきめ細かな肌。そして銀のまつげにふち取られた、うつすらと青みがかつた灰色の瞳。穏やかな月夜を思わせる美しい青年が現れた。

「んーいい出来。この顔なら側にいるだけで良い癒しになるわ

私がにこにこしながら近寄つて頬をなでると、レーへンは眉間に皺をよせてこっちを睨んできた。

「どうして猛者はダメなんですか…」

落ち込んだ声を出す。それもまたイイ。

精靈と国土 1（後書き）

レー・ヘン＝雨

ベウ・オルクト＝曇り

です。オランダ語。

今まででてきた人名や爵位も同じくです。

いまだ建国初日

窓の外が暗くなつて来て、私は王の居室に案内された。

ずっと曇り空だからいまいち夜になつた気がしないわね。ベッドの上で持つて来た荷物の中についた、花柄ワンピースを見て、私はある事を思いついたので早速ベウォルクトに相談してみた。どうしてベウォルクトなのかといふと、なんとなくこっちの方がまともな返答してくれそうだったから

「花ですか」

「そう。うちの焼け跡から花を持つて来たら、植える場所つかしら?」

怪我をしてあまり覚えてないけれど、裏庭の花達は無事だつたはず。青空も夕日もないんだから、花があればちょっとは楽しい気持ちになるかもしれないわ

「外の土で育てるのはまだ無理ですが、城内に植物栽培施設がありますから、そちらで育てる事ができますね」

と、ベウォルクトが言つてくれた。よかつた!

「それならばワタシが行つてきましょう

あら、いたのレーへン。

「そうだね、こいつの事はレーへンだけで行つた方が早いし、確實ですよ」

「じゃあレーへン、お願ひ、一株だけでもいいの。無事に生き残つていて、まだ花の咲いてない苗だけでいいから、根のまわりの土ごと掘り返して持つて来て欲しいの」

「わかりました。ファムさまにもらつたこの姿がさつそく役にたちますね」

そ、そうね！本当はただ私の日の保養のための姿なんだけれどね

「でも髪は隠していつたほうがいいわ。銀髪は田立つもの」

「そうですね」

レーへんは頭をひと振りすると、あつといつまに黒髪になつた。
「短時間でしたら色をかえられます。ファムさまと同じ色にしてみました」

レーへんの綺麗な顔はさつきまでほとんど無表情だったのに、もう表情をつくるのに慣れて来たらしく、田元が微笑んでいる。

ああ、良い顔には何色も似合つのねえ

「これなら親戚の者が花を引き取りに来たつて言えるわね。いいこと？まず知らない人について行かない。誰かに何をきかれても答えちゃだめよ。とにかく苗をとつて来てくれるだけでいいの」

「わかりました。優先すべきは花の苗を確保すること。寄り道しない。知らない人にはついて行かない。それからえーと……」

私が言った内容を指を折りながら数える姿をみていると、なんだか初めてのお使いに子供をだす親の気分になつてきたわ…
ヴィルへの手紙も頼みたかつたけれど、また今度にしておきましょ。

焼け跡となり、廃墟と化した家の裏庭に黒い髪の男がいた。

「何をしている」

「あ、こんにちは」

男は振り向いた。十人が見たら十人が振り返るような、稀に見る端正な顔立ちをしていた。

「黒い髪という事は、彼女の親類か何かですか？」

「ええっと、そうなのです」

「どこか遠くを見ながら男が答えた。

「実は花の苗を貰いに来ました。このまま枯れてしまうのはもったいないので」

「そうですか、花のこととはかまわないですが、実はこの家がもう一度と誰にも踏み荒らされる事がないよう、場に強い結界を張つていたんですが、どうやつて入りました？」

「それはどうも、すみません。普通に足で入りましたよ」

「それではいくつか質問があります。おまえは何者だ？」

数時間後、レー・ヘンがぼろぼろの姿で花の苗をカゴ一杯に抱えて帰ってきたので驚いた。

「どうしたのその格好！ そんなに苗を持つて来るの大変だったの？」

「いえ、苗は簡単だつたんですけど、恐い人に襲われまして」

よく見るとほろほろなのは服だけで、レーベン自身には怪我はないようだった。

「やだなにそれ、私が無駄に綺麗な顔にしちゃったのがよくなかつたのかも。」めんなさい

「いえ、いいんです。ちゃんと苗も秘密も守り抜けましたし」

「そう、それならよかつたわ」

わりと平和な街だと思っていたのに、危ない人がいるのね。

精靈と国士 2（後書き）

レーヘンはおつかい中に一回答えひやこました。

11 / 25 誤字修正

昨日はぐるやみ国、というかお城の中を案内してもらつたわ
なんとこのお城、中に列車が走つてゐるのよ！ 縦にも横にも走
つてるらしいの。どんだけ広いのよここは。

「建物の中に列車が走つてるなんて！」

「エレベーターとも言つんんですけど、ファムさまには列車の方がわ
かりやすいようですね。歩いていると何日もかかりますから、こう
いった移動方法があちこちにあるんです」

「列車を操作しながらレーへンが言つた。

「私本物の列車なんて乗つた事なかつたわ！ これってどうやって動
いているの？」

「旧時代と同じ電力です。この城にはいくつか発電施設があり、王
の即位とともに現在ほぼ全てが稼働中です。発電方法はまずタービ
ンを…」

「ベウォルクトの説明は私には難しかつたので、

「今日は見るだけにして、後日勉強して頂きましょう
という事になつたわ。

ほかにお城の動力やらについて見学しながら説明を受けたけれ
ど、私の知らない単語が多くてよくわからなかつたわ。

それから移動中に薄いガラスのまな板のようなものを渡された。

「この画面に服飾品の画像が出ますので、欲しいと思つたものが出
て来たら絵に触れてください」

「寸法は治療時に測つていますから、どれもファムさまのサイズで
すよ」

レー・ヘンやベウォルクトに説明を受けながら言われた通りにガラス板に出てくる絵を触つて、欲しい服を選ぶと、駅に着いた時に本物が手渡された。なんでも、選んだ画像を即座に知つて、その通りに服や靴を作つてくれる部屋があるらしいの。

手持ちの服もほとんど無かつたから、これは嬉しかつたわ。憧れのレースたつぱりのドレスなんか、挑戦しちゃおうかしら

夜は大浴場に案内してもらつたの

王の居室にも浴室があるのだけど、同じ階に大浴場があつて、熱いお風呂や水風呂、泡が出たり、良い匂いがするものだつたり、とつても楽しいの。ベウォルクトがお肌が綺麗になる入浴法を色々教えてくれたわ。

それにしても、発電機を動かすのも、服を作るのも、風呂や部屋の掃除も、誰がしているのかしら
「すべて全自動です」

…せんじどうになにかしら?

この日はとても楽しかつたのだけど、後になつて思い返すと自分の能天氣ぶりに腹が立つ日になつた。

そして今日。

昨日ベウォルクトとレー・ヘンが用意してくれたご飯があまりにも酷かつたから、今日から自分で作る事にしたわ
毎食とも塩味のビスケット三枚と具無しコンソメスープつて、どこの修道院なのよここはー

台所はどこ、食材はどこよ。

王さまになつたのにご飯も自由にならないなんてー！

案内されたのは全て金属で出来た調理場で、まったく使われた様

子が無かつた。

ベウォルクトとレーへンがどこからか小瓶や箱に入った調味料や食材らしきものを沢山持つて来てくれたので、ひとまず私がわかるものだけ残して、あとは棚にしまう。

「この箱にこの粉とこの粉と、この液体を入れるとパンができます」パンは自分で焼かなくていいみたいね

「パンが焼けるまでにスープを作りたいわ」

具になりそうな物を味見してみたけど、薬っぽかたり変わった味の物が多くつた。

「あんまりおいしくないのね。こいつのはぱさぱさしてるし」

「合成食品は風味よりも栄養ですから。そちらはフリーズドライ食品ですから、水で戻して食べるんですよ」

レーへンがそう言って、袋に書いてある表記を読み上げてくれた。「じゅせい？　ふりーずどらい？　なんだかわからないけど、スープに使えそうなものを鍋に入れてくわよ」

「お茶の葉と食器ですね？ 探してきます」

レーへんがまた探しに行き、私はぐつぐつと煮込まれている鍋の中を睨みながら自分の状況を整理してみた。

レーへんと街で遭遇した日の夜に、ヴィルと会つ。帰り道に中年才ヤジ貴族に連行される。…これが一日目ね。

朝に帰宅して、ヴィルに手紙をかぐ。その日の深夜に家が火事になり、レーへんに助け出される。…これが二日目。

くろやみ国に移動する前に田が昇つていたから、この時点でレーへんに会つて三日目で、くろやみ国での初日。怪我の治療を受けて、夜にレーへんに花の苗を取つて来てもらつた。

昨日は一田城の中にいた。これが四田田。

「つまり、今日はレーへンに会つて五田田で、私がこの国に来てから三田田といふこね」

最後に会つた時、ヴィルは「五日後に」と言つた。つまりは、六日田。

明日は、ヴィルと約束した田。

家には帰れないけれど、なんとかして、ヴィルに会いに行きたい。せめて私が無事だと伝えたい。

「違いますよ。この国に来て四田田です」

振り返ると、荷物を抱えたレーへンがわざととした表情で私を見ていた。

「…四田田つて？」

私は背後にずっと立っていたベウォルクトを見た。布に包まれていてもその顔は私を見ようとしていない。

レーへんに目線を戻すと、何か思い出したらしくて、これまた目が泳いで、震えていた。

とおつても拳動不審だわ。

「…どうこうとか説明しなさい」

…ちょっとお尋ねしたいんですけど

私がこの国に来て、何日経っているの？

精靈と国土 3 （後書き）

設定作り込みすぎて、自分の首を絞めないよう気をつけたい今日この頃です。

11 / 26・改行と語彙と後書き追加

消えない思いと見つからない答え 1

「実は治療器に入られているあいだに少々時間が経つていて…」
私が掴みかかって脅すと、ベウォルクトはようやく喋った。
レーへンが食器を抱えたまま震える、かたかたという音が聽こえてくる。

「…！ そう言つ事は本人にちゃんと伝えなさいよ…」

私が治療室に入っているあいだに、何故か一日余分に時間が過ぎていたそつよ。

「数百年ぶりに治療器を動かしたので、ちょっと誤作動がありますて…」

「あんまり具体的に聞きたくないけれど、それでどうなったのよ」「ファームさまの怪我が酷かつたために治療ではなく、治療器が誤作動を起こして分解処理されそうになりました。なのでいつたん治療器を停止させ、復旧作業にかかりっていました。ちなみにその間ファームさまには眠っていました」

「えらく簡単な調子で言つわね…」

「よく…生きてたわね私…」

「ええ本当に」

レーへン、そこで同意しないでちょうどいい。

調理室にはパンが焼けるいい香りが漂つていたけれど、私の心はそれに和むどころではなかった。

ヴィルと会う約束をした五日後は、今日じゃないの…

「私、街に戻るわ」
ヴィルが待つていてるかもしねないと思つと、いても立つてもいら
れなくなつた。

私が調理室を出て行こうとするとき、口にベウォルクトが立ちふ
さがつた。

「それはできません」

「どうしてよ！ ちゃんと用事が済めばちゃんと帰つてくるわ！」

「この国の王になるということは特殊なのです。ファムさまは王にな
られてまだ間もありません。体はこの地の瘴氣を受け入れ始めた
ばかりです。いま城外に出てしまつと体内の命脈が狂う可能性があ
ります。どうか体がなじむまでお待ち下さい」

「…それってすぐに影響出るの？」

「ファムさま？」

「城の外に出て、命脈というのがおかしくなるまで、どれくらいの
時間がかかるの？」

ベウォルクトが答えにつけた。

「それは…わかりません。どんな影響ができるかわかりません。危険
です」

「今日の数時間だけで良いから行きたいの。帰つて来たら大人しく
しているから」

「…しかたありません。帰つて来たら治療室行きは覚悟されていて
ください」

ベウォルクトが折れてくれた。

私は自室に駆け込んで、書き物机の上に置きっぱなしになつてい
たヴィルへの手紙をつかんでポケットに入れると、部屋の外にいた
精靈達に言つた。

「さあ、連れて行きなさい！」

「ワタクシが行くと目立ちます。レーへンをお連れ下さい」

「わかつたわ。おねがいね、レーへン」

「はい。ファムさまはこの身にかえてもお守りします」

そう言つレーへんはいつの間にか黒髪になつており、上は白のシャツに薄い灰色のベストを、下は細身の濃い色のパンツと同系色のブーツといった格好をしている。これなら街を歩いても違和感無いわ。

ちなみに全部昨日私が自分の分と一緒に作つてもらつたもの。寒色系がすらりとした背格好によく似合つているわ。さすが私。

ちなみに私の服は動きやすい薄い色の花柄ワンピース。今日はキャンバス地の歩きやすいペたんこ靴でよかつたわ。

転移門の上で私はまたあの不味い葉っぱを噛んで、口を開くとそこにはもう見ることはないと思っていた光景が広がつていた。

「ひとまず私の家に向かってちょうどだい。なるべく人目につかないようにお願いね」

「はい。かなり速度をあげて走りますから、しつかり掴まつていてください。風が強いようでしたら口を開じて下さいね」

レーへんは前と同じように私を抱き抱えて走り、城壁までくると一気に足だけで壁を駆け上り、最後は蹴つて高くジャンプした。

「……っ！」

いきなりの浮遊感に叫びそうになつたわ。

それから屋根伝いに駆け抜けて、あつといつ間に見慣れた場所へ着いた。

私の家は酷い状態だった。

あたたかで居心地のよかつた建物の面影がどこにもない、ほとんど崩れ落ちている、ただの黒い廃墟。あまりの痛々しい姿に見ていい

ると涙がでてきたので、家に近寄る」ことはやめて、私は周囲に「ヴィルの姿を探した。

そこには誰もいなかつた。私の家だった場所以外は、いつもと変わりない昼下がりの街だった。白っぽい石畳で、おなじく白く塗られた塀と、木枠と白っぽいレンガ造の小さな家々が立ち並ぶ。平民の住宅街だから、道も狭い上に入通りもほとんどない。

けれど、人がいなさすぎるよつに感じた。

「おかしいわね…」

「ファームさま、どうもこの都市の北の方にほとんどの人が集まっているようです」

「北？ 北の宫廷広場でなにかやっているのかしら？」

この時期にあるお祭りなんてなかつたはずなのに…

一体なにが起きているの？

消えない思いと見つからない答え 2

「つかから北の方角にはこの国の王宮があつて、そこに面した広場は富廷広場と呼ばれているのよ。そこで何かやつているみたいね」

「様子を見に行きますか？」

「ちょっとだけ見てきましょう」

私は万一ヴィルが来てもわかるように、手紙を燃え落ちた家の門の所にはさんで、富廷広場の方へ向かった。

レーへんに抱えられて屋根伝いに向かうと、広場から聴こえる大規模な騒ぎの音がどんどん大きくなってきた。

屋根の上から見ると、広場は人で埋め尽くされていた。みな一同に王宮の方を向いている。

「王宮に何かあるみたいね」

王宮のメインバルコニーから何人か人が立っているけれど、さすがに遠すぎてよく見えないわ。

「レーへん、下に降りましょう」

「わかりました。体に不調を感じたらすぐに言ひて下さいね」

広場の隅に降り立つたとき、足元に号外新聞が落ちているのを見つけて、拾いあげた。

「新国王…」

「どうやら皆さんこの国のお新しい王を祝つていてるみたいですね…フ

アムさま?」

紙に印刷された写真の人物は、私がとても良く知る顔だった。

「まさかね、た、他人のそら似かもしれないじゃない…」

そのとき、法術で拡大された声が広場に響いた。

『国民のみなさん』

ちょっと低くて甘い音。私の、大好きな声だつた。

『本日は祝つて下さりありがとうございます…この国の国王となつたヴィルヘルムスです…』

「ヴィル…ヴィルヘルムス王、即位…」

足元が崩れ落ちる音がした。

私は王冠を見上げた。私が待っていたヴィルは、今、あの遠くの、バルコニーに立っている。

人々をかき分けて、前へ進もうとした。

こんな群衆の中で、ちっぽけな私なんて見えるわけがない。

けれど、歩く足が次第に遅くなり、横へそれ、私はうつむきながら広場の隅の路地へ入つた。

胸が熱くなり、いきなりこみ上げて来る物があつた。耐えられなくなつて、私は足元の地面に吐き出した。

「げほつ、かはつ」

それは大量の血の固まりだつた。

「ファームさま！」

「じ、時間切れみたいね…」

一瞬にして、私の体は震えが止まらなくなり、喉の奥からはどんどん熱い血の固まりが溢れ出て來た。

「ゲホゲホッ、と…とりあえず家まで戻るわよ、レーへン」

焼け跡の家に戻つてくると、私は焼け残つた門に背を預けるようにしてしゃがみ込んだ。

「手伝ってくれる者がいます。すぐに連れて来るので、落ち着いて待つていて下さい」

やつ言つとレーへんはどこかへ走つて行つた。

私は時折咽せそうになるのに耐えながら、気持ちを落ち着けるつもりで昨日のやり取りを思い出していた。

お城の案内に疲れたので王の間に戻つて休んでいると、ベウォルクトが丸い球体に絵と文字が沢山書かれているものを持って来た。手渡されて私も持つてみると、両腕に抱えるほど大きいのに、とても軽かった。

「これは世界地図です」

触つてみるとただの球体じゃなくて、山や平野のような地形が凹凸で再現されている。

「私、世界地図つて初めて見たわ。へえ、この世界つてこんな丸い形しているのね！ なんでみんな落つこちないの？ 空や雲や太陽はどこにあるの？」

「…そちら方面については、また追々説明します」

なんだか今ベウォルクトに可哀想な目で見られた気がするわ。布越しだけど。

「ちなみにファームさまが持つているのが今の人間社会で一般的に出回つてゐるもので、こっちが精靈達で作つた人類未公開版です」

そう言つてレーへンがもう一つの地図を出してきた。

「そんなの私が見ちゃつていいいの？」

「今の所、数で言つとこの国は精靈が多いので、大丈夫です」

「多いつていつも一対二だけどね…それにしても、国の数や地形がずいぶん違うみたいだけど」

「くわやみ国のように、人々の間では存在が忘れられた国や、人間の国ではないものなども載つていますからね」

星の亀裂やら忘却の穴なんていう、あきらかに胡散臭い名前が地図のあちこちにあつたけれど、見なかつた事にしましょ。

「「」の国は？」あるの？」

「「」ですよ」

ベウオルクトが指差した所は海だった。

「なにもないじゃない」

「人間版ですから記録から抜け落ちているのです。おなじ場所を精霊版の方で見つけてみてください。そちらにまづやんと載つていますよ」

私は精霊版の地図に持ち替えて、ぐるぐるとまわしたあげく、ようやく見つけた。ちゃんと卵くらいの大きさの島があり、「暗病国」の文字が書かれていた。

「島国なのね！この国」

「昔はもつと国土があつたのですが、沈んでしまつたんですね」

レーへンが青灰の瞳をちょっと陰らせて言った。

「国の名前が変更されてませんね。……」

ベウオルクトが地図上の海の一箇所を押し、何かつぶやくと、「暗病国」の字が「くろやみ国」に置き換わった。

「わあ」

「今ので他の場所にある世界地図でも国名が更新されました。といつても精霊版ですから、知るのは精霊がほとんどですが」

「私、いろんな国が書かれた地図つて初めて見たわ。へえ、白箔国つてこんな所にあつたのね。くろやみ国とは、海と青嶺国（しうれい「」）を挟んでいるのね」

レーへンが一点を指差した。

「ファムさまがいたのは白箔国の「」のあたりですよね」

「ええそりよ。王都のはずれの街よ」

「白箔王はいるのですか？」

ベウォルクトが言った。

「いるわ、見た事はないけれど、高齢だからそろそろ退位するつて
ずっと前から噂になっていたわ。子供が沢山いるから次の王様選び
が大変だらうつて」

「長子が継ぐのではないのですか？」

「それで過去に何人もの長子が殺されたらしいから、王様や偉い人
達が出来がいい子を選ぶようになつたらしいの。でも、今は一番の
有望株がずっと拒み続けているって話しだつたわ」

「選ばれたのね…ヴィル。おめでとう」

「あなた貴族じゃなくて王族だったのね

「お祝い、直接言つてあげたいけど、ごめんね」

遠い喧噪を背景に静かな裏路地で一人で血を吐いていると、いま
までこらえて来た悲しさと寂しさが溢れ出て來た。
汗が止まらないのに、寒くてたまらない…

ヴィル、あなたが上流階級の人って、気付いてたわよ
ちょっと世間知らずなことか、お行儀がよいところとか、
でも、それでもいいって思つてた。

あなた偉そうな所無いし、私の話をちゃんと聞いてくれたわ

私、ちゃんと決めてたの。

いつかは別れが来るとしても、いまは目一杯あなたを愛するつて。
私じやない、立派な結婚相手が現れても、あなたの幸せを願うつ
て、決めてた。

でも…

会いたい…ヴィルに会いたい。

時折咳き込んで血を吐きながら、私はうずくまつて泣いた。

「ファームさま」

どれくらい時間が経つたのかわからないけれど、呼びかけられて
顔をあげると、レーへンが立っていた。

折角の服が私の血で汚れちゃってるわね。

「協力してくれる精霊を連れてきました。くろやみ国までファームさ
まを連れて行つてくれます」

レーへんの横に可愛い顔した見知らぬ少年が立つていた。

明るい茶色の瞳に、くすんだ灰色の髪をうしろでひとつ結びにしている。マントを羽織つて、変わった柄のポーチを首から下げている。

「はじめまして闇の国主さま。ボクは旅の精霊です。お手伝いさせていただきますね」

旅の精霊は血で汚れる事に構わずに、私を抱えあげた。

「おねがい、もう少し、もう少し…」とさせてしまつて…。もうあんまり血も出なくなつたし…」

「いけません。すでにかなりの血を吐いています。一刻も早く戻らねば、命に関わります」

旅の精霊が私を背負つのを手伝いながら、レーへンは強い視線で私を見た。

「ワタシがかわりに…」で一日待ちます。手紙を渡せば良いんですね

一度は止まつた涙がまたあふれて來た。

「ありがとうございます…おねがい…」

私は震える手でレーへンの手に手紙を握らせた。

中身は無事を知らせる内容と、家で待つと言つ約束を守れなかつたことを謝る文。国に着いてすぐで、怪我の治療の間に書いたので、くちやみ国の事は書いていない。書き加える時間がなかつた。

「ヴィルのことは分かる…？」

「はい。さきほどバルコニーにいた人物ですね。さすがにこの国の王宮へ不法侵入できませんが、ここで待つ事はできます」

「国の精霊にはお互い不可侵の盟約があるからめんどくさいよな旅の精霊が言つた。

「レーへン」

硬い表情をしたレーへンに何かの薬を口に含ませられながら、私

は言つた。

「なんでしょう」

「笑つてちょうどいい… 笑顔はね、武器にもなるし、元気も沸いてくる優れものなのよ。私に… 元気を分けてちょうどいい…」

そう言つて私は笑つた。こんなに力を振り絞つて笑つたのはきっと親が死んだ子供の頃以来ね。

「……はい」

レーへンは潤んだ瞳で、ぎこちなく微笑んでくれた。
精靈つて泣くのかしら。今度きかせてね

「ではくれぐれもよろしく」

「まかされたよ。西の妖精の祠だね」

「うん。キーはさきほど伝えたとおりだから。あと、祠の妖精にひとこと挨拶してくれるとありがたい」

「わかったよ。じゃあ、お先に」

私を背負つた旅の精靈はレーへンのように飛び上がる事無くひたすら軽やかに道を走りだした。そしてなぜか城壁は、そこに何も無いかのようすり抜けた。

「ボクは大地の精靈だから、土や石なら自由にできるんだ」

精靈つて… すごいのね…

祠につくと、精靈は私を背負つたまま前方に声をかけた。

「妖精よ、出て来ておくれ！」

「なんじやい、あまり大きな声で呼ばんで欲しいの」

祠の裏から出て来たのは、小柄な老人だつた。しわくちゃの顔にぼさぼさの眉毛とおひげ、曲がつた足腰、どうみても良い歳までいつたおじいちゃんだつた。

くたびれた生成りの草色のシャツとズボン、腰には小さな袋をく

くり付けている。

「よう…せい…なの…」

「そうですよ。妖精はたいていこの姿をします」

元気だったらものすごく突っ込みたい所だわ

「キラキラして…羽の生えた妖精…に、憧れてたのに…」

「ははは、それ虫のことじやないですか」

「これはおおー」とじや

私が軽いショックでぐつたりしていると、旅の精霊と妖精が何か会話をし、祠の裏の転移門へ移動した。

「しばらく経つたら、闇のが来るからあとよろしくね

「あいよ。おじょうちやん、大事にな」

妖精はしわくちゃな笑顔で見送ってくれた。

おじいちゃんでも可愛いわね

また会えると良いな

気がつくと私はぐるやみ国の中庭のベッドに寝かされていた。

どうやつて戻つて来たのかも、治療も受けたのかさえ記憶に無かつた。

けれど、ひどく体がだるい。少し動かしただけで、あちこちずきずきと痛む。

なんの夢もみなかつた。

せめて夢の中で会えたらつて思つたのに。

田を覚ますと枕元の椅子にレーへンが座つていた。薄暗い部屋で

うつむく姿勢のレーへンの表情はよくわからない。

私はかすれる喉からゆつくりと声を出した。

「ヴィルはいた…？」

「…いませんでした」

私はため息とともに手を伸ばしてレー・ヘンの頬にふれた。レー・ヘンは私の顔を見ようとしている。

「嘘ね」

「すみません。戦闘になり、やむなく撤退しました」

レー・ヘンは気まずそうに眉間に皺を寄せて私に言つた。

「どうしてそんな状況になるのよ。私は手紙を届けてって言つただけよ?」

「すみません」

「手紙はどうなったの?」

「一応は渡しましたが…説明はしてません」

「…そう」

来てくれたんだ、ヴィル。

「ファームさま、どうか安らかに…」

「それ、死んだ人に言つ言葉よ」

体痛いのに、笑っちゃつたじゃない

消えない思いと見つからない答え 3（後書き）

次回更新ではレー・ヘンが頑張り（？）ます。

妖精が出てきました。

感想欄での回答で「一般とはかけはなれた姿」とお答えしましたが、ノームという、ヨーロッパのおっさん妖精の存在を書いてから思い出しました。しかもノームは大地の妖精らしいです。この作品の妖精イメージは、ホームレスのおじさんのような感じです。

「…ん？」

「どうしました」

「広場で異質な精霊の動きがありました。確認作業にはいります」

「その精霊の属性を最優先で調べて下さい」

「ヴィルヘルムス王、国民への挨拶の時間です」「わかりました」

ヴィルヘルムスはバルコニーから外に出て、彼を待ちわびた国民達へ国王就任の挨拶をした。冷静に、淡々と、適度な速度で喋り、早口になることも、言葉に詰まる事も無い。その内容は感動を与えるものではなかつたが、聴く者に安心と信頼を抱かせるものだつた。無事に挨拶を終えて手を振るヴィルヘルムスの耳元で、ささやく声がした。

「判明しました。闇です。人間の女性を抱えて広場から離れ、その後探知が途切れました」

「現場に案内しなさい」

「お、王、今夜の食事会の打ち合わせを…」「任せます。しばらく休憩時間にしてください」

ヴィルヘルムスは歩きながらマント、王冠と腰の飾りのついたサ

ーベル、華やかな刺しゅうの入った上着を脱いで傍に控える側近隊に渡した。

「どちらへ……！」

「外です」

先ほど人々の注目を浴びて演説していた人物が、まさか興奮冷めやらぬ広場に現れるとは誰も思わない。

ヴィルヘルムスは広場の隅の、裏路地に立っていた。足元には、おびただしい血痕が残っている。彼は微動だにせずそれを見つめる。「この血の持ち主を探知する事はできますか？」

「いえ……人物を特定することはできますが、探知が阻害されていますので、どこにいるのかは、

「かまいません。彼女かどうかの確認だけでも、

「わかりました」

「立ち去った闇の精霊の行き先には心当たりがあります」

ヴィルヘルムスは淡々と言い、歩き始めた。

「ヴィルヘルムスさま、あなたはもう一国の王です。身辺の安全に気を配つて下さい。……護衛に二等級精霊を五体つけますよ」

「（）自由に（）どうぞ」

広場から南へ向かつた先にある住宅街の片隅には、焼けただれた廃墟がある。そこには三日前の夜に現れたのと同じ黒髪の男が立っていた。

あたりは夕暮れ色に染まり、男の無表情な顔に黒い影を落としていた。

ヴィルヘルムスが仕掛けておいた結界は、またしても反応した様子がなかつた。

「また君ですか。彼女をどこへやりました」

「どこへも。の方はもうどこへも行きません」

端正な顔を傾けて、男は言った。

ヴィルヘルムスはわずかにだが、表情をゆがめた。

「その血は？ 君のものではないでしょ？」

男の服は、あちこち赤茶けた色に染まっていた。見慣れた者ならば、それが乾燥した血液だとわかる。だが、男に怪我をした様子がない事から、それが誰か他の者の血であることは一目瞭然だつた。男はヴィルヘルムスの言葉には答えず、うつすらと微笑みながら言った。

「いいんですかこんな所を出歩いて。約束も忘れてしまつへりい、とても忙しいのでは？」

「その血は誰のものだと聞いている！」

ヴィルヘルムスは声を強め、走り出した。

手にはめたグローブから、あらかじめ用意しておいた結界を発動させ、法術を動かす。

「目標へ向けて、拘束と貫通！」

周囲に針金状の光の集合体がいくつも発生し、ヴィルヘルムスの声とともに男の身体へと飛んで行く。

男は慣れた様子で光の針を避けて行くが、針達は男の動きに合わせて弧を描きながら追いかけ、数本が身体に突き刺さる。

「そのまま爆…くつ」

しかし身体に無数の光の針が刺さったにも関わらず、男の動きは更に加速する。一瞬の跳躍でヴィルヘルムス前へ移動し、首筋には刃物が触れる気配がした。

刃物は男の手から伸びていた。よく見れば、両腕がそのまま銀色の刃へ変形しており、今にもヴィルヘルムスの首を刈ろうとしている。

夕暮れの日差しを受けた男の腕が、一瞬光る。

「あの方の心を惑わせる存在がいなくなるといつのは、とても素敵
な案だと思いませんか？」

ヴィルヘルムスの目をまっすぐ見据えながら、わざわざくつろい男
が言った。

穏やかな聲音に反して、男の青みがかつた灰色の瞳は強く輝いて
いる。

だが、そう言つた男は何もせずに刃物のようになつていた両腕を
元の状態に戻した。

「ですが、どうもあなたを始末するの、かなり手間がかかるようで
すね」

男の手足にはヴィルヘルムスが仕掛けた攻撃の他に、いつの間に
か透明な花びらのようなものがまとわりついていた。

「随分と大事にされているようで」

男はヴィルヘルムスの周囲に浮かぶ五つの白い大輪の花のような
ものを眺めて言つた。

「そうでしょうね」

ヴィルヘルムスは淡々と言つた。

「あなたが探している人は生きています」

男は赤茶けた色の封筒を掲げた。

「ですがもうこの国には帰つてきませんよ。すでに新しい居場所で
楽しく過ごされています」

それまでの冷静で、ゆらぎなかつたヴィルヘルムスの雰囲気が一
変する。瞳には、怒りがこもつていた。

「そんな血まみれの手紙を見せられて信じじられるとでも？」

「信じる信じないは関係ありません。事実ですから。この国があの
方の居場所を奪つた以上、もう自ら戻る事はない」

男は言いながら掲げていた封筒をヴィルヘルムスの前へ差し出し
た。

「なにがあつても見つけ出します」

封筒を受け取ると、黒髪の男は一歩後ろへ下がり、冷たい笑みを浮かべた。

「それはどうぞ、『自由』」

見つからない思いと消えない答え 1（後書き）

レー・ヘンが頑張り（？）ました。
一人称じゃなくなつたとたん描写が楽になつた・・・

田中はさきらびやかな世界にいる男が、夜な夜な廃墟にでかけていた。

ほとんどの時間はそこに佇むだけで、時間が経つと「」の場所へ戻り、数時間の仮眠の後に公の仕事に向かう。

時折、体が汚れ手が傷つくのもかまわず、一心不乱に廃材を搔きわけ、地面を掘り返している姿もみられた。

見つかって欲しくないものを探すという矛盾のなかで、彼は狂いそうになる「」の意識と必死に闘っていた。

新国王就任に関わる一連の催しの日程は、直前に起きた異例の変更によつてかなり前倒しとなり、式典の当日はさらにに変更が起きた。それらすべてを押し進めたのは当事者である新国王だった。

前国王によつて次代の発表がなされると、国民への告知よりも早く、内々での即位式典が行われ、新白箔王は誕生した。この時点で異例だった。

さりに、病気がちだった前国王は療養のために早々に離宮へと移ることとなり、ただちに宫廷は新国王とその身辺の者たちで固められた。

その見事な交代劇に、前国王と新国王の間に密約の存在を勘ぐる者達もいたが、その内容まで把握出来た者はいなかつた。

「これからよろしくおねがいします、我が国の精靈よ」

「かしこまりました。ヴィルヘルムスさま。よつやく貴方を王と呼ぶ事ができますね」

即位式典の後、新白箔王はすぐさま近衛兵と共にナールデン公爵の元へ向かつた。それと同時に、王専属の非公開の調査部隊を動かす。即位前日に平民街で起きた、とある事件の調査のために。

「証拠は押さえました。ナールデン公爵と軍警察の癒着問題は貴族庁と軍部に任せます。それで、報告を」

「はっ、現場検証の結果、崩れた一階の下敷きになつた者がいるようです。遺体はまだ発見出来ていません」

白箔王は、自室の椅子に背筋を伸ばして座り、指一本動かさずに淡々と報告を聞いていた。

「それと、例の家が火事になつた翌日、今朝の事ですが、都市を囲む城壁に巡らせていた守護障壁を越えた者がいます。それも、障壁に無理矢理穴を開けるのではなく、障壁上部の力が薄い部分をくぐり抜けたようです」

「障壁の弱い箇所は、三秒ごとに移動する上に目視は不可能で、越えられる者がいないとされていたのでは」

「はい。ですので…ただ者ではありません」

「また例の場所へおでかけですかい？」

「…」

ルトガーは部屋の前で男が帰つて来るのを待つていた。

男の公務の予定表は頭に入っているので、今日はいつもより早い時間に帰つてくる事はわかつていた。

男は無言で扉を開けて中に入り、ルトガーは慣れた様子でその後に続く。

「俺たちの間でも驚きの声があがつてますぜ。日中もあれだけ動き回つているのに、よく体が持ちますねえ、ヴィルヘルムス王」

ヴィルヘルムスは返事をする事無く、両手にはめたグローブを外し、濡らしてしぼつたタオルで顔と手を拭くと、水差しから「ゴブレット」に水を注ぎ、一気に飲み干した。

ルトガーはかまわず続ける。

「知つてますかい？ 富廷内の一室では、新国王は夜な夜などこの女の元へ通つているという噂。皆その相手が誰かを嗅ぎまわっていますよ」

身を投げ出すようにソファに腰掛けたヴィルヘルムスは口元をゆがめ、いびつな笑いを浮かべた。

「そんなもの、好き勝手に詮索するがいい」

「どうせオーフあたりに隠してもらつてるんでしょうが、時間の問題ですよ」

ため息まじりにルトガーが言った。

「見つけられるのなら見つけて欲しいですよ」

ヴィルヘルムスはシャツの胸ポケットから取り出した赤茶けた封筒を見つめながら言った。

「どうしたんです、それ」

「さきほど手渡されました」

「誰に」

「先日と同じ、あのいまいましい黒髪の男ですよ」

ぶつきらぼうに答えたヴィルヘルムスに、ルトガーは少々面食ら

つた。

たいていの物事に動じず、冷静で沈着な男が悪態をつく様子は、めったに見られるものではない。

封筒の表面を指先でぬつくなぞりながら、ヴィルヘルムスは言つた。

「報告は？」

「ありますよ。家の裏庭で倒れていた軍警察隊員についてですが、案の定、巧妙なやりかたで記憶を封じられていきました。なんで、指示のとおり精神の病ということにして、退役処理と入院手続きの後、うちで強制的に身柄を引き取りました」

「結果は」

「手こずりましたが、これが報告書です」

ルトガーは着崩した軍服の懐から一枚の折り畳んだ紙を抜き出した。

差し出されたそれを受け取ったヴィルヘルムスはすぐに開いて目を通した。数秒後、ヴィルヘルムスが手を離すと、紙は音も無く火がつき、空中に溶けるかのようにして一瞬にして消え去る。

「銀色の……理論上では、闇の精靈といふことになりますが……現実に存在するとは……」

「報告している俺も、半信半疑ですよ。こないだ遭遇したつていう、ボロい外套を着た男とは、関係あるんですかねえ」

「おそらくあるでしょう。花の苗を貰いに来たと言つのがあからさまに怪しい上に、問いつめようとするのらしくらりとかわされ、さらに実力行使に及ぶと速攻で逃げられましたからね」

「その胡散臭さ、フリーなら、是非とも調査部にきてもらいたい人材つすね」

ルトガーが茶化すように言つた。

「あの場に精霊がいたということは、一緒にいたはずの人間は生きている可能性があるという事ですね。：オーフ、聴こえているのでしょうか？　いまこちらに来れますか？」

ヴィルヘルムスは、己の人差し指にある指輪に話しかけた。

「はい、なにか御用でしょうか」

柔らかな光と共に、輝くような流れを持つ黒髪と、美しいまつげをもつ中性的な顔つきの精霊が現れた。白地に金の刺しゅうの入った布地をたっぷりと使用した衣装をまとい、神官のような姿をしている。

ソファに腰掛けるヴィルヘルムスを見て、わずかに眉をしかめる。「王よ、そろそろ晩餐会が始まりますよ」

「この話が終われば向かいます。銀色の精霊について教えて下さい」
ヴィルヘルムスは衣装棚に向かつて歩き出した光の精霊オーフに声をかけた。

「闇でしょう」

「はい。さらに申し上げますと、人の姿をとり、しかも都市の障壁をすり抜け、ヴィルヘルムスさまの結界をもうともしない精霊となると、おそらく特級精霊です」

オーフは衣装棚から晩餐会用の王の装いを取り出しながら答えた。ルトガーはその様子を眺めながらソファの背にほおづえをついて言った。

「特級ってのがあるんですか？精霊ってのは一等級、二等級、三等級、あとは薄級…でしたっけ。それ以外にも存在するので？」

「ええ。特級はとても稀な存在です。世界でも20は存在しないでしそう。そしてそのほとんどはワタシのような国に仕えるなどの特殊な地位にいます」

取り出した靴に汚れがないか調べながらオーフが答える。

「それでは、オーフも特級精霊なのですか？」

「そうです」

「闇の特級精霊が仕えている国というはあるのですか？」

「オーフは答えず、上着を差し出し、ヴィルヘルムスがしぶしぶそれを受け取つて身につけ始めると、口を開いた。

「暗病国といつて、ほとんど名前だけの状態ですが、今でも存在だけはしています。この国ではおとぎ話に出てくる闇の国として有名ですね。そういえば先日、新たな名前に変わつていましたが」

「その新たな名前は？」

「装飾が施されたサーベルを受け取りながらヴィルヘルムスは尋ねた。

「くろやみ国です。表記は国字表記の黒闇国ではなく、くろやみ国だそうです」

「ずいぶんとふざけた名前ですねえ」

ルトガーが愉快そうに言つた。

「ヴィルヘルムス王、先刻の血痕の主は例の家の住人の方でしたよ鏡の前で身だしなみの確認をするヴィルヘルムスに、オーフは静かに言つた。

「…この手紙の血痕も確認してください。それと、何か仕掛けられていなかも」

オーフは、赤茶けた封筒を受け取つて、しげしげと眺めて、微笑んで言つた。

「なにも仕掛けられていません。付着した血は先ほどと同じ人物のものです。ですが、この封筒は我が国で流通していないものですね」

「へえ、そりや珍しい」

オーフの傍に寄つて、ルトガーは封筒を覗き込んだ。よく見れば、封筒はつなぎ目が存在しない袋状のものだつた。使われている紙にも見た事のない光沢がある。

「一連の出来事に共通するのは、闇属性ですか。おそらく彼女は…」

ヴィルヘルムスはちいさくつぶやいた後に、言った。

「…いいでしょう。なんとしてもその闇の国を世界の表舞台に引き

きり出します」

思わず良くなき生きていたわねって言つちやつたわ。一回田だけだ。

田覚めると一ヶ月ほど時間が経っていた。

なんでも、私の中の命脈と、気脈に変換した瘴気が反発して身体の内側からぼろぼろに崩れていたそうなの。

ずっと寝ていた割に床ずれなどがないのは、精靈達がなにかやつてくれていたおかげらしいわ。しかも身体についたお肉すら以前のままなのよね。うちの精靈達は隙のない仕事してくれるわね。

変化といえば、髪が背中あたりまで伸びていたくらいかしら

目が覚めたといつても、身体を動かすとあちこち痺れたように傷むから、まだ一日の大半をベッドの中で過ごしているわ。

ちなみに、王の居室は王の間に繋がっているらしくて（そいえば歩いてたゞりつける場所にあつた）、気脈の安定には適しているのだそうよ。

内臓が弱っているからと、食事は全てじるじるしたおかゆに近い何か。ほんのり甘いし、そう悪くない味だけど、色が黒と紫で、あんまり食べる気になれないわ…

あとは人間の食生活についてちょっとと思い出してくれたベウォルクトが、時々ホットミルクやアップルジンジャーティーを作ってくれる。

レーへンは白箔団の広場で私がみつけた号外新聞を持ってきてくれた。

しわくちゃになつっていたそれを手のひらで丁寧にのばして、読んで、ようやくあれが夢ではなかつた事を確認できた。

記事には新しい王の即位について詳しく書かれていて、同じページの写真に大きく写っている顔は、改めて見てもとても格好よかつた。

ヴィル、自分が暮らしていた国だからわかるわ。あなたの立場の大きさが
白箔国は戦争が多い赤麗国せきれいこくや青嶺国しおりんこくと違つて、交易で豊かに栄える國。

いま栄華を誇つている國のなかで、一番優雅な國。
私が存在するのか怪しい、小さな小さな國の王になつた時、彼は歴史ある立派な國家の王になつていた…

そして記事には私が知らなかつた彼の情報も詳しく書かれていた。
「ヴィル…あなた…」
年下じゃないの！

どれだけ私に隠し事してんのよ！
「18歳だったのね…成人年齢は過ぎてたからいいけど、未成年にお酒飲ませてたら、やばかったわね…」

居酒屋に良く行つたもの。しかもヴィルの方がお酒強かつたのよね。

「白箔国の成人年齢はいくつなんですか？」

「16歳よ。飲酒や結婚なんかはその年齢から出来るの。へえーへえー、青嶺国の学院で法術の学位をとつて、白箔国では精靈術の学位をとつたんですって。凄いわねえ」

というか本当に私つて彼の事知らなさすぎだわ

彼と会つた時は他愛ないおしゃべりが楽しくつて、そして彼の身

分を知るのが怖くて、あまり彼の事を尋ねなかつた。

「ねえ、レーへんはヴィルと会つたんでしょ？」

「ええ、一応」

「彼、どんな様子だつた？」

「とっても元氣でしたよ。といひでファームをめ、『』報告が

「な、なにかしら改まつて」

ふわふわした表情をしていた綺麗な顔が、いきなり真剣な顔になるから変にちよつと緊張しちゃつた。

「白箔国の方に祠の転移門がバレそうです。端末に接触の反応がありました」

「それはまずい。あれは纖細だからトキにこじつておかしくなると、こちらからは修理できなくなります」

レーへンの言葉に加えて、ベウォルクトが言つ。

「ファームさま、どうなさいますか？」

私を殺そうとした貴族の追っ手から…

私の頭には軍警察に取り囮まれて尋問される、祠の妖精のおじいさんの姿が脳裏に浮かんできた。怖い声で脅されて、涙目でふるふる震えてくる。

「…仕方ないけど、壊れちゃうのはもじもの時に困るし、しばりへ白箔国への転移門は使わないでおきましょ」

「いいね、レーへン」

「はい」

ベウォルクトがレーへンに確認して、両方そろつてお辞儀する。

「『』命令承りました」

なんだか初めて女王さまっぽいことした気分よ

でもこれで、転移門でヴィルに会いに行く事が出来なくなつてしまつた。

手紙で無事を知らせることもできただけで、やつぱりちゃんと会って話したい。

でも、私には既に考えがある。

私は白箔国だとただの街娘で、王宮なんて行つたって門前払いされる身分だけれど、くろやみ国では一応は一国の主。なあいつか、王さま同士といつ立場で会える機会がきっと来る。

そう思うと、明るい気持ちになれたわ。

そしていつか会えた時に、ヴィルにしつかり挨拶できるよう、ヴィルにちゃんと田を向けてもらえるよう、しつかりした良い王様になるわ！

「そうとぐるなら、まずは元気な身体に戻らなくちゃ！」「あの変な色のおかゆを持つて来てちょうだい！」

「ファームさま、運動のために城内だけですが散歩にでも行きませんか？」

「いいわね！ 軽い散歩ついでに植物園に行きたいわ

「それって植物育成施設のことですね」

「そうよ、味氣ないから植物園つて呼んでるのよ。植え替えた花の様子が見たいの」

「ボクも行つて良い？ 国土の土はひとつおつ見て来ちゃつたんだ」

「うそ、私を運んでくれた旅の精霊は、まだくろやみ国にいたりする。

街にいる時は偽装していたらしくて、今の髪は薄い水色で、瞳はターコイズブルー。どちらにもこにこしてて可愛らしい顔によく似合つていてるわ。

「ファームでいいわよ。國土の土つて外の事？ それって面白いの？」
「ボク、世界の土壤を見て回つたり、地形を調べるのが趣味なんだ
精霊つて趣味持つてるのね…

「國土に変化はありませんでしたか？」

「うーん、今の所なかつたみたい、あ、でもさ…」

自分たちと違う精霊に会えて、ベウオルクトはちょっと嬉しそう

だつた。布越しだから表情は分からぬけれど、いつも静かで落ち着いた声がちょっとだけ弾んでいるときがある。ときおり旅の精霊となにやら難しそうな話に熱中していたわ。

「この国は闇の転移門でないと来られないからラッシュキーだつたよ。ファムさま、また来るね～」

そう言つて、私が植物園に通えるようになつた頃、旅の精霊はこの国を去つていつたわ。なんでも、白箔国以外の場所にある転移門を使つたそうよ。

「あ、植物園にボク秘蔵の種を植えといつたから！ 楽しみにしてね！」

翌日、見事な果樹園ができていた。美味しい果物は嬉しいけど、急激に栄養を持つて行かれて横に植えてあつた私の花たちが枯れかけた。

これだから精霊は！

修正：踏みつけた
みつけた

ちょっとずつだけど、私は女王をまとめて一歩ずつ歩き始めた。

まずは知ることから！

「私は自分の生まれた国についてあまり知らないの。この国のこととはアナタ達に教えてもらうとして、他の国の事も知りたいわ」
「いずれ他国と渡り合うことになるんだし、情報は大事よね。」

「我々の伝手で各国の精靈から情報なら手に入れられますが、断片的ですし、具体的な人間達の様子はわからないですね…」

「実際に見に行つた方が早いってこと？」

「ファムさまの外遊は認められませんよ。しばらくは国内で大人しくしてください」

「わかるてるわよ」

私の提案に、ベウォルクトが聞鬢入れずに言つてきた。

私の行動に関して精靈達はとても厳しくなった氣がするわ。まああれだけ死にかけてばかりだから無理も無いけど…

「使者をたてるのはいかがですか？」

「私は行きませんよ。ファムさまをお守りするんですから」

今度はベウォルクトの言葉に聞鬢入れずレーへンが言つ。

「…ワタクシにひとつ考えがあります。ですが、時間がかかりますのでしばらくは手持ちの情報を知る所から始めましょう。大丈夫ですファムさまに学んで頂きたいことは沢山ありますから」

ベウォルクトの最後の一言には、なんだかい今までにないくらい強い決意というか、意思を感じたわ。私に向かつて

「…おてやわらかにお願いします」

「ファムさまが楽しそして興味深く学習出来るよ、全力を頼べ
させて頂きます」

そんなこんなで、わざと穢やかな口々が続いたある日、私はある
ことに気付いた。

「なによこれ…」

「レーへン」

「はい、ファムさま、なんでしょう」「う

「髪の汚れがおちないのよ。違う洗髪剤ないかしら…。
毛先から中程までがまばらな灰色の汚れがついて、洗つてもこす
つても落ちないのよ。

私の話をきいたレーへんは、二つこつ笑つて言つた。

「ファムさま、それは汚れではありません。髪そのものの色です」

「…どうこうことかしら」

「王座から変換された瘴気がファムさまの体に蓄積されていこる証
です」

「どうしてくれよ、私の白髪の黒髪が…！」

「もつじぱりくの辛抱ですよ」

それから数日過ぎすうちには、私の髪は根元まで灰色に染まり、つ
いにはレーへんと同じ銀髪になってしまった。

おほほほ、見事な輝きだこと。

「おそろいですね、ファムさま」

…私、人間やめちゃうの？

「そろそろ頃合いですね」

「どこのどう判断したのかわからないけれど、ベウォルクトが言つ
た。うちの精靈達には、そろそろ当事者に事前に説明する事の大変

さを理解してもらいたいわね

「すっかり体に変換された瘴気が貯まつたようすで、影靈を創りましょ！」

「影靈？」

「いつたいなにが起きちゃうの？」

「まずは媒体を用意しましょ！」

「何でも良いのなら花の苗なんてどうかしら？ 可愛こと思ひナビ」

「かまいませんが…おそらく寿命がかなり短いですよ」

それはちょっと寂しいわね

「はじめてですから、媒体にはファムさまの氣脈が馴染んだ物がいいかと」

私達は影靈創りのために王の間にいた。

最近は身体の痺れもなくなつて、王の間で過ごす時間も増えたのでここには私の私物がいくつか置いてある。鏡や身だしなみ用の道具やハンカチなどを入れた小箱、体の調子を整えるための体操をするマット、いつでも飲めるお茶セットと保存のきくお菓子。あとは良い香りのする花を乾燥させて入れたポプリボール。

一度、王座のまわりにごちゃごちゃと物を置いたらベウオルクトが「王の間は特別な場所ですから品格を～云々～」と言いだしたので、王座の裏に棚を置いて、細々とした物をだけ収納するようにしたわ。

王の間はとつても不思議な場所で、私が「こうだつたらいいな」と思うと、希望にあつた形に変形してくれる。

王座が無骨で可愛くないって思つた時は、気がつくと表面に纖細な彫刻が施されたものになつていたし、お茶を楽しむ場所が無いとなげくと、椅子やテーブルが現れてくれた。

一度レーへン達とゆっくり話をしたいと思つた時には、即座にソファやローテーブルが床から出てきてびっくりしちゃつたわちなみに王の間や王座と同じ素材で出来ているらしくって、全部

暗い色なのがちょっと寂しいのよね。あと出来ないこともけつこいつあつて、食べ物や服や本は出でこないみたい。

私は王座の裏の棚の扉を開けて、媒体になりそうなものを探してみた。

「じゃあ、子供の頃から使つてゐるこの櫛なんてどうかしら?」

「理想的ですね」

ベウォルクトが何か合図をすると、ちょうど王座の正面の床が立ち上がり、腰の高さあたりで止まった。

「こちらに媒体を」

「ええ」

私は手に持つていた桃色と白の花の絵が描かれた櫛をそこに置いた。

「それでは背筋を伸ばして王座に座つてください。心を落ち着かせて、穏やかな気持ちを心がけていてください。あとはレーベンのときと同じです」

「うーん」

私が心中で思い浮かべると、台の上に置いた櫛が黒いもやもやとした物につつまれ、空中に浮かんで人の形になる。
あら?

しばらくして黒いもやが溶け去るように消えると、そこには人の姿をした者が立つていた。背中を越える長さのゆるやかなカーブをえがく銀に髪、アーモンド型よりちょっと尖つている目、低くもないけど高くもない鼻、血色の良い唇に、筋トレで鍛えたやわらかくあがる口角……

「つて、私じゃないの」

銀髪の、私そつくりの人物がそこにいた。
着ているのは今まさに私が着ているのとまったく同じ花柄の膝下ワンピースに、白いリボンで編まれたサンダルをはいでいる。

『はじめまして、ファムさま。わたしはあなたによつて生み出された影靈です。よろしくおねがいいたしますわ』

どうしてかは解らないけれど、影靈は口を開かずにそう言つて、微笑みながら優雅にスカートの裾を持つてお辞儀をした。お上品だわ！

それからお辞儀が終つたもう一人の私は、間をおかずには色の子うさぎになつた。

近寄つて抱き上げると手のひらに乗る大きさで、すくべちりちりやい！

「はじめて創つた影靈ですから、まだ身体が安定しないようですね」「いいえ、この姿で合つているわ。私がお友達が欲しいって思つて、それから動物ならしいなつて思つて、うさちゃんなら、なお素敵つて思つたのよ」

「…姿はひとつの方が安定しやすいのですが…」

ベウォルクトがちょっと疲れたような声を出した。

私、だいぶベウォルクトの感情に気付けるようになつてきたわ。「次からは氣をつけるわ。で、影靈つて何？」

王座に戻つて膝の上にうさぎちゃんを乗せ、そつとなでてみると暖かくて柔らかくつて、ふわふわ…うふふ、幸せ…

「影靈は媒体を元に構成した精靈の一種です。王の間の機能として、一定量ファムさまの身体に瘴気が貯まつたら、それを用いて影靈が創れるようになつてゐるのです」

じゃあこれからも定期的に影靈を創る事になるのね。

「ファムさまにしか出来ないことですよ」

子うさぎちゃんの耳をそつと人差し指でつづついていたレーへんが微笑んで言った。

鏡で確認すると、私の髪はすっかり黒髪に戻つていた。

あはは、精靈なんて創っちゃつたわ。

子うさぎちゃんはハーシュという名前にしたわ。

まだ身体が安定してないからか、最初の一言以来何も喋ってくれないけれどいつも私の後をとてとてと歩いて、とっても可愛い。

「ファムさま、以前話していた国外の情報収集の件ですが、使者に影靈を使うのはいかがでしょうか」

私がハーシュを愛でているとベウォルクトがそんな事を言出した。「アンタ、こんなか弱いうちちゃんに何をさせようっていうのよー」「ハーシュは現在のファムさまと同程度の記憶と知識しか持ち合っていないので、旅に出しても危ないだけですよ」

一応、分かるけど、ちょっとはつきり言い過ぎじゃない? 国王舐めてる? レーヘン、んん?

「ハーシュではありますん」

私がレーへんにげんこつをあげようと右腕を振りかぶったとき、ベウォルクトが言った。

ハーシュには王の間であるすばんしてもらい、私は列車に乗つて随分と長い時間移動した先に連れて行かれた。

床がぼんやりと光るだけなので、部屋全体がよく見えない。まるで空氣そのものが固まっているかのように、肌にまとわりつく感じがする。慣れない感覚に私が身震いすると、レーへんがどこからともなく取り出した暖かいショールを肩にかけてくれた。

「ここはどこなの?」

「過去の王達の靈廟です」

ベウォルクトが奥に消えて、しばらくしてから小さな箱を持って来た。手のひらに乗るくらいの大きさで、光の具合で色がかわる綺麗な白っぽい布に包まれている。

「ファムさま。今回の影靈はこちらを媒体にしましょ?」

「それってなに?」

ハーシュ＝野つせきちやんの意（多分）
オランダ語です。

猫と迷つたけれど、ウサギで。

ほぼ一ヶ月後、私の髪は再び銀色に染まっていた。
そしてベウォルクトが持つて来た小さな箱と、その中身を媒体に、
私はハーフェと同じ手順で影靈を創った。

「今度の媒体にはすでに人物の記憶が含まれていますので、特に姿をイメージする必要はありません」

前回と同じように、黒いもやは人の姿となつた。

そしてもやが消え去ると、そこには美しい女性が立つていた。

短い髪は銀色で、長い前髪は左側だけ耳にかけられて、右側は目を覆うようにたらされている。肉の厚みが薄いほつそりした身体は、足元まで覆う形の飾り気の無い真っ白なワンピースに包まれていた。

「ふうん」

女性は物珍しそうに口の両手をひろげて眺める。

それから顔をあげて、確かに意思を持つた灰色の瞳が周囲を見渡す。

鋭さを持った目元、堅く結ばれた口元、一見すると少年のような中性的な風貌のなかに、権力者の雰囲氣があつた。

ほつそりとした指先で前髪をつまみ、しげしげと眺めて、口を開く。広い部屋によく響く、低めの安定感のある声。

「おれ、ちゃんと死んだと思ったんだけど？ それに、この髪の色……」

私は王座の上で背筋を正して、ちょっとお腹に力をいれて、声を出した。さあ、女王として初めての挨拶よ！

「はじめまして、古の女王。私は今この国で女王をしているファム。

あなたには影靈として復活してもらつたわ

「影靈…あの技術、実用化できたのか…で、わざわざ復活させて、

このおれに何の用?」

「あなたの力を貸して欲しいの」

「断る」

女性がそう言つた瞬間、突風のような轟音がして、いきなりレー
ヘンが私の目の前に立ちふさがつた。

「させまんよ」

レーへンのひろげた腕の下から彼女の方を見ると、私へ向けて右
手を突き出して立つていた。

「チツ」

「なんて危険人物を推薦したんです、ベウォルクト」

レーへンが強い声を出す。

「この性格は見事に生前のままですか…」

ベウォルクトがやれやれという風に言ひつ。

え、どういうこと?

「もしかして、私、いま危なかつた?」

「あんたを人質にと思つただけさ」

女性は悪びれずに言つた。

「面白い冗談ですね。今の攻撃はどう見ても殺傷目的でしたよ
見ると、レーへンの身体は服ごと傷だらけになつていて、余裕の
笑顔だし、血が出でないから気がつかなかつた。

「レーへン! ぼろぼろじやない!」

「ワタシは大丈夫です。時間が経てば元に戻りますから」

「王への攻撃は厳罰対象ですよ。貴方はそんなことまで忘れてしま
つたのですか? 古の王よ^{いじえ}」

ベウォルクトが静かにそう言つと、女性は震えて、表情には怒り
の感情が露になつた。

「おれはようやく死んで樂になれたんだ! もう放つておいてくれ

！」

そう叫んで、彼女は王の間から走り去ってしまった。

「えーと、あの人、行っちゃつたけどいいのかしら」
私がレーへンの怪我の具合をみながら言つと、

「ファムさまが認めない限り、城から出られませんので大丈夫です。
それに逃げ込む場所は見当がつきます」

ベウォルクトが落ち着いて答えた。こうなること、全部予想して
いたわねアンタ

表情が見えない精霊は、遠くに耳を澄ませるかのように布で覆わ
れた頭を傾け、数秒経つてこちらを向いて言つた。

「確認しました。この城の中には過去の歴代王の私物を保管する専
用の小部屋が多数あるのですが、現在彼女はその部屋に立て籠つて
います。ここは基本的に本人が中にいると外からは開けられません
「なんとか話し合いたいんだけど…本人が嫌つて言つなら仕方ない
わね」

ちょっと疲れたので、私は王座の裏の棚からお茶セツトを取り出
して、王の間にテーブルセツトを出してもらつて一息つくことにし
た。

保温瓶から甘く味付けした薄緑色のミントティーをカップに注い
で、お皿の上に昨日焼いたさくさくのビスケット菓子を並べる。
「ワタシが引っ張り出しますよ。扉のシステムに入すれば解
錠できます」

ぼろぼろなのに元気良いわねレーへン。あ、傷がもう塞がつて
切り刻まれた服の間から見える白い肌が目の毒だわ。

「立て籠るのも時間の問題ですね。影霊は王の間でファムさまから
力の補給を受けるか、なにかしらの気脈を攝取する必要があります。
そのうち飢餓感に耐えられずに出でくるかと」

「だからハーシュはいつも王の間にいるのね」

暗い色のソファに座つてハーシュを膝の上に乗せて、ミントティ

ーをたっぷり一口飲んで、私は一連の出来事を整理した。

「無理に開けなくていいわ。彼女が落ち着いてくれるまで待ちましょつ。レーへン、アナタはその小部屋の前で待機。彼女が出て来たら知らせてちょうだい。あと向かう途中で新しい服に着替えて来なさい。ベウォルクト、アナタはここに残つて私の質問に答えて。彼女の生前にについて知りたいわ」

レーへンはお辞儀をして王の間から出て行き、ベウォルクトはテーブルを挟んで私の向かいに座った。

「教えてちょうだい。あの人、どうしてあんなことを叫んだの？」
「彼女が生きていた時代は、世界中で戦争が起きていました。この国の元となつた暗病国も、国内は比較的落ち着いていましたが、軍事大国としてあちこちの国家を蹂躪していました」

第一王女だつた彼女はわずか11歳で即位。それとともに国軍の総帥という立場を受け継いで、何度も前線まで赴いて軍を指揮し、また類い稀な法術の才能があつたために直接戦いに身を投じることもあつた。

そして戦乱の世の集結をみるとなく、28歳の若さで亡くなる。

「…楽しみの少なそうな人生ね」
「ちなみに後世での呼び名は血霧の女帝でした」
「そ、そうなの。強そうな名前ね」

影と声 3 (後書き)

この後書きは活動報告にて

影靈として復活した古の女王が小部屋に引きこもって3日が経つた。

レーへンがずっと扉の前に待機してくれてるので、いい加減寂しくなった私はベウォルクトとの勉強の合間に様子を見に行つた。

「いいかげんに出て来たらどうですか？ そのまま部屋の中で一度目の死を体験しますか」

「自死なんて、おれのプライドが許さない。惨めな死骸を貴様らに見せてたまるか！」

「ではそこから出てきてください、ワタシの手で終わらにしてあげます」

「ざけんな！ 誰が貴様なんぞに殺されるか！」

「なぜか喧嘩になつているわね。といつか、声は中に『届くのね。』
「なに喧嘩してるのよ。わかつたわ、手を貸してくれないなら、それでかまわないから。とにかく出て来てくれない？」

「はん、いきなり甘い言葉に切り替えて誘い出すつもりか？ 出て来た所で拘束して洗脳でもするつもりか？」

「なかなか良い考えですね」

「レーへン、ちょっと黙つてなさい」

「はい」

私はレーへンを押しのけて扉の前に立つた。

「古の女王、あなたが出て来ても何もないわ。女王の名にかけて誓います。勝手に復活させたのは事実だし、自由にしていいわ」

「…本当か？」

「ええ」

「ただし、ひとつゲームに参加してもいいわ」

彼女は部屋から出て来た。元々白かった顔が、さらに青白くなっている。

「この女はふざけているのか？」

「ファームさまにはファームさまの考へがあるのです。アナタはもう王ではありません。今の王の命令には従つてもらいますよ」

彼女の言葉にベウォルクトが答えていた。顔見知りなのかしら？

「王の間でゲームの説明をするから、移動しましょ」

私はリボンを束ねて作った花飾りをピンで胸元に留めた。

「私はこの花を守りきつたら勝ち。あなたはこの花を奪つたら勝ちね」

「簡単なルールだな」

王の間に戻つてだいぶ回復したらしく、彼女の顔色はだいぶよくなっていた。

「あなたが勝つたら、願いをきいてあげる。負けたら私のお願ひをきいてね」

「ああ」

「ちなみに期限はあなたが諦めるまで」

「なんだと！」

「レーへン、全力で守つてね」

「かしこまりました。ではっ」

「なんで守り手が襲つて来るんだ！」

「攻めの守りですよ」

それから毎日のように繰り広げられる影靈の彼女とレーへンの攻防が始まつた。

もうどこのサークスなよつて言いたくなる激しい動きと、たぶ

ん法術？の技の応酬。始めは遠くから見学していたのだけれど、あまりに動きが早くって、私には何をやっているのかさっぱりわからないので、一日で飽きちゃった。

ちなみに毎回レーへンが圧勝しているらしいわ。
レーへんに勝てないとわかると、彼女は戦略的になつて、私の隙を狙うようになった。

おかげで食事を共にしてくれたり、私が植物園の手入れするのを見たり、お茶の時間を一緒にしてくれたわ。少しずつだけど、会話が続くようにもなつた。

でもすぐに彼女は私を攻撃しようとするから、脇にいるレーへんが速攻で攻撃態勢になり、そのまま長時間の攻防戦へなだれ込むのがいつもの流れ。ときどきこれが一晩中続いたりもするわ。
彼女もだけど、レーへんも元気がいいわね

そして戦闘で壊れたお城はベウォルクトが順次修復している。文句の一つも出てこないのは、彼女の復活を提案したのがベウォルクトだからみたい。

お城の仕組みの勉強として、私も手伝っているわ。横で眺めていることが多いけれど

今日はベウォルクトと共にこの国に元からいる移動民族に会いに行つた。ちょうど彼らがお城の近くを通りかかる日らしいの。

久しぶりの外よ！

私の身体もだいぶ落ち着いたらしくて、一時間くらいなら外出しても大丈夫だつて！ でも念のために体内の命脈を落ち着かせためのフード付きマントを着せられたわ。

彼らの事をベウォルクトはイグサ族と呼んでるので、私もそれにならつてイグサ族と呼んでいる。

イグサ族は30人程の集団で生活していて、基本的に島の沿岸部をなぞるように移動しながら生活している。鍋に入れた海水を火にかけて沸騰するやり方で蒸留して、塩と真水に分けて生活に使っているらしいの。食べ物は海藻と、魚介類。

私も魚が食べたい！ とベウオルクトに要求したけれど、くうやみ国近辺の海で採れるものは私の体には合わないそうよ。一応お城の施設で魚も育てられるらしいんだけど、何百年も動いてないらしくて、お魚を食べられるようになるまでずいぶん時間がかかるらしい。ちえ

イグサ族の人たちは私とは違う種族らしくて、背が低く、手足が太くて、顔には大人も子供も皆地面に生えている枯れかけの草と良く似たものがもじやもじやと生えている。男女の区別は、ちょっとわからなかつたわ…。身体にも草を編んだマントのようなものをまとつていて、遠目からだと涸れ草の固まりに見えた。

イグサ族には長い間滞在する場所もあって家のようなものもあるらしいんだけど、そこは遠いらしのでまたの機会に見せてもらひう事になった。

私は友好のしるしに、私の作った花の塩漬けと砂糖漬けに、緊急連絡用に呼び出しスイッチのついたペンダントをあげた。

それからベウォルクトに通訳してもらいながら、困った時は手を貸すし、必要な物があれば彼らの魚介類や生活用品と交換出来ると言う事を伝えた。これは私が欲しい物ではなくて、ベウォルクトが欲しがつたものだつたりする。イグサ族の事を色々調べているらしい。

帰りには逆におみやげとして彼らが連れている動物の毛を刈つたものをもらつたわ。このもこもこ、何に使おうかしら。王座で使うひざかけを編むなんていいかも。

帰り道、珍しくベウォルクトは私に感心していた。

「初めての訪問で彼らとあそこまで情報交換出来るとは、お見事で

す

「世の中には持ちつ持たれつって言葉があるのよ。ベウォルクト。こちらが見返りを期待せずに提供すれば相手は何かしらを返したくなるものなのよ。商売の基本ね」

お城までのあと半分の道のところとこりで、突然右陰から影靈の彼女が飛び出してきた。

「よう」

「な、なんで外に？」

「おそらくファムさまが外にいるからでしょう。城がゲームのルールを最優先で適用したようです」

私は腕の中のこともこをベウォルクトへおしつけ、胸元の花飾りを手で押さえながら反対方向へ走り出した。

「待てっ！」

「待てと言われて待つ女王はいないわよ！」

「コードの裾が足にからまって、ものすごく走りにくいや！」

そう走らないうちに彼女に腕を掴まれてしまった。

「それをよこせ！」

花を奪おうとする彼女から私は必死にもがいて胸元を守るうと深く屈んだ。

「あがつ！」

突然彼女がつまづいて、何かの力で地面に叩き付けられた。見ると、地中から伸びた手が彼女の足を掴んでいた。

「こんなこともあろうかと、地中にひそんでいました！」

声とともに、地面がひび割れてレーへンが飛び出して來た。今度は土で服を駄目にして…「イツは…

「ちくしょう！　たかが精霊に…」

「いまの時代はもう、たかがなんて存在じやありませんよ」

「あつ！　あんなところに空飛ぶトカゲが！」

「そんな言葉にだまされません…って、え？」

彼女の指差した方を見ると、薄緑色をした何かが「ひらへ向かつて飛んで来るのが見えた。

「な、何かしらあれ、鳥？」

「ファームさま！」

ベウォルクトが素早く私をも「じ」と抱き上げ、お城の方へ走り出す。

「ま、待つて、アレ、上に人が乗っているわ！」

「襲撃かもしだせん。とにかく城へ戻りましょう」

いつもおつとりしているベウォルクトも、その気になれば俊敏になるのね

「わ、わかったから、レーへンー その人たちまとめてお城まで連れて来てちょうだい！」

「はー…い」

猛スピードで遠ざかっていくレーへンの声が間延びして聴こえた。これドップラー効果っていうのよね！ こないだ勉強したわ！

「ベウォルクト、世界にはあんなに大きな翼を持つたトカゲがいるのね！」

「ファムさま、あれは竜です」

しばらく経つて、レー・ヘンの後から竜という生き物と一人の人間が王の間に入って来た。

影靈の彼女は一緒じゃないみたいね。

生まれて初めて見る竜は、牛2、3頭分はある大きさの灰色がかった緑色をしていて、二本の早く走れそうな足と一本の小さめの手、一対の大きな翼と長い一本の尻尾を持っていて、ごつごつした岩や木の肌のような鱗らしきものに覆われた姿をしていた。背中の中程には馬具のようなものがとりつけられている。

それに乗つて来たであろう人物は、背格好から判断すると相手は男の人のように、毛布に包まれた何かを大切そうに抱えている。あの大きさからして…

「こんにちは。私はこのくろやみ国の女王ファムよ」

思いつきり普段着用の木いちご柄ワンピースで王座に座つてますけどね。女王なのよ

「お目にかかるて光榮です、ファム女王。あの…ここは暗病国ではないのですか？」

お姫さんはやはり男性だった。マントのフードをかぶつた上にマフラーを深く巻いているので顔はよくわからないけれど、低く響く声が王の間に響いた。

「以前はね。いまはくろやみ国という名前になつたの。それで、うちに何か御用かしら？ その抱えているのはもしかしてあなたの女の子さん？」

「…妹です」

彼はゆっくりと抱えていたものを床に降ろし、毛布を取りのけた。

「…どうしゃったの、その子」

「子供の頃からこいつは時々こいつやって身体がおかしくなるんです。初めは一部分だつたんですが、成長するにつれてどんどん酷くなつていきました。様々な名医に見てもらいましたが、ついに見放されました」

中から出て来たのは、身体のほとんどが透けてしまつた女の子だつた。

「かつてこの地にあつた暗病国は、高度な技術を持つた国だときいています。…どうか、妹の命を助けてください」

少女の前に膝をついて、お兄さんは深く頭を下げた。

「どちらで暗病国の話を聞きましたか？ この国は人間の地図には載つていらない場所ですが」

私の横に立つていたベウォルクトが言った。

「旅の精霊が教えてくれました。西の海の上に妹を助けられるかもしれない国があると。それから自分で古い文献を調べて、暗闇国の事を知りました」

「私を助けてくれたあの子ね…」

あの明るくてやさしい精霊ならこの国の事を人に教えるくらいしそうだわ。

ベウォルクトが納得したように言った。

「確かにこの国にはかつての暗病国のが眠っています。人間の国地図にはまだくろやみ国は登録されていませんから、信じて貰うためにあえてばかした伝え方をしたのでしょ？」

「あなた達はどこから來たの？」

「緑閑国」です

海の向こうの青嶺国のその先の、かなり山深いところにある小さな国だわ。

「伝説を信じて、最後の希望にここまで来てくれたのね」

「失礼します」

レー・ヘンが女の子の透けた手首をとつ、じっと見つめた。

「どう?」

「かなり危険な状態です。おそらく生まれ育った場所の気脈が特殊だったのでしょうか。ファムさまに似た体質のようですが、制御が安定せず暴走しているようです。自分の命脈が外へと流れ出て、逆に天地の氣脈を吸収し、どんどん存在が薄くなつて身体が消滅しかけているのかと。」

「ベウォルクト、レー・ヘン、意見を聞かせて」

「影靈として再生させる方法なら助かるかもしません。ですがこの少女の存在はだいぶ薄くなっているので、影靈の媒体として持つかどうか…」

「それに、影靈創りの時期までに間に合ひそうにありません」

私は自分の髪の毛を手に取つてみた。まだ半分ほどしか銀灰色に染まつていない。

私たちが話をしている間も、少女の輪郭はどんどん薄くなり、いまはもう、うつすらとした影だけが存在を示すだけになつていて。「とにかくこの状態を止めないと。そういうた薬かなにか、ある?」「あります。治療室から持つて参ります」

そう言つてベウォルクトが早足で立ち去つていった。

「ファムさま、先ほど着ていたコートはありますか?」「これね」

レー・ヘンは私からコートを受け取ると、少女の身体を包むよつこ

巻きつけた。

「これで命脈が流れ出すのを止められます。一時しのぎですが…」
お兄さんは少女から田を離さずに、ただじっと私たちの話を聞いている。

彼らを連れて来た竜も、心配しているのかそつと上から少女を覗き込んでいた。

お兄さんが少女をいたわるようにそつと触れている場所を見て、私はあることに気がついた。

「ねえ、お兄さんの力を借りれないかしい。使えそうな感じがするの」

はじかれたように彼は私を見た。

「あなた、生まれ持った命脈以外の気脈が身体にあるの、わかる？」
王の間にいるからか、私には気脈や命脈などの存在がよく感じ取れるようになつてゐみたい。お兄さんの手が触れている場所から、何かが少女に流れ混んでいるのがわかつた。

「もしかしてこの身体の原因も…」

そう言つてお兄さんは片手でマフラーとフードを外した。
中から現れた精悍な顔つきの男性は黄緑色の短く刈られた髪と深緑の瞳をしていて、さらに田元を中心に三分の一ほどが鱗のように堅く変質していた。特に左目は爬虫類のような瞳孔をしている。

「おそらく彼らは竜脈の近くで育つたのでしょう」

レーへンが少女の手首に触れたままの姿勢で言つた。

「竜脈？」

「古くからある天然の強い気脈の一種です。竜はそこからの影響で生まれるんですよ。うまく調和すれば彼のようになりますが、この少女のようにその強い気脈に引きずられるようにして身体を壊す場合もあります」

「じゃお兄さんは竜の力を持つた人なのね。すごく強い生命力を感じるわ。ねえ、この竜脈をうまく混ぜて調和できれば、彼女の命脈を身体にどじめられるんじゃないかしら」

「そんなことをすれば人間じゃなくなつてしまつぜ？」

声に振り返ると、王の間の入り口に影靈の彼女が立つていた。

「身体に竜脈が混じつたからそこにはいる男はそんな格好をしているんだ。顔を隠していたのは、そのみてくれば地元で苦労したからじゃないのか？ そんなのを命脈にまぜるとさらに酷い事になるぜ。図々しいんじゃないのか？ そんなことをして。あなたはその人間の事を背負い込めるのか？ 勝手にまるで違うモノに変えられて、おれのように絶望してあんたの命を狙つようになるかも知れないぜ？」やううとしていることは、そういうことだ

お兄さんはうつむいている。けれど、少女から離れる事はない。レーへンはずつと少女の手首を持つて様子を測っている。私は彼女を見つめて、言つた。

「でも、今この場でこの子が死んでしまう事を望む者は誰もいないわ」

「持つて参りました」

ベウオルクトがいくつか箱を抱えて帰つて來た。

小瓶から薬を飲ませようとレーへンが少女を抱き起しすと、少女の口が動いてかすかな声が聞こえた。

「お、おね……おねがいします。兄を……ひとりぼっちに……したくない

…」少女の兄は顔をあげて、私を見つめて言つた。

「どんな姿でもかまいません。妹が生きてさえいてくれるのなら……だから……頼みます」

私はゆっくりと、自分にも、王の間全体にも響くよつと言つた。

「この子が生きる事に悩んだら、私も一緒に悩んで、一緒に良い方法を考えるわ。法術が使えたりすゞく頭が良かつたりするわけじゃないけど、それくらいの事は私にもできるし、更にいえばこの国の

女王としてなら何ができるはずよ

王の間に頼んで影霊を創る時のような口を王座のすぐ横に出して

もらい、少女の身体を横たえる。

私は王座に座って、ゆっくり深呼吸をして心を鎮めた。

『ファームさま

「ハーシュ？ どうしたの？」

声が聞こえた方を見ると、ハーシュが誕生したとき以来の人の姿になっていた。

『お手伝いしますわ。この子が吸い取った気脈をわたしに流して下さいまし』

口を動かさずにやう言つて、ハーシュは穏やかな微笑みのままそつと手を差し出してきた。

「わかったわ」

私はハーシュの手をとった。

「ファームさま、ハーシュと手をつけないだまゝ、反対の手を少女の胸元に置いてください。アナタはこちらに手を」

そう言つてベウォルクトがお兄さんの右手を少女の額へと誘導した。

私はゆっくりと眼を見渡し、最後に影霊の彼女を見て微笑んで、言つた。

「あ、はじめるわよ」

願いが許される場所 2（後書き）

竜出でました。王道っぽく。竜が
現れる新キャラ達の名前は、順々に出てきます。

2011／02／06…お兄さんの髪の色を深緑に変更

はじめてだけどなんとなく大丈夫だといつ思いがあつたから、私は落ち着いていた。

少女の身体を眺めながら流れをつくることを意識する。

冷たくて固いバターがゆっくりと温まり、溶けて柔らかくなるようになつた。

それからその柔らかくなつたものが流れ動いて行くよう…

お兄さんから少女に、少女から私の身体を通しハーシェに…

少女の命脈はゅくへつと竜脈と混ざるにつれて強く感じられるようになつて來た。

それと共に消えかけていた姿が現れ始め、しつかりとした輪郭が見えるようになつてきた。

そして私の視界がちょっと暗くなつた瞬間、

『ファムさま、』

「命脈が安定しました」

「お身体の限界です。今日はここまでにしましょう」

ハーシュが言つて、ほほ同時にレーへンとベウォルクトが喋つた。

私は手を離して、倒れこむように背を王座に預けて深く息をついた。

どれくらいの時間が経つたのかわからないけれど、すくなく身体が重くなつたみたい。うまく動かせないわ。

「ファムさま、すぐに薬を飲みますよ」

レーへンがすぐさま小瓶を3本押し付けて來た。

「まずこれを飲んで、次にこれ、そして15分後にこれを飲んでく

ださい」

「わ、わかつたわ」

なんだかよくわからないけど、とにかく言われたままに飲む。初めのはすつごく不味くて、次はまあまあ甘くて、最後のは酸っぱかつたわ。

全部飲み終わったら、身体がびっくりするくらい軽くなった。

「ありがとう、レーへン」

「お疲れさまでした。ファムさま」

小瓶をレーへんに返してあたりを見渡すと、ハーシュはいつのまにか子ウサギに戻つていて床に目を閉じてうずくまつていて、お兄さんは崩れるようにして少女の眠る台のふちにもたれ掛かっていた。みんなそれぞれ疲れているみたいね。

そばでずつと様子を眺めていた竜はふんふんと少女の匂いをかいで何かを確認しているみたい。

ベウォルクトがそれぞれの身体の様子を見て回つて、最後に私の元へ戻つてきた。

「ファムさま、お身体の方はどうですか？」

「今のところはちょっとだるいだけね。ねえベウォルクト、あの子まだ元気になれないの？」

「まだ身体の消滅を防げた段階です。全快にはしばらくかかるかと。ファムさまの身体への負担具合を見て明日か明後日に一回目をおこないましょう」

「わかつたわ。じゃあみんなの滞在場所を用意しましょう」

「少女は王の間から動かさない方がよろしいですよ」

「ならきっとお兄さん達もここに泊まる方が安心できるわね。簡易テントでも張る？」

「…夜だけ彼らの普通の寝台と簡単なついたてを作りましょう」

「王の間にテントは駄目みたいね。ベウォルクト。」

「寝台とついたてね。あと人が滞在するのに必要そうな物は私が用

意するから、アナタは竜が滞在するのには何が必要か聞いておいて

ちょうどい

「かしこまりました」

私は王座を離れて、うんと伸びをした。

それからこわばつた身体をほぐすよつこゆつくじと歩きながら窓辺に立つ影靈の彼女の元へ行つた。

「なにもしないでくれて、ありがとつ」

「…べつに」

彼女は窓の外を向いたまま言つた。

「ねえ、さつき言つてた事についてだけじ、あなた絶望してたの？」
「死ぬ時までな。今は、なにもかも変わつちまつて、無くなつて、
からつぽになつちまつた」

小さくかされた声だつた。

私は彼女の目線と同じ方向にある、空を覆つ灰色の雲たちを眺めながら言つた。

「あのね、私王の間であなたを蘇らせた時に願つたの。もしも蘇らせようとしている相手が死んでいたいと思つていたなら何もしないでちょうどいいって。本人が生きたがつていた時だけ復活させてちょうだいって」

「…なんだと」

私をまっすぐに見つめてきた彼女の瞳は暗い灰色だつた。いまにも雨が降りそうな空の色だわ。

「あなた、死ぬ時にもつと生きたいつて思つていたはずよ」

「…覚えてない、そんなこと」

彼女は足元に目線を移した。見ると、ここ何日かの乱闘のせいで真つ白だつた細身のワンピースの裾はぼろぼろになつて、灰色になつていた。

「私ね、この間死にかけたの。身体の内側が崩れて、血を沢山吐い

て、自分ではわからなかつたのだけどかなり危なかつたらしいわ」
あの時、思い返すたびに呆れちゃうくらい私は自分の死を感じて
なかつた。レーへンが必死で止めたのに、まだまだ大丈夫だつて思
つてた。

「それでね、その時すごく会いたい人がいて、自分の身体がどうな
るかよりもその事だけ考てたの。だからもしも私がその時死んでい
たら、死ぬ間際はその人と会う事しか考えてなかつたことになるわ」
あの時ヴィルに会えていたら、もしかしたら私、気が緩んでその
場で死んじゃつてたかもしれないわ

「どちらえようによつては何かを望むことは生きたいつて願うことに
なると思うの」

「…おれも、なにか強く望んでいたのか
「たぶんね」

それつきり彼女は口をつぐみ、私は背後から聞こえてくる竜の鋭
い爪のついた足が床を引っ搔く音や、ベウォルクト達が話す声
可愛い竜ですねえ」「床が傷つくのである竜の爪を切りたいのです
が」「いやあの、爪がないとコイツ早く走れなくなるんで…」に
なんとなく耳を傾けていた。

「…ゲームはおれの負けでいい

「ぼろりと、こぼれ落ちるように彼女の声が聞こえた。

「え？」

「あなたの配下になつてもいいつて言つてるんだ。したいことも別
にないしな。ただし、条件がある

「何かしら？ 可能な限り受け入れるわ

「黒のマスカラが欲しい。銀のまつげだと目元が寂しいんだ」

「化粧品もアクセサリーも、必要な物があればなんでも用意するわ。

昔あつたものと同じものもお城のシステムを使えば作れると思うか

ら、なんでも相談してね」

「ああ」

「ねえ、ずっと尋ねたかったのだけど、あなたの名前、なんていうの?」

「おれの名は…女王さま、あんたが新しく名付けてくれ」

「え、いいの?」

「おれは生まれ変わったんだ。なら名前だって新しいほうがいいだろ」

照れる美人ってとっても可愛いわ!

「えっと、じゃあマルハレータはどうかしら? 私の育った所の言葉で真珠という意味があるの」

「マルハレータか…わかった」

「ありがとう、これからよろしくね! マルハレータさん」

「呼び捨てで良い。…ようしく、ファム女王」

私が差し出した手を、彼女はゆっくりと握ってくれた。
ほつそりした長い指は少しひんやりしていたけれど、暖かい手のひらだった。

さあて、今夜は新しい仲間と、お密さんの為に女王さま自らが手

料理をふるまうわよ!

いつも自分で作ってるんだけどね!

「はい、どうぞ」

意外なことにマルハレータの要求した品々を用意したのはレーへンだつた。彼女は嫌そうにそれらを受け取つて、大浴場へ消えて行つた。

人間の頃の習慣に感覚が馴染んでいるから、影靈という存在になつてもお風呂には入りなくなるものらしいわ。

一夜明けて、朝。私とベウォルクトは朝ご飯を持って兄妹と竜が滞在している王の間へ向かつた。

「おはよう、サヴァ。身体の具合はどう?」

「おはようございます。ファム女王。おかげさまで疲れがとれました」

お兄さんのサヴァはすでに起きていって、旅装の下に着ていたゆつたりした粗織りの長袖のシャツとズボンに、膝上まで覆う皮のブーツを履いている。服の端からは所々変質した肌が見えているけれど、昨日のように隠したりせず、堂々としている。

彼は竜のゲオルギの身体を草で編んだたわしのような物で磨いていた。

「ライナちゃんの様子はどう?」

「眠つたままですが、健康状態です」

一晩彼らと一緒に待機してくれたレーへンが答えた。

消えかかっていた少女は昨日の急造した台とは違つて、柔らかなマットのついた寝台の上に横たわっている。一時は影しか残らない

まで薄くなつていた姿はすっかり存在感を取り戻していて、ライナ
とこの名の少女の姿が良く見えるよつになつた。

顎のラインで整えられた暗い緑の髪に、涼やかな目元にはお兄さんのサヴァーと似た雰囲気がある。それに加えて子供らしさのある丸みのある輪郭。まだ女性らしさの少ないほつそりとした身体つき。瞳の色は何色なのかしら

彼女は遠目からだと人形と見間違うくらい静かに眠っている。

「ゲオルギ用の朝食も用意しました」

そう言ってベウルケトが抱えていた箱を床に置いた。

中身に異物。黒豆。黒豆一袋の右端を手で押すと豆が飛び出る。

た瓶を取り出してサヴァに渡す。

「これをテイナさんに飲ませてあけてください」

「かのうさん、おはようございます。」

「元気になつてもらうわよ」

窓際にテーブルセットを用意して、スープポットからそれぞれの器にポタージュを注ぐ。野菜と果物のサンドイッチを盛った籠はテーブルの中央に置いた。食事はマルハーレータも一応食べるだろうからと3人分。人数が増えると作りがいがあるわ

「おはよう、マルハレータ」

「ああ…おはよう」

王の間に入つて来たマルハレータは新しい服に着替えていた。ヒールが高い黒のショートブーツに黒い細身のパンツ。薄いグレーの光沢のあるシャツを着て、両手には法術師の証である人差し指と中指が覆われていない形の黒いグローブをはめている。

「男みたいな格好ね」

「おれにはこれのほうが落ち着く。もう女王じゃないしな。おかしいか？」

「ううん、男装の麗人って感じで、素敵だわ！　ねえ、その靴で歩きにくくないの？　それにどうして爪に色がついてるの？」

「靴は慣れると平氣になる。今は高さがないと落ち着かないくらいだ。爪はちょっとした仕掛けのためと、その、お洒落で…」

「綺麗ねえ、私にもできるかしら？」

「ああ。道具があれば簡単だ」

「ああ、女の子同士の会話つてものすつしふり！」

一回目の龍脈の融合は午後に行われた。

もう消えかける事のなくなつたライナの身体には様々な変化が起きた。龍脈の影響らしいわ

全身が鱗に覆われたり、色が変わったり、顔つきが変わったり、かと思えば元に戻つたりと安定しない。

「ファムさま、影靈の要領で調節してみてください」

「わかったわ」

せつかく見た目が変化するのなら、可憐な姿になつて欲しいわ

私は王の間の力を借りてそう願うと、最終的にライナの姿は元の女の子の姿に近いものになつた。

そうするうちに彼女の命脈が動く気配がしたので、私は触れていた手を離した。

まぶたが痙攣して、そっと開く。兄のサヴァと同じ深い緑の瞳が現れた。

「ライナ、ライナ？」

サヴァがそつとライナに声をかけた。

「…兄さん？」

ライナは一回ほど瞬きした後にゆっくりと両手を持ち上げて目の前にかざして眺める。

「私、いま生きてるの？　どこか消えてない？」

「どこも消えてない。お前は生きているよ」

ライナはゆっくりと身体を起こした。彼女が着ていた病人用の薄い灰色のゆつたりとしたワンピースは後ろが破けていて、窮屈そうに折り畳まれた白い羽根が見えている。両耳の上には親指の先ぐらいいの大きさの突起が現れていた。

「羽根と角が残ったわね…」

一対の真っ白な羽根と一対の銀色の小さな角。あごのワインで整えられていたまっすぐな髪は暗い緑色の中にいくつか銀色の房が生まれて、たて縞模様を描いていた。

私は王の間に頼んで全身が映る鏡を出してもらつた。

「ライナちゃん、心の準備ができたらこの前に来てちょうだい。すぐじやなくてもいいわ」

「女王さま、お気遣いありがとうございます。今、行きます」

心配そうなサヴァに手伝われながらライナは寝台から降りて、ふらつきながら裸足のまま鏡の前に歩いていく。

彼女はまっすぐな視線で自分の姿を見た。

「…面白い髪の色になつてますね」

「あと羽根と角が生えちゃったけどね。でも十分可愛い女の子よ、あなた」

ライナは角を人差し指で撫でたあと、ワンピースの襟をさらに破いて背中の羽根を引っ張り出して、なんとか動かそうとして、あきらめて言った。

「私、銀色好きです。角はそんなに目立たないですし、羽根は頑張れば空が飛べるようになるかもしません」

彼女は鏡を見ながら自分の顔に触れ、ワンピースの上から胴体に触れ、両腕、両足に触れ、しゃがんで10本揃った足の指を優しく撫でた。

「私の身体、もう消えたりしませんか?」

「このまま城内で様子を見て、10日間後までに体内でなにも変化が起きなければ、その後も大丈夫でしょう」「う」

ベウオルクトがそう言つて、ライナは笑顔になった。

願いが許される場所 4（後書き）

やつぱり後書きは活動報告して

私は目を潤ませて天を仰いだ。目に入るのは果てしなく高くて暗い色した天井だけど、感動のあまりなんだか輝いて見える。

「おいひい…お魚つてこんなに美味しい出汁がでるのね…」

なんとサヴァアがゲオルギと一緒に海の遠方まで出かけて、網で魚を捕つて来てくれたの！

彼らの旅の荷物にあつた干し肉をもらつた私が涙を流して喜んだのを見て、可哀想に思つてくれたらしいわ。

下処理をしたお魚をぶつ切りにして油で炒めて野菜と一緒に煮込んだスープは、ひと匙でうつとりするような口クのある味だった。

「喜んでいただけてよかったです」

「やつたね兄さん」

新鮮な野菜や穀物はあるんだけど、お肉やお魚、ないのよね…。代わりに植物油や豆やスペイスで作られたお肉っぽいものや人造の卵や牛乳とかは手に入るんだけど、時々あの脂ののつたベーコンやこつてりした貝のシチューが恋しくなるわ…

「ベウオルクト！ レーベン！ 魚介類の保存食の作り方を調べるわよ！」

「学習意欲が高いのはよろしいのですが、王の間で干物をつくることはやめて下さいね」

元気になつたライナが翌日には固形の物も食べられるようになつたので、回復のお祝いを兼ねて私はまた頑張つてご飯を作つたわ！

今晚の献立は魚と野菜の具沢山スープとパンが二種類、三種類の

豆のパテと温野菜サラダ、デザートは果物のゼリー寄せとベリーのブディングよ。

レーへんにちょっと手伝わせたけれど、単純な下ごしらえは出来ても、味の仕上がりに関わる細かい気配りが出来ないみたい。味見させてもいまいち分からなって顔をしていたわ。

今日は品数が多いので食堂でご飯を食べる事にしたわ。

精靈達は料理を食べたがらないから離れた席でゲオルギにご飯をあげたり、食器を運んだりしている。

元人間の影靈のマルハーレータは一緒に席についてなにやら難しい顔つきでサラダを食べている。彼女は大抵の料理に対しても不思議そうな顔や難しい顔をするのだけど、生前は何を食べていたのかしら?

「そういえば、あなた達はいま何歳なの?」

ちまちまとパンを食べていたライナが顔をあげた。

「兄は21歳で、私は12歳です」

彼女ははきはきと答えた。

「しつかりしてるわねえ」

「俺がしつかりしていないので…」

サヴァアは静けさと落ち着いた雰囲気を持つている青年で、肌の紋様の影響か表情が少なくて言葉数も少ない。そのかわりにライナは喋る子で、よく動く表情で明るく笑う。サヴァアに言わせると、屈託なく笑うようになったのはこの国に来てからだそうよ。

食後の団らんにお茶を飲みながらサヴァアとライナの生い立ちを詳しく聞く事になった。

「戦争で村が無くなってしまい、一人きりの兄妹なんです

」
「彼らが生まれ育ったのは山あいの小さな村だつた。

近くには野生の竜が多く生息する谷があつて、扱いが難しい竜と仲良くなる人間が多く、竜関係の仕事につく村人が多かつた。

けれど6年前に起きた野生の竜が生息する谷の権利争いに巻き込

まれて、村は消滅。ライナと彼女の幼馴染以外は皆殺されてしまつた。

うちの精靈達に言わせると、その村も竜の谷も、竜脈の影響があつたに違ひないそうで、その村には竜人と呼んでもいいくらい強く竜の力を持つ人達が沢山いたはずなんだそうよ。

「小さな争いでおそろしく貴重な資源を無駄にしていますね」

一足早く村を出て自活していたサヴァーは、なんとか生き延びた4歳のライナを引き取つて一緒に暮らしはじめた。

けれどライナの症状が一気に悪化し、治療法を求めて隣国の青嶺国に身を寄せた。

その後、知り合つた旅の精靈に海の彼方にある治療出来そうな国を教えられ、ほとんど賭けのよつた思いで海を渡つてくろやみ国までやつて來た。

「ファームさま。私達をここへ置いてくれませんか」

ライナが意を決したように言った。

「何でもします。私の身体を治してくれた恩返しがしたいんです」「ちらつと隣のサヴァーを見ると、目を見開いている。彼は知らなかつたみたい。

周りを見ると、精靈達は我関せずという様子なので、私の好きにして良いといつゝことらしい。マルハレータにも視線を送ると、『アンタが女王だる』という声が頭に響いて來た。どうも影靈は創造主の私と思念で会話できるみたいね

「私はかまわないけれど、ここ何も無いわよ」

「私達は身体のせいで緑闇国でも青嶺国でも辛い思いをしました。暖かく迎えてくれたこの国で生きていいたいんです」

ライナのまっすぐな瞳はきらめいている。確かにここには山も森

も自然の生き物もないけれど、身体が消えかける子や身体に鱗模様がある人を嫌がる人間もいないわね。羽根や角を生やした責任もあるし、彼女達がここで暮らす事に問題はないわ。

「サヴァはどうなの？」

「俺も構いませんが… ゲオルギは国に戻さなければなりません。卵から俺が育てましたが、個人で所有権を持てないんです。コイツは頭がいいから、鞍を外せば自分で帰れるでしょう」

「そう… せつかく仲良くなれたばかりなのに…」

「ゲオルギを見ると、何やら熱心にギイギイと鳴いている。それを見ていたレーへンがうなずいて言った。

「大丈夫だそうですよ。一旦戻つて、力ずくで脱走してくるそうです」

「レーへン、アナタ言葉分かるの？」

「竜の言葉は簡単ですから」

「私には全部同じ鳴き声に聞こるのだけど、何がどう簡単なのかしら？」

「ゲオルギ、オマエ言葉喋るのか」

「サヴァも驚いているじゃない

「この世には人間が考へてている以上に賢い生き物が沢山いるんですねー」

よ

ついに国民が出来たわ！

祝杯をあげたいのに、お酒が無いなんて！

「ベウォルクト、一刻も早くお酒作りを開始しましちゃうねー」

「では明日の勉強は醸造技術にいたしましょう」

とりあえず絞りたての林檎ジュースで乾杯したわ。

無いものとあるものの 1（後書き）

変更・ライナの年齢を二歳ひきあげました。

「よく似合つてゐるわよ、ライナちゃん」

一日経つてだいぶ歩けるようになったライナはもう病人服ではなくて、身体を締め付けないふんわりとしたワンピースを着ている。羽根があるので背中があいたホルダーネックになつていて、首元にはふわふわした生地のスカーフが巻かれて、同じ生地の花飾りがついたサンダルをはいていて、とても可愛らしい姿だわ。

「ありがとうございます、ファムさま…」

ライナは照れながら笑う。

昨日ガラス板の画像を操つて彼女の服を作つた時、はじめ顔を赤らめて遠慮していたけれど、次第に一緒に服の柄えらびを楽しんでくれた。

「ギャオギャオ」

「そう、君の言うそれが結界。壊すには鼻息に工夫が必要なんだ」
レーへンは竜のゲオルギと随分仲良くなつたらしくて、無事に戻つて来るためいろいろと助言をしていた。

「ギー、フー」

「もつと力を混ぜることは出来るかい？　あとは厩舎を抜け出す時は暴れるよりも鍵を解錠して逃走した方が、君自身の仕業と思われにくいくらいだ」

「ギュー」

「なんだかどちらも可愛いわね」

「俺もゲオルギと会話してみたいですよ」

「ゲオルギから外した鞍を布袋にしまいながらサヴァアが言った。

「ベウォルクトに尋ねてみたら？ あなたなら竜と会話出来そうよ」
「レーヘンとゲオルギ眺めながらサヴァアと会話していると、マルハレータがずんずんと近づいて来た。

「お前、その身のこなしからしてそれなりに強いんだろ」「え、ええ。一応ですが国騎士団に所属していました」

確かに、サヴァアは背が高くて見た目は細身だけど肩周りを中心にしてしっかりと筋肉がついているし、力強い歩き方をする。

「騎士団にいたといふことは、もしかしてサヴァアは騎士なの？」

「ええ、一応は。もう騎士団を抜けたので剣は返してしまいましたが」

「ゲオルギと一緒になら竜騎士というわけね。格好いいわあ……」

でもわりと大人しそうな人だし、マルハレータに圧倒されて布袋を抱きしめながら答える姿はちょっと戦う人に見えないわね。

「なら、おれの身体慣らしにつき合え。おれが身体の扱いに慣れたらお前の妹の身体慣らしを手伝つてやれる」

「おや、ワタシではダメですか」

声が聞こえていたようで遠くからレーへンが言つ。なに、そこにやつとした笑い方。どこで覚えて来たのかしら

「オマエは卑怯な手ばかりで慣らしにならん」

一体どんな手口で鬪つたのかしら、レーへン。マルハレータは精靈達に慣れて来たようで、復活したばかりの時のように感情をあらわにして言い返す事がなくなつた。

「ファム女王」

「なにかしら、マルハレータ」

「おれはライナの身体の慣らしが済んだらまづこの国の状態を見てまわつてくる。おれの時代の後に国がどうなつたか気になるしな。帰つて来たらあんたが言つてた他国情報収集に出かける。それで

いいか

「いいわよ。国内のことを調べたら内容をベウォルクトに報告してね。あと私も報告を聞きたいわ」

「了解した。あと、それから…」

彼女は胸元から金色のペンダントを取り出し、私に差し出してきた。

「いつでもいい、影靈の核にこれを使ってくれないか」「わかったわ」

ゲオルギが飛び去るのを見送った後、マルハレータの身体慣らしを行う事になった。

「身体慣らしとは、俺は何をすればいいんですか?」

「格闘の模擬戦みたいなもんだ」

「暴れるのでしたら、練兵場がありますのでそちらでやりましょう」
そう言ってベウォルクトが私たちを案内してくれた。

お城の中層階あたりにある練兵場は、とてもなく広かつた。王の間を3つほどつなげたくらいの広さがある、壁や天井がぼんやり光るだけの、何も無い部屋。

「この部屋はファームさま以外でも登録さえすれば誰でも扱えます」
レーへンがそう言うと、床に四角い穴が開いて金属製の棚がせり出してきた。

「練習用の防具です。どうぞ」

サヴァは棚の中から黒と灰色の胴あてと厚みのある籠手、すね当てを取り出して身につけた。マルハレータは防具に向きもしないで軽く伸びをしている。ちなみにいつも高いヒールのブーツもそのままよ、あの人。

私とライナはマルハレータとサヴァが立つ場所から離れて、王の間と同じように床から椅子を出して座る。

「何ですかこの鎧。金属でもないし、皮でもない。布のよつな…」
「はじめるぞ」

不思議そつなサヴァアの言葉を無視してマルハレータは素手で飛びかかった。

「うわっ」

サヴァアは驚きつつもわずかな動きでかわし、大きく後ろへ飛び退いた。

マルハレータの手足は陽炎のような透明なもやに包まれていた。
彼女が腕を振ると大風のような音がする。

「あれは空気をいじってるの？」

「そうです。マルハレータの手足は高速震動する空気で包まれてお
り、触れるだけで岩も碎けます」

「あれが法術というものなんですか？」

一緒に見学しているライナも興味津々でレーへンに質問する。

「似ていますが違います。あれは純粹に気脈操る技です。法術ほど纖細な制御ができない分、破壊力があるんですよ」

「まだ法術は使わない。原始的な術の方があんたらも田で理解でき
る事が多いはずだ」

ちらりとこちらを見てマルハレータが言った。

確かに、彼女が操る気脈の流れがよく分かるわ。あなた先生に向
いてるかもしれないわね。

「ライナはわかる?」

「なんとなくですが…」

長い手足でしなやかに動く一人の姿は格好よかつた。

「こうやって目で追える動きを見ると、レーへンの動き方がいかに
異常だったかわかるわね」

「お褒めにあずかり光栄です」
「褒めているつもりないわよ。」

「おまえ、少しばかり反撃したらいでいいだ」

物足りなさうにマルハレータが言つ。

「女性と素手で闘うのは苦手で…模擬戦用の槍か剣はありませんか？」

サヴァアがマルハレータの蹴りを籠手で受けながら言つた。

「槍とか剣とか触った事がないから、棒でいいかしら？」

私が形をイメージすると、床から台座に乗った何本かの長さが違う棒が現れた。

「かまいません」

サヴァアは籠手を外して放り投げ、彼の腰の高さを越える位の長さの棒を掴んで、マルハレータに向かつていった。

一人は一時間ほど模擬戦をして、ついでに私やライナも練兵場の機能を使って障害物を出したりして参加した。二人の動きを邪魔するようにブロックを出すのは面白かったわ！

それにしてあれだけ動き回って一人ともほとんど息が切れないのは凄いわね

「兄さんは騎士団の中で1、2を争う槍使いだったんですよ
やるわねえ

翌日の午後も同じように練兵場で遊んではいるが、レー・ヘンが天井を見あげた。

「どうやらゲオルギが戻つて来たようです。まだ海洋上ですがしばらくすると到着するでしょう」

「もう？ 帰つて来るの早すぎない？」

「おかしいですね。移動だけでもっと時間がかかるはずですが…」

サヴァアが首を傾げている。

「とにかく港へ向かいましょう」

それにして港なんてものがあったのね、この国。

私はライナとサヴァアと一緒にレー・ヘンに誘導されるままお城内から列車に乗つて移動した。

駅から降りるといつの間にか外に出でていた。

かつてはきちんと舗装されていたらしい幅広い荒れた道をしばらく歩いて行くと、どんよりした暗い灰色の海に面して朽ち果てた港が広がっていた。さびた金属と半分碎けた石垣に波がぶつかってしぶきが飛び、物悲しげな風が吹いている。

「港というか、人工物の跡しか残つてないわね…」

「この方向に青嶺国などがある大陸があるんですよ、ファムさま」「そうなの…」

私は風になびく髪を手で押さえながらレー・ヘンが指差した方向を見つめた。

青嶺国の向こうには、緑闇国や白箔国があるのよね…

私たちが港に到着してそう時間が経過しないうちに、空に「ま粒

のよつなゲオルギが見えて來た。

「…何か乗せてるわね…子供かしら？」

「兄さん！ ゲオルギの背を見て！」

隣で見ていたライナが叫んで、ゲオルギが着地した場所へ向かつた。

まだ羽根に慣れてないからかふらつきながら小走りで駆けて行く。

「シメオン！」

「ライナ！」

ゲオルギの背に乗っている何かはライナと同じくらいの年の旅装の男の子だつた。明るい黄緑色のむらむらした髪に、女の子のようになつた顔立ちをしている。

「ライナ！ ライナ、ライナ、ライナ！」

つけていたゴーグルを外して急いで竜の背から降り、泣きそうな顔でまっすぐにライナへ向かつて走る。

そのまま猛烈な勢いを殺す事無くライナに抱きついた。
…あんな勢いでぶつかつてライナ大丈夫かしら？

「シメオン、どうしてここに？」

「そんなのライナがいるからに決まってるからじゃないか！ ライナ、外に出て、身体は大丈夫？」

男の子は必死な顔でライナに尋ねる。

「うん…あの、あのね」

ライナは顔を伏せた

「私の身体、いろいろ変わっちゃつ…」

シメオンと呼ばれた男の子の手をとつて角に触らせる。

「角とか」

それから大きく羽根を広げて、動かしてみせた。

「羽根が生えちゃつたの」

シメオンはライナを見つめたまま硬直して動かない。
「で、でもね！ もう身体がおかしくなる事はないんだ。私、こん

な姿だけど、元気になつたんだ！」

そう言つて目を潤ませて震えながらライナは一生懸命に笑おうと
していた。

ライナを見つめていたシメオンは震えて、叫んだ。

「髪！ ライナの長い髪が！」

シメオンに驚いた拍子にライナの緊張が解けたようで、顔のこわ
ばりが溶けていた。ぽかんとした顔で自分の顎の長さで切りそろえ
られた髪を触る。

「ええ？ あ、うん、長いと旅に邪魔だから切っちゃった」

あらら、あの子泣き始めちゃつた。

ひとしきりシメオンは泣いて、ライナに慰められていた。

「でも… よかつた」

そう言つて、シメオンは再びライナを抱きしめた。

「ライナが元気になつたのが一番嬉しいよ。どんな姿になつてもラ
イナはライナだよ」

「…ありがと、シメオン」

そう言つて、ライナも泣き始めて、一人は涙を流しながら笑いあ
つた。

しばらく私たちが遠くから眺めていると、ライナがシメオンと呼
ばれた男の子と手をつないで私の元へやつてきた。

「ファムさま、幼馴染のシメオンです」

「はじめまして、女王さま」

綺麗な顔をした男の子だけど、私をまっすぐに見てくる青みがか
つた緑の瞳には鋭さがある。どうも普通の子供じゃなさそうな感じ
ね…

「私の一つ年上で、緑閑国では神童つてよばれていた凄い子なんで

す。村が襲われた時も、シメオンのお陰で生き残れたんですね

「はじめてまして、シメオン。私は…」

「女王さま、僕をライナと同じ身体にしてください…」

シメオンは私をまっすぐ見つめたまま言った。

「ええっ？」

「シ、シメオン、何を言つの…」

ライナが驚いている。

「ライナを世界で一人きりにしたくないんです」

「やめてよ。シメオンは身体どこも悪くないんだよ」

「ライナの言う通りよ。生まれ持った身体をそんなに軽く扱うもんじゃないわ。とりあえず、成長期が終わってからもう一度言になさい。その時まで願つていられたらうつと考えてみるわ」

なんだか激しい子ね…

ゲオルギの様子を見ていたサヴァアが近づいてきて言った。

「シメオン、お前、国は？ 学院試験があつたんじゃなかつたのか」

「無理。緑闇の国外追放受けた」

「はあ！？ 一体何をしたらそんなこと」

「兄ちゃん達を実験に使おうとした組織を潰した」

「…全員か？」

「ああ。それで、全部王様に報告した。そしたら、命だけは助けてくれた」

なんだか物騒な話をしているわね…

彼らは彼らなりの状況があるみたいだし、落ち着いたらゆうくり話を聞かせてもらいましょうか。

「あのね、シメオン、私この国で暮らすこととしたんだ

「わかつた。僕も一緒に緒だからね」

即決だわ！」「の子！」

霧が漂う早朝の朽ち果てた港に小さな人影があった。

懐から取り出した物を空に向かって放り投げる。投げられた金色の物体は海面に落ちる事無く羽ばたいて、空の彼方へ吸い込まれるように消えて行つた。

「これで借りは返したよ、白箔王」

「あんたらのいた国はけつこう荒れていたようだな。あのちび、随分な殺氣を持つじゃないか」

そう言つてマルハレータはライナの傍から離れないシメオン眺めてにやりと笑つた。

シメオンが来た翌日、人工の太陽光が降り注ぐ植物園で朝ご飯を食べながらみんなの顔合わせをしたわ。

今は食後ののんびりとした時間で、私たちはご飯を食べていたテーブルで、子供達とゲオルギは離れた場所の芝生の上でゆったりとした時間を味わっている。

ライナは昨日一昨日と長旅をしたゲオルギの身体の泥汚れを固いブラシでこすり落としていて、そのライナの後ろでシメオンが彼女の翼に水で湿らせた柔らかなブラシをあてている。

私は洗ってきたラズベリーを盛ったお皿をテーブルに置いて、サヴァに尋ねた。

「彼も騎士団にいたの？」

「いいえ、将来的には入るつもりのようでしたが、勉強してライナの身体の治療法を探すつもりだと言つてました」

「じゃあ学者志望だつたのね。」

「だがあいつの目は随分と……」

「…そうです。村が襲われたときも、今回ライナの事でも、あいつは随分と手を汚しています」

シメオンが国を出る経緯は壮絶だつたわ。

そもそも、緑閑国で暮らしていたはずのサヴァとライナがくろやみ国へ来る直前に青嶺国にいたのには理由があつて、事件に巻き込まれていたのだそうよ。

緑閑国には古くから存在する秘密組織があつて、特殊体質の人間を捕まえては実験に使つていた。目的は不老不死や鍊金術など、様々に噂されていたけれど、実際の所不明。表立つて公表出来ない命や魂を弄ぶような行為を繰り返していた。

そんな集団に特異な体質を持っているライナが目を付けられ、攫われてしまつた。なんとか致命的な実験に使われる前にサヴァは彼の騎士仲間達の助けで彼女を救出することに成功して、縁故を頼つて青嶺国へ逃げ込んだ。

何故国外に逃げたのかというと、組織の背後に緑閑国の大貴族が関係していて、さらに他国の貴族とも繋がりがあつたので、緑閑国は彼らを守ってくれなかつたのだそうよ。

青嶺国で保護をうけて兄妹は一時の平和を得たけれど、騒動の結果としてライナの身体の症状が一気に酷くなつて、手の施しようがない程に進行してしまつた。

そしてサヴァはライナを助けるために僅かな情報を頼りにゲオルギに乗つてこの国まで飛んできた。

「世の中には恐ろしい集団がいるのね」

「仲間がシメオンと共に滅ぼしたようですから、もうあまり心配はないと思います。事後処理にいくつかの国が動いているようですしどうですが、そのせいであいつ…シメオンは行き場を失いました」

シメオン本人いわく「ライナを傷つけた奴らを徹底的に潰した」そうで、危険人物として子供ながらに捕まり、国王に組織の内部情報提供することで取引をして、処刑ではなく国外追放処分になつた。

裏の意味では、秘密組織や大貴族の罪を暴いた事であちこちから恨みを買つてしまい、後ろ盾の無い13歳のシメオンは彼らの権力が届かない国外追放という形で生き延びることができた。そして国を出た所でちょうど騎士団を抜け出してきたゲオルギと再会して、連れられるままにくろやみ国へ来たのだそうよ。

貴族の権力で殺されそうになつて國を出て來た所は私とちょっと似てるわね…シメオンの方が話が大きいけれど。

ちなみに現在の緑閑国は内部に巣食つていた秘密組織が暴かれて、国内が大混乱状態だそうよ。青嶺国が介入して調停を試みているらしいわ。

「あいつの家族は早くに死んでしまって、村の孤児院で育つたんです。村が焼かれた後は俺がライナと一緒に引き取つて一緒に暮らしていました。あいつらは本当に仲がいいんです」

ライナの白い羽根を優しく撫でているシメオンの顔は、とても安らいでいた。

ライナが振り返り、シメオンを見て微笑む。

彼はそれをみて頬をかいだ後、心から嬉しそうに笑った。

「シメオンが気になるの？」

マルハレータは彼をじっと見つめていた。年下が好みのかしら？「いや…ちょっと懐かしい奴を思いだしただけだ。似てるようでは、やはり似てないな

つまらなさそうね、誰に似ていると思つたのかしら。

「あいつはあんな風には笑わない」

サヴァアがライナ達のところへラズベリーの皿を持って行き、ベウオルクト達がテーブルにやつて来たところでマルハレータが口を開いた。

「追跡はどうだった

「うまく行きましたよ」

私が真っ赤な林檎にナイフを入れて横で、ベウォルクト達が何かの情報をマルハレータに伝えている。

「なにがあつたの？」

「外からの搜索の動きがありましたので、こちらからも一応たどつてみたのです」

「まだ想定の範囲内でしたし、今はあえて深く探らない方がいいでしょ？」

ゲオルギがシメオンの荷物に何か術がかけられていたのかしら？

「今回はいいけど、次からは何かあつたら私も教えてちょうだいね。私に理解出来ない事でも情報が見えない所で素通りするのって不安になるから」

「「はい」」

「ちょうどいい機会だ。」この国…くろやみ国のセキュリティについて確認しておきたい」

テーブルのある部屋を指で転がしながらマルハレータは言った。

「せきゅりちい？」

あつ、睨まないで、あなたが睨むと本当に怖いから。

「もつと女王の教育をしつかりしろよ。ざつとみてきたがこの城にはかなり物騒なものがあつたぞ」

「すみません」

私と一緒に睨まれたベウォルクトが謝つている。

「この城はすべてあなたの指示で動く。もとからいた精霊やあんたに創られた影霊もそれなりに城のシステムを使う事が出来る。だが新しくやってきた人間はそういうことができない」

「一応みんなには居住範囲は自由に使えるようになっているわ。登録しないと使えないものや慣れないと使うのが難しいものが多いから、今は日常で使う施設がある場所だけ行き来出来るようにしてあるの」「当分それだけにする。用事があつて他の区域に行く際は精霊達をつける。そうだな…あのウサギも動けるようにしておけ」

ハーシュにもお仕事ができたわね…

マルハレータは私たちにいくつか助言をくれて、ライナには気脈を整える方法を伝授してくれた。シメオンがライナと一緒に自分の事のように一生懸命聞いていたのが、なんだか微笑ましかった。

「単騎、ビークルがまだあるなんてな」

「すぐに動かせるのは平野用の簡単なものだけです。気になるものを見かけたら記録を撮ってきてください」

「了解した。3日ほどで帰つてくる」

午後になつて、マルハレータは銀色の馬のよつた不思議な機械にまたがつて国内を見て回りに出かけていった。

「いってらっしゃい！ 気をつけね！」

マルハレータがでかけている数日の間に、私の髪の色はすっかり変化して影靈を創る頃合いになつた。

なんだかとっても久しぶりな気がするわ

約束通り、私はマルハレータのペンダントを王の間の机の上に置いて王座に座る。

「ファームさま、もしやそのペンダントはマルハレータのものですか？」

「そうよ。よく分かつたわねベウォルクト。これを今回の影靈の核にするわ」

折角だから、彼女がいない間に創つて、驚かせちやおうと思つたのよ。肌身離さず持つていたペンダントなんだもの、きっと彼女にとって大切な何かだったに違ひないわ。

台の上では今までどおりと同じ黒いもやが生まれ、人の形をつくりだしていく。うーん、感じとしてはどうもマルハレータの時と同じく、昔の誰かが復活するみたいね。あのペンダントの中に何か入つてたみたい。

「レーへン、構えてください」

もやが消える前にベウォルクトが突然言つた。

「まだですか」

あきれたようにため息まじりでレーへンが答える。

「どうかしたの？」

私がそう言つた瞬間、影靈の黒いもやが消え去り、レー・ヘンが素早く私を抱えて飛び退つて、遅れて強い衝撃が襲つて私たちはまとめて一気に吹き飛ばされた。

「わっ」

「ええええ！」

壁に叩き付けられるかと思つたけど、なんとかレー・ヘンが空中で姿勢を変えて、無事に着地することができた。

顔を上げると田の前が煙に包まれていて、なにがどうなつているのかわからぬ。

遠くで何かが崩れる音がする。

頬に風を感じた。

「…なんと」

愕然とするベウォルクトの声が聞こる。

しばらくすると煙が晴れて、王の間の様子が見えて来た。窓際に見事な大穴が空いて、外からびゅうびゅうと風が吹き込んできている。

「ど、どうなつちゃつたのこれ？」

私は急いで大穴のふちまで走つて、外を覗いた。

「ねえ、あの遠くで吼えるの、あれ、人間？」

遠くの枯れた大地から聞こえてくる爆発音に次々と天高くあがる土煙と地響き。それと共になにか叫びながら暴れ回つている人影がちらりと見える。

「一応そつですね。いまは影靈ですが、元は人間でしたから」

「王の間に穴…空いちやつたわね…」

レー・ヘンが追つて来て大穴から下を覗き込んでいた私の手を掴む。「ファムさま、危ないので下がつてください。別室へ退避しましょう

「え、あの復活した人を追わなくていいの？」

「それはベウォルクトがやります」

見ると、ベウォルクトの周囲から危険な気配が漏れていた。

両手に壊れた壁の固まりを持つて、うつむいたまま動かない。

「そ、そ、う。じゃあ任せるわねベウォルクト！」

「…かしこまりました…もしかしたら治療室を使うかもしれません

が、よろしいですか」

「自由に使つてちょうだい。せっかく復活してもらつたんだから、死なせちや駄目よ」

「善処します」

それからしばらく私とレーへンはライナの羽根を動かす練習につきあつたり、彼らの居室で必要なものを話し合つたりして過ごした。半日経つた後、レーへンが言った。

「そろそろ王の間に戻りましょうか」

危ないのでライナ達には部屋で待機してもらつたわ。

「レーへん、ちゃんと私を守つてね

「もちろんです」

王の間は相変わらず大穴が空いたままだった。

王座に座つて『大丈夫？』と王の間に尋ねると、『問題ないけど、修理に数日かかる』という、言葉には満たない思いのようなものが伝わつて來た。というか、いつの間にか建物と会話出来るようになつてるわ私！

影靈として蘇つた人物は、がつしりした体格の大男だった。私の腕ほどの太さの金属で編まれた縄でがんじがらめになつて、うつ伏

せでベウォルクトの前に転がされている。

「…生きてるの？」

「問題ありません。この人物は元々頑丈ですし、さうに影靈となつて補強されていますので」

ベウォルクトが手をかざすと縄が消え、男は勢いよく立ち上がつた。ものすごく背が高いわね！

「なんだあ、ここは」

暗い銀髪、鈍く光る刃物のような灰色の瞳が周囲をせわしなく見回す。肉の薄い頬に強く引き結ばれた口元。キツい目つきと思いつきり不機嫌な表情がなければそこそこ的好男子なのに、もつたいたない。服装は灰色の制服のようなかつちりしたズボンに黒の細身のタシクトップ。靴底の厚い頑丈そうなブーツを履いている。ベウォルクトが何をしたのかしらないけれど、全部ぼろぼろだつた。

筋肉のついた見事な体つきに、レーへンがうらやましそうな目線を送つている。

「！」、こんにちは。私はこのくろやみ国の中王ファム

ぎりつく瞳が、私を見た。

「あ、あ？」

睨んでくる：迫力あるわね。

「あなたは一度死んで、影靈として復活してもらつたの」

「お嬢ちゃんよ、ふざけるんじゃねえぞ。誰がそんな事頼んだ」

「おれだ」

私が答える前に、男はいつのまにか背後にいたマルハレー塔に蹴りとばされた。

細い足でみんなに遠くまで蹴り飛ばせるなんて！

男は頭から壁にぶつかって、なぜか壁の方にヒビが入つた。ベウォルクトが微動だにせずじつと壁を見るのが凄く怖いわ。

「アンタは…」

「ひさしごりだなあ、オイ。復活早々大暴れしやがつたそうだな」

女でも、ああいつた凄みのある笑顔つてできるのね！ 私にも出

来ないかしら。あのヒールでぐりぐりつてするのもー。

「おれが頼んでてめえを蘇らせてもらつたんだ。感謝しな」

男は夢からさめたよつこぼんやりとした表情でマルハレータを見上げた。

「あー、せつぱり状況がわからねえんだが。それに、あんた、体が「だまれ。おれの今の名はマルハレータだ」

「ああ?」

「おれも一度死んで、蘇った。オマフのようにな。だから今の俺はマルハレータだ」

「随分と女らしい名前になつたんだな」

「別にいいだろ? 強さが義務の時代じゃないんだ」

二人の会話からは随分慣れた感じがするわ。家族なのかと思つたけれど、顔は似ていなゐね。

男はマルハレータが差し出した手を掴んで、引き上げられるようにして立ち上がつた。

「マルハレータ、彼とはどうじつた関係だつたの?」

「コイツはおれの部下だつた。軍の将軍で、おれの護衛もやつていた。ファム女王、「コイツにも新しく名前つけてやつてくれないか?」

「ええ、よひこんで! そうね...ローデヴェイクはどうかしら?」

昔話に出て来る英雄の名前なの

「いいんじやねえの」

「おい、俺様の意見は無視かよ...」

マルハレータはわめくロー・デ・ヴェイクから離れて私が座る王座の

方へやつてきた。

「おかえりなさい、マルハレータ」

「あー…タダイマ」

彼女は視線をはずしながらだけ挨拶して、指の先くらいの大きさの小箱をくれた。

「記録だ。精霊達に見せてもらえ」

「ありがとう。国内を見て回って、どうだった?」

「なにもなかつたな。潔いくらいまでに何も無かつた。どうしようもなく死んだ土地だな」

すつきりした顔してるわね、あなた。

「いまは蘇つてる途中なのよ。時間はかかるけど、これから元の姿に戻つていくわ」

「元にしなくていい。あんたはあんたの国を造れ」

彼女は表情を変えずに私をまっすぐに見て言った。

「わかつたわ」

マルハレータが戻つて来て、ローデヴェイクはすっかり大人しくなつた。表情も、まあそんなに恐くなくなつた。

私が話しかけても睨んできたりぶつきらぼうな返事が多いのだけど、彼女の言葉にはちゃんと耳を傾けて、素直に従う。

「彼は生前『狂狼將軍』と呼ばれていました。当時は女王以外の命令をきかず、気に入らない事があると敵味方構わず暴れ回っていたそうです」

ベウオルクトの話をきいて納得しちゃつたわ。

「あなたの言う事はきいてくれるのね」

「ちゃんと賤けたからな」

何をどうやつたのか聞きたかったけれど、彼女は教えてくれなかつたわ。

ちなみにロー・デヴェイクは暴れた彼を取り押されたベウオルクト

に対しても、一応従順な態度をとつてゐる。

「一日あけて、マルハレータについてもらいながら他のみんなと顔合わせをしたわ。」

「兄さんよりも大きな人！」

ライナがローデヴェイクを見上げて驚いたように言つた。
確かにサヴァも背が高いけれど、ローデヴェイクのほうが頭ひとつ分大きいわね。

「あんた、おまえらは」

「ライナです」

「シメオンだ」

ライナはちょこんと可愛くお辞儀をして、隣に立つシメオンは視線を外す事無くローデヴェイクを睨んだまま名を告げる。

「おびえるかと思ったけど、意外とライナは平気ね」

「小さい頃はよく森で野生の竜や虎を手なずけてましたから」

「…あなたたち凄い所に住んでいたのね…」

でもサヴァの答えにちょっと安心したわ。というか、まったく動じていないうちライナとは逆にシメオンがものすごく警戒してゐるわ。

「この時代は羽のあるチビなんているのか」

「この国では彼女だけですよ。他所ではわかりませんが」

ローデヴェイクの言葉にレーへンが答えた。

確かに、探してみれば世界のどこかには羽根のある人がいるかもしれないわね。人間以外の種族も、ちょっととはいるみたいだし。

「ライナに近づくな。あんたは殺し屋と同じ気配がする」

シメオンがローデヴェイクを睨みつけたまま言う。

「察しの良いガキだな。俺様は仕事じゃねえ限り弱いには手を出さねえよ」

ローデヴェイクは面白そうににやつと笑つた。マルハレータとちよつと笑い方が似てるわね。

「弱い」という言葉にシメオンの機嫌がますます悪くなつたみたい。ライナが不安そうにシメオンの様子を伺つてゐる。

「ローデヴォイク、残りのみんなを紹介するわ。まずはちがハーシュちゃんよ」

空氣を歸るために私はそいつひでーへンからトウヒザウのハーシュを受けとつて両手で胸の高さに掲げ、「サヴァアです。こつちは竜のゲオルギ。よろしく」続いてサヴァアが挨拶した。

「珍しい生き物がいるじゃねえか」

ローデヴォイクはゲオルギを見て言つた。

ゲオルギは首をかしげながら見返す。

「焼いたらそれなりに食えそうだな

「食べないでください」

サヴァアが言いながらおびえるゲオルギの前に立ちふさがつた。マルハレータがつかつかとローデヴォイクに近づき、すばやく足

払いして引き倒して頭を踏みつけた。

「食うなよ?」

「…了解」

なんだかんだで、ローデヴェイクは元上司のマルハレータについて旅に出る事になった。

彼の復活を頼んで来たマルハレータ本人は最初、「国において護衛にでも使え」と言ったわ。でも、

「国に一人で置いておくと危険なので、あなたが責任持つて管理してください」

とベウォルクトが言うので、連れて行く事にしたみたい。

王の間の穴、びっくりするくらい大きな穴が開いちやつて、当分は修理終らないものね。

必要な物を準備すると、復活したばかりのローデヴェイクの身体の調子を見る時間を考え、マルハレータ達の出発は三日後という事になった。

「ちなみにローデヴェイクってどれくらい強いの？」

「おそらく本気になると我々では押さえきれないでしょ」

「ワタクシが彼を取り押さえる事が出来たのは、復活直後の錯乱状態だったからです。戦闘経験もあちらの方が上です」

精霊達がそう断言するのなら、相当の危険人物ね…。頼もしいのか、危ないのか、いまいち判断がつけられないわ。

「とりあえず、しばらく彼の事はマルハレータに任せましょ」

三日間、ローデヴェイクには影霊として安定するためになるべく私がいる王の間にいてもらっていた。もちろん監視役のマルハレータも一緒に。

たいていの時間は、マルハレータと私がお茶を飲んでいる横でベウォルクトが王の間の修理を手伝わせていた。ローデヴェイクはふてくされた顔をしつつも、見た目に似合わない丁寧な手つきで纖細そうな検査器具や道具を使って作業していた。

どうも昔の時代って、複雑な道具や機械が普通に使われていたみたい。マルハレータもお城の壁の所々にとりつけてある板を触っていたし。あれで城内のどこに誰がいるかとか、部屋の明るさとか暑さ寒さを操作できるなんてすごいわよね。仕組みについて説明してもらつたら法術みたいな技術が使われていなくて驚いたわ。

ちなみに、私は王の間にいなくても簡単なお城の操作なら手ぶらでできるよつになつたわ。不思議だけど、気がついたらできちやつた。

うちの精霊達はまた私に何か告げ忘れてるんじやないかしら…

王の間でマルハレータと二人分の荷物の最終確認をしていたら、ローデヴェイクが珍しく私に話しかけて来た。ベウォルクトの修理手伝いは、一段落したみたい。

「今の女王さまよ、旅に持つてく武器をよこせ」

ローデヴェイクはポケットが沢山ある皮のよつな生地の上着にこれまでポケットのたくさんついた灰色のゆつたりしたズボンに着替えていた。うーん、彼らの時代の服つて今より形が複雑よね。生地も丈夫そうだし。

「そうね、色々歩くから護身用の物が必要よね。剣がいいかしら?」「普通の物だとこいつはすぐにぶつ壊す。おい、おまえの相棒はおれの部屋に置いてある。良い出来だつたからとつておいた」

驚いた表情でローデヴェイクはマルハレータを見た。

「ちゃんと手入れはあるんだろうな」

「さあな」

そつけない返事に、ローデヴェイクは唸つた。

結局、彼の武器はすぐには使える状態じゃなかつたらしいので、小型の整備道具セットと一緒に丈夫な黒い袋に入れて担いでいくことになった。随分と変わった形をしていたけれど、いつたいどんな使い方をするのかしら、アレ。

「マルハレーータは武器とか必要ある?」

「いらん、下手に兵器を持つと怪しまれる。おれは素手で十分だ」

「ローデヴェイクの武器は良いの?」

「あれはアイツの一部みたいなもんだつたからな。たとえ動かなくとも持つてりや少しさ落ち着くだろ」

「動く? 剣に似たような、そうでないような不思議な形をしていたけれど、どう動くのかしら。」

「これで必要そうなものは大体そろつたかしら?」

「あとは… そうだな、現在この国ほどどの程度まで外部に情報を出しているのか確認しておきたい」

確かに、そのあたりの話はまだしてなかつたわね。

「この国はまだ人間の地図には載つてないの。伝説上の国としてや、おとぎ話に出でくる闇の国として存在が知られている程度ね」

「ファムさまの言った通り、この国はほとんど外に存在を知られていない状態です。他国とのつながりも定期的なやりとりすらもありません。白箔国とは2度ほど接触がありましたが、それきりの状態です」

レー・ヘンが私の言葉に続けて言つた。

「サヴァガ言つには、青嶺国の王室図書の古い文献には『暗病国』の名前があつたらしいけど、『くろやみ国』という名前を知つている人間は今の所いなじやないかしら」

「わかつた」

マルハレーータはうなずいて、それから銀糸のような前髪をゆらしながらゆつたりと首を横に傾けた。

「それで、女王サマ、あんたはおれ達に外でどう振る舞つて欲しい

？」

なんだか学校の先生に問題の答えを聞かれているみたいね。

でもこの場合、正しい答えなんてない。

必要なのは、私の意思。女王としての指示だわ。

「しばらくただの旅人ということで、見聞を広めて来てちょうだい。精靈達の情報網じゃ得られない、人間の目から世界を見て来て欲しいの。よその人間の国が今どう動いているのか。そして暮らしている人達の生活や文化、価値観や考え方、何を日々感じているのかを私に教えてちょうだい。あなた達の情報は、このくろやみ国が外の国と喧嘩をしないで済む助けになるわ」

マルハレータは私の言葉を聞いてやわらかく微笑んで、ゆっくりお辞儀をした。

「その命令、承った。ファム女王」

「それと、私たちが何かしなければならない事が起きそうな時や、誰かにくろやみ国の話をする時は事前に相談してね。私とあなた達影靈は離れた場所でも会話ができるから」

「ああ。わかった」

「アナタ達は何か言う事ある？」

古くからこの国を守っていた存在の意見は大事よね。

「暴れるのは好きにしてけっこうですが、くれぐれも他国に侵略の口実を作る真似は避けて下さいね」

尋ねてみたら、レーへンがそう言った。暴れるのはいいの…

「申し訳ないけど、お金これだけしか無いの。追加の現金は現地調達でお願いするわ。一応換金出来そうな物は渡しておくから」

私の持つて来た荷物には白箔国で働いて貯めていた微々たる通貨しかないわ。あの貴族オヤジからもらった手切れ金は燃えた家の食卓に置きっぱなしだったから、とつぐの昔に灰クズよ。

「今は国が違えば通貨も違うんだろ？ 現金はいらん。荷物になる。換金物だけでいい

三日田の早朝、マルハレータ達を見送るために私たちはお城の出口に立っていた。

ベウォルクトが手のひらに収まる大きさのガラス板のよつなものをマルハレータに渡す。

「ローミングパッドです。使い方はあなたの方の時代のものと同じにしてありますから、必要な情報はこれで得て下さい。精霊とのやりとりにも使えます」

「わかった

「マルハレータさんが帰つて来る頃には私、飛べるよくなつてみせます」

ライナは生き生きとした田でマルハレータに挨拶をする。本氣で空を飛ぶ気なのね。

「期待はしない。だがおれが言つた事を守つて実践すればもっと身軽に動けるようになる」

「はい！ わかりました」

珍しくライナの隣は竜のゲオルギだけがいて、シメオンがない。なんでも、昨日ローデヴェイクとひと悶着あって、朝方まで練兵場でぼろぼろになるまで闘つて、止めようとしたサヴァ共々寝込んでいたらしいわ。

ローデヴェイクの方は何ともないみたいだけど。彼は今ベウォルクトに何事を言い聞かせられている。

「あと、あのね…」

私はおずおずとマルハレータに封筒を差し出した。

「これ…もし白箔国でヴィルヘルムスつて人に会える事があれば渡して欲しいの。一応、彼は王様をやっているんだけど…」

精靈達が「またですか」ってあきれた雰囲気を出している気がするけど、無視。

「もし、でいいの。もし、会えたらで。大した事書いてないし」

中身は、私は今お仕事に就いていて帰れないけど、元気です。つて、書いてあるだけだし。

マルハレータは私の手から封筒を受け取ってくれた。

「了解した。渡すだけで良いんだな？」

「うん。ありがとう」

一通りの挨拶が終つて、二人は出発した。

「時々は帰つて来てね！　おみやげよろしくね！」

「ああ」

表情は変わらないながらも私の声に手をあげて答えるマルハレータの横で、ローデヴェイクが信じられない物を見たという顔をしていた。

マルハレー タ達を見送った後、ライナとゲオルギは医療道具を持つたレー ヘンとシメオン達の様子を見に行って、私は久しぶりに一人で王の間でお茶を飲んでいた。

「二人が出発したばかりなのに、もう寂しく感じちゃうわ

「彼らがいた時は随分とにかくやかな出来事が多かつたですからね」焼いたメレンゲ菓子と、ジャムを練り込んで焼いたロールパンをお皿の上に並べながらベウォルクトが言った。

「ところで、どうしてマルハレー タはローデヴェイクの復活をお願いして来たのかしら」

結局本人には聞きそびれちゃったので、ベウォルクトに尋ねてみた。

顔を布で覆つたこの国最古の精霊は私の向いの椅子に座つて、彼女と彼についての昔話をしてくれた。

「あの時代の誰もがそうだったのですが、全てが戦争に向かって動いていて、誰もが己の願い通りに生きられる時代ではありませんでした」

マルハレー タは11歳で即位してずっと戦争国家の代表として戦いの指揮をとり、自身も前線で戦つた。既に戦火は何代も前から世界中に蔓延しており、彼女の代ではもうどうにも止められる規模ではなかつた。

ローデヴェイクは徴兵制のために幼い頃から少年兵として戦陣に身を投じ、初めは戦いへの恐怖で怯えていた日々を送つていた。

その中で彼は偶然にも即位前のマルハレー タと出会う。その時を境に彼は積極的に戦闘に参加するようになり、早くからその戦闘能力の高さから頭角を現していたこともあって、成長とともに軍での地位も上がつていった。

「本人は初め機械工員になりたかったのですが、大規模戦闘での殲滅戦にかなりの才というか、実力があつたようで、最終的にはマ

ルハレータの直属の部下として任についていました

戦場では一人はいつも一緒にいた。互いに守り守られて、戦つて戦つて、敵をひたすら殲滅していった。

けれど戦争は一向に終結へ向かわなかつた。

そうするうちに先にローデヴェイクが戦場で死に、それから数年後にマルハレータも戦闘中に受けた傷が元で亡くなつた。

「あの二人は当時から強く想い合つていましたが、戦火の女王と配下の将軍、死ぬまで添いどづることができませんでした」

葬儀の際、彼女の胸元には彼の遺灰が入ったペンダントが飾られていた。

「あのペンダントのことね」

「せっかく今の女王サマがくれた第一の生だ。この世界がどうなつたか、ぞんぶんに見てやろうじゃないか」

マルハレータはしつかりした足取りで歩いて行く。

「俺様を置いて行くんじゃないよ」

「ああ？ 来るならさつさと来い。ついて来いとは言つたが、おれはもう女王じやねえんだし、オマエも将校じやないんだ。すきにしていいんだぞ」

「おおよ」

ローデヴェイクは応え、背後からマルハレータの腰に腕をまわし彼女の首筋に顔をうずめた。

「アンタも俺も、もう戦争に行かなくていいんだな」

「…ああ」

マルハレータは己を囲うローデヴェイクの腕に触れながら言った。
「オマエはもう一人きりじゃないんだよ。ローデヴェイク」「

「アンタもだ、マルハレータ」

「…死後になるけど、せっかくだから一人には人生の楽しみを味わつて欲しいわね」

いつも奇妙な顔をしてご飯を食べたり、お茶を飲んでいたマルハレータの姿は結局お城を出発するときまで変わらなかつた。花の香りをかいで目線が揺らぎ、子うさぎハーシュのふわふわの背中をおそるおそる触ろうとして、結局触れなかつた。

ローデヴェイクは国を出発する直前まで穏やかな雰囲気の部屋で落ち着かなさそうにしていて、明るく楽しそうに笑うライナ達を遠くから眺めでは不思議そうな顔をしていた。

「少しばこの時代に馴染んで、落ち着いて帰つて来てくれる」と嬉しいわね」

「ところでファムさま」

「どうしたの？ レーへン」

いつの間にか戻つて來ていたレーへンが私の傍に立つていた。

「二人が旅立つて、この国の人口比率が変わりました。現在人間に属するものが4、精霊に属するものが3となり、人間が過半数を越

えました。それで、先ほど確認したのですが、人間の地図にも『くろやみ国』が表示されました

「えつ」

「ヴィルヘルムさま、地図に例の国の名前が載りましたよ」「そうですか」

指に止まっていた金色の小鳥を窓の外へ放っていたヴィルヘルムスは、書類が積まれたテーブルに戻り、卓上に飾られた赤い花にそつと触れ、言った。

「この時を待っていました」

真珠の守り手 4（後書き）

次回から第三章です。

女王の目覚めを感じして城の一日常は始まる。

毎日彼女が過ごす場所に照明がつき、空調が整えられ、彼女が眠つている間に働いていた清掃や改修などの管理部門が休眠状態に入る。

基本的に睡眠を必要としないベウォルクトやレー・ヘンは、いつもその動きで朝を知る。

遠くから漁から戻つて来た竜の鳴き声が聞こえてくる。

「お田覚めになられたようですね」

「では朝の挨拶へ向かいましょう」

くわやみ園の一日はこうして開始される。

朝、外が明るくなつた頃に私は目覚める。

カーテンを開けても朝日はなくて、いつも代わり映えのしない曇り空。

私の目覚めを感知し城は動きだし、空調が整う音がする。自動的に天井や廊下の照明が音も無く点灯していく。

曇りだから朝から照明が必要なのよね…

寝間着のままかるく体操をして、顔を洗つて身支度を整えて調理室へ向かう。

「おはよう」、「わいこます。ファムさま。」、「機嫌いかがですか？」

「おはようレーへん。私の機嫌はいつも通りよ」

「体調はいかがですかファムさま」

「おはよう、まあまあ良い調子よ、ベウォルクト」

大抵は自室を出て廊下に出るとすぐに精霊達が現れる。涼やかな笑顔は朝に似合つわね、レーへん。

「おはよう、ライナ」

「おはようございます、ファムさま」

「さまなんて付けなくとも良いのよ」

「私がつけたいんです。ファムさまはこの国の女王さまなんですから」

調理室に着くとライナがいて昨夜作つておいた朝食をバスケットに詰めていた。彼女はだいぶ翼の扱いに慣れて来たらしくて、体の幅まで折り畳んで、調理台のまわりを元気よく動き回つている。

「サヴァアとシメオンは朝ご飯に来れそう？」

「シメオンはちょっと寝坊するけど来るつて言つてました。身体の方は昨日ベウオルクトさんとレーへんさんが治療してくれたんですけど、まだ疲労が残つてているみたいなんです」

「そう。無茶するわねあの子」

ライナはシメオンの好物の具入りパンをバスケットに入れている。

「兄さんはゲオルギと漁に出かけて、もう帰ってきて貯蔵室へ魚をしまいに行つてます」

「え、もう? 回復早いわね」

「兄は丈夫さだけがとりえですか?」
足に柔らかい感触があたるので見ると、子うさぎの姿をしたハーシュがすりよつて朝の挨拶をしてくれていたので、抱き上げる。

『おはよう』『ぞこます、ファムさま』

「おはようハーシュ。今日もふわふわね」

最近は植物園にみんなで集まつてご飯を吃るのが習慣になつてきている。

そのあとは人工の日光を浴びながら花たちや烟の手入れをして、野菜と果実の収穫をして過ごす。お昼前になつたら調理室に移動して一日分と明日の朝食を作つて、食堂か王の間で昼食。

その後はそれぞれの時間を過ごす。

私は王の間でベウォルクトによる女王学習の時間になつていて、内容によつてはライナやシメオンも参加するのだけれど、今日はベウォルクトが一人とサヴァアとゲオルギを連れて海岸の調査へ向かつている。港も補修しようつていう話になつてゐるし、下調べをしておくみたい。

私はいまだ城内安静の身なので、レーへンとハーシュと一緒に大人しく王の間で過ごしているわ。

おやつのブルーベリー入りクッキーをつまみながら、私はペンで勉強用ノートにみんなの名前を書き出してみた。

- ・人間…ファム、サヴァア、ライナ、シメオン (計4名)
- ・精靈…ベウォルクト、レーへン、ハーシュ (計3名)
- ・竜…ゲオルギ (計1匹)
- ・現在国外で活動中 (精靈扱い?) …マルハレータ、ローデヴェイク (計2名)

「ひつじてまとめてみると、ちょっとは賑やかになつたわねえ」
私はペンをノートの上に転がした。ペンの中のインクがきらきらと光る。

「それで、マルハレータとロー・デヴェイクがいなくなつて、精霊と人間の数の比率が逆転したのね」

「そうです。一応人間の数が過半数を占めると、人間の国として地図に表示されるようになります。ゲオルギは竜なので人口には加えていません。サヴァやライナ……いわゆる竜人の他国での扱いは分かりませんが、この国では同じ人として計算しています」

私は王の間に転がしている二つの球体の地図を眺めた。どちらも同じ位置、同じ形の島にぐるやみ国の名前が書いてある。

「これから何かが起こるかもしれないわね……」

「念のため、國土と周囲の海に注意しておきます」

「お願いするわ。サヴァにも声をかけておいてひつだい。彼も漁で沖に出かける事があるし、何かあつたときのためにね」

「かしこまりました」

そう言つてレー・ヘンがお辞儀をした時、王の間にベウォルクトの声が響いた。

『ファームさま、しばらく王の間に皆で待機されていてください。修復中の壁とは反対側の奥の方に。レー・ヘン、警戒態勢を』

『どうかしたの？ ベウォルクト』

レー・ヘンが微笑みを消し、ハーシュが人の姿になつて私の傍に立つ。

『海賊が来ました』

シメオンは眉間に皺をよせながら水平線を見つめていた。

ベウォルクトに指示された機器は先ほどから順調に海水の調査を始めていて、もうしばらくは見守るだけでよさそうだった。

体の痛みはすっかりなくなつたが、手足のだるさはいまだ消えない。思考がぼんやりしているのは、先日は旅に出てしまつた銀髪の大男に言われたことが未だに頭にこびりついているのもあつた。

「そのままいくと守りたいもんの傍にいれなくなるぞ。あの羽根の

生えたチビはそのうち死ぬだらうな。おまえのせいで」

見下されるように言われ、感情が沸点をこえて、自分から飛びかかつてしまつた。恐怖に耐えられなくなつて戦闘になつたともいえた。大男ローデヴェイクは見た瞬間から危険だと、シメオンの本能が叫んでいた。

年齢も経験も体格もあちらの方が上。内容は一方的だった。

サヴァが止めに入り、マルハレータが静止の声をかけなければ死んでいたかもしれない。

「ちくしょう、どうすればいいかも言えっての」

シメオンは前髪を両手でわし掴み、海から目をそらした。

しばらくたつてシメオンが検査を終えた機器を持つて調査基点の

テントに戻ろうと歩き出した時、甲高くなつたライナの声が響いた。

「いやあ！ こないでっ」

恐怖に染まつた彼女の声にシメオンの意識は急激に働きはじめた。

「ライナ！」

ライナは人間が恐かつた。

幼い頃から異質の外見を持つ兄への人々の反応を見て來たし、自分も奇病のせいで沢山の人間に、沢山の視線と扱いを受けて來た。心優しい人もいることは解つてゐる。けれど記憶に貯まつた恐怖とはなかなか仲良くできない。その恐怖心は緑閑国で組織に攫われて決定的になつた。

無言のうちに攫われ、言葉のやり取りの無いままに実験物としての数々の扱いをうけて、ライナの心の傷はさらに深くなつた。

くろやみ国で治療を受けて、生まれ変わつたような姿になつても、その心はいまだ傷を負つたままで、女王の保護のもとにゆづくりと時間をかけて癒していくことしていた。

「操作は難しく有りませんか」

「だいぶ慣れきました。これで何がわかるんですか？ ベウォルクトさん」

ライナの持つていた杖は下部が海水の中に沈んでいて、上部についた筒にはめ込まれた林檎サイズの画面には何かの計測結果の数値が刻々と変化しながら表示され、記録され続けていた。

一緒に海辺に来ていたベウォルクトがライナの横から画面を覗き込む。顔を布で覆つた姿は奇異だが、その内は穏やかで優しい事をライナは知つている。

「今のうちに海の様子を調べておきたいのです」

「どうして今のうちになんですか？」

「ファームさまのおかげで時折、海に波が観測されるようになります。波が生まると、船が来ます。本格的に海が変化する前に対策を講じておきたいのです。港も必要になるでしょう」

ライナは海を見つめた。暗く厚ぼったい灰色の空に覆われたそれは、沼と言つてもいいくらいの、静かすぎるものだった。

「シメオンが来たときはあんなに波が高かつたのに…」

「まだまだ島の近海は不安定なのです」

「ベウオルクト！」

ライナが見上げると空をゆっくり旋回するゲオルギが見えて、羽の隙間からサヴァアがこちらを見下ろしていた。

「どうしましたか、サヴァア」

「小舟が数隻この島へ向かって来ている

「…なんと」

ライナは杖を両手で強く握りしめた。

ゲオルギは音も無く大地へ降り、サヴァアがゲオルギから降りてこちらに駆け寄つて來た。

「城へ連絡しました。ワタクシはここで彼らを出迎えます」

「付き合います。ライナ、おまえはゲオルギに乗つて城へ戻るんだ」
サヴァアはそう言い、顔の鱗のような肌を隠すようにまとっていた外套の風よけの襟を立ち上げ、マフラーを巻き直した。

「シメオンはどうするの」

「俺が探して、一緒に戻る。おまえは心配するな。さあ、行け」
サヴァアそう言い、ライナの髪を撫でて、背を押して歩かせる。

「う、うん。すぐに帰つて来てね！」

ライナはゲオルギに駆け寄つて羽根の根元を掴み、後ろ足を踏み台にして体を持ち上げ、ゲオルギの背中に乗つた。風の抵抗をうけないよう、自身の翼は背中の影に小さくすぼめる。

ライナの姿勢が安定するとすぐにゲオルギは力強く飛び上がつた。

竜の背から地上に残つたサヴァとベウォルクトを見つめると、ベウォルクトが片手をあげた。

「我々もすぐにあとから行きますから、心配しないでください」

上空から見ると、兄が言つていた舟がよく見えた。

一隻からは既に何人か人が降りていて、兄と闇の精靈が立つてゐる場所へ向かつて歩いていた。

もう一隻は別のところにいて、すでにそこから降りて歩いて来たらしい数人が、ライナとゲオルギを見て何かを叫んでいる。ライナは身を切るような風の冷たさに身を縮こませ、震える両手を強くにぎりしめた。

不意に、風を切つて何かが甲高い音を立てて素早く横切る音がした。

ライナは血の気が引いた。攻撃されている。

ゲオルギは飛ぶ速度をあげた。

「このままだと、私達を追つてお城にたどり着かれちゃう」
お城には女王がいる。

ライナは女王の事が大好きだった。ライナの話を聞いて笑ってくれる人。

彼女は兄の姿を蔑まず、牙を持つたゲオルギを可愛がり、極端な性格のシメオンを受け入れてくれた。そしてライナの体を作り替えて、自分の世界から恐ろしい奇病を追い出してくれた人。一緒に料理を作つて、服やアクセサリーを作つて、おやつを食べながらお喋りをして、ライナはファム女王に対して、母親にも姉にも友人にも似た、不思議な思いを抱いていた。

女王はライナにとつて、兄のサヴァやゲオルギやシメオン以外に出来た初めての『大切な人』だった。なんとしても守りたい人だつた。

「ゲオルギ、海に向かつて」

ゲオルギはライナの言葉に素早く方向転換をして、速度をあげた。一人と一匹に投げかけられる物は、更に増えた。羽根をかするものも増えてきた。

「ゲオルギ、これ以上は羽根を怪我しちやう。降りよう」「ギュー」

不安そうな声にライナはゲオルギの首筋を優しく撫でた。

着地したゲオルギの元に大きな体格の男達が集まつて来た。
「やつぱりだ！ 俺の言った通りだろ！」

「みごとな竜だな。本当に野生か？」

「女の子が乗つていいぞ」

「羽根が生えていやがる」

ざわめく声に、ライナは不安で顔をあげられなかつた。ライナの

視界に顔が入らないほどに大きな人影が5、6人うごめいている。

「俺たちは何もしない。安心しろ」

「この島は死んだ場所じやなかつたのか？」

「そのはずだが、お頭にきいてみるしかないな。おまえ、名は？」

「おい、お前は何者だ？」

矢継ぎ早に投げかけられる男達の声。

ライナはゲオルギの背の上で後ずさりした。すると彼女を捕まえようとする手がいくつも伸びて來た。

「おい、よせ！」

鋭い声に、ライナの緊張は限界を超えた。

「いやあ！ こないでっ！」

「『きげんよう、海賊のみなさん。私はこの国の女王、ファムよ』私はベウォルクト達が調査設備を置くために設置したテントの中で、仁王立ちの姿勢で海賊達に挨拶をした。

今回は着替える余裕があつたから、漆黒と淡い灰色で染められた手触りの良い生地で作った、裾が広がらない足首までのワンピースを着ている。足元はヒールの高い編み上げ靴。

「怪我をさせたのはこちら側ですが、先に攻撃したのは向こうです」ベウォルクトがいつもと変わりない調子で言つ。

「わかつてゐるわ。ライナ、大丈夫？」

「だ、大丈夫でう」

ライナが怯えきつてゐる。顔は泣くのをこらえているのがわかるし、羽根の先が震えているわ
ずっと彼女の手を離さないシメオンは、全身土汚れまみれで、ものすごく不機嫌な顔つきで立つてゐる。
「よく守つたわね、シメオン」

「はい」

「でも相手に怪我をせるのはよくないわ」

「…うん」

私たちが王の間で待機して、サヴァとベウォルクトが海賊の代表に会つてゐる間に、先に戻るうとしていたライナとゲオルギが別行動していた海賊達に襲われた。

ゲオルギを野生の竜だと思つて捕まえようとして、羽根の生えた女の子を見つけて、これまた捕まえようとしたそうよ。

それに気付いたシメオンが殴り込んで来て、大乱闘。

なんとか死者は出なかつたけど、怪我人が出たので、治療器具を携えて私とレーへンは海辺までやつてきた。お城は今ハーシェがお

留守番してくれている。

「怪我人に関しては、こちらで治療を引き受けましょう」

「わかった。先に手を出したのはこちらだ。あとで対象者にはしつかり罰則を与える」

海賊達の代表は、うなずいてそう言つと、ライナの方を向いた。

「怖がらせてすまなかつたな、嬢ちゃん」

相手の右目はつきぬけるような青空の色だった。この灰色に覆われた国ではめったに見られない、懐かしい色ね。

「それで、あなた達、いったいうちに何の御用かしら?」

海の波と国題たび 2（後書き）

20110612：語句の微修正をしました。

「アンタら」こそ何者だ？　ここは俺たちの先祖の土地だぞ」「…どうこうことかしら？」
私は男と私の間に立つベウォルクトを見た。

「すでに血による統治は終わりました」
ベウォルクトが変わらない調子で言った。

「確かに彼らは数千年前にこの国を見捨てた者達の末裔です。崩壊して行くこの国を捨てるという誓約もなされています。もう別の民族ですよ」

私の隣に控えるレーへンが言った。

「そう」「自分の肩の力が抜けたのがわかつた。
また家を追われるのはいやだもの

「それにあの男では王位に就けません。國や城のシステムを使つことはできませんよ」

レーへンが口をほとんど動かさず小声で言った。

「まあいいか。俺たちは今さうこに戾る氣もないしな」

そう言つて海賊達の代表は首の後ろに手をやつてもみはじめ、あぐびをした。そのまま横目でベウォルクトとレーへンをちらりと見る。

「オマエら、伝承にあるあの鋸びた山の精靈か。一体もいたのか」
独り言のようつづつ言つたあと、大股で近づいて来て、私を見下ろして来た。…背が高いわね。サヴァとどちらが高いのかしら？

首の後ろがちょっと疲れながら、私は男を見上げる。

首筋の中程までの黒い髪は波のように豊かに波打ち、はつきりした一重の目は左が黒で、右は透き通った青い瞳。どちらも強い視線でざらつと周囲を射抜いている。顔つきは精悍だけれど、若そつだし、整つた容貌は女性にもてそうね。

脚をぴつたりと覆う荒い生地のパンツに胸元の開いたシャツ。ちよつと光沢のあるジャケットは丈が短い。

そして左手には黒のグローブをはめている。

ということは、法術を使うわね。

さらには、腰布に四本も剣を差している。使い分けでもしているのかしら？

そういうえばテントの外で待つてもらつている他の海賊達も、何かしらの武器や道具、法術用のグローブや腕輪をつけていたわね。

田の前にいる海賊の代表も、外にいる仲間達も、きっと何かあれば即座に動いて、私達なんてあつといつまに切り伏せちやうわね。

でも、私の傍にはレー・ヘンとベウォルクトがいる。子供達にはサヴァとゲオルギがいてくれている。

「アンタも精霊か何かか？」

「一応人間よ。出身は大陸なの」

私は声の調子に気をつけながら、ほがらかに話し続ける。

「何にも無い土地で、寂しくはないのかい」

「景色が味気ないのを気にしなければそれなりに楽しいわ。荒々しい海賊には解らないでしようけれど。ところで、あなた達どうやって来たの。今、海は波がない状態のはずよ」

男はにやりと笑つた。

「確かにこの近海は“銀鏡海”って言われるくらい強烈な嵐の海だ。だが俺達の祖先はその海を渡つてこの国から出たんだぜ？ その時

と同じ方法を使つたまでだ

「もしや、ジェットエンジンの技術がまだ残つてゐるのですか」

ベウォルクトがちょっと驚いた調子で言つ。

「まあ、あれがあると便利だからな。だがいまだ一から作るのは難しくて既存のを小型舟にしかつけられないままだ

「燃料は何を使つてゐるの?」

「海水を加工して使つてゐる。元々使つていた燃料は俺達だけだと

いまだに再現出来ないんでね」

元々は何だつたのかしら? あとでベウォルクトに聞けば教えてくれるかしら?

「それで、話は戻るけどあなた達は何をしに来たの? 私としては侵略ではないと嬉しいのだけど」

男はますます笑みを深めた。やわらかく動く口元ね。

「失礼、女王。俺達は『黒堤組』という海賊だ。大体この島の近海と大陸の間で主に活動している。俺は組の首領、通称“マvro”だ」

そう言つと、マvroと名乗つた男は腰に着けていた鞄から手のひらに乗る大きさの壺を出した。

「俺達はオジ貴を弔いにきた」

…マルハレータの壺に似てゐるわね。

「偉大な黒堤組の男は死ぬと船の炉の火で焼かれる習いがある。志半ばで無念の死を遂げた者は海に、そして満足して死んだ男の灰はこの祖先の土地に葬つてきた。先代の首領だったオジ貴は最後まで偉大で、そして満足いくまで生き抜いて死んだ」

男は黒くてツヤのある小さな壺にそつともう片方の手を添えながら言った。

「そう、それであなた達はここまで來た訳ね」

「まあ、それに加え最近この島がいきなり国名つきで地図に出て来

たのは気になつていた…な。それを確かめに来たつてのもある。そこでだ

マウロと名乗った男は壺を差し出してきた。

「頼みがある」

「どういひこと?」

「今までここは無人の、閉じられた場所だった。今は開かれているのなら、オジ貴をちゃんとした場所で眠らせてやってくれないか。野ざらしの場所に一人眠らせておくのは忍びないんでね」

「それくらいなら、まあ…いいけど」

私は壺を見つめて言った。

「大切な人にはゆっくり休んでもらいたいものね」

私が壺を受け取ろうと両手を差し出すと、男は目元を緩め、それから壺を持った手を後ろへ引いた。

いきなりだつたのでバランスを崩してよろめいた拍子に顎をつかまれて、向こうがぐいと顔を近づけてきた。
唇と唇が重なる

触れたか触れないかのその瞬間、私はめいっぱい右手を振りかぶった。

テント内の空間に鋭く乾いた音が響く。

思いつきり振り抜いた右手の指先が痺れて震えた。

「ウブな女かと思ったんだが、いてえな」

田の前の男は詫びる様子もなく左頬をさすっている。

なんてことしてくれるのこいつ！

しびれていた手のひらがすごく痛くなってきたわ！

海賊は油断大敵！ 気を許してはならないわ！

「レー……」

震えながらレーへんに命令しようと、背後を振り返った私は
びっくりした。

「ファムさま、3秒ルールです！ 3秒ルール！ 0・2秒でした
から、大丈夫ですから！」

レーへんが必死になつて言つてくる。

「なによ、3秒ルールって！ それに、足元のそれは一体なんなの」
一生懸命フォローしているつもりらしい銀髪の精靈は、いつの間にか現れていた灰色の生き物を踏みつけていた。レーへんの足の下で暴れるそれは、白猿国の動物園で見た事のあるライオンという動物に似ているけれど、ゲオルギ並みに大きな体をしている。一体何かしら？

レーへん達より後ろの少し離れた場所では、こわばつた顔つきでこちらへ飛び出そうとしているライナと、慌てて彼女を押しとどめようとしているシメオン、その横で立ち尽くしているサヴァに、状

況がよくわかつていな様子で首を傾げて竜のゲオルギが見える。

そしてベウォルクトの隣にはいつの間にか白に近い灰色の髪の若者が腕を組んで立っていた。

「…どちら様かしら？」

「動けよコトヒト。シシはちゃんと俺を守りつとしたぞ」

マグロと名乗った男は頬をさすりながら若者に向かって睨んで言う。

「組頭の命に別状はありませんでしたので。それに、今のは明らかに礼を欠いた行為だつた」

コトヒトと呼ばれた若者は表情を動かさずに答えた。中性的な風貌をしていて、灰色の髪を一本の三つ編みにして、やや濃い灰色の瞳をしている。房飾りのついた墨色のゆつたりとした上着を着て、下は同じ系統の色をした裾の短いズボンに、布で出来たサンダルを履いている。

「アナタ、闇の精靈？」

レーへン達と似た物を感じたので思わず尋ねてみると、若者はわずかに目を見開いて、組んだ腕をほどいて前に一步踏み出した。

「鋭い目をお持ちですね。初めてまして、くろやみ国の女王。ワタシはかつてこの国を離れた精靈で、現在はコトヒトと名乗つております」

そう言つて灰色の髪した精靈はゆるく微笑み、お辞儀をした。

「うちとは違つて、灰色の髪なのね」

私は銀髪のレーへンを振り返った。

「一等級だと銀髪以外も現れるんですよ」

銀髪の精靈は優雅に微笑んで、私が尋ねる前に答えてくれた。

「シシ、もう大丈夫だ、戻れ」

海賊の首領は腰にあつた剣の刺さつていない幅広の鞘を掲げて、レーへンが足で抑えていた灰色の生き物に向かつて声をかけた。

レーへンが足をじけるとシシは体を起こしてぶるぶると震えて毛並みを整え、レーへんに向かつてひと吼えしてから首領の元へ駆け寄り、吸い込まれるようにして鞘の中に消えていった。

「な、なあにあれ！ もしかしてあれも精霊なの？」

「あれはいわゆる人工精霊です。影霊の研究過程で誕生した一体です。国外へ出た人間達や精霊の元でずっと保護されてきたのでしょう」

びっくりして声をあげる私の耳元で、ベウォルクトが小さくをさやいて教えてくれた。よく見るとシシという人工精霊は柄にライオンの彫刻が施された剣になつて鞘に収まっていた。

「コトヒト、おまえも一旦戻つてくれ。あとでちゃんと場を設ける」「わかりました」

そう言つて、コトヒトも剣の姿になつた。シシとは違つて鞘も一緒で、飾り気のない灰色の細くすべてが真つ直ぐな形で、黒い房の飾りがついている。

「精霊つて、ああいつたことも出来るのね！」

「お伝えしておきますが、特級はあのような事はできませんよ」

「あれはコトヒトが己自身をああいつた形に改变したからで、我々はできませんので」

レーへンが言い、ベウォルクトがさらに付け加えるように言った。

「別に誰もやれなんて言って無いじゃない」

そんな事言いそうに見えるのかしら、私つて。

「このシシとコトヒトは俺の護衛用精霊みたいなもんだ。まあ、由来はあんたらの方が詳しいみたいだが、今は黒堤組の首領に代々仕える精霊だからな。今更何言われたって返さねえぞ」

そう言つてマヴロと名乗つた男はふた振りの剣を元のように腰に

つけた。

「…ふてぶてしいわね」

「うちの業界はツラの皮厚くないとやつてけないんでね。そいつ言つあんたはなかなか気が強いな」

「気弱じゃ女王は勤められないわよ。左頬の腫れ、どんどん赤くなつてるわよ?」

「それを言つならあんたの手も、だいぶ腫れてるんじゃないか?」

男は愉快そうな顔つきで笑い、私は顔が引きつりそうになりながら力をこめて微笑み返した。

「お頭、なんかもめてたっぽいけど、どうしたんすか。コトヒト達も出て来てたみたいでしきど」

テントの外から海賊の仲間が声をかけてきた。

「なんでもねえよ、ちょっと女王さんを口説いてただけだ」

男は目の前で飄々(ひょうひょう)と答える。

ああ、もう一度ひっぱたきたいわ。

すぐ外には何人か集まっているらしくて、ざわめく声が大きくなつた。ライナが身を堅くして、シメオンがそつと寄りそう。

「お仲間さん達が心配しているみたいね。一曰外に出て話しを続けましょう」

「ああ、わかつた」

「ライナ、シメオン、あなた達はゲオルギとここにいて機材を見ていて。サヴァは奥の怪我人達の具合を確認してきてちょうどいい。顔は隠したまま構わないから」

私が指示を出すあいだにレーへンが外出用の外套を着せてくれる。フード付きで地面すれすれまで裾が長く、袖も長いそれを海賊の首領は興味深そうに見ているけれど、何も言つてこない。

「ベウォルクト、レーへン、アナタ達は一緒に来てね」

「かしこまりました
「もううんですよ」

精靈を連れて海賊の首領と一緒にテントの外に出ると、海賊の仲間達が集まってきた。黒堤組と名乗るだけあって、皆黒や灰色が多い服を着ている。ざつと見て6・7人いて、若い人が結構多いわね。みんな首領の周りに集まって、ほとんど顔しか出でていない格好をしている上に不機嫌顔が隠せていない私と、顔を布で覆ったベウオルクトに珍しい銀髪と綺麗な顔立ちをひんやりとした表情で覆ったレーへンは遠巻きに観察されている。

「それで、あなたのオジさまを預かる話も受けたときの、さつきのは何かしら？」

「あの…うちの頭は一体何をしたんですか？」

黒髪の壮年の男性が一人進み出て、私たちに話しかけてきた。

「女の唇は安くないって教えてあげただけよ」「つい思い出してぶっきらぼうに答えちゃったわ。

「気に入ったもんは速攻で捕りにいくのが海賊の流儀だ」

私の言葉に、マウロと名乗った海賊の首領はまたにやりと笑う。

「まさか…」

壮年の男性は顔を青くした。

「海の男には危険がつきまとう。いつだってその時その瞬間の情熱に命をかけている。何時死ぬか解らないからな。だから気に入ればその場で口説く」

自信満々の姿にまた腹が立ってきたわ…

私は彼の周囲に集まつた面々を眺めた。みんな口の端を下にまげて、呆れ返つた顔つきをしている。

「ほかの海の人達は違うみたいだけ?」

「俺の流儀だからな」

「アホか」

「なにやつてんすか」

「失礼にも程がある」

「死ね」

…個性的な海賊のみなさんね。

「ただのちょっとかいなら早々に引き上げて欲しいわね。匿名のマヴロさん? 通称の名前ということは、本名ではないんでしょ?」「ああ、たしかに口説く相手に名乗っているのは悪かつたな、俺の本当の名はカラノスだ。マヴロは仕事相手に黒堤組の代表が名乗る名前だ」

キスしようとしたことはあくまで謝るつもりないみたいね…

「カラノス、ね。こっちのほうがあなたらしい響きだわ」

「そうか? ありがとよ」

海賊の首領、カラノスは少年のように微笑んだ。

腹立たしいことに彼の頬の腫れはひいてきている。私の右手は未だに痛いのに。右手はカラノスと会話している間にレー・ヘンがそつと近づいてきて、冷たい包帯を巻いてくれていた。

「女王さんよ、あんた面白いな」

波打つ黒髪を弾ませ楽しそうにそう言つた後、笑みを含んだ表情のままカラノスの黒と青の瞳が鋭くなつた。

「だが国主としてちょっと甘すぎるな。世間知らずのただの小娘と変わらないレベルだ。それじゃ他所の国に舐められちまうぞ?」

ひとつの集団を率いるだけあって、しっかり見るとこからは見ている男ね。

「…わかってるわ。まだ、女王になりたてなのよ

「近いうちに他の海賊や国の調査団なんかがこぞつてここにやってる。そん時は誰もあんたの都合なんて構つてくれないぜ。俺としては先祖の土地が他所の国に占領されるくらいなら、あんたらにいてもらつた方がいいんでな。僭越だが言わせてもらひ。このままじゃ、この国はいいように扱われる。それでいいのか？」

最後の言葉は、私だけじゃなく背後に立つ精霊たちにも投げかけられて、いるように感じた。

「なぜ、他の人達がここに来るつて言えるの？ 島だけなら地図に前から載つていて、何もない土地だつて、あなたたちも知つていいじゃない。子孫にあたるあなた達はともかく、来るだけ無駄なのにどうして？」

「それが状況が違うんだな」

カラノスは腰に差した剣に手をもたせかけて言った。

「いま大陸では青嶺国や白箔国、それに赤麗国なんかがこぞつて新しいものをかき集めていてな。新しい土地、国、珍しい品物、情報でも良い値段で買い取ってくれるんだ。あんたらの事も、報告するだけでも報償ができるだろう」

「どうしてそうなつているの？」

「さあな…最初は一国の王がはじめたらしい。新事業開拓でもしたいんだろう。それを他の王達も真似しだしたようだ」

「さらに、この国の周囲の銀鏡海に波が生まれる事が増えている。この現象は数百年ぶりだそうだ」

のんびり構えている場合じやないつてことは、わかつたわ。

「教えてくれたことは感謝するわ。正直いつて、外の状況なんて、知らなかつたし」

カラノスは思考に手一杯状態の私にゆっくりと近寄ってきて、外套から流れでていた毛先が灰色の髪を一房持ち上げながら、言った。

「なら改めて、俺と今夜どお？」

「レーへン、沈めて」

「任せてください」

「うわっ。気配消して近づくな！」

「精霊ですから、あしからず」

それからシシがまた出てきたり、レーへンが追つたりと、騒動になつた。

しばらくして海賊の仲間たちが疲れた顔で謝ってきたので、なんとか苛立ちを静めて、その場を収めたわ。

結局、怪我人の治療ももう少し時間がかかるので、海賊達には機材を撤去したテントに追加のテントを設置して、そこで夜を明かしてもらうことになった。

間違つても、あの男を城に入れるもんですか！

一応食べ物も提供することにしたので、有り合わせの材料で急いで作ったシチューが二つの寸胴鍋一杯、お芋と葉野菜のサラダをひと山、ハーブを練り込んで焼いたパンをこれまたひと山に、採れたての果物を一箱と癖のないハーブで香りをつけた水をガラスのボトルに詰めたものを20本ほど届けた。

運ぶのはシメオンが率先して引き受けてくれて、サヴァとゲオルギと、城の外に出るまでだけどハーシュが手伝っていた。シメオンは運んだついでに怪我させた人達に謝りに行つたみたい。

今日の夕食は王の間で食べることにしたので、ライナが料理の仕上げをしている間に私とレーへンと一緒にテーブルの上に食器や飲み物を並べていると、ベウォルクトがコトヒトを連れて入ってきた。

「今日は私用で来ました」

コトヒトは、先程の姿と同じだつたけれど、肩から黒いケープを羽織っている。胸のあたりにはなにか模様のようなものが描かれているけれど、何か意味があるもののかしら。

「組頭の許可は得てきました。まあ、内偵と思つて頂いてかまいませんよ。ちょっと精靈として用事があつたものでして」

「私も話を聞いているわ。精靈の用事なら仕方ないけれど、今回は手短にお願いね」

「ありがとうございます。女王さま」

「どうも、先程ぶりですね。コトヒトさん」

レーへンがコトヒトに言葉をかけて、握手した。

「やあ、さつきは挨拶できなかつたねレーへン？ だつナ？ 今回は名前」

「ええ、その名前であります。これからはどちらで通してくださいね」

「ねえベウォルクト、もしかしてコトヒトの方が先輩なの？」

「ええ。レーへンは世界の一等級以上の精靈のほとんどよりも後に生まれましたから」

「ベウォルクトさん、これ青のからりの回覧板です」

そう言ってコトヒトは何も持つていらない右手を差し出した。

「ああ、きいてるよ。ありがとう」

ベウォルクトはそう答えて同じく右手で握り返した。

「例の話ですか…」

レーへンがなんだか暗い顔つきでベウォルクトの右の手のひらを覗き込んでいた。

「回覧板？ もしかして精靈にまつ近所付き合いでがあるのかしら？」「ええ。特定の精靈達のやつとりを扱つときまつざつて仲間が運んで来てくれるんです」

「一体どんなやつとりなのかしら？」

私がじつと見ていくのに気づいたらしい、ベウォルクトが手のひらから顔をあげた。

「情報をまとめてからになりますが、この件は後ほどファムさまに

御報告いたしました

「ありがとうございます。よろしくね」

「ファム女王」

コトヒトの灰色の瞳がまっすぐ私を向く。

「ワタシはもうこの国の精霊ではありませんが、言わせてください。
この国を蘇らせて頂き、王になつて頂き、ありがとうございます」

「まだまだこれからよ。でも、嬉しい言葉をありがとうございます」

コトヒトはそれからぽんと頭を下げて、海賊達のテントへ戻つていった。

夕食後の食器を片付けたテーブルの真ん中に、私はお茶をたっぷり詰めた保温瓶と、棚から出してきたありつたけのビスケットとドライフルーツを乗せたお皿をどんと置いた。

「さあ、みんな、会議をするわよー！」

今日は騒がしかったから、食後の、しかも夜は難しいことを考えずのんびりしたいところだけれど、私は国民たちと話し合いたい事があつた。

「レー・ヘン、ベウォルクト座つてちょうだい。それにハーシュも

「わかりました」

「はい」

精靈達は空いていた席に座り、ハーシュはウサギから人の姿になつてライナの隣の席に落ち着いた。ゲオルギはサヴァの隣から顔だけ出している。

全員が席に揃つと、私はめいめいの席の前にカップを並べて、お茶を注いだ。精靈達は飲まないからお茶はないけれど、お皿に載せたカップは置いた。

テーブルセットが整つと、私はみんなを見渡して言った。

「海賊と取引しようと思うの」

驚いた様子なのはライナとレー・ヘンだけだった。ベウォルクトなんて頷いているわ。

「彼らの持つ情報は貴重だわ」

「あの、海賊と取引つて、危ないんじゃないですか？」

ライナがおそるおそる言つ。

「ありがとう、ライナ。危ないからこそなのよ。彼らは波がなくても来れたくらいだから、今後もそれなりに関係を持つておいたほうがいいと思うの。取引相手ならいきなり略奪しに来る事もしないでしょうし」

「ファムさまはあの男はお気に召さなかつたようですが？」
レーへンが不思議そうな顔で言つ。

「ええ。腹立たしいことこの上ないわ。でも、言動は腹立たしいけれど、あの男には悪意はなかつたわ。私に油断が多くて頼りないって、忠告してくれただもの」

私はそこでお茶を一口飲んで気持ちを静めた。

「まあ、初対面であれだけ助言してくれたことには十分警戒したほうがいいわね」

「当面はこの国から情報か何かを提供して、向こうからは世界の情報を見渡すというのを考えているの。注意しながら、利用できるものは利用しないと。何もしないでいて、そのうち他の集団が来たとき対処できないのが一番怖いわ」

私はみんなを見渡して言つてから、薄く切つて乾燥させた林檎をかじつた。生のものよりも強めの甘酸っぱさが口の中に広がる。

「みんなはどう思つ?」

「ワタクシに反対意見はありませんが、初めは様子見とした方が良いでしょ。海賊は彼らだけではありませんし、渡すものは注意深く吟味しないと」

ベウオルクトが言つた。

「あの」

サヴァアが手を上げた。

「騎士団にいた頃に聞いた話ですが、あの黒の海賊は比較的まともだといわれています。大規模ながら規律があり、海賊と名乗つていますが無差別な略奪はせず、依頼された仕事をこなすことが多いと。その取引相手には国家の要人も多いと聞いています。昼間少し言葉を交わしましたが…」

話している途中でみんなからの注目を浴びて落ち着かなくなつたのか、サヴァアは一度言葉を切つてお茶を一口飲んで、それからまた

口を開いた。

「…無作法などこちらもありませんでした。ですがこの国の情報を流せば、その分外からの危険も増えるのでは？」

「問題はそこよねえ」

「僕のことはどう伝えたってかまいません。でも、ライナの事は守つてほしいです」

他国の権力者達から恨みを買っているシメオンがカップを握りしめて言った。

「シメオン、私はあなたを売つたりしないわ。あなたの事も、ライナもサヴァーの事も、ゲオルギの事だつて、精霊たちの事だつて私は守るわ」

ベウォルクトが黙つて私のカップにお茶のおかわりを注いでくれた。レーへンは驚いた表情で自分を指さす。

「ワタシ達、精霊もですか？」

「そうよ。アナタ知らなかつたけど、よその国には精霊を捕まえて改造したり、売買する人間だつているのよ？」

「ああ、そういえば、熱心にどこかへ連れていくこうとする人に何度か会いましたつけ。あれはそういう意味だつたんですね」

よく500年間つるつきまわつて無事だつたわねアナタ…

「しかしファムさまはあの男と関わりを持つのは嫌そうでしたが」「商売で関わると、好き嫌いの感情は別の話よ。」「心配なく、私があの男とどうにかなるつもりはないわ！」

それからまたひとしきりみんなで意見交換をして、海賊に何を提供するかや、どういった交渉方法でいくかの案を出しあって、大まかに決めて、後は私がベウォルクトとレーへンからの助言を元に最終決定することになり、夜の会議はおしまいになった。

王の間に穴が開いているせいでお城の機能がかなり弱っているらしいので、念の為にサヴァとシメオンはベウォルクト達と一緒にお城の周辺の警備に立つことになった。

「ライナ、今夜はハーシュと一緒に私と眠らない？」

私は海賊が来てからずっと不安そうな表情をしているライナに声をかけて、ふわふわのウサギのハーシュと一緒に寝ることにした。

「兄さん以外と眠るのは初めてなんです。時々、朝になるとシメオンも一緒に寝ていることはあるんですけど」

温かい寝間着に着替えて、ライナは羽根のある彼女専用に作ったうつぶせ寝用の枕を抱えて、照れながら私の部屋にやってきた。

一緒に横になつて他愛ないおしゃべりをしているうちに安心したのと、昼間の疲れが出てきたらしくって、ライナは程なくして眠りについた。力の抜けた真っ白な羽根がふんわりとシーツの上に広がる。そつと触つてみると、汚れひとつなく、艶のある羽先だった。私自身はなかなか寝付けなかつた。しばらくしても眠気がこないので、枕元にいるハーシュに眠るライナを頼んで、起き上がって甘酸っぱい味のハーブティーをカップ一杯作つて、備え付けの浴室に向かう。

たっぷりのお湯に肩まで浸かり、ゆっくりとハーブティーを飲む。ふつとため息をひとつくと、自然に涙が出てきた。

「別の男に口説かれても、ちつとも嬉しくなんてならないわよ」

湯気の向こうに向かつて、つぶやいてみた。

「聞いてよ。キスされそうになつて、防げなかつたの」

そう言つて、頬を伝う涙をお湯に落としながら、私は一人で作り笑いをした。

「でもね、思いつきり、力いっぱいひっぱたいてやつたんだから」

湯気のせいか何だかわからないけれど、前が良く見えない。

「褒めてよね、ヴィル」

「あの女がほしい」

カラノスはそう言い、持つていた杯から酒をあおった。

彼の言うところのオジ貴、先代の組頭を見送るために特別に用意していた酒で、黒堤組はささやかな宴を開いていた。皆めいめいに酒を飲み、物を食べ、あちこちで先代についてや、この島の変わった国民たちについて語り合っている。

その中で組頭のカラノスは護衛の精霊シシの上にもたれかかり、送別の際にだけ使用される杯でコトヒトを相手に飲んでいた。杯をあおる回数がすすんだせいか、カラノスの黒と青の瞳は熱をおびて潤んでいる。

「体の形もなかなかよさそうだが、媚びない目つき、飾らず動く唇。駆け引きはそこらへんの小娘程度の癖して、譲らんといふは譲らん度胸。ああいうのは海にも陸にもなかなかあらんな」

カラノスはそう言い、酒に濡れた唇をなめた。

「しかも普通は国に一体いるだけで貴重な特級精霊を一體も従えていやがる。んであの手の早さ。お袋より容赦なかつた」

カラノスはどこか嬉しそうに己の左頬をなでた。

「しかし、あれはかなり嫌われたんじゃないのか」

ただ居るだけの形で宴に参加しているコトヒトは、右ひざを抱えて座った姿勢で、冷静に言った。

「逃げると追いたくなる。ますます欲しくなつたな」

コトヒトはため息をついた。

しばらく経つて、酔い覚ましにとテントの外に出てきたカラノスに、副頭の一人の壮年の黒髪の男が近づいてきた。

「おいお頭、あの女が例の依頼の対象なのか？」

男の言葉に、カラノスは頷いた。

「ああ、おおかたあの女がヴィルヘルムスの依頼の女だろう」「髪の色が違っていたようだが。依頼の女は、黒だろう。女王のは不思議な色だつた」

「いや、おそらくあの女で合つて居る。あの顔にはまつ黒な髪が一番良く似合つ」

カラノスはそう言いつて腕を組み、雲に覆われた夜空の下、水平線も何もわからない海の方角を眺めた。

「探ししまわる訳だ。若いくせに枯れてる奴だと思つていたが、女を見る目はあるんじやねえか」

そうつぶやいて、背後に立つ精霊の視線に気づくとカラノスは強気の笑みを浮かべた。

「だが譲る気にやならんな。女については向こうから問いつめられるまで黙つとけ」

「もう一つの用件はどうしますかい」

副頭の男が尋ねた。

「そうだな……売り込みに使う情報はちと精査しとくか。『くろやみ国つてのが海の上の島にできたという情報は本当だつた。だが銀鏡海のせいで苦労して上陸はできたが、事故が起きてすぐ帰つた』つて所にしておくか。嘘は無いし、これだけでも結構な内容だ」

「わかりやした。さつそく報告書の準備にとりかかりやす」「わかった。壮年の男はそう言つて、テントへ戻つていった。

「悪いがヴィルヘルムス…女王はもうつぞ」

カラノスは暗い闇に包まれた海原の果てを見つめながら言った。

海賊と情報 2（後書き）

番外編ページにこの晩のレー・ヘンとコトヒトの雑談を「銀と灰」というタイトルで載せてあります。

何度も何度もあの人の夢を見る。

街外れにいくと、焼け落ちたはずのあの白い小さな家が元の姿で建っている。急いで中に入るが、誰も見つからない。

探し回ると台所に人のいた痕跡を見つける。火にかけられたままの鍋があり、まな板の上には刻みかけの野菜、食卓の椅子にかけられたエプロン。

一瞬前まで、彼女はここにいたに違いない。

台所から続く裏庭への扉が小さく開いていて、畳下りのあたたかな光と、庭に植えられた花たちの発する香りが差し込んでいる。扉の先から彼女の楽しげな笑い声が聞こえてくる。

だが急いで扉を開けると、そこは一瞬にして火の海だった。

直ぐ目の前に彼女がうつ伏せで倒れている。あの艶やかな黒髪が、血溜まりの上にひろがり、投げ出された手は青白い。

そして、気がつくとそこは煤だらけの廃墟になり、彼女の姿は消えている。

この夢はたいていここで終わる。今回もそうだった。いまだに慣れることなく、そしてほとんど変化がない悪夢。しかし今では悪夢であっても会えるのなら構わないと言え思つようになってしまった。

諦めようかと思つ氣にもなれないほどに求めてゐる。もつ一度、あの声で名を呼ばれ、あの指先に触れられたいと

ヴィルヘルムスはゆっくりと目を開いた。

ベッドサイドに置かれた小箱に一瞬目をやると力なく起き上がり、必要な分だけ朝の空氣を吸い、一旦おいて深く吐き出すと、ベッドから出て身支度を始める。

「おはようございます。ヴィルヘルムスさま。よく眠れましたか?」寝室を出たところに王の上着を持ったオーフが立っており、声をかける。

「ええ、以前よりはマシになりました」

その表情をみて、オーフは眉間にシワを寄せた。

「王の居室を結界で覆うのを認めたのは、落ち着いて休んで欲しかったからなのですが」

「休んでいますよ。密偵や忍びこんでくる女性がいなくなつて、気が休まります」

廊下を歩きながらヴィルヘルムスは袖の金のカフスボタンを留めていく。

「結界は執務時間外の“おでかけ”をしまかすためでもあるようですね」

「緑闇国件が落ち着いたので、しばらくは遠出しませんよ」

オーフから上着を受け取り、ひととおりの術の確認をして、羽織る。

「あの国の秘密組織が人間をさらつていると聞いて飛び出して行つたのに、見つかなかつたのでしょうか?」

「収穫はありました。黒堤組にも依頼しています」

まっすぐ前を向いて歩き続けるヴィルヘルムスに、オーフは目を伏せた。

先に執務室へと向かうオーフと別れ、ヴィルヘルムスが食堂に入ると給仕たちと王の秘書官達が一様に礼をする。

「おはようございます、ヴィルヘルムス様」

ヴィルヘルムスは白いクロスをかけたテーブルに着き、ひとり分だけ用意された朝食に手をつける。用意された飲み物の中でも、赤い野菜を絞つたものに一瞬だけ眉をひそめる。給仕が動いた。

「お下げいたします」

「いえ、飲みます。嫌いではありません」

朝日を受けて輝くグラスを持ち、ヴィルヘルムスは礼儀にのつとつた姿勢でどろりとした真つ赤な飲み物を飲み干す。

「マウリツツ、今日の予定に変更は？」

王の選任秘書官が一人進み出て、口を開く。

「夕刻に会議がひとつ入りました。これは新規事業の成果報告も兼ねています。それと、ヴィルヘルムス様個人宛てに先日の結界の件で正式な依頼状が届いています。夜会の招待状が三枚ほどきていますが、いかがいたしますか？」

「夜会は貴方達秘書官が私の代理で出てください」

「我々がですか」

「そうです。すべて代理のほうが、偏りがなくていいでしょ。あとで報告を聞かせてください」

「かしこまりました」

そのまま指示を出しつつ食事を終え、コーヒーが運ばれてくる。異国から持ちこまれた深く豊かな香りがあたりに漂う。これを飲み終われば、白箔王としての一日が開始される。ヴィルヘルムスはたいして味を楽しむこと無くそれを飲み干す。

「今日の休憩にはハーブティーをお願いします

「…あれは庶民の飲み物ですが？」

「味の好みは個人の自由です」

「シシつて雄？ 雌？」

「さあな。精靈にそんなもの関係ないだろ」

「まあ、見た目だけの話なのは確かね。でも一応気になるわ」

「なあ…あんた、「トヒトがどっちなのか知ってるのか？」

「もちろんよ。え、何あなた、知らないの？」

「どっちなんだ」

「精靈にそんなもの関係ないんでしょ。知らなくても問題ないわよ

「いや、あれはあれで気になる」

港でカラノスと並んでそんな会話をしながら、私は海賊たちの船を眺めていた。

遠く、灰色から海らしい濃くて深い青色にかわっていく水平線の間際に、焼いたケーキのような黒茶色の四角くて平べったいものが浮いている。遠くにあるはずなのにかなりの幅がある。

「あなた達の船、かなり大きいのね」

「母船はひとつの中くらいの規模があるぜ。人も多いし、物もそれだけある」

「賑やかそうね」

「乗るかい？」

「そうね、機会があればお邪魔させていただくわ

「そうか」

…なぜそこですつゝい笑顔になるのかしら。私、何か返答間違えた？

カラノスは黒と青の田を細めて、ひどくゆづくつと手を伸ばして

きた。逃げたかったけれど、下手に避けるのは危険な感じがしたので、動けなかつた。指先で頬をそつと触れられる。

「また口説きに来るぜ」

「そういうのはもつと遊びがいのある人としてちょうどいい。少なくとも、この島にはそんな暇のある相手いないわよ」

私はいつでも背後に待機しているレーへンへ声をかけられるように注意しながら、感情を込めずに言った。

「なんだ、操をたてた男でもいるのか？」

「個人的な話にはノー・コメントです」

エンジンの音がして一艘の船が港に近づいてきた。

港に辿りつくと、降りてきた男からカラノスは両手に收まるくらいの黒い立方体をした箱を受け取り、そのまま私に差し出す。

「ほら、ご依頼の他国情報だ。おまけで王たちの情報も別項で作つてある。あとは大陸の一般的な上流階級の情報もひと通り入つている」

「あ、ありがとうございます」

受け取った箱はずつしりと重かつた。中の情報の取り出し方、きっと精靈が知ってるわよね。

海賊との取引は順調に話をつけることができた。素直にカラノスに情報がほしいから取引しない？ と声をかけたら「ああ、いいぜ」と、それだけで成立したわ。

「報酬がジヒットエンジンの大型化技術とは、えらく割のいい取引だ」

「こちらから提供するものは、海賊が必要そうにしていた技術で、もちろん喜ばれた。

「おまけの分はコトヒトを通じてそこの精靈に頼まれたやつだ。注文通り、あちこちの国の過去の女王とか、王女情報がしつかり入つ

てるぜ」「

思わず勢い良く振り返っちゃったわ。レー・ヘンは微笑んだままで、
ベウォルクトはそっぽを向いている。

「…アナタの要求は受け取ったわ、ベウォルクト」

「こればかりは、重要なことですので」

「まあ確かに必要だけど…」

一国の主として、しつかりしなくちゃね！ これから先、この国

は他国に舐められる訳にはいかないもの。

世界一の規模と言われている大空騎士団が毎年主催している協闘大会の時期がやってきた。

毎年各国の部署から腕に自慢の代表騎士たちが集まり技を競うこの大会は、大空騎士団所属の者だけでなく、国家の騎士はおろか傭兵や一般市民でさえ参加することが出来るので毎回多くの注目を集めている。

莫大な賞金が出る上に、うまく権力者の目に止まれば出世のチャンスもあるため、一般層の予選は千人単位で人間が集まる。だが毎年のように本戦まで進める者は少なく、本戦に進めただけでも見事なものだと褒め讃えられる。それだけ騎士とそうでない者の差は大きい。とりわけ大空騎士団の層は厚く、ほぼ毎年のように上位入賞をさらっていく。

だが、今年はいつもとは大きく様相が違っていた。

すでに誰が勝つかの予想は軒並み崩壊し、闘技場近辺の賭博場は阿鼻叫喚で大騒ぎになり、関係者はおろか闘技場の周辺の住民たちでさその話でもちきりになっている。

「こりや、すげいことになつたな。一体どういった」

大空騎士団の大会運営室の壁一面に張り出されたトーナメント表

を眺め、紺碧色の瞳にまっすぐな青い髪をした青年は口笛を吹いた。表には参加者達の名前があり、周囲には各人についての情報が貼り出されている。身内にあたる大空騎士団の者達は名前と装備、入賞した場合の賞与についてなど。他の国家騎士団所属の者達の名前の周囲には性格や戦い方の癖などの情報を印字した紙が貼りつけられている。

そして一箇所、正確には約一名の周辺には慌てて書かれたとわかる文字が踊った紙片が大量に貼られていた。

「競技名は“くろの騎士”で本名は…偽名だろうな、これ。語感からして大陸の東の奴っぽいな…。なあ、今までの戦歴をもう一度教えてくれないか」

「はい」

青年の言葉に背後に直立していた女性が答えた。大空騎士団の制服を着て細い銀フレームのメガネをかけ、深く澄んだ湖のような水色の瞳に、やや緑がかつた青色の髪を肩のあたりでゆるく束ねている。

「まず“くろの騎士”は一般枠で応募し、一般予選の集団競技は圧勝。武装して闘う本予選に進み、ここではすべて一分以内に勝利しています。現在進行中の本選では一戦をこなし、こちらは三分内で勝利。いまだ武器を手にすることなく、無手で、かつ、無傷です」

青年はため息をついた。

「とんでもないのが出てきたな。こいつ本当に人間なのか？ いつかのようだに、どこの精霊か何かが退屈のあまりに紛れ込んできたんじゃないのか？」

「…事前に参加者の身体検査を実施しています。それに会場内と周辺には法術と精霊術で常に探知術を発動させていますので…一応人間かと」

予選は一段階あり、一般人は一般枠だけの一般予選、騎士達は事前に各騎士団内での厳しい選抜がある。それらを経て合同の本予選

があり、勝ち抜いた者だけが闘技場で一戦一戦開催される本戦に参加できる。ちなみに過去の入賞者達は予選が免除され、いきなり本戦から参加することが認められている。

「大空の中で負けたのは二人だったな。すぐ呼び出せるか?」

「一人だけなら。一人はまだ治療室から出られません」

協闘大会は厳密に決められたルールにのつとつて闘うため、一応の安全は保たれているが、法術での緊急治療が必要なほどの大怪我はざらにある。

「一人でいい。呼んでくれ」

「はい」

女性が控えの伝令に指示を終えるのを待ち、青い髪の青年は再び口を開いた。

「それで、こいつは何者なんだ。これだけの腕を持つ奴だ。どこかで見覚えくらいないのか」

女性は目を泳がせた。

「…実は心当たりがあります。団長も、動きに見覚えがあると断言していました」

「その団長様は今どこにいるんだよ」

嫌な予感がして、青年は口の端を曲げた。

「その…先ほど飲み物を買いに行くと言つて出かけてしました」「引き留めろよ。あいつを制御できるの君だけだろ。ユリア副団長」「すみません」

ユリアは目を伏せ、謝罪の礼をした。

「ジエスル、ユリアを咎めるのはやめていただきたい。彼女を咎めていいのはこの私だけですよ」

「ああ、来たか」

ジエスルは男の声を聞いて、先程よりも重いため息をついた。

扉から入ってきたのはやや大柄な体格に公用な分だけ筋肉をつけた男だった。濃い青紫の瞳にやわらかく波打つ淡い紫色の髪をして

いる。

「ユリア、冷えた飲み物を買つてきた。ジェスルも飲みますか？」
そう言つて紫色の男は抱えていたケースを下ろして、瓶を一本取り出し、胸元から呪い捕りのスカーフを取り出してざつと表面を拭くと、ジェスルに差し出した。

「どうぞ」

「相変わらずだな、おまえ」

受け取つたジェスルは空気が抜ける音とともに瓶を開封すると、そのまま口をつけて飲み始めた。

「私は私ですから」

表情を動かさずに男はそう言つて、もう一本瓶を取り出すと今度はポケットから取り出したハンカチで水分を丁寧に拭き取つて、ユリアの手をとり、瓶を持たせた。

「あ、ありがとう」

その言語に満足したようで、紫の髪の男は口元に小さく微笑みを見せ、それから口を開いた。

「ユリア、例の騎士と会話してきた」

眼鏡の奥でユリアの目は瞬いた。

「本ですかエシル。どうでしたか？ やはり彼でしたか？」

「ああ。事情があつて参加しているようだ。だが多くの話してくれなかつた」

「そうでしたか…彼が…」

ユリアは瓶を持ったままうつむき、エシルはいたわるようになに彼女の髪をなでた。

「おいおいお前ら、俺にわかるように説明しろ！」
置いてきぼりにされたジェスルは声を上げた。

協闘大会本戦の、三回戦第一試合がまもなく開始されようとしていた。

毎試合それなりの盛り上がりをみせるが、今回はある出場者が現れる試合はどれも満席となり、立ち見席すら設けられるほどだ。

闘技場内の、闘いの広場へとつながる西門の警備を受け持つ男は震えていた。

日の入らない廊下の先から聞こえてくるのは落ち着いた、静かな足音だった。全身鎧だとは思えないほどに、恐ろしく音が軽い。

そして音は大きくなり、暗影の中から黒い鎧に包まれた戦士が現れる。

見たことのない形状と質感の漆黒の鎧は、中の人物の長身で細身の体を隙間なく覆い、その複雑な形狀は身体の動きを一切殺すことがない事が見ただけでもわかる。いくつものパーツで構成されているが、継ぎ目が巧く隠されており、よく見れば同色の細かな装飾も施されている。

すでに何名もの有力騎士を一瞬でねじ伏せたその実力に、かつて騎士を目指していた男は、恐怖ではなく期待で胸が打ち震えていた。この目の前の存在が、これからどんなものを見せてくれるのかと思うだけで、手に汗をかく。

「がんばれよお」

黒い鎧はその声に特に答える事なく、男の開けた門をぐぐり、日の当る会場へ足を一步踏み出した。

歓声が一気に膨れ上がった。

黒い鎧がゆっくりと闘技場の中央まで歩みを進め、立ち止まると、会場の興奮はさらに増した。客席すべての視線が騎士に降り注いでいる。

興奮の渦に取り囮まれながら、“くろの騎士”は微動だにしない。その威風堂々とした様子に、観客たちはまた熱くなつた。

(「まいったな…」)

“くろの騎士”は、外からはまったく見えなかつたが、闘技場の中心でけつこう動搖していた。

本来はそこそここの所で有力騎士と接戦をして、負けて、本予選か本戦の参加賞どまりで落ち着く予定だつた。まさかここまで自分が動けるとは思つておらず、本人の意図しないまま思わず勝ち進んでしまつたのだ。

こんなにものびのびと自由に体を動かせたことが未だかつてなかつたので、面白くて少し調子に乗つてしまつたのもある。

自立つことは不本意だつたが、状況を報告した際に上から「勝ち進んだからには、ついでに行くところまで行ってじつそり賞金をかっさらってきてちょうどだい！」と、正式なお達し今まで出でしまつた。しかも一緒に参加する予定だつた“やみの騎士”は、「あ、なんか法術で制御入つてますね。これはワタシは遠慮したほうがいいです」と突然言いだし、出場を辞退してしまつたので、彼一人で目的を果たす状況になつてゐる。

だが、優勝は目的ではないし、この先にはより腕のたつ者がいる。加えて言えば、彼の知り合いだつて増えてくるだろう。動けば動くほど、正体に気づかれる可能性が高くなる。

現に、先ほども知つてゐる顔に声をかけられた。自分の素性はともかく、国や目的のことをうまくはぐらかせたかどうか自信がない。「どうしたものか…」

サヴァは外からは見えないヘルムの中で、音にならないため息をついた。

「あんた、緑閑国の『竜槍のサヴァ』だろ？ 国を抜けて、例の騎士団の誘いも蹴つて行方不明と聞いていたが、こんな地の果てみたいなところで何をしてるんだ？」

くわやみ国に海賊の黒堤組がやつて来た際、サヴァはシメオンや国の精霊のベウォルクトと共に海賊達の対応をした。その時に組頭の側近らしき壯年の男からそう話しかけられた。

いきなりで少々驚きつつも、武装もしていないのにじうして自分だと解るのかと尋ねれば、「隠しているつもりでも見えるもんは見えるし、女王があんたの名を呼ぶのも聽こえた。それに竜がえらくなついていたしな」と笑つて言われた。

「俺達と一緒に来ないか？ うちには外見で何かいう奴なんざいないし、竜使いも何人か働いている。金も仕事もたんとあるぜ」

そう言葉をかけられて、サヴァは腕に抱えた箱を持ち直し、言った。

「せつかぐの申し出だが。断らせてもらう」

「どうしてだ？ こんな死んだ土地に何があるんだ？ こんなちつぽけな国だとあんたの力を腐らせるだけだぜ？」

箱の中からはほんのりと料理に使われたらしき香草の香りがした。これを準備するのはかなり大変だったはずなのに、妹のライナは女王と一緒に時折笑顔を見せながら調理室で賑やかに動きまわっていた。

「ijiは居心地が良い。妹も気に入っているし、離れるつもりはない」

「そりが、だがせいぜい気をつけろよ、海にいるのは俺達のよう

にお行儀よい連中だけじゃないからな

海賊達は去り、サヴァアは女王に申し出た。

「俺をこの国の騎士にしてくれませんか?」

王座に座る女王は目を見開いて驚いたあと、口を開いた。

「守り手が増えるのは嬉しいけれど、騎士にするつてどうやつたらいいのかしら」

傍らに声をかけると、くろやみ国^{クロヤミノクニ}の精霊レー・ヘンは首をかしげる。

「さあ…」

「ファームさまが任命すればよいのです。外交的に通用する正式な“騎士”でしたらどこの戦場に乱入するなどして名を挙げるなど、やるこ^{ハシメ}とが増えますか」

もう一名の精霊であるベウォルクトが言つ。

資料庫に駆け込んでいたライナがシメオンと共に戻つて来た。抱えていたデータボードを差し出してくる。

「兄さん、シメオンが見つけてくれたの。昔の特殊な服だつて。これを改良すれば兄さんの龍脈の制御もしやすくなつてもつと強くなるかもつて！」

ボードに表示された画像資料を覗き込んで、レー・ヘンが言つ。
「確かに、これならサヴァアさんに負担がかからず防御にも役立ちそうですね」

「さつそく調整にはいりましょ^ウ。まあ、まずはサヴァアさんの検査を、緻密に、徹底的に」

布で巻かれた顔に覗き込まれるように詰め寄られ、サヴァアは後ずさつた。

「せつかくですから、装備もしつかりしたものを用意しましょ^ウ。
近接戦から遠隔操作、細菌ものまでありますよ

「ベウォルクト、アナタなんだかうきつきしてない？」

ウサギのハーシュと共にボードを眺めていた女王が顔をあげて言った。サヴァアは言った早々不安を感じてきた。

「…あの、使い慣れた形状のものでお願いします」

装備がひとつおり完成すると、あとは調整と動作点検が必要になつた。古い時代のものを再調整したのもあって、かなり徹底的に耐久性を検証する必要が出て來た。国外に出ている戦闘が得意な二人組を呼び戻して耐衝撃実験をする話も出たが、ちょうど大空騎士団の協闘大会が開催される頃だつたとライナが思い出し、ならせつかくだからと参加することになった。

緑閑国にいた頃、サヴァは一度も協闘大会に参加した事が無かつた。それなりに実力があつたので惜しむ声もあり、身近でその様子を見ていたライナは悔しい思いをしていたらしい。サヴァ本人としては自分のような外見の者が代表として國の外に出す事を上層部が許可しないとわかつっていたので、特に出たいと思わなかつたが。

そして名前は女王の発案で、

「くろやみ国の騎士だから“くろの騎士”とか“やみの騎士”なんてどうかしら?」
となつた。

そして今に至る。

今まで経験した事が無いほどの歎声と注目を受け、少々動搖したサヴァはひと呼吸置いて思考を整理すると、自分が立つてゐる場所に集中する事にした。

一気に観客の声は気にならなくなり、目の前に立つ対戦相手の様子を探ることに意識が向かう。

これまで“くろの騎士”的相手は二種類いた。一方はとにかく少しでも健闘しようと力んで周りが見えなくなつてゐる状態、もう一方は闘争意欲を無くしてすっかり怯え、思考が止まつてゐる状態だった。

だが目の前にいる相手はそのどちらでもなかつた。

自分と同等かそれ以上の相手とやり合える喜びで表情は生き生きとしており、目は輝いている。

上位入賞確定の実力を持つた正式な騎士だ。

「貴方はエシル団長とお知り合いなのですね」

腰の両側の鞘から剣を抜き、相手の騎士は言ひ。一本とも装飾のない実践的な剣だ。

「僕は大空騎士団所属のユミシト。お相手できて光榮です、『くろの騎士』」

二人の間に立つ老年の騎士が手に持つた小さなランプに水色の線香を近づける。この線香が燃え尽きるまでが試合時間で、約十分ある。

線香が燃え尽きても勝負がつかなければ、主審の大空騎士団所属の騎士と赤麗国と青嶺国から呼ばれた副審二名によって勝敗が判断される。

試合が早く終われば燃え残った線香は勝者のものになり、次の試合時間を延長する事などに使う事が出来る。これは短時間で戦闘を終わらせる事が出来る者を高く評価するといつ、大空騎士団の考えに基づいているからだと言われている。

線香に火が付き、細い煙が空へと立ち昇つた。

闘技場に併設した建物内の大会運営室には張り出し窓があり、高層階でもないため闘技場の広場を近くで一望出来るため、試合を見

るには特等席だった。

「はじめましたね、『くろの騎士』の試合が」

窓から“くろの騎士”に突き進むコミニットを眺めながら、エシルは傍らで右腕で左腕をかばうようにして立つコリアに言う。

「コミニットが相手なら少しばかり実力がわかるだろう。何せ前回の三位入賞者だ」

ジェスルはそう言うと、窓から視線を外し伝令と共に部屋に入つて来た騎士に声をかけた。

「さてメールト、休んでいる所をすまないが、お前が闘つた“くろの騎士”について教えてくれ」

「は、はい」

メールトという名の騎士はちぢりと上司のエシルとコリアの姿を確認すると、口を開いた。

「自分は本戦の初回に剣で闘いました。相手は何も持つておらず、初め拳闘士かと思ったのですが違うようでした。自分の剣筋の距離を測り損ねている事が何度もあります。素手に慣れていないようでした」「得物があるって事か。それでなんで素手なんだ？」

「自分には解りかねます。ただ…」

メールトの言葉にひと際大きくなつた歎声が重なる。

「なんだ」

ジェスルが闘技場を見ると、コミニットが片膝をついていた。

コミニットは荒い息を整えると立ち上がり、再び“くろの騎士”へと立ち向かう。一本の剣による激しい剣戟を“くろの騎士”は一つ一つ受け、時折小さな動きではじいていく。どの方向から剣が迫つてもすぐに体の向きを変え、すべて黒に包まれた手で対応している。

そうするうちに次第に剣戟を受けるよりもはじく回数が多くなり、ついに片手だけですべて受け止め始める。

「あの騎士は闘う」と学習し、強くなっています」

闘技場から目を離せないでいるジェスルへ向かつてメールトが言

つた。

「自分の時もそうでしたが、コミットの剣ももう効かないでしょう」
コミットが剣を引いた一瞬の間に一步踏み込み、金属の胸当て部分に手刀を叩き込んだ。重い一撃だったようだが、コミットは踏みとどまり、衝撃で足元の地面に亀裂が入る。

だがコミットが体勢を立て直す前に“くろの騎士”は両方の剣の刃を掴むと胸部に蹴りを入れた。

たまらずコミットは剣から手を離して吹っ飛び、倒れる事は無かつたが両膝をついてうずくまつた。

両の膝が地面に触れると負けとなる。

「勝負あり！」

主審の老年の騎士が右手をあげて声をあげ、火消しの粉を線香に振りかけた。

“くろの騎士”は掴んでいたコミットの剣を空中に放り投げ、目の前に落ちて来る瞬間に蹴り飛ばし、それらは持ち主のすぐ前の地面に交差するようにして突き刺さった。

「見事だ。そう思わないか、ユリア」

「…ええ」

ぐるの騎士と闘技場 2（後書き）

もうしばらくサヴァ兄さんのターンは続きます。

24日：勝負判定ルール変更。肩の判定を削りました。

闘技場の入り口前の広場で黒髪の青年が手に持った紙片を睨みで
なにやらつぶやいていた。

「ええっと、焼きマシュマロと飴細工は買つたから、あとは焼きり
ん！」に焼きそばに、串焼き？ 串を焼いたら炭になるのに一体どう
食べるんでしょう？」

整った顔立ちを曇らせ、その哀しみにも似た表情にすれ違う女性
達が心配そうに愛おしげな視線を送るが、青年はまるで気付かず人
ごみの中で手元を見つめ、器用に障害物を避けて歩き続ける。

もう片方の手には広場の屋台で買つた食べ物が油紙に包まれて一
つほど抱えられていた。

「しかしこれでは折角の売り上げが減つてしまつんじゃあつません
か？」

青年は紙片を持った手に止まる黒い小鳥に話しかける。艶のある
尾羽根を持つた黒い小鳥は青年を見上げてピチピチと鳴き、紙片を
くちばしでつつぐ。

「わかりました。わかりましたから。確かにお陰さまで上手くいき
ました。串焼きは鳥肉でいいんですね？」

青年は顔をあげて屋台に視線を巡らせるが、何かに気付くようこ
とで闘技場に足を留める。

「おや？」の術の気配は……」

黒い小鳥はピイと一声鳴くと、青年の手から飛び立つて闘技場を目指してまっすぐ向かつて行つた。

“くろの騎士”とユミニットの試合が終了して次の試合が開始された頃、闘技場裏口の関係者のみが立ち入れる通用門を通る存在がいた。温暖な気候の土地で灰色のショールで髪を覆い、灰色の外套を着ている。裾からは花柄の普段着のようなものが見えているので旅人ではないようだつた。その姿は周囲の目をひき、さらに抱えている身長よりも長さの包みも目立つていた。

大会出場者の関係者に与えられるバッジを持つていたため通はしたが、門にいた衛士の一人は金の象眼細工の腕輪に手を触れ、あらかじめ指示されていた通りの相手へ信号を送つた。

長い包みを抱えた存在は時折通路の途中で立ち止まり、首を傾げ、また歩き出す。何度もそれを繰り返し、ついに目的の場所までたどり着いた。

注目される中で鎧を脱ぐ訳にも行かず、サヴァは控え部屋に戻ると椅子に大人しく腰掛けていた。本人はする事も無いのでそうしていたのだが、じつと動かない姿に勝手に威圧感を感じて怯える者もいた。

さらに先ほどの試合前に大空騎士団の団長に声をかけられていたこともあって、周囲では様々に憶測を飛ばす会話が行われており、時折サヴァの耳にも「あの団長の知り合い…？」、「昔のうちにいた奴とか？」、「あの鎧は一体」などの言葉が漏れ聽こえて来た。

「“くろの騎士”さま？」

場違いなくらいのんびりとした若い女性の声が聞こえ、見ると部屋の入り口に細長い包みを持った女性が立つていた。灰色のショー

ルで顔を隠しているが、“おつかい”が来る事はあらかじめ知っていたサヴァは彼女の方に向かつて歩いて行つた。

「ご入用の品が完成しましたの。お持ちしましたわ」

「ああ、ありがとうございます。…君は」

「ハーシュとお呼び下さいまし」

ショールから覗く瞳をきらめかせてハーシュは言つ。女王と瓜二つの瞳だが、ウサギの毛並みと同じ灰色をしている。

「それと、伝言があります」

彼女は抱えていた灰色の布で覆われた細長いものを差し出して、言つ。

「『壊せるとこひまで壊せ』だそうです」

周囲がざわついた。

ハーシュはようやく声を使つて喋ることが出来るようになつたばかりなので口数は少なく、たどたどしい。

内容としては合つてゐる。だがそれは“くろの騎士”的話だ。試作だから使い勝手や耐久性を確かめるために強者が集うこの大会に参加したのだ。だが控え室にいた人々は違う話だと思い込んだらしく、ハーシュと自分を恐れる目で見ている。

「おい、壊せつて…」

「会場には補強の結界が貼られてるんだろ?」

「死傷者ができるかもしけんな…」

動搖したざわめき声に対応する方法も思いつけず、サヴァは聞かなかつた事にした。

「…屋上に移動しよう」

関係者のみの立ち入り区域なためか、屋上の休憩所は人がおらず閑散としていた。

ハーシュは人目がないとわかるとショールを外し、束ねていた銀髪を手で整えなおした。サヴァの視線に気付くと、俯いて「上手に黒髪に変えられませんでした」と言つた。

サヴァは「そうか」と答えるとハーシュの持つて来た細長い荷物を何度も持ち替えて重さを確認した。

「どうですか?」

「重さもしなりもちようじよさねづだ」

「ベウォルクトが渾身の作だと仰つてましたわ」

「そういえばレーへンはどこに?」

「入り口近くまでは一緒でしたが、結界を避けて外でファムさまのお土産を買っています」

サヴァは銀髪の影靈を見た。彼には精靈と影靈の区別がつかない。どこが違うのだろうか

「あなたは入れるのにか

「わたしは新しい存在なので既存の術では認識出来ないよつですの」
ハーシュは微笑んだ。

“くろの騎士”の試合をハーシュは見学していくことにした。

観客席は人であふれていたので控え室から続く通路の窓からなんとか会場が見える場所を見つけて覗き込んだ。やや遠くからだが場所は一望出来たしサヴァと闘う相手の姿は見えた。

会場からは人々のざわめきが聴こえてくる。

「皆さん一体何を話しているのでしょうか?」

「今までは何も持たずにいた“くろの騎士”が初めて武器らしきものを持つて現れたのです。皆驚いているのですよ」

突然の声に振り向くと、見ると銀色の眼鏡をかけ長い髪を束ねた女性が隣に立っていた。ハーシュは一瞬自分の事に関して何か言われるかと警戒したが、女性が何も言わないのでそのまま試合に目線を戻した。

“くろの騎士”が手に持つていた長い包みの布を取り払つと、中から出て来たのは「槍」だった。

灰色の不思議な淡い光沢をもつ一種類の素材だけで出来ており、

持ち手のある本体部分からなだらかに鈍く光る刃へ繋がっている。

「槍というより、薙刀みたいですね」

同じ方向を見て女性は言う。ハーシェは薙刀を知らないので、帰つたら調べてみようと思った。

「おそらくこれで彼の正体に気付く人が増えるでしょう」「どうしてですか？」

ハーシェは首を傾げる。この女性は彼の事を知っているのだろうか「ある国の騎士団に龍槍と呼ばれる騎士がいました。国外の催しものや外交式典などには姿を現す事がありませんでしたので、知る者しか知らない存在でしたが、彼は槍の名手であり独特の使い方をすることで有名でした」

女性は眼鏡の奥の目を細めて言う。

「はあ……」

「要するに、槍を持つと解りやすくなるのです

「そういうわけですね」

奇しくも相手も槍を持っていた。紺色の髪の男の「突き」に対し「くろの騎士」は「なぎ払う」と応える。三回目で全く同じ瞬間に真正面から刃が突き当たり、男の槍が砕けた。男は残った槍の柄を放り捨てるとき腰の剣を抜いて切り掛かっていった。

「彼は青嶺国^{アオマツノクニ}の騎士団の精銳の一人です」

「だから青い服装ですね」

「今大会では上位三位以内は確実とされています」

“くろの騎士”は槍の刃で剣を受け、そのまま振り抜くと長い柄を回転させてもう一撃、さらに勢いを増して一撃と続けて振り下ろす。男は一撃目を避けたが一撃目は剣で受けると体勢を崩し、距離をとろうと一步後ろへ下がる。

「あなたは“くろの騎士”的関係者ですか」

試合の様子を話す調子のまま、女性は言う。

「ええ」

既に会話をしている姿を人に見られているので、偽る必要は無いと

考えてハーシェは答える。

「ではあなたに恩を売ります」

驚いて顔をあげた瞬間、背後から声がした。

「足止めありがとうございますよ、副団長」

振り向くと、ハーシェは人間の集団に取り囲まれていた。

「すまんが、闇属性の精靈は問答無用で捕獲するよう依頼がでている。あんたが精靈なのか人間なのかいまいちわからんが、とりあえず連行してくれ」

中心に立つ青い髪の男が言った。彼と同じ制服を着た無言の男達に囲まれ、ハーシュは身構えた。

影靈であることを知られてはならないとベウォルクトに言われている。どこかに連れて行かれる訳にはいかない。さらには創造主から受け継いだ記憶から制服を着た男達に殺されかけた事を思い出し、不安を感じて後ずさる。

先ほどまで話しをしていた女性を探すと、こちらの状況を無視して窓の外を眺めていた。

「おっと、逃げないでくれよ」

取り囲んでいた男の一人が素早くハーシュの腕を掴んだ。振りほどこうと腕を振るが、相手の手はびくともしない。

「暴れると拘束するぞ」

「は、離して」

ハーシュが小さく叫んだ瞬間、男とハーシュの間に剣が突き刺さった。

「なにっ」

男が思わず手を離した隙をついて、ハーシュは走った。

「敵襲か！？」

ジエスルが剣が飛んで来た方向を見ると、開いた窓の外、かなり離れた会場の真ん中に小さく立つ“くろの騎士”からだつた。

「牽制のつもりか？　おい、今のは競技違反になるのか？」

「試合中の不慮の事故でしょう。“くろの騎士”も手がすべることがあるようですね」

眼鏡をかけなおし、ユリアは言つ。

「思いつきり狙つてるだろ？　がこれ。かなり深く刺さつてるぞ」

「暴投は暴投ですよ。ちょうど試合の勝敗もついたようです」見れば試合相手の男は会場の端に座り込んで、やはり驚いた顔でこちらを見ている。剣は男の物だつたようだ。

「これで“くろの騎士”は決勝戦まで到達しましたね」

ユリアは穏やかな表情で言つた。

“くろの騎士”がしばしじめらを見つめた後、早足で退場するのを見て、ジエスルは悟つた。

「まずい、あいつも動き出しちゃ」

ジエスルは衛士に撤収の合図を出して移動を開始しながら、隣で涼しい顔をして歩くユリアを睨んだ。

「お前わざとあの女を逃がしたろ」

「私はただ彼に熱い視線を送つただけですよ」

“くろの騎士”が気付くように強い殺氣を込めただろ？　が

「あの女性を追いますか？」

ジエスルの言葉には応えず、ユリアは静かに言つた。この調子になると彼女は融通が利かなくなる。舌打ちしたくなるのをこらえ、ジエスルは思考を切り替えた。

「ああ。手分けして闘技場内を探すぞ。外はいい。別のが待機しているからな」

ハーシュは走りに走つて階段を下り、裏門を目指してさらに走つた。

しかし出口付近にまた数名の人間がいるのを見て立ち止まる。

「どうしましょう…」

どうすべきか迷つていると階段の上からざわめきが聞こえ、見上げると“ぐろの騎士”が降つて来た。

彼は数階分飛び降りたはずなのに柔らかく着地し、ハーシュを見る。

「無事か」

「はい」

「レー・ヘンがすぐ外で待つてゐる。そこまでたどり着けば無事に帰れる」

サヴァの言葉にハーシュは深くうなづき、一人はそのまま外へ向かつて走り出した。ほとんどの人間は驚いて避けてくれたが、立ちふさがろうとする衛士はサヴァが槍で牽制して道を開けてくれた。走りながらハーシュが闇の精霊を探すと、裏門の向こう側で数人の男達と対峙しているようだつた。

「あちらでも問題が起きているようですね」

「よく知つた術の気配がしたので彼が現れたのかと思いましたが、違いましたね」

黒髪の青年は残念そうに言った。

「本人は今すんごく忙しいんでね。俺らが代理で動いてるの。まあ術は正真正銘あの人なんだがね」

真っ白い襟が特徴的な外套を着た男達が青年を取り囲むようにして立つており、その中で代表格らしき男が茶化した調子で言つて。「忙しいなら忙しいなりに余計な事をしないで欲しいのですが」

そう言いながら青年は持つていた食べ物を肩から下げていた布袋に放り込み、両手を空けた。

「そう言つたて。あんただろ、白箔国で皿のついた手紙を運んで、ヴィルヘルムス様を襲つたのつて」

男の言葉を聞いて上空を飛んでいた黒い小鳥が降下して青年を突つつきだした。

「… そうですが、何か？」

小鳥の攻撃をものともせず、青年は答える。

「おまえさんはくろやみ国の者かい？」

「今回は“お忍び”ですので、お答え出来ません」

青年は微笑んだ。

黒い小鳥が一声鳴き、青年が裏門を見ると、ハーシュが飛び出して来る所だった。サヴァは衛士の足止めをして門の内側に残つている。

「おつと、待ちな」

青年に向かつて駆け寄ろうとするハーシュを白襟の外套を着た男が捕らえようとする。状況がよく解らず、困惑っていたハーシュは男と目が合つ。

「あなたは…」

男はずれたショールの間からハーシュの顔を覗き込んだ。

「あの、あなたはどなたですか？」

食いつくよにして顔を覗き込んでくる男に対して、不思議そうにハーシュは言った。

「俺はルトガー。白箔国の者だ。あんた、名前は？」

「私は……」

ハーシュが答える前に、黒い小鳥がルトガーの視界を遮るよつて顔の前に飛び込んで来た。

「なんだ、この鳥は。精靈術か？」

その時、どこからともなく現れた金の小鳥が黒い小鳥を襲つた。

鋭い足の爪で捕まると地面へ押さえ込む。

その隙にハーシュは青年の元まで走つた。

「おつかい”じ苦勞様です」

「はい……」

息を整えながらハーシュは言つ。

押さえ込まれた黒い小鳥は何度か羽ばたき、もがきながら苦しそうに一声鳴く。金の小鳥が強く爪を立てると、そのまま煙のように消えてしまった。

青年の顔が曇つた。

「ずいぶんと乱暴な」

金の小鳥は地面から飛び立つと男の方にとまつた。

「俺の主もだいぶ余裕がなくなつてきてね。ずっと探し人が見つからないもんだから術も荒つぽくなつちまつて」

「探し続ければいい」

冷たい響きを持つ声で青年は言つ。

「だが貴方達が探そつとすればするほど、の方が傷つぐだけですよ」

「ここを出れば闘技場の外だからな。中と違つて術の制限がないからアンタらの拘束くらいうなら訳ないぜ？ それくらいの準備はしてある」

衛士達とともに追つて来た青い髪の男が言つ。

サヴァは強行突破するために身構えようとしたが、背後から威圧感を感じ、振り返つた。

「そいつらを逃がせ」

声を発したのは獸のよう荒々しい紅の髪をした大男だった。乱れに乱れた髪で目元はおろか顔つきまで隠れて見えないが、赤を基調とした風格のある服装から赤麗国の身分ある人物なのだと判断出来る。赤麗国軍の紋章が入つてるので、おそらく軍籍で騎士なのだろう。だが男の言葉に衛士達が動かないでの、サヴァは警戒体勢を解かずに状況をうかがつた。

「聞こえなかつたのか。そいつらを見逃せと言つていい」

「将軍。一応この場では指揮権は大空騎士団にあります。どいてくれませんか」

「エシル団長」

紅の髪の大男の隣にはサヴァも見知つた大空騎士団長がいた。

「という訳なので、全衛士に通達を。彼らを追つな」

「おいエシル！ どういうつもりだ！」

青い髪の青年が驚いて叫ぶ。

「もう一度言うがこの場では大空騎士団が全ての判断を下します。つまり私がルール」

長い両腕をゆつたりとひろげ、良く通る声を響かせ、堂々とHシリ団長が言つた。

「白箔の依頼だらうがなんだらうが知らねえ。決勝で俺の相手が消えるのが一番困る」

赤よりも濃く鮮やかな紅色をした髪を振り、大男は言つ。

「まさか…あんた赤麗国の紅濫将軍か？ 前回優勝者の」

目を見開いて青い髪の青年は言つ。

「おう、青嶺の坊主か。お前とは初めて会うな。親父殿は元気にしているか？」

紅濫将軍は乱れた髪で表情はよく見えないが笑つてゐるようだ。

「普段は所属先の意向に縛られる我々騎士が、心置きなく闘える場を設けるというのがこの大会のそもそもその主旨。つまり、この場で一番優先されるのは協闘大会の決勝の遂行。このまま“くろの騎士”を捕らえ決勝が無くなってしまえば、今大会に参加した全ての騎士だけでなく、最愛のコリアからも恨まれてしまつ」

苦悩の表情でエシル団長は言つ。

「お前はいつだって副団長命なんだな」

「ええもちろん」

青年から投げかけられた呆れ氣味の言葉にエシル団長は力強い領きで返した。

「それに、不完全燃焼は健康に良くありません」

「不完全燃焼はまずいよな。思わず手当たり次第に殺したくなるもんな」

エシル団長の言葉に腕組みをしてうんうんと頷く紅濫将軍に、周囲の一般衛士たちは一步距離を置いた。

「という訳で、そこのお一人、どうぞ逃げてください」「では遠慮なく」

黒髪の青年はエシル団長の言葉に応じて素早くハーシュを抱える。彼らを取り囲んでいた衛士達はいつの間にか昏倒していた。

青年は田線だけでサヴァに挨拶をすると、搔き消えるようにしていなくなつた。

エシル団長は倒れた一人の元へ行き、首筋に触れた。脈はあり、死んではおらず外傷も無く、ただ意識が無い状態だった。

「流石ですね。良い仕事だ。特級あたりでしょうか」

サヴァはこの隙に自分も去ろうかと考えていたが、エシル団長が周囲の衛士に指示を出しながらもこちらの動向を探っているので下手に動けずに入った。

「おい、『くろの騎士』」

思いがけず傍で声をかけられ、見上げると紅濫將軍が紅色の髪の隙間から、橙色の瞳で見つめてきていた。

「お前は俺と鬪え。それでこの貸し借りは無しだ」

サヴァは相手の言葉につなづくと、兜の顎に軽く指をかけて通信機能を立ち上げた。

「聴こえるか？　俺は後から戻る

『わかりました。闘技場、さらに包囲されていますから帰りは気をつけ下さいね』

連絡を待つていたらしく間髪入れず精靈からの返事があつた。

「ああ。なんとかしてみる」

『それとくればぐれも設置した転移門の場所を悟られないようにしてください。バレスこうでしたら破壊して構いません。それではくろやみ国でお待ちしています』

「ほんと騎士つてのは、どこの奴も我が道を突き進んでるよな…」

運営室の椅子に力なく座り、ジェスルはつぶやいた。

「我々大空が決定権を持つのは大会終了時まで。その後はまた各国の意見に従いますよ」

エシル団長が腕を組んで壁にもたれ掛かりながら言った。

「わかったよ。あーあ、この結果、あいつにどう報告すりや良いんだ

青い髪をかき乱すジェスルに、ルトガーが申し訳なさそうに近づく。

「色々すんませんね」

「気にするな。お前はこのまま赤麗国に向かって例の銀髪の二人組を追え。こっちの報告は俺がヴィルヘルムスに届けておく」

「お手数かけます。ジェスル王子」

「いいさ。あいつには今まで山のよろこび借りを作ってるしな。友人のよしみつてやつだ」

青嶺国のジェスル王子はそう言い、伸びをした。

「さあて、決勝が終われば“くろの騎士”的確保だ。今度こそ逃がすなよ！」

紅濫将軍は主審に手元に残った線香の全てを使う事を宣言した。

「この線香は残せば残すほど賞金が増えるらしいが、俺は存分にこの闘いを楽しみたい。まあ金と比べて望んだ相手と闘える時間を惜しむなんざ、騎士としちゃあとんだ笑われ者になるだろうがな」

サヴァも残った線香全てを使用する事を主審に告げる。これでさ

らに闘える時間が増えた。この鎧が持つかどうか解らないが、出場目的は達成出来そうだった。

精靈達がくろやみ国にたどり着くまでの時間稼ぎにもなるだろう。決勝が終了すればまた追っ手が動き出すに違いない。

「『竜槍』はこの世で闘いたいが叶いそうにない相手の一人だつた。他の二人は運當だのなんだので今回は出られないと言いやがつたが、こうして叶わなかつた相手と勝負出来るなら、わざわざ遠出して参加したかいがあつたわけだ」

「大陸に名を轟かせる武人にそう言われるとは、光栄だ」

サヴァアは槍を軽く振つて握り具合を確認すると、わずかに腰を落として構えた。

紅濫將軍は笑い、駆けた。

くろの騎士と闘技場 5（後書き）

この続きは兄さんメインのため番外編ページの「くろの騎士の脱出劇 - 決勝 -」にあります。
次回からまたファムさんのパートです。

ハーシュとレーへンが闘技場のある街から転移門を使って帰つて来たのは夕方になる前で、ハーシュは疲れたらしくてウサギの姿でレーへんに抱えられていた。

けれど王の間でレーへンがひと通りの報告をして、聞に回復して、初めてのおつかいの体験談を聞かせてくれた。

「ちゃんと外の方達とお話できました。しっかりとおつかい任務も果たせましたわ」

「ワタシだつて、ちゃんと屋台のお土産を買つてきましたよ

どうして生まれたての子と張り合つてよーへん…。

精霊と影霊の話を聞いて、いつひに口が暮れて、ようやくサヴァとゲオルギが帰つて來た。

「ただいま戻りました」

「お疲れ様、サヴァ」

試作の黒い鎧は見事に大破していく、パーティはかるうじて繋がっているけれど、もう機能はしていないみたい。ゲオルギから降りる時にも細かな破片がぽろぼろと落ちていた。

「大陸の騎士達つて強いのね…」

「その、大会中は右肩と右腕の亀裂以外はそう破損していないのですが、脱出時にやつかいな人物とやりあつて、その時にだいぶやられました」

サヴァは疲れた様子でそう言い、レーへんに手伝つてもらいながら崩れかけた鎧を脱ぐ。

槍を見てみると、こちらは細かな傷が入つてゐるだけだった。

「こつちはそんなにひどい事にはなっていないみたいね」

「修理は必要ないかもしませんが、今回のデータからさらにサヴァさんに使いやすいものに改良することができます」

ベウォルクトが槍を灰色の布で包みながら言つ。

「兄さん！ 目が…！」

ライナの驚く声にサヴァ達の方を見ると、兄の顔をライナが両頬を掴んで覗き込んでいた。サヴァアは律儀に背を屈めてライナにされるがままになつてゐる。

「どうしたの？」

見ると、サヴァアの右目が竜のような縦線の瞳孔になつており、数回瞬きをすると両目とも人間のものになつた。瞳の色は前より少々明るい緑色になつてゐる。

「サヴァ兄ちゃん、身体大丈夫？」

シメオンがサヴァアの腕を持ちあげて傷がないか調べる。

「なんともないな。むしろ、以前よりも身体が軽く調子が良いくらいだ」

「鎧で身体を覆つてゐる間に命脈と竜脈の混ざり具合が調整できたようですね」

「確かに、腕の模様も左右対称になつてゐる気がする」

レーへンの言葉にあまり自覚がないのか、シメオンに身体を調べられながらサヴァアは答えた。

黒いアンダースーツだけになつたサヴァアがシャワーを浴びに行き、ベウォルクトがついでに体調を調べるついて行つた。残つたライナとシメオンが外された鎧の破片を拾つて何段もの浅い箱に丁寧に並べてゐる。

「ゲオルギも慣れない身体でよく頑張ったわね」

全速力で飛び続けたのでまだ荒い息をしているゲオルギの黒い肌を撫でて労る。元々灰色がかつた緑色をしていたゲオルギの身体は、

くろやみ国にいるうちに黒くなってしまった。この国の氣脈、とうよりも王の間で私が瘴氣から変換した氣脈を吸収しちゃつたらしい。

竜の個体判別は色と尻尾の形を元に行ひりこいから、これでもう元々どこの国に所属していた竜なのか判別できないそつよ。そのおかげで今回ゲオルギもサヴァについて他国へ出かけることができた。

「竜つて本当に不思議なのね…」

「竜脈の性質がそういう変質的なものなんですよ」

ゲオルギのために水氣のある瓜を持ってきたレーへンが言った。

黒のシャツとゆつたりとした灰色のズボンに着替えてきたサヴァを囲んで、活躍の話をみんなでレーへンのお土産の屋台の食べ物を食べながら聞くことにした。

サヴァのかなりざつくりした話し方に加えて、時々レーへンとハーシュが詳しい説明を加えたり、合いの手を入れる。各国の騎士を打ち倒してサヴァが大会を勝ち進んでいく様子をライナは目を輝かせて聴いていた。

「兄さんがちゃんと強いつて証明できて、嬉しい」

「あの大会は法術も精霊術も使えないから、俺に有利だつただけだ。実戦ではどうなるかわからないぞ」

ライナの隣に座るサヴァはそう言つて、妹の頭を手のひらで軽く撫でた。

「それで、すみません女王。脱出に全力をかけたので賞金は…」

「そうなの…」

「ファームさま、賞金は持つて帰れませんでしたが、前日に出店で稼いだ分があります。元気を出して下さい。はい、暖め直した焼きマシュマロですよ」

「うん…そうね」

微笑むレーへンからピンク色の焼きマシュマロを受け取つてほおばる。手のひら大のビスケットに挟まれたところが甘いマシュマロは、いつもは大好きなんだけれど、今はあんまり美味しい感じないわ…

「レーへンさん、ファムさまはお金で落ち込んでるんじゃないんです。鳥の精霊が消されてからなんです」

解説ありがとうライナ。そのとおりよ

闘技場周辺で市場が開かれていると聞いて、うちの果物の中でも大陸で良く見かけるものと、作り置きのドライフルーツを竜のゲオルギに運んでもらつて売ることにした。でも無口なサヴァとすっとぼけたレーへンだけで売るのはどうにも心配だったので、精霊術が出来るシメオンに作つてもらつた黒い小鳥型の人工精霊に、影霊の要領で私と繋がる簡単な連絡機能をつけて、レーへン達に連れて行ってもらつた事にした。

おかげで露天商で果物を売る際に、私の花屋の経験から色々アドバイス出来たのだけれど…黒い小鳥は結局ハーシュが捕まりそうになつた時の騒動で金の小鳥に消されちゃつたのよね…。

金の小鳥。

あれ、ヴィルの人工精霊だわ。よく私との連絡用に手紙を運んでくれたから良く覚えているもの。

「攻撃されるなんて…何か行き違いでも起きているのかしら…」

レーへンが以前ヴィルと戦闘になつた時も、防戦だけかと思ったらこちらからもかなり攻撃したつて言つし（これについてはさつきたつぱりレーへんを叱つた）、もしかしてうちの国つてヴィルに敵認定されてるのかも…。

「ううう、どうしよう

泣き出したい気持ちになりながら泣つたるいマシュマロをもうひとくち食べる。

「ファムさま、元気を出してください」

心配そうな顔でライナが私のグラスに冷やしたザクロジュースを注いでくれた。

「うん、ありがとうライナ」

「ファームさま」

「なあに、ベウォルクト」

サヴァアの鎧を運び終えたベウォルクトが王の間に戻ってきて、ゆっくりとした足取りで私に近づいてきた。

「先日コトヒトが運んで来た回覧板の内容についてお話をしたいのですが」

「ああ、国家ランディングの話ですね。ようやく完成しましたか」

レーへンが納得した顔で言ひ。

「國家？ ランキング？」

「一体どんな話なのかしら。

「何名かの精靈達で趣味の一環として作っているものですが、国家の様々な項目でランディングを作っているんです。回覧板でデータを収集して、先日そちらの最新版が完成しました」

「それって、うちには載っていないんじゃないの？」

何しろ建国したばかりだし、国民も十名くらいしかいないもの。ちゃんとした国家扱いさえしてもらえるのか怪しいものだわ。

「いえ、制作員の中にワタクシもいますので、最新情報が反映されています」

レーへンがベウォルクトが説明を始めるのに合わせて王の間の空間に沢山の画像を映し出す。様々な項目の元に、国の名前が並んでいる。

「子供の平均寿命に睡眠時間に男女の人口比、平均的な親指の長さに、赤ちゃんの平均昼寝時間…？ ずいぶん色々あるのね。なにこれ、夕食の献立に悩んでいる時間？」これ本当に測ったの？」

「まあ各国の精靈が好きに調べているものなので、項目内容はかな

りバラバラなんですよ。大まかな内容のものや細かいのものを合わせると一万項目くらいあります」

今回自分は参加していないと言つレーへンが指先で空中に浮かぶ画面を整理して、いくつかの画面を前面に出した。

「それで、我がくろやみ国なのですが、技術力の総合と開発力が圧倒的にトップでした」

「な…げほっ！」

さらりとベウォルトが言つものだから思わずマシュマロを吹いちやつた。気管支にビスケットの破片が入つて咳が止まらないわ！

「みやこと準備 1（後書き）

23日、前半部分リライトしました。

6月26日、露天商で売る～のあたりの話を番外編「銀色の精霊、商売する」に載せました。

「わが国は最下位や、情報無しで順位外の項目もかなり多いのです
が、技術力の項目は、総合だけでなく細かく分類した項目でも八割
以上の項目で上位三位以内になっています。ちなみに誕生したばかりの国がトップを飾るというのはかなり珍しいことです」

ベウォルクトが技術力の項目の画面を表示してくれた。
確かに画面中央の大きな三角形の一番上に「うちの国の名前が大陸
共通語で書かれているわ」

「う、うちの技術力ってそんなに凄いものなの？」
咳き込んで涙目になりながら尋ねると、レーへンが水の入ったコ
ップを差し出しながら答えてくれた。

「ワタシは五百年間あちこちの国をうろつきましたが、この国、特
に城にあるほとんどものはもうよそでは存在していないようでした」

レーへンの言葉に驚く。

「え、そうなの？ てっきり青嶺国みたいな大国では普通にあるも
のかと思っていたわ」

周囲を見渡すと、シメオンが口を開いた。

「僕、青峰國の王立学院の入試用に大陸の技術について勉強をした
ことがあるけど、くわやみ国システムは全く知らないものばかり
です」

「確かに、鎧もある檜もいまだに素材も造りもよくわからないな
「私は入院が多くつたからあんまり世の中のこと知らないです…あ、
でもあの植物園は凄いと思います！」

「この国で生まれてまだ数ヶ月しか経つてないハーシュは何が何だ
かわからないって顔をしているわ。」

「確かに、建物の中や地下を走る鉄道なんて聞いた事無かつたわ」

「説明してちょうだい、ベウォルクト。この国にまだついてこんなに珍しいものが多いの？」

「…以前にも簡単に説明しましたが、改めてお話しをいたしましょう。私の言葉にベウォルクトは椅子に座り、みんなに説明してくれた。「我が國にあるものは大昔にはどの国でもありふれたものでした。ですが過去に発生した大規模戦争での破壊行為で、暗病国以外の大國は崩壊したため、新たな国が育つていくに連れて別の文化が生まれていったようです」

「確かに、私よりもマルハーレータ達の方がこの国の道具を上手に使っていたわね」

「ここ数百年は法術や精霊術が発達して日常生活に使われるようになっています。そのせいで黒堤組のように、かつての物は残っていても製造方法や改良については知らないといったことが多々あります」

「技術力はわかつたけれど、開発力って、うちは新しい物なんて作つてないわよ？」

「物というよりは技術のことですね。ライナさんを助けた際の、王の間のシステムと人体を経由して治療をするという発想が画期的として、新しい治療法開発として高く評価されました」

「私の時の？」

ライナが驚いた表情で自分を指差す。

「ええ、あれは我々でも全く思いもよらなかつた王の間の使い方なのです。ちなみにこの件では精霊の研究団体から問い合わせがきます。なんでも、賞を贈りたいとかで」

レーへンの言葉にあの時の事を思い返してみるけれど、無我夢中だったからあまりよく覚えていないわ。

「そ、そう、なんだかよく分からぬけど、凄いことだつたのね、あれ。… その、ちなみに、白箔国はどうなの？」

「あの国は貿易、文化事業、法術学、新規開拓などでトップですね。

精霊研究も上位にきています」

レー・ヘンがまた別の画像の内容を読み上げてくれる。

「ふうん」

頑張っているのね、ヴィル

「ねえ、そのランギング情報って一般に公開されるの？」

「いいえ、これは精霊が自分たちの楽しみとして作っている物ですから基本的に公開はされません。ですが尋ねられれば開示しますし、精霊の個別の判断でこうして仕えている国には知らせることもあります。… おそらく精霊が国家に関わっている国の上層部には公開されているでしょう。比較した情報しかないんで、それぞれの具体的な数値はわからないようになっていますが」

楽しみで一万項目も情報調べるって、何が面白いのかしら…？

「それって、なんだか嫌な予感がするわね…」

「お察しの通り、今回いきなり無名のわが国が技術力総合トップに現れたためか、急遽上位になつた国で会合を開きたいとの通知が青嶺国の特級精霊経由で届いています」

ベウオルクトが頷いて言つた。

「ぐるやみ国は欠席するわよ

私はきつぱりと宣言した。

「おや、どうしてですか？」

驚いた顔をしてレー・ヘンが言つ。

「だって、我まだ海賊としか渡り合つたことのない元一般市民よ？
なのにいきなり大国の王様達と渡り合えっていうのは無理がある

わ

それに、ヴィルのこともある。また攻撃されたらもう今度こそ本当に立ち直れなくなっちゃう。もうちょっと状況を調べて、私の気持ちも落ち着いてからこしたいといこうだわ。

「白箔国の人が来るとは限りませんよ。誰かしらが来た場合は故郷の話などできるのでは?」

白箔国から私を連れだした張本人のレー・ヘンが言つ。

「それならもつと行きたくないわ。私あの国の貴族に殺されるとこりだつたのよ」

「酒造と飲食店数、一人当たりの食費一位の赤麗国が来るので、お酒や料理もきっと豪華ですよ」

今度はベウォルクトが言つ。

「ぐつ…なんでアナタたち、そう勧めてくるのよ!」

「実はこの集まりに各国の特級精霊達の会合も便乗しようかという話になつていまして、くろやみ国が会場設営の担当になつてているのです」

「マイシラは…

「ちよつと、そこ並びなさい」

きょとんとした顔で王座の前に並んだレー・ヘンとベウォルクトの額に、私は思いつきり手刀を叩き込んだ。

「何勝手に決めてんの! 誰が王様やつてると思つてんのよ! ああもう、すつじく手が痛いわ!

「あのつ…

精霊たちに説教していると、サヴァが申し訳なさそうな顔で近づいて來た。

まさか…

「すまみません…できれば俺からも出て欲しいんです。青嶺国の人一言だけでも挨拶を」

「おねがい、ファムさま。私たちここに来る前に青嶺国の人様に命

を助けられたんです」

「確かにシメオンの処刑やゲオルギの捜索がされていないのも…」

「青嶺国の措置ですね。ゲオルギの件は憶測ですが」

ベウォルクトが答え、シメオンが頷く。

みんなが私を見る。

「大丈夫です。ファムさまは我々が全力で守ります」
レーへンが言い、ベウォルクトやライナ達が頷く。個人の気持ち
がどうこうと言つてられないのね…

「…もう！ わかったわよ！ 行くわよ！」
仁義と、すつとこどつこい精靈達のためにね！
みんな、手伝つてよね！

へりやみ国と準備 2（後書き）

例によってあとがき的なものは活動報告にて

なお月曜日に前話を半分以上書きなおしています。
セリフと描写が増えている程度ですが

9月26日・誤字修正

会議しています。

「会合場所はくろやみ国と青嶺国の首都から地図上で正二角形に位置する海上になります。このあたりは海流が安定しているので、会場施設と、宿泊施設を浮かべる計画になっています」

「家の乗った筏みたいなものね。わかつたわ。内装の雰囲気は旅行先のちょっとと豪華な宿つて感じでいきましょう。快適で、居心地の良いものにしてちょうどいい。途中途中で確認したいから報告してね」「かしこまりました」

「これって誰が取りまとめ役に報告しなくちゃいけないんじやない？」

「ええ。今回発案元の青嶺国が調整役も引き受けてくれていますので、そちらに事前資料を提供せねばなりません」

「それっていつ頃までにするのか聞いてている？ 連絡手段とかは？」
「青嶺国の特級精霊から使者が送られて来る予定なので、その際に渡すことになっています。正確な時期は分かりませんが、おそらく一ヶ月ほどになるでしょう」

「わかつたわ」

私は自分のノートを作った予定表に書き込んだ。

「まつたく、やる」とが山積みね

王の間は現在対策会議室になっているわ。

王座の前に創られた寝台ほどの広さの真っ黒な机の上には、広げられるだけ広げたメモの山と大量の資料が積み上げられている。それらを前にすると思わずため息が出てしまった。

国として他国との会合に出るのに何が必要なのか、考えられるだけ考えついたものを整理して、とにかく一つ一つ決定したり、作つたりしている。みんなで作業を分担しているけれど、とにかく私が判断して、どうするか決めないと始まらない。毎日脳みそがフル回転しているわ。

「すべて必要なことですよ。そもそもが今まで国として対外的なことを何も決めていなかつた状態だったのです」

王の間の空中に無数に浮かんでいる、先程まで話し合っていた内容に関係した情報画面を整理しながらベウォルクトが言う。

「もう、アナタだつて今まで何も言ってこなかつたじゃない。それに政治とか経済の仕組みなんて白箱国の市民学校ではたいして勉強しなかつたから、思いつきもしなかつたし。仕方ないわよねえ、ブルムちゃん」

そう言いながら私は傍らのクッショーンの上に置かれた銀色のかたまりを撫でる。表面は鏡のようになつてしまつとしていて、触るとほんのり温かくてとても心地良い。

「卵に尋ねても何も答えられませんよファームさま」
床に落ちていたメモを拾い上げながらレーべンが苦笑する。笑顔のバリエーションが増えてきたわね。

「でも中では聽こえているかもしねないじゃない。いいのよ、ほとんど独り言なんだから」

イライラの解消にさらに卵の表面をすべすべと撫でる。

ブルムちゃんは先日創った影霊で、核をライナとシメオンが資料庫から見つけてくれた竜の卵の化石にしたためか、未だに孵る様子がない。

王の間が調べてくれたところによると女の子らしいので、レース飾りのついたピンク色のクッショーンの上に乗せていつも側において撫でている。鳥の卵のように暖める必要はないらしいわ。

「古代の竜って、どういった子なのかしら? ゲオルギヤライナ達

と仲良くして欲しいわね」

「お待たせしました、女王」

冷たいお茶とオレンジとレモンの蒸しケーキで休憩をしていると、サヴァアが王の間にやつてきた。

「お疲れさま、サヴァア。慌ただしい時に呼び出して『めんなさいね。新しい鎧は順調?』

サヴァアの鎧は修理できないくらい壊れちゃつたらしくて、新しい物を一から作っている。色々時間がかかるつているみたい。

「ひとつおり完成しました。これから耐久試験です」

「今回は法術への耐久性も付加していますので、調整にはもう少しかかりそうです」

サヴァアの言葉に、ベウォルクトが補足してくれた。

「あなたを呼んだのは意見を聞かせて欲しいからな」

ハーシェがサヴァアの分のお茶を用意してくれる横で、私は机の上に並べた色とりどりの記憶ブロックの中からキラキラ細かい粒子が光るものと真っ黒いものを手に取る。

「俺もあまり国交関係について詳しくないのですが、分かる範囲でお答えします」

「ありがとう。助かるわ」

手に取った記憶ブロックのうち黒い方を机の真ん中に空いた穴にはめ込むと、このあいだ黒堤組から得た諸外国の情報が空間に表示される。

海賊がくれた黒い箱を開けるとこの記憶ブロックが詰まつていて、レンガくらいの大きさからサイロのような小さいものまで様々で、初めて見た時は子供用の玩具かと思っちゃったわ。ちなみに精霊はこの記憶ブロックに触らなくても中身を知る事が出来るらしい。

キラキラしている方を同じように六にはめ込むと、今度は精霊達が趣味で作ったランディングが同じように表示された。王の間経由で操作して、くろやみ国の名前が載っている部分だけを抜粋して、机の上に引っ張つてくる。

サヴァアは表情を変えなかつたけれど瞬きをして、書類やメモの上に浮かぶ画面を見て、それから私の方を見た。

「何度も見ていますが、不思議な仕組みですね」

「私はもう慣れちゃつたわ。原理は、さっぱり分からぬけど」

「お望みならば何度でもご説明いたしますよ」

それは今度お願ひするわ、ベウォルクト。

「他の国はこのランキングを見て私たちの国をどう思つたかしら？」「いきなり現れた謎の国といつたところでしょうか。しかも高い技術力がある」

サヴァアが腕を組んで言った。

「警戒するとと思う？」

「ええ。そして利用しようつと考へるでしょう」

「やつぱり、今度の会合で注意すべきは人間よね。各國の頭脳が集まるもの。頭も切れるし立ち回りもうまいわ。ねえサヴァア、あなた交渉じつて得意？」

「いえ、まつたく…」

私とサヴァア、この国の年長者が一人して暗い表情になる。

「私も花屋の時のような街の人達との駆け引きくらいならできるけど…国の代表となると難しい所だわ」

平民だった私に、騎士で口数の少ないサヴァア、まだ子供のシメオンに同じく子供でずっと病氣だったライナ。精霊と影霊はおいといて、私たちは彼らに対して話術も交渉力も及ばない。

ましてや腹の探り合いなんてできるわけがない。

弱い立場だと思われてしまうと、うまく丸め込まれてしまつて、気がつかないうちに属国にされたり、一方的に搾取されてしまつとも有りうる。

「私たちはまだ国同士の交易なんてできないわ。交易するにしてもこちら側がちゃんと有利に交渉できる要素が思いあたらないもの。精靈のランキングで他国より評価されたといつても、うちの技術は外に出すにはまだ不安があるし、私だって人に仕組みを聞かれてもまったく答えられないものが多いし」

黒堤組との交渉は彼らの持つていた技術の延長のものだったから、相手にとって価値があつたけれど、法術や精靈術が主流の今の時代だと、どの技術がどう価値があるのかまだわからない。

「ライナを治療した方法だつて、画期的だけれどこの部屋のシステムを使わないと出来ないわ」

「問題は世界の中でこれからこの国の立ち位置をどう作つて行くかね。正直、小さい小さい国だし、そつとしておいて欲しいところだけれど」

頭が疲れて來たのでお茶にスライスしたレモンを入れて飲む。きりつとした酸っぱさに気分がすつきりするわ。

「ですが、いざれこいつた状況になる事は避けられなかつたでしょう。ワタシとしては、この国の外交活動の初回が人間のみの会合になるよりは我々が介入出来る今回の方が安心出来ます」

レーへンが言う。

「俺も、今は他国に内部を知られていない分、様子見よりも少々前に出てみた方がいい時期だと思います」
サヴァアが言った。

私は腕を組んで、肘をついて、それから高い高い王の間の天井を見つめて、窓の外の曇り空に目を移して、そしてお茶を飲み干した。

「いい」と思いついたわ

「今の所、この国は外に知られている情報が少ないから怪しまれているに違いないと思うの。だから、いつそ初めから怪しい謎の国つてことを利用するわ。やつてくるのは、精霊と、人間の大天使と、その護衛」

「この国には大使がいませんが」

レーへンが首を傾げる。

「私がやるのよ。ただの使者だつたらそこまで身分が高くないから、おそれおおくて各国の偉い人と会えませんって言えるでしょ？」「はあ」

レーへんがさらに首を傾げる。身分の話は理解しにくそうね、アナタ。

「最低限会う必要があるのは…今のところ青嶺国のトップだけよね。長く喋るとボロが出しちゃいそうだから、もし国の紹介みたいな物が必要になるのなら書類みたいなものにして配りましょう」

その方が権力や汚い狸オヤジ達と触れなくて済むわ。はっきり言って彼らとやりあつて話術で勝てる見込みは無い。

黒堤組との時だつて、私、腹をたててひつぱたいちゃつたし

「白箔国はどうします？」

「…国の代表に誰が来るのか、行つてみないと分からぬのよね。

今のところ国同士では関わりがないし、面会の予定はなくていいわ」

今、女王としてヴィルと会つても、私は彼とどう会話すれば良いのかまったく分からぬ。この間の鳥の精霊の事もあるから、敵視されているかもしれないと思うと恐くて、当分会いたくないのが正直な気持ちだわ。

もし違う人が来たら私を狙つた貴族について知りたいけれど、他

所の国の者がいきなり国の貴族（しかも裏で犯罪めいた事をしている狸オヤジ）について尋ねるなんて変よね…。

「あとの面談は… うね、各国の精霊たちとしますか」「どうして精霊と？」

「精霊が出てくるなら貴方達が同席できるでしょう。それに私、精霊相手なら喧嘩になつても勝てる自信があるの」腰に手を当てて宣言する私を見て、

「ええと、なんですか？」
サヴァアが精霊達に確認する。

「…」

納得したくないけど反論もできないみたいね。

「各国への土産物は何にしますか?」

「そういうしたものも必要なの? うちに土産になるようなものなんてないわよ。アナタ達精靈が喜びそうなものを選んでちょうだい。いつそその方が世間ズレしてるみたいでいいわ」

そう言つたら、何故か城の外に生えていた枯れた雑草の標本になつた。謎の感性だわ……

「あと重要なのは、衣装ね」

女王ではなくて、大使っぽく見える、あまり派手ではないものがいいわね。

私は感情が顔に出やすいから、表情はメイクで隠しましょ!。

各国の上流階級の女性の服や髪型、メイクを研究しなければ!

全身綺麗ずくめになつて、各国の権力者と渡り合うわよ!

「服も身だしなみも問題ありませんよ、ファムさま」

私が黒堤組からもらつた資料を漁つてみると、一軒が爽やかに言つてきた。

「どうこうとかしちゃ?」

「ファムさまの服は既に我々で用意してあります」

ライナから資料を受け取りながらいつも落ち着いた調子でベウオルクトが言つ。

「……嫌な予感しかしないのだけど

特に、初対面でぼろぼろの外套を着ていたレーへンに言われると、不安しかないわ。

案内されたのは衣装部屋ではなかつた。円形に湾曲した壁全体がぼんやりと光る灰色の空間。その中央に、漆黒の衣装が用意されていた。ちょうど人が着ているよつた形で宙に浮かんでいる。

「なんのよこれは」

そう、全部まつくる。頭頂部から足先まで。

「これって私の衣装なの？」

腕を組んで睨みながら尋ねると、ベウォルクトが深く頷いた。

「はい。実は検査した結果、ファームさまの身体はいまだ万全ではないようです。さらに余命に参加する時期は影靈を創った直後あたり、とりわけ周囲から氣脈を吸収しやすい頃ですので、万一に備えております」

「最終調整がまだですが、ビーツを着てみてください。せつと似合いますよ」

そう言つとレー・ヘンは衣装を手渡してきて、ビニからともなく現れたカーテンで部屋の一部を仕切つた。

着替えは見てはならないといつ私の教えにちゃんと従つてくれているのね。

仕方ないから黒い衣装を手にとつてよくみると、それぞれのパーティは違う生地で出来ていて、表面の色合いや光沢も微妙に差がある。

「凝つた作りをしているのね… 手触りもすごく良いし…」

とりあえず着てみてることにして、ブーツとタイツとが一体になつたようなものを履き、床すれすれまで丈のある袖なしワンドピースを着る。

それから手袋と袖が一緒になつた前開きの上着を着て、手首の金具を留めて、これまたひたすら丈の長い、細身のベストを羽織る。

これには細かいリボンがところどころに編み込まれていて、不思議な模様が肩周りから胸元をたどり、膝下辺りまで続いている。

「着てみたわよ」

そう言つてカーテンを開くと、いつの間にかレー・ヘン達だけでなくライナやシメオン、ハーシュも待ち構えていた。

「すごく素敵です。ファムさま」

「ありがとう、ライナ」

「襟元はきちんと閉めていてくださいね」

そう言つとレー・ヘンはベストの襟から胸元のボタンを留めた。これで顎から下の肌は全部隠れてしまつたわね。

「なかなか悪くない着心地ね。締め付けもないし。このリボンの刺繡も可愛いわ」

「これは特殊な織り方で作つたものでして、この国の大使の証であるとともに他の精靈達が見ればファムさまの身体の説明にもなります。取り扱い説明のような物ですね」

なんだか珍獣扱いね…

「最後にこちらを」

そう言つてベウォルクトが黒い花環のような帽子を頭に乗せてきた。すると霧のようなものが降りてきてヴェールのように全身を覆う。

ヴェールは触ろうとするともやつとしていて、触れている感覚がない。重さもない。

私が歩くと床に触れているあたりのヴェールが砕け、花びらのようにふわりと舞い散り空氣中に溶けて消える。けれどヴェール自体は減る事がない。

「すごいわね、これ。一体どうなつているの?」

鏡で見ると見事に黒に覆われた姿だった。このヴェールは内側からは透けて見えるけれど、外からは見えないようになつていていたいね。マイクも髪型も、さらには体型すらも全くわからない。

「そのヴェールの性質は王の間に使われているものと同じもので、常時空氣中から生成され、また空氣中に還元される循環素材です。それによつてファムさまの全身とその周りの空間を常に安全に保つ

ているのです

「仕組みは全くわからないけれど、とにかくこれに包まれていれば私の身体はおかしくならないといつことね」

「そうなります。ファムさまが周囲の気脈を吸収しないよう、外界から遮断するのです。会場は気脈が薄い場所を選びましたが、念のために、安全処理を施した部屋以外では絶対に脱がないでください」

「わかったわ」

またあの時みたいに血を吐いて死にかけるのは御免だものね。

「王の間と同じといふことは、もしかして私の意思で形を変えられたりもするの？」

「はい。ですが全身を覆つ形は変えられませんのであまり自由度は高くありません」

何度か試してみたけれど、結局真っ黒な色は変えられなくて、模様をつけたり、光沢のある生地にしてみたり、レースを付けられる程度だったわ。

「上質な布でふちにキラキラした刺しゅうがあるように見せれば礼装っぽくなるし、地味にすれば普段使いに見せることができそうね」
「ひいう機能、お洒落するには便利そ�だけど……」

「こんな布の塊みたいな姿でお洒落してもねえ……もうこれは変装よね。謎の国の大使って演出には合つてないけれど、この姿で女王ですって言つても誰も信用しないわね、きっと」

目的に合つてるからそれはそれでいいけれど。

いつか立派な女王さまとして素敵なドレスを着たいわ。

「どこか不具合な点はありますか？」

「見た目以外ならまあまあ満足しているけれど……そうね、ワンピースの裾周りが歩きにくいから、もう少し広がるものか、スリットを入れてくれないかしら」

「かしこまりました」

「もういつそ声も変えてしまいましょう。女か男かも、人間か精霊

かも分からなくしましょ。」「

ここまできたらとにかく演出しようがないの。

人が揃っているので、ついでにみんなの衣裳も決めてしまうことにしたわ。

同じ顔をしているハーシュは似たような格好をしてもらつことになつた。こちらはところどころに灰色の意匠が入つたもので、髪をまとめて結いあげて、ひざ上までの黒い布のヴェールで覆う。

「アナタ達も、それっぽい格好でよろしくね。サヴァアの分も鎧とは別に軽くて動きやすい騎士の服を用意してちょうだい。使う色は黒か銀、それと灰色で」

「はい」

「折角だし、留守番組もみんなで揃いの衣裳を作りましょ。」

そう言って私はライナとシメオンの肩を抱いた。

「ライナのは僕に考えさせてください。ファムさま」

「じゃあシメオンのは私が決めます」

「二人で考えなさいな。礼服としてかつこいいものをね」

さすがに全員ででかけると城と国ががら空きになるので、留守番組としてライナとシメオンとゲオルギ、そして城の管理をするためにベウォルクトが残ることになっている。

「レー・ヘンは今回の特級精霊たちの会合に初参加になります」

それを聞いてなんだか激しく不安になつたわ。

ベウォルクトに助言を貰いたい時つて結構多いから、一応何か連絡手段を考えるつもりだけだ。

王の間に戻つて今度は他に用意するものについて話し合つている

と、鎧を着たサヴァアがやつってきた。

「完成したのね！」

「ええ」

「この間の“くろの騎士”的鎧とは少々違っていて、関節まわりが布のような素材になつていて。身軽になつてからやかに動けそうね。表情は相変わらず頭部全体を覆う形の黒い兜で見えないのね」細身で長身の背格好からなんとか中身はサヴァアだとわかる。

「ああ、すみません」

そう言つとサヴァアは兜だけ外し脇に抱える。

「槍の他に今回はこちらも使ってください」

そう言つてベウォルクトがサヴァアに一振りの剣を差し出した。鞘にも柄にも私の衣裳と似た模様が描かれている。

「鎧には対法術処理を施しましたが、精霊術にはこちらで対応してください。術でけしかけられてきた精靈をかなり強引に排除できます」

サヴァアは手渡された剣を鞘から引き抜き、明かりにかざす。

「綺麗……」

ライナがそれをみて感嘆した声をあげる。

剣は暗い色ガラスのような素材で透きとおつていて、中に煙のように黒い模様が入つていて、中に煙のように黒い模様が入つているのが見える。

「落としたら割れちゃいそうだけど、大丈夫なの？」

あんまり見慣れないのでちょっと心配になっちゃったわ。

「外見はガラスに似ていますが材質は全く違います。脆くはありませんし、金属よりも丈夫ですよ。サヴァアさんの腕力に耐えるようにも作っています」

サヴァアは剣をひと通り調べると、刃の側を持つて持ち手を私の方へ向けて差し出してきた。

「女王、騎士の任命をお願いします」

「改めて、正式な任命式ということね。私は何をしたらいいのかし

「

「騎士とは覚悟を決めた者のことをいいます。己が定めたものを守る為に剣をふるい、己の情理を殺してでもそれを守るという覚悟を決めた者です。その覚悟をあなたに認めてもらえば、俺はくろやみ国の正式な騎士となります」

私をまっすぐ見る彼の声は、とても静かで落ち着いていた。

「わかったわ」

私は差し出された柄を両手で持つた。

王座の前でサヴァアは右膝をついた。

剣はかなり重いけれど、しっかりと握れて、持ちやすい。ふらつかないよつに気をつけて持ち上げ…無理。とても重いわ。

顔が引きつりそうにながら私が持ち上げようとするのを、左右からハーシュとライナが支えてくれたので、なんとかひざまづくサヴァアの右肩に刃を置く事が出来た。

一呼吸おいて息を整えて、私は宣言した。

「あなたをくろやみ国の騎士に任命します。この国と国民を守つてね、サヴァア」

「はい」

「ふ～ふ～ふ～ん、ふふ～ん」

「どうしたんです、ファムさま。朝から粉だらけになつて。新しい美容法かなにかですか？」

「お菓子焼いてるのよ！ 調理室で小麦粉を練つてるんだから察しながらいよ。きいてレーベン。今日はね、私の二十歳の誕生日なのよ！」

ちゃんと白箱国と、この国の暦表を確認したもの。

「私の生まれた国だと、五年」とに大きなお祝いをするの。これはそのための特別なケーキなのよ」

ちなみに二十歳すぎは嫁き遅…フツ。なんでもないわ。この国ではそんなもの関係ないわ。自分で自分の誕生日ケーキを焼くのも、この国ではまったく問題ないんだから！ とつておきの、素敵なケーキを作るわ！

「ちなみに晩ご飯はライナとシメオング作ってくれるやうよ。折角だからアナタもなにか作つて祝つてみない？」

「うーん、ではこの間上手く出来たパンケーキを焼きましょ～うかあれ、三十枚失敗してようやく一枚成功しただけじゃない。

「多分、もう失敗しませんよ」

「気持ちは嬉しいんだけど、私、これからスポンジケーキを焼くから今度してくれないかしら」

「パンケーキはスポンジケーキの付け合せになりませんか？」

「同じような味だからならないわよ」

「どうしてそこで心底不思議そうな顔をするのかしら…

「お菓子つて難しいんですね」

私は精靈に味覚を教える事のほうが難しいと思つただけれど。

「今夜は試作のお酒も出して、皆で楽しく過ごしたいわ」

ところがそうもいかなくなってしまった。

スポンジケーキが焼きあがるのを待ちながらケーキを飾るクリームや果物や砂糖漬けの花を吟味していたら、お城から近海に接近する船があると知らせが来て（勝手に頭の中に映像が浮かんできた）、詳しく確認したらこの間来た海賊の黒堤組の小型船だつた。

前回と同じように港ので腕組みをして、私は船から降りてくる黒堤組の代表^{マウロ}を睨む。

「もう少し後か、早い時間帯に来てくれると助かるのだけど

もうこれでケーキは夕食に間に合わなくなっちゃつたわ。

「俺達は商売相手だぞ。時々挨拶しに来たつていいだろ。時間の都合は波に聞いてくれ」

形の良い眉を上げ、風に揺れる黒髪をかきあげながらカラノスは言つ。

相変わらず態度が大きいわね。それに、私が何を言つても見上げた先の黒と青の瞳は笑つている。

「別に挨拶だけならコトヒトとシシだけ寄越してくれてもいいのよ。ねえ」「コトヒト、シシ」

「ここにちはファム女王。そう言つていただけると、組頭には悪いですが嬉しいですね」

「ガウ」

私がいつものように傍に精靈を待機させているからか、前回と違つてコトヒトとシシはカラノスが船を降りる時から姿を現している。白灰色の髪をした若者姿のコトヒトはにこやかに、艶のある灰色毛

の長い四足の獣姿のシシはやや警戒しながら挨拶をしてくれた。

「シシはいつもとっても素敵な毛並みね」

あのふさふさした体毛を触りたいけれど、私が近寄るとシシに後ずさりされちゃうのよね。

「そいつは俺が寂しい。わざわざあなたに会いに来たんだぜ？ それにシシは用心深い上に忠誠心も篤いからな。懐いて欲しいなら俺に近づくのが手っ取り早いぞ」

「うう」

それは避けたいんだけど。

「まあいい。今回の商品はこれとそっちの箱だ」

そう言つてカラノスは肩に抱えたずつしりと重そうな黒い箱と、三人の黒尽くめの男達が船から積み降ろしている大きな箱を指さす。「依頼通り収集した情報と、あっちの箱には他国の書籍が入つている」

「ありがとう。こちらもあなた達と交渉できそうなものをリストアップしているから、確認してちょうだい。それから取引といきましょう」

「ああ」

「荷物はちゃんと持つた？ 忘れ物はない？ ハンカチ持つた？ ほら、襟が曲がってるじゃないの」

「… なあ、… ナンデオレナンデスカ？」

「あんたあの子の事応援したいんでしょ、ならしゃんとしなさい！」

「これって普通は精靈がやるんだろ？俺他に仕事が…ナンデ俺…
「滅多にできない経験じゃないの。何事も経験が大事よ？あと夜
の冷えに気をつけなさい。お腹壊しやすいんだから」

『時間がない。急ぐぞ』

「あーもうわかったからって、ちゃんと役目は果たしますって、う
わ！」

「向こうの…と仲良くな。くれぐれも怒りはちぢめダメよ？ 命に關
わるから」

「ちょ、待てええええ…」

「ベウイルクト、詳しい確認をお願い」

「…我が國のものではありませんね」

一瞬耳をかたむけるような仕草をしたベウォルクトが答える。落
ち着いているから、危険な物ではないみたいね。

「どうした」

カラノスが私たちの様子に気付いて声をかけてきた。

港の傍に建てた待合室と会議室が一緒になつた施設で黒堤組と取
引内容の確認をしていると、海賊が来たときとは違つ、もつと別の、
警報のよつなものがお城から伝わってきた。何かわからないものが
うちの領域内に出現したらしい。

…というか、私は外にいるのに普通にお城と連絡が取れちゃつて
…まあとにかく、何が来たか調べないと！

黒堤組はコトヒトや他の仲間たち含めて皆不思議そうな、必要とあれば警戒状態に入りそうな様子をしているから、今のところは無関係とみていいわね。

「取引中にじめんなさい、ちょっと近海に不審な物が出てきたらしくって…これ、空を飛んでるわね」

サヴァとゲオルギは今城内にいるから、別よね。

「まもなくここから目視できる領域に入りますね。どうします? ファムさま」

レー・ヘンが私の傍らで待機しながら言つ。

「一応お城の皆には待機していくと云えてちょうどいい。んー、こつ

ちに誘導できそうね

なんだかそういう事ができそうだわ。

「わかりました。無理はしないでくださいね」

青と翼と 1（後書き）

24日、タイトルを「青と翼」から「青と翼と」に変えました。

「ここまで成長されているとは」

ベウオルクトが少し驚いた声でつぶやく。

「やりすぎちゃったかも。これ加減が難しいのね」

海上にいる未確認飛行物体が私たちがいる港に辿りつくより、突然風を起こして誘導してみたけれど、風力が強かつたみたいで空中で何度もかきりもみ回転して、最後はふらつきながら港に降りたつた。
…なんとなく出来ちゃつていいものなのかなしら、こうこう事つて。

「お城と私が繋がつてているからできたみたいだけど、これって法術の一種なのかしら?」

「今は純粹に海面温度と上空の温度を変動させただけですね。これは空気中の分子を操作しただけですから、法術が成立するよりもっと前の時代の原始的な技術ですよ」

レー・ヘンが空を見上げながら言う。

うん、戻つてから細かい説明をお願いするわ。

「まずはお客様のお相手が先ね」

そう言つて、私は港に降り立つた存在を見た。

「ベウオルクト、この世には羽毛の生えた竜がいるのね!」

「ファムさま、あれはグリフォンという青嶺国特産の生き物ですよ
やつてきたのはゲオルギと同じくらいの大きさで、やや細身のグリフロンという生き物だった。

頭の先から上半身と羽根の付け根まで薄青い羽毛で覆われていて、

下半身はそれよりもやや濃い青で、どうも普通の動物と同じような毛みたい。尻尾は細く長くて、先っぽにふさふさの毛がはえている。前足の爪はかなり鋭くって、後ろ足はシシと似た形をしている。大きくて曲がったくちばしに、鋭い目付きは猛禽類に良く似ていて、そして眉間のやや上の額には宝石のように輝く拳ほどの大さきの石が埋まっていた。

「へえー。あれがグリフォンなのね」

輝くような艶のある毛並みに包まれたすつきりとした立ち姿は、青嶺国絵本で見たことのある姿よりずっと優雅に見えるわ。

厚ぼったい灰色の雲に覆われた空に同じく灰色の海を背にして、港の暗い色した石畳の上に立つグリフォンは、その青く輝く姿と背景の暗さとが似合わなさ過ぎて存在が浮いて見える。

グリフォンは降り立った場所から動かず、鋭い目付きでじつとこちらを見ている。口に何かを咥えているわね

「ねえ、あれって…人かしら?」

「そのようです。先程から動きませんが」

「げつ」

声をした方を振り返ると、カラノス達が待合室の建物の扉を半分ほどあけて顔を出していた。何故かカラノスが引きつった顔をしている。

『黒堤組か、こんなところで何をしている』

不思議な響きの声がした。

「え、今、あのグリフォンが喋ったの?」

『失礼する。』『はくろやみ国だらうか』

今度は私の方に声をかけてきた。じつとこちらを見つめながら、口元を動かさずに。どこから喋っているのかしら?

「え、ええ、そうよ」

『我は青嶺国精霊、アクシャム様からの使いで來た。くろやみ国

の代表者との面会を希望する』

「代表者は私よ。ところでその咥えている人、大丈夫なの？」

『ああ』

グリフォンは今気がついたとばかりに嘴をひらき、ぐつたりしたままの人を地面へ落とす。前足でつつくが、反応はない。

『すまないが、こいつの世話をお願ひしたい』

「ええ。面会はこの人が用意してからの方がいいかしら」

私は精霊を連れてゆっくりとグリフォン達に近づきながら尋ねた。

『こいつはただの付き添いだ。使者は我だ』

「わかつたわ。使者さん、お名前はなんというのかしり

そばまで来て見上げると、澄んだ緑色の瞳がじっと見下ろしてきた。

『我の名はソルだ』

「ソルね。ようこそくらやみ国へ。私はこの国の女王のファム。私の後ろにいるのがこの国の精霊のベウォルクトとレーへンよ。ええつと付き添いの人、大丈夫？」

声をかけながら観察すると、青と紺色のきつちりとした服をまとった青年だった。まつすぐな青い髪を後ろでひとまとめにして、腰には剣が差してある。

『うう…』

返事のようなうめき声のようなものが聞こえてきたけれど、暗い表情で目を閉じたまま動かない。

『…治療室に連れていったほうが良さそうね』

『ちなみにこいつの名はジェスルだ』

『青領国の精霊の“証紋”を確認しました』

いつの間にかソルの額の石に手をかざしていたレーへンが言った。つまり、正式な国からの使者ということね。

「ベウォルクト、王の間の修理はもう完了しているのよね」

「ええ」

「この人を治療室に運ばなくちゃいけないし、使者との話もある。「あなた達も、お城に来る？ 取引の品物の受け渡しもあるし、もう全部まとめて相手をしようと思つて、そう黒堤組に声をかけた。」

前回彼らが来た時はお城の機能が落ちていたから用心のため海賊達を案内しなかつたけれど、もう取引の契約をしたし、今回は万一おかしな動きをしても対処できるわ。

「おおよ、面白そうだしな。ついでにそいつも運んでやらあ、箱を担いで意気揚々とカラノス達が待合室から出てきた。

「それ、どうかしたの？ サっきまで怪我してなかつたじゃない」現れたカラノスは何故か黒い眼帯をつけて右目を隠していた。

「カツコイイだろ？」

指摘するにやりと笑う。

「物騒な感じが倍増するわね」

事情がありそудし、あんまり踏み込みたくない相手だからそれ以上は追求しないことにした。

「組頭、本当に大丈夫か？」

黒堤組の精霊のコトヒトが心配そうな顔をしている。

「別にお城に罷なんてしかけてないわよ」

「いや、城の事というか…」

珍しく言葉を濁し、コトヒトはちらりとソル達を見る。他の黒堤組の仲間の何人かも同じような顔つきをしている。

何があるのかしら

「あつちは俺個人の事情だ。オマエ達は気にするな」

「そう言つとカラノスは安心させるように笑い、傍らのシシの背中を撫でた。

港から歩いて数分の駅からグリフォン一名と付き添いの青年、カラノス含めた黒堤組の人たちを列車に乗せて、一気に城の中へ移動する。

ソルは何も言わず案内されるまで、海賊たちも特に驚く様子がなかった。なんでも、彼らの母船にも同じような移動手段があるらしいので、見慣れているんだそうよ。

「あとであなた達のオジ貴さんが眠っている場所にも案内するわ」「そいつはありがたい」

まったく、慌ただしい誕生日になっちゃったわね。

青とじ翼と 2（後書き）

毎話あとがきは活動報告に書いています。

女王からの来客の知らせを受けて、ライナとシメオンは王の間に散らかった資料の片付けを行っていた。掃除などは女王の指示を受けたらしい小型機械が現れて自動的に行ってくれている。

「シメオン、今度は暴れちゃダメだよ」

ライナがまとめたメモの束の上に重しがわりのデータボードを乗せながら言つ。

「わかってるよ。今回は大丈夫。ライナの傍から離れないようにするから。さあ、もうお密さんが来るから別室に移動しよう」「記憶ブロックを机の上に並べ終えると、シメオンはライナの手をとり急かした。

「うん。でも、ちょっとグリフオーンは見てみたいな……あれ？」

ふと王座の傍らにおいてある銀色の卵を見て、ライナは顔色を変えた。

列車を城内の途中駅でいったん停めて、ジョスルさんを治療室に運びこむ。彼の治療のためにベウォルクトが残り、残り全員で王の間へ向かう。

控え室にあたる部屋まで来るとレー・ヘンに後を頼んで、先に私は王の間に入ると、ライナとシメオンが片付けてくれた机を、上に乗っている物も全部まとめて床下に収納した。

「あとは家具が必要かしら」

王の間に指示を出してお客さん用の椅子とテーブルを窓際に配置する。ついでに照明も落ち着いた色に変えてみた。

そして呼吸を落ち着けると髪を整え、着ている黒いワンピースの襟元と裾を整えて王座に座る。

「ファムさま、これを」

来客用のティーセットを運んできたハーシェが、黒い布を首にかけてくる。

「謁見用のものです。略式ですが」

「ありがとうございます」

広げてみると細かい刺繡の入った細身のストールだった。

「レー・ヘン、いいわよ」

ハーシェが別室に移動して、合図をするとまず青嶺国からの使者がレー・ヘンに案内されながら王の間に入ってくる。

レー・ヘンが王座の傍に待機すると、私は王座からある程度距離をおいて静かに佇むグリフロンを見た。

『改めまして。くろやみ国の女王よ、私はソル。青嶺国の精霊の使いで参った。どうかお見知りおきを』

そう言つとソルは頭をゆっくりと下げる。動きに合わせて首の毛並みがつやりと光る。

「よつこそ青嶺国の使者ソル、アナタが来るのは精靈達から聞いています。資料を受け取りに来たのでしょうか？」

『そうです』

「渡す形式は記憶ブロックと紙とを用意してあります。アナタが運ぶにはどちらの形式がいいかしら?」

『記憶ブロックで』

王座の脇に置いてある箱からレー・ヘンが光沢のある黒い記憶ブロックを一つ取り出し、ソルの額の石の前にかざす。ソルは目を閉じた。

『ぐるやみ国の精靈の証紋を確認した』

「この中に会場の情報が入っています。各國に仕える特級精靈の証紋で見ることが出来るようになりますから、皆さんにそう伝えてください」

『了解した』

ベルトの付いた鞄に記憶ブロックを入れると、レー・ヘンはそれをソルの首にかけ、金具で固定した。

これで使者の用事は済んだわね。付き添いの人、大丈夫かしら?」

田覚めると箱の中だった。

薄暗い、身動きできない狭さ。低い振動音も聞こえ、ジエスルの意識は状況を確認するために急速に覚醒した。

まるで棺桶に入れられているかのようだと、思った瞬間手足に“加速”と“強化”的法術をまとい目の前に迫る天井板を叩き、蹴る。

何度も繰り返すと箱は壊れ、空気の抜ける音と共に蓋が外れた。

這いすり出てみると箱の外は闇だった。照明が全て落ち、何かの光が周囲でまたたき、箱が開いたことを知らせているらしい甲高い音が響きわたつてゐる。

「なんだここは」「は

攫われるようにして青嶺国から海上へ飛び出した後の記憶は無かつた。国獸であるグリフオンに乱暴するわけにもいかず、されるがままだつた。

「元気がよろしくようですね」

声に振り向くと、一気に周囲が明るくなつた。

「うわっ、なんだ一体

眩しさに思わず目を閉じる。

「ようこそ、くらやみ国へ。ワタクシはこの国の精霊ベウォルクトです」

すぐ傍で聞こえる声にジエスルは身構えるが、まだ目が慣れずまぶたを開くことが出来ない。

「せいれい…なのか?」

こじ開けるように無理やり目を開くと、顔を布で包んだ人の形をした精霊が立っていた。

「次は黒堤組ね。レーへん、お願ひ

「はい」

レーへんに誘導されながら誘導してソルに入れ替わるようにして

黒堤組が王の間に入つてくる。

「天井、高っ！」

「見事なもんだな、こりや」

カラノス達が王の間を見渡しながらちょっと驚いている。さすがにこういった部屋は海賊たちの船にもないみたいね。

「おい、さつきの話忘れんなよ」

『ああ。我はあくまでアクシャム様の使いだ。お前のことは気にしない』

すれ違う瞬間、カラノスとソルが小声でそんな会話をしているのが王座に座る私の耳に聞こえてきた。どうも、王の間経由で声を拾つてゐみたい。

便利ね。今はあまり有効活用できていけど。

「ファームさま、付き添い人が起きたそうです
レーへンが小声で伝えてくる。

「わかったわ。こちらに案内してちょうだい」

正面を向いたまま返事をすると、レーへンは珍しく返事を濁す。

「それがその、すでにこちらに向かっているのですが少々…
どうしたのかしら?」

「アンタこの國のお偉いさんか？　聞きたいことがある」

案内されてきたはずのジエスルさんは、ベウォルクトを盾にしていた。

「ちゃんと答えてくれないとここの首が飛ぶぜ」「
剣をぬき、ベウォルクトの首に当てる。
なんてこと！」

「やめなさい！」

あまりの出来事に思わず叫び声が出た。

「お密さんに手荒な真似しちゃ駄目！ ベウォルクト！」

「なっ、げっ！」

ジョスルに首に剣をあてられ直立しているベウォルクトの背後には銀色の太い金属製のワイヤーの束のようなものがうごめいている。今にも驚いている青嶺国の青年に襲いかかろうとしていた。

銀のワイヤーはただじりいくと精霊の左の袖口から出ている。

「正当防衛が成り立つ場面ですのに」

いつの間にか私をかばうようにして前に立っていたレー・ヘンが表情を変えず、目だけ細めてこちらを見る。こちらも右腕が刃物のように変化していく、すぐにも斬りかかるように身構えている。

「せっかく実験体に使える口実ができましたのに」

ベウォルクト、そこは残念そうな声を出さないでほしいわ。

「どうしよう、これ…」

ライナは途方にくれながら抱えている銀の卵を見つめる。

卵はいまだに内側から音がしており、小さなひびも生まれている。今にも孵化しそうだつた。

王の間の片付けを終え別室で待機しようとした際に卵の異変に気づいたライナは、慌てて卵を抱え王の間を出てきてしまった。前回の影靈が王の間で大暴れしたように、もしも女王が謁見中に孵化したこの影靈が暴れでもしたら大変なことになる。

「大丈夫かな…いきなり爆発とかしないよね」

「修理した王の間の機能を確認するための影靈つてベオルクトさんが言つてたから、危ない生き物じゃないと思うけど…」

不安そうなライナを元気づけるようにシメオンが言つた瞬間、卵の内側からの音が大きくなり、ひびが崩れて穴が空いた。

覗き込もうとしたライナの目の前で穴から何かが飛び出した。

「わっ！」

穴から飛び出した銀色の何かは捜し物をするかのように部屋の中を飛び回り、扉にぶつかると一瞬ずり落ちるが、姿勢を正してピイイと鳴くと、再び扉に体当たりをして、閉まつたままの扉に穴をあけ外へ飛び出した。

「すゞい速さ！ 危なくないの？ あれ…」

驚いた顔つきのままライナが振り返りシメオンを見る。

「さあ…」

シメオンは不安そうな顔になった。

「きっと創造主の元へ向かうつもりなんだ」

「創造主、じゃあファムさまの元ね。とにかく追いかけよう」

「ライナ待つて！」

一人は銀色を追いかけて走りだした。

精靈を使っての脅迫に失敗して、ベウォルクトとレー・ヘンの様子に驚いた顔を見せつつもジエスル青年はまだ余裕があった。
「うちの家訓にはこうある。“精靈とやりあつには五手先読んでも足りない。アイツらはその斜め裏側から鼻歌を歌いながらやつてくれる。ならどうするか”」

そう言いながらジエスル青年は左手を右手の剣にかざす。剣の刃はぼんやりと青く輝いた。何だか良くない気配がするわ。

「“とにかく死に物狂いで先手必勝”つてな！」

そう言って床を蹴り、ベウォルクトに斬りかかった。

ベウォルクトは身体から出ている銀色のワイヤーで剣を受け止める。けれどすぐに一步引いて身構えた。見るとワイヤーの何本かが切られて落ちている。

「…」

レー ヘンがそれを見た途端わずかに眉間に皺をよせ、私を抱えて飛び退つた。

「もういいぢょ！」

ジエスル青年はさらに斬りかかるうとする。

二十九

さつきから何してゐるのよー! この野!

私が静止の声をあげる寸前に、金属と金属がぶつかる音が聞こえた。

レーヘンの廊越しに見ると、王の間の中程にいたはずのカテノスがいつの間にか割つて入り、ジェスル青年の剣戟を自分の剣で受け止めていた。

ひとん家で暴れるなんざ行儀の悪い坊をやんたな

間違つて方をうながす。かのじいは、お酒に酔へ、嘗てか顔つきに

一
あ、兄貴！？

「お前みたいな舍弟は知らんない奴だな」
悪いが別の人だ。
まあ他人の空似

がテルアビブへ出て、シエラレオネに船を向けていたけれど、そこへと

あの不敵な笑みを浮かべているに違いないわ。

「危ない！」

突然、開いたままの扉の向こうから叫び声が聞こえてきた。

そして扇から勢い良く入ってきた銀色の何かと、シエス川青年の後頭部とが激しい音をたててぶつかる。

なつた。

「…ええーつと」

ה'תנ"ג

「とりあえず、生きてるみたいだから…」レーヘン、様子を見てちょうだい

「わかりました」

「ファームさま！ ブルムが…ひつ、知らない人！」

「…ジェスル王子？」

ブルムを追いかけていたらしい、ライナと、ライナを背負ったシメオンが王の間へやつてきて、扉の傍で倒れているジェスル青年に気付いて驚いている。

「…王子？」

どういう事かしら？ この人付き添いなんじやないの？

「シメオン、ライナ、隣の控えの間にグリフロンのソルがいるから、ちょっと呼んできちゅうだい」

一人が出てから今度は城外の警備についてもらっているサヴァニアに連絡をする。

「サヴァア、聞こえる？ あなた青嶺国のジェスル王子って知ってる？ そう、そうなの。直接の面識はないのね。わかつたわ。こっちの謁見はもう少し長引きそうだから、引き続き警備をお願い」それから城内で待機しているハーシュにも連絡と確認をとつて、ベウォルクトとカラノスの元へ向かう。

「ありがとうカラノス。止めてくれて」

「なあに、恩を売ろうかと思つてな。んで、そいつは一体なんだ？」床に転がる銀色の塊に目線をやりながらカラノスが尋ねる。

「うちの新しい仲間よ」

「ようやく孵つたようですね」

いつもと変わらない調子に戻つたベウォルクトがそれを拾いあげる。

『「んにちは、んにちはファムわー、ブルマやつと歌から狂ひれましたのー！」

胴体をベウオルクトに掴まれたまま、ブルムが尻尾と羽根をめい
つぱい振りながら挨拶する。

「だわ」
「こゝにちは一月止無事に生還れてくれた。うそだ間にさ

まだちつちゃいけど、ゲオルギより田元が鋭い。…逞しく育つて
くれそうね。

「そういえばベウォルクト、アナタ切られてたけれど大丈夫なの？」
ベウォルクトの左手をつかむと、灰色の手袋に覆われたいつも通りの姿だった。人間と同じ形で、指も五本揃っている。切られた銀色のワイヤーもいつの間にか床から消えていた。

「問題ありません。少々驚きはしましたが」

確かに、あの暴れるロー・デヴェイクを取り押さえたものが、こう簡単に切られちゃうなんて驚きだわ。

「…お前ら、もしかして精霊術に詳しくねえの？」
振り向くと、腰に剣を戻しながらカラノスがなんだか呆れたような顔をしている。

「こいつが使つたのは“抗精靈”術。精靈と事を構える時に使う精靈術の一種だ」

…そういうものがあるのね。
見ると、ベウォルクトも首を傾げている。

「ベウォルクトはずつと引籠もつてましたから、外の様子に詳しくなくとも仕方ありません。精霊術はここ最近の数百年の間に大陸の人間達が作ったものなんです。特に、抗う精霊術はここ数十年のものですね」

元同郷の精霊コトヒトが説明してくれた。

「あるらしいとは聞いていましたが初めて見ました。あれが抗精靈術ですか。けつこう地味なんですね」

五百年人間の街をさまよっていたレー・ヘンが言つ。

「俺も間近で見るのは久々だな。使える奴はそつ多く無い。精靈術がかなり使えないと抗精靈術を習得できないらしいからな」

左右に揺れながらカラノスが言つ。見ると、護衛のシシが駆け寄つてきて彼に頭突きをしていた。

「すまんかったって。あれくらいで心配するな、シシ」

『何をやつてているんだ。まつたく』

王の間に戻つてきて私の説明をきいたソルは、マットの上で頭に黒い包帯をまいて眠るジェスル青年を呆れたように睨んだ。鷺のような顔でも表情つて出るのね。

「この人、なんでこんなことをしたの？」

尋ねると、ジェスル青年の顔を覗き込んでいたソルは一つため息を吐いてから顔をあげた。

『こいつはアクシャム様の秘蔵つ子の一人でな』

あちこち出かける事の多い王子に対し、青嶺国の精靈アクシャムは世界中の精靈に依頼した。

『青嶺国の王子に会つたらよろしく頼む』と、

心配したつもりでの依頼だつたのに、言葉だけが一人歩きして精靈達に伝わつたらしい。そのおかげで森で巨獣型の精靈と会えば目があつた瞬間突進され、谷で霧状の精靈に出逢えば霧を濃くされ遭難し、海に行けば海の精靈達が総出で襲い、海中に引きずり込もうとする。

聞いていて思わず顔がひきつっちゃったわ。

「それは…よく今まで生きてこれたわね。そんな目にばかり遭つてると精霊を見たら速攻で攻撃したくなる気持ちもわかるわ」

「みなさん冗談半分で遊んであげてるだけなんですよ

レーへンがさらりと言つ。

「アナタ達にとつてはそうでしょうね…精霊の「冗談つて人間に

は冗談じや済まない事もあるのよ?」

私も子供の頃に両親が精霊に守りを依頼して、結果どんなもな

い目に遭つたことがある。

「くそつ、だからどこ行つても俺にだけ精霊が絡んでくるのか」
声がして、見ると頭を抑えながらジエスル青年が身を起こしてい

た。

「頭打つてるからまだ動かないほうがいいわよ。でもあなた王子様
なんでしょ? 身分が高いんだし、国が精霊達から守ってくれたり
しないのかしら?」

「そりゃ ain't」

ジエスル青年が何か答える前にカラノスが言つ。

「青峰の王子つてのは大陸一キツイ身分で有名だ。何しろ王子を甘
やかせば処罰対象にすると国法で決められているくらいだからな」

『我が国の王族は何事も自力で対処しろ』というのが教育方針だから
な』

ソルも当然のように言つ。

「なんだか…大変な人生を送つてゐるのね」
王子様つて大変なのね。

「とりあえず、拘束

「うわっ」

ジェスル青年が無事に目を覚ましたので、私は王の間の床材から漆黒のベルトのようなものを創りだして手足を拘束して身動きを封じる。

ちなみに、剣は没収済み。

「何だこれは！」

「そうやってちょっと頭を冷やしてちょうどいい。いきなり他所の国で暴れるなんて、そんなのじゃ命がいくつあっても足りないわよ？」
そう言ってから青い髪の青年を睨む。

「精霊に言われたくないな」

そう言って相手もまつすぐ睨み返してくれる。

…精霊？

私は王座に座つたまま肩から腰まで流れる自分の髪を見下ろしている。

「これでも人間なのよ、私」

青年の眉間の皺がさらに深まる。納得していない顔つきね。

『自業自得だな』

座り込んでいるジェスル青年を見下ろしながらソルは口を開いた。

「ソル！ お前、何してたんだよ！」

『無論仕事だ。貴様が寝ている間に終わつたがな。まあ、貴様のおかげで台無しになりそうではあるが。まったく勝手なことをしてくれる』

「それは…すまん」

ジエスル青年はグリフオンに対して申し訳なさそうに顔を下げた。
「使者ソル、この状況、どう対処しますか？」

ベウォルクトがグリフオンに尋ねと、ソルは尋ねたベウォルクトではなく私の方を向いて答えた。

『私は今回精靈の使いとしてやつてきた。青嶺国では精靈は人間に對し権限と責任を持たず、人間も精靈に対し権限と責任を持たない。精靈側の立場からするとこいつの責任を取る必要はない。この責任能力のないバカはそちらでどう処理しても構わん。それがこやつの運命なら仕方あるまい』

堂々と言い切つたわね。

「見捨てるつてか。ソル」

ジエスル青年は青いグリフオンを見上げながら皮肉じみた笑いを浮かべる。

『お前はお前で対処し、道を切り開け。私は我的使命があるんでな。では』

ジエスル青年は何も言わず、ソルは翼を軽く広げて礼をすると尻尾をゆつたりと揺らしながら青年を置いて出口へ歩いて行く。

一瞬、このままソルを帰していいのか迷つた。けれどこの場合は相手の言う事を受け入れておいた方がいい気がした。

『…サヴァ、ゲオルギと一緒に海の途中まで青嶺国の使者を見送つてちょうだい』

「あなたが王子だらうとなんだらうと、この国で暴れた責任はどうでもらうわよ」

「おおよ。なんだつたて受けてやる」

…なんだか積極的ね。ひとまずジエスル王子は禁固部屋に入ることにした。といつても、内側から開けられない単なる個室なんだけど。

鍵は私が精霊達の許可がないと開けられない仕組みになつていて。これまでに国外からのお客が騒動を起こした場合どうするか決めてなかつた上に、相手は正式な青嶺国の使者の付き添い。どう対処すべきなのが考える時間が欲しかつた。

帰国したソルは何かしらの報告を青嶺国にするだろうし、万一王子のことで私たちの方に問題があるよう人に判断されたら、まずいことになる。けれど…

あの王子には必死さが無かつた。

どこか余裕みたいなものがあつたし、抗精霊術というのも、驚いたけれどあの時はそう威力のあるものじゃ無かつた。

「なんだか試されてる気がするのよねえ…」

それならそれで、おもいつきり腹がたつけど。

あまり手荒なことはしたくない。けれど今は彼の事情を知りたい。

「あー、情けねえ、俺」

そう言ってジエスル青年は濃い青色の瞳で天井を見上げる。

治療を受けて連行されたのは一人用の寝台と机と椅子が1セットだけがある小部屋だつた。窓は無いが壁のパネルが十分な明かりを保ち、不便はなかつた。壁は継ぎ目がなく、さらには法術の影響を

受けないものだつた。これだと剣を没収されたジェスルには破壊しようがない。

「技術力が世界一だというのは本当なんだな」

壁をひと通り検分すると寝台に座り、慣れない手ざわりの毛布の上に寝転がる。

いきなり付き添い扱いでこの国にやつてきたジェスルがとっさに思いついたのはこの方法しか無かつた。上級クラスの精靈に取り囲まれて軽く感情が先走つたのもあるが

「こりゃお袋にどやされるな…あいつにも」

どちらも怒らせると大変恐ろしい相手だ。しかしチャンスは掴めるときになりふり構わず手を伸ばすのがジェスルの信条もある。自分としては、まずまずの成果といったところだろう。

「失礼します」

扉をノックする音が響き、部屋の中に一人の少年が入ってきた。寝台から起き上がり、少年の顔を見てジェスルは思わず声を上げた。

「お前つ、シメオンか？」

かつて緑閑国で秘密組織が騒動を起こした際、大空騎士団の分隊長として鎮圧に出向いた時に出会つた少年だった。

「お久しぶりです。ジェスル王子」

少年はかつての時の悲壮な表情ではなく、穏やかな顔つきをしていた。肩には今まで見たことのない種類の、鋭い顔つきをした銀色の子竜が止まっている。

「一応顔見知りなので僕が尋問役として来ました」

そう言つとシメオンは手に持つていた箱を机に置き、中から筒状の物と金属製のカップを二つ取り出す。それから筒の蓋を外して中の液体を注ぎだす。一瞬自白用の薬品かと思ったが、シメオンは二つともに注いだ。

一つを自分で持ち、もう一つを差し出してくる。

「薬物を心配するなら確認しても構いません。」この部屋、壁材は法術を弾きますが中に対しては使えますから。精霊術は靈素が薄すぎて使えませんけど」

そう言つて立つたまま自分のカップを口に運ぶ。

ジェスルはカップを受け取り念の為に“分析”で調べてみると、中はただの香草茶のようだった。一口飲んでみると、知つている味だつた。

「お前、この国にたどり着いたんだな。あいつに渡された人工精靈は？」

「位置情報を伝えるだけのものだったからこの国に来てすぐに稼働させましたよ。あとは何もしてませんけど」

「どうか」

思えば、あの男の行動が活発になつたのは、この少年が去つてしまらく経つてからだつた気がする。

「お前が暴れた理由つてのには会えたのか」「ええ

」そう言つてシメオンは穏やかに微笑む。

歳相応ではないが、自ら滅びに向かっていた以前よりは子供らしさが出た顔にジェスルは僅かばかり安堵を覚えた。

「どうか、よかつたな」

「あの時はありがとうござります。お一人のおかげで僕はこうしてここに生きることが出来ています」

そう言つとシメオンは一度目を閉じ、再びひらくとそこにはかつての鋭い鋭さが宿つていた。

「ところで、ジェスルさんはなぜこの国に来たんですか？」

恩はあれど、いざとなれば容赦するつもりはないようだ。きっと少年が大切にしているものがこの国にはあるのだろう。

「あー、本当は来るつもりなんてなかつたんだが、使者…ソルが出掛ける直前に俺も一緒に行けって言われてな」

そう言つてジェスルは肩をすくめてみせた。

シメオンは無言でジェスルを見つめる。

「それで？ 何故精霊を盾に取るなんて事を？」

「俺はこの国を知りたい」

青い瞳はシメオンの肩にとまる銀色の子竜を見た。

「名前以外ほとんど知られてないのにあちこちからかなりの注目を浴びているこの国が、どんな場所で、どんな奴らがいるのか。うちの実家に仇なすのか、そうでないのか。知るのにいい機会だと思つたから俺は俺で行動することにしたのさ。馬鹿な真似かもしけないが、こうでもしないと俺はソルの付き添いとしてあのまま帰らねばならなかつた」

伸びをして、ジェスルは身を乗り出す。

「それに、ひとつ探してみたいものもある。この国で黒髪の女を見かけなかつたか？」

機会と運と信じてゐる 1 (後書き)

シメオンとジエスルの会話の内容は、番外編「ある少年の物語」にあたります。

ジエスル青年についてはブルムを連れたシメオンが尋問に向かってもらい、その間に田の前の事を片付けることにした。

「お待たせしたわね。黒堤組のみなさん」

預つている先代マグロを安置した靈廟から戻ってきた黒堤組をハーシュが王の間に案内してくる。

ハーシュは今度の会合に着ていく灰色のヴェールをまとっている。あの衣裳が気に入つたらしい。一応は私と同じ顔なのをカラノス達に詮索されないようにする意味もあるので着てもらつてているのだけど「待ちはしたが、まあ俺達にも得るものはあつた。コトヒトも懐かしがつていたしな。珍しい光景だつたぜ」

「そういうのは見ないふりをするものです」

カラノスの言葉に、コトヒトがすまし顔でシシの背を撫でつつ返事をする。

「あのグリフォンと坊ちゃんはどうした」

「別室で対応中よ。さあ、取引と行きましょう」

合図をすると、王座脇の扉から黒堤組へ渡す品を詰め込んだ箱をレーへンが運んできた。

私たちの方で予め用意していた取引用リストの中から海賊たちが選んだ今回の品は、ジェットエンジン用の燃料の効率的な製造方法と、それ用の製造設備。かなり大きな荷物になる。

「テリダイ、確認しろ」

「はい」

カラノスに同行してきた海賊の一人、黒い細身の上着を来た男性が箱の中の物を調べ、いくつか質問をする。ベウォルクトがそれにたいして図面や実際の設備を指さしながら解説を始めたので、確認作業が終わるまでしばらく時間がかかりそうだった。

「ところであんたら、今度ある海上会合に出席するんだってな」
ベウォルクトとテリダイの会話が終わるのを待つていると、カラノスが話しかけてきた。

「ええ」

いつの間に知ったのやら。海賊の情報網つてどこまで広がっているのかしら。

「国同士の会見としちゃ非公式だが、かなり大物が集まるらしいな」「そうみたいね」

「女王さんよ、俺たちをその会合へ向かう道中の護衛として雇つてみないか?」

「護衛?」

思わずカラノスの顔を見つめると、相手は黒い瞳を細めて不敵な笑みを浮かべている。

「…狙いは何? 正直に応えてくれたら、考えるわ」

そう言つと、カラノスは両手を広げながら答える。

「何も会合に参加させろって訳じやない。ただ、俺たちにとしちゃああいつた大陸のお偉いさんと近づく機会はめつたにないからな。得意先を増やすキッカケが欲しいだけだ」

「組頭は黒堤組の“マヴロ”になつてまだ間もないですから、あちこちに顔を知らせる必要があるんですよ」

カラノスの後ろに控えるコトヒトが補足した。

「あんた達の不利になるような真似はしない。約束する」

「本当に?」

「ああ。なんだつたら誓約書も書くぜ」

確かに、海にいる海賊が各国の要人に近づく機会なんてめったになさそうよね

「もしかして、さつきの恩を売ったって…」

「まあ、この流れを狙つてはいたな。で、どうするよ?」

軽い言葉の調子は変わらないけれど、カラノスの顔つきは真剣で真つ直ぐにこちらを見つめてくる。

「それに、俺たちがいるとお得だぜ。あんたら法術と精霊術に詳しきねえだろ。必要だと思うぜ、そっち方面の対策」
うつ

確かに、ここには様々な過去のシステムが眠っている王城があるけれど、海の上ではそうもいかない。

私はおろか精霊達も人間の術に詳しくないし、サヴァは一応知識があるけれど、一人だけだと防御だけで手一杯になるかもしれない。旅に出ているマルハレー塔達は今回の件に間に合いそうにないし、この国でその方面に一番詳しいシメオンは留守番組としてライナと共に國を守つてもらう必要がある。

さつきのジエスル王子の事もあるし、最新の法術と精霊術について弱いのはまずそつね

「会合で各國の王達と渡り合つつもりなら用心に越したことはないだろう。特にそのあたりに關して注意した方が良い相手がいる。白箔国の王、ヴィルヘルムスだ」

一瞬、息が止まった。

聞こえた名前を頭の中で繰りかえして、ようやく理解が追いつく。

「…、ヴィルヘルムス、王?」

「そうだ。知つていいか?」

「……・名前と、顔だけなら。どんな王様かは知らないわ」

カラノスは面白そうな顔をする。

「そうかい。顔と名前、な。まあ、久々の白箔王の交代だからあちこちで話題になつたからな」

「それで、その白箔国の中王がどうしたのかしら」

カラノスは腕組みして王座に座る私を見上げてくる。

「ヴィルヘルムス王は数ヶ月前に即位したばかりだが、かなりやり手の王だ。それにあの男は王としての他に法術の使い手としても有名だ。性格も、冷徹で容赦がない」

なんだかよく知っているわね。

「会つたことあるの？」

「何度かな。あの王は国外の情報収集に力を入れているんでな、良い取引先だ。実を言うとずっと失われていたこの島の座標を入手できたのも白箔国の所からだ」

「そう、手広くやっているのね」

あなた達も、白箔王も

「最近は会つてないが。なんでも、女に会つので忙しいらしいぜ」

「…そう」

「ど、ごぞの深窓の、ご令嬢に夢中らしい。貴族の娘か、はたまた他の姫君かつて噂だ」

「そうなの…」

あの人、素敵な女性に会えたのね。

「ファームさま？」

レーへンが声をかけてくる。

表情が、うまく感情が隠せているか、自信がないわ。周りのみんなと目を合わせられない。

「どうした？ 顔色が悪いぜ」

「なんでもないわ。カラノス、会合への護衛の話、受けるわ

カラノス達に視線を戻すこと無く返事だけを投げかけて、立ち上がる。

「ベウォルクト、黒堤組が同行するのに必要な情報を至急まとめて彼らに伝えてちょうだい」

「かしこまりました。今日は久しぶりに外を歩きましたので少しお休みになられたほうがよろしいようですね」

ベウォルクトがそつと近づくと、小声で囁いてきた。

(「何がありましたらハーシュが代役をします」)

「ええ。そうね、そうさせてもらうわ」

「カラノス、私たちの出発は一十日後だからその頃にまた来てちょうだいね。レーへン、ベウォルクト、悪いけれど、あとよろしくね

「お、おお」

「かしこまりました」

「ファームさま！ 部屋まで……」

「いいの。レーへン、アナタはここにこなさい」

レーへンが付いて来ようとするのを止める。

「ファームさま」

王の間を出ると、ハーシュとライナが待っていた。

「大丈夫ですか？」

「平気よ、ちょっと疲れちゃつただけ。ライナ、気分がすつきりするハーブティーをお願いできる？」

「はい！ すぐに持つてきます」

ライナがかけ出して見えなくなると、じらえきれず涙が一筋流れ落ちた。ハーシュがそつと肩を撫でてくれる。

せめて、部屋に戻つてから。あと少しだけ我慢しなさい、ファム

「なんだ。なんか言いたいなら言えよ」

女王が去った後、無言でこの国の精霊の片割れは海賊の代表を睨んだ。

「今のは、本当ですか？」

「ああ、若い王の色恋の話だからな、あちこちの話の種だ。憶測や噂も多いが、女の夢中でどこぞに結界で囲つた家に住まわせているだの、王宮を抜けだして会いにいってるだの言われてこるぜ」

「そうですか？」

カラノスは精霊の顔を見たが、相手は変わらず冷たい表情のままで、銀髪で陰つた瞳は遠く窓の外、空の雲の流れをみつめていた。

一つの王がしたことは国として関わりありません。何しでかそうと国は責任を負いません。煮るなり焼くなり好きにしてください。

ややこじこ回しを簡単にすると、こう書いてあった。

「本当に、容赦無い扱い方されてるのね」

黒堤組から手に入れた資料の中に青嶺国の国外向けの法律があったので、さしつかえなく王子の対処について何か情報が載っていないか調べてみたら、ソルの言つたようなことと同じような内容が書いてあつた。

青いグリフオノは精靈は責任を負わないと行っていたけれど、國家としても、王子、つまり王位継承者の言動に責任を負わないと書いてある。

要するに、王の間で暴れた青嶺国の王子をどう扱うのか、全部私が決めなくてはならないわけね。

ひととおりシメオンが尋問したところ、ジースルは自分の非を認めて、もう暴れないと約束してくれた。

こちらとしても斬られたベウォルクトがまるで気にしていない上に拘束する際に多少乱暴に扱つたので、特に罰則を下されたことはせず、ひとまず相互理解のために話し合いの場を設けたことにした。

なるべく和やかに会話したいので、場所は黒一色の王の間ではな

くて、明るく緑あふれる植物園の、果樹園と私の花畠の間にある、いつもみんなで朝御飯を食べているテーブル。

どうも人間離れした銀髪の私を警戒しているようなので、お茶とお菓子を用意した上に、精霊達はテーブルからやや離れて、さらにシメオンやライナも同席して会話に参加してもいい。

「本当に面白いなここ」！ 建物の中に庭なんて初めて見たぞ。太陽無いのになんて明るいんだ？ この土は本物か？ このテーブルの素材は何だ？」

ジエスルがひとつひとつに驚くので、この国の技術が本当に今の大陸に存在しないものだと実感した。

好奇心旺盛なようで、なんでも質問してくるので、それに一応私の分かる範囲で答えていると、けつこう打ち解けることができて最初のような殺伐とした感じはなくなつていった。

ライナの姿に関しては、

「羽根のある奴つているんだな。綺麗な翼だな。これだけ真っ白だと手入れ大変だろ」

嫌悪せず、むしろ感心していた。性格は悪くない人のようね。

「ソルなんて暇さえあれば翼の手入ればつかしていつも気にしてるんだぜ。青いから汚れなんて目立たないのによ」

対人恐怖気味のライナもこれにはちょっと驚いて、時間が経つと気軽に話しかけてくるジエスルに対して時折笑みを浮かべて返事をするようになつた。

「俺たち王位継承権のある奴らは15歳までみっちり教育されて、あとは仕送りも後ろ盾も無しで世間に放り出される。俺達に根回しや^{ひいき}龜^{ひいき}殻なんかすると逆にした奴が罰せられるんで、誰も近寄ってこない。そんな中で人脈も自分で一から創りあげなきゃならんから、下手すると一般人より出世していくって言われてるな。まあ王位継

承権を放棄すれば王族としての生活費の支給やいろいろな特権も認められるんだが」

「たいしたことでもなさそうに笑いながらジエスルは桃の蒸しパンをかじる。

「うちではそれなりに苦労してタフにならないと王にはなれないのか。けっこう美味しいな、これ」

「機嫌で次の蒸しパンに手を伸ばす。この人、偉そう…いえ、図々しいわ。

「援助がないなら、あなた普段何をして身を立てているの?」

「俺は大空騎士団に所属している。あそこは完全実力主義だから身分で差別されないんだ。一応青嶺国経由で俺の休暇届は届いてると思うが、定内に戻れないとクビになってるかもな。騎士団長は容赦ない奴だから」

あつさりとそつ言い、また笑う。

「そうなれば、また次の仕事を探すさ。今はこの国にいる方が面白い」

びっくりするくらい脳天氣だわ、この人。

ちなみにこのジエスル王子、私より年下で現在十七歳。青嶺国王の七人兄弟のうち四番目だそうよ。

「以前青嶺国の精霊が言つっていましたが、青峰の王族は代々樂天的で向こう見ずな冒險気質があるそうです。おかげで過去に国内外で問題を起こして色々と苦労したんだそうです」

立つたまま私の近くに待機しているレーへンが教えてくれる。

「それって、よつとほどの事をしてきたのね」

「おお、俺のじいちゃんの武勇伝とか、凄いぞ。失われた黄稜国イエローリングの秘石を求めて手ぶらから旅したとか、グリフォンの子供を守るために赤麗国の一ヶ師団に単身で喧嘩売ったとかな」

そんな王族ばかりでよく国が保てているわね…

ちょっと呆れつつ、甘い香りのする蒸しパンを食べながらジエスルを観察する。

紺に近い深い青色の瞳はよく動く口と共に表情豊かで、笑うたびに後ろで一つにまとめられた小さな尻尾髪が跳ねる。なんというか、元気の良い子猫みたい。ちょっと獰猛なところがあるから、この場合山猫とかそういう感じかしら。

様々な不便さを強いられる王位継承権を捨てずにいることは王位に就く気はあるってことよね。懷に入るのが上手そうだし、あんまり油断はできない相手だわ。

観察しながら様子を見ていると、次から次へと身内や自分の冒険譚を披露するジエスルに対して、

「黄稜国ですか」

「グリフォンの子供ってどんな感じなんですか？」

意外にもベウォルクトとライナが彼の話に食いついている。この國、外の刺激が少ないものね…

目を輝かせて青年の話を聞いているライナの隣で、シメオンがどこか不安そうな顔をしている。あんまり良くない傾向だわ

「シメオン、ハーシュとブルムをつけるからジエスルの案内をお願いするわ。ざっとお城の見学でもしてきてちょうだい。問題のない場所はハーシュが知っているから。それが終わったら王の間に連れてきて」

「わかりました」

「ライナ、あなたは留守番組のリーダーとして、いくつか伝えておきたい事があるから一緒に来てちょうだい」

「はい！」

シメオンがほっとしたよ、ライナは元気よく返事をする。

「ひとまずこの場はお開きにしましょうか」

そう言つて、お茶を飲み干して席を立とうとしていたら、サヴァアが木陰から現れた。

「女王、防衛システムの確認が終了しました」
サヴァアが移動するの、気づかなかつたわ…彼もだいぶこの城のシステムに慣れたようね。

「ご苦労様、それで、うまくいきそう?」

「ええ。いくつか改善箇所はありますが。これがまとめたリストです」

そう言われて、差し出されたデータボードを受け取る。

城を含めてこの国には厳重な防衛機能がある。けれど数千年も前に作られたものなので、念の為サヴァアに今の人間の視点から国の防衛システムに弱点がないか数日かけて探しもらつていた。

「ありがとう、これだけはなんとしても出発までに間に合わせないとね」

データボードの中身にざっと目を通すと、防衛システムの弱点だけでなく、もしも敵が襲撃してきた場合を幾通りか想定して、それぞれどう対応するのか、そのためには国どの機能を使い、対策と準備には何が必要かも書かれていた。

元騎士だけあって、どの想定にも短所と長所、安全と危険について冷静にはつきりと書かれている。

「さすがね！」

これに今計画しているものが対応できるよう、精靈達と相談しながら

「そうそう、サヴァア、あなたまだジェスル王子と会つてなかつたわね。紹介するわ…」

そう言つてテーブルの方に顔を向けると、ジェスルが口を大きく開け、驚愕の表情をしてサヴァアを指さしていた。

「お、おまえ！ “ぐるの騎士”か！」

「おまえこの国の奴だったのかよ。よくも闘技場の結界ぶつ壊しあがつたな！」

顔を戻し、目の前のサヴァを観察する。そういえば、サヴァはずっと防衛システムの監視をしていたので、城のシステムと繋がつていたために黒い鎧を着ている。

「どういづれとかしら？」

「えーと……」

見上げた先の表情の見えない黒い鎧の仮面の向こうから、サヴァの困ったような声が聞こえてきた。

「…すみません」

当分の間、ジェスル王子はれっきとした他国からの客人としてこの国に滞在することになった。客人といつても、本当はざつと見学してもらつたら黒堤組にでも頼むか、自分たちで船を仕立てるかしてすぐにでも送り返すつもりだったのに、

「闘技場の結界の補修費用、けつこうしたんだよな。俺が帰つて報告すればあんたら責任追求されるかもな。でもこの国面白いから、もつじばらいたらそんな細かいこと忘れそつだなあ～」

と、ジェスルに露骨に脅されて、結局会合の出発までうちに滞在することになった。

即位してから今までで一番お金が無いのが悔しい… ちょっと眞面目に外貨を稼ぐ手段を考えなくちゃ

「 もう、せっかく対外用に謎の国つてこにして準備しているのに、あの王子に色々バレちゃってる気がするわ！」

一番秘密にしておきたいことは隠せているけれど、国民の少なさとかは把握されている。

せめてもの救いは彼が今度の会合に参加しないらしいことくらいね。

「 記憶操作でもします？」

レー・ヘンが微笑んで人差し指を立て、細い銀の針のように変形させる。

「 危なそうだから、やめてレー・ヘン。一応は王子なんだから変な細工をしたのがバレるとそれこそ問題になるわ」

おさらば、この国がジエスル王子をどう扱つかは青嶺国に対する私たち態度とみなされる。彼を殺したり拷問すれば敵意があるとみるし、仲良くすれば友好的。そして王子だからとうやうやしく接すれば青嶺国に恭順の意思があるとみるでしょうね。

青嶺国に属国になる気はないし、敵対するつもりもない。友好関係を築けるかは、青嶺国の首脳陣と会つてみないとわからない。

「 青嶺国の法律に合わせつつ特別扱いは無し、変に構えず、普通に外からのお客として接するのよ？ いい？」

「 わかりました」

レー・ヘンがお辞儀をして、その時よつやく精霊が手に持っているボウルに気づいた。

「 あら？ 今日はアナタなの？ いつもはハーシュがやつてくれるのに」

顔をあげたレー・ヘンは、嬉しそうに微笑む。

「 はい。交代してもらつたんです。ハーシュはベウォルクトから影靈としての説明を受けています。今度の会合で精霊達に会つ際の準備です」

「 そう」

ハーシュは世界で最初の影靈とこうじで、精靈達へお披露目する必要がある。なんでも影靈は長く研究されていて、ようやく完成了した存在といつて他国の精靈達も興味があるらしいわ

「それに今日は影靈を作りましたから、普段の成分に加えて保護成分も入っているんですよ」

「そうなの」

ボウルを覗き込むと、いつもの木の香りに加え、ふわっと甘い香りがした。

「ではそちらの椅子に座つてください」

指示された背もたれのない椅子に腰掛け、お風呂上りでばらけていた髪をざつとまとめて、背に流す。

銀髪の時は変換された瘴氣を溜めてこんでいるせいなのか髪の口シが強くなつてまとまりにくくなるけれど、黒髪に戻るとさらつとして、まとめやすくなる気がするわ

「失礼します」

そう言つてレーへンが私の背のそばまで来たので、いつものように正面を向いて首筋を伸ばす。けれどいつも経つても髪を持ち上げられる感覚がしない。

変に思つて振り返つてみると、銀髪の精靈はスラリとした指で髪を一本だけつまみ上げ、真剣な顔つきで細い筆で栄養剤を塗りつけていた。

「ちよつとなにやつてるのよ。それじゃ朝までかかつても終わらな
いじゃない」

「ですが髪が痛まないよう、しつかり保護せねば」

「ハーシュはいつも手に栄養剤をつけてそのまま梳くようにして髪に刷り込んでいるから、アナタもそうしてちょうどいい。私の髪、結構頑丈だからちよつとくらいい引っ張つても平気よ」

そう言つとレーへンは少し考えるようにボウルの中の深く澄んだ緑色の栄養剤と己の手を見比べ、そつと両手を栄養剤に浸して液体をなじまる。それから手をボウルから引き上げ、おやおやおやの髪の中に指を差し込むとゆっくり滑らせる。

「ひうですか？」

「そうね、いい感じ」

「痛かつたら言つてくださいね」

「わかつたわ」

何度か繰り返すうちに慣れてきたらしく、次第に手つきも落ち着いてきたので安心して正面に戻つて温かいハーブティーを飲みつつ、今度の会合用の資料に目を通す。

しばらぐ経つて、やけに後ろが静かなのでまた振り向いてみると、レーへンはまだ私の髪を触つていた。

「レーへん、大丈夫？ 終わつたの？」

「ええ。栄養剤は終了しましたが……」

言いいながらも生え際あたりから長く指先を髪に通し毛先までそつと滑らせる動きを繰り返している。

「どうしてだかずつと触つていたくて」

そうつぶやいて、黒髪を眺めながら目を細める。

「心地いいです」

「そう?」

毎日ハーシュと二人ががりで手入れしているからかしら?

「気に入つたのならしばらく触つっていてもいいわよ。そのほうが栄養剤も髪に馴染むだらう」

そう言つと、部屋の明かりに柔らかく照らされながら銀髪の精靈が微笑む。

「はい」

実はだいぶ長くなつてきたから少し切りたいのだけど、この様子だと反対するかもしないわね

髪を触られてこるからか、なんだか眠くなつてきたわ…

「ファームさま」

少しうとうとしていると、背後からレーへンがそつと呼ぶ声が聞こえてきた。

「なあに?」

「もう夜に泣くのはやめませんか?」

口に運ぼうとしていたカップが途中で止まつた。

ここ数日、夜はハーシュしか部屋に入れてないのに何でも知つてるのでね。

「別に、泣くくらいいいじゃない。感情を溜めこむよりいいでしょ」「ハーシュが心配してベウォルクトに相談しました。ライナ達もフアムさまの様子が今までと違う事に気づいています」自分ではじまかせているつもりだったのだけど、みんなに心配かけちゃつてるのね…

「そんなに忘れないんですか? あの男が」

背後から、そつと、確かめるような声が聞こえてくる。

「…そうね、ふつ切るにはもう少し時間がかかるわ」

頭の中では理解していて、いくら泣いてもどうしようもないって分かつてこるので、涙が止まらないくらいのもの。

「海の上で会わない方がいいのでは」

「いいえ、会うわ。それとこれとは別よ」

元恋人のファームとしてはまだ気持ちの整理がつかないけれど、黒いヴェールをつけて、顔を隠して、くろやみ国代表として白箔国王に会うことなら、きっとできる。

「だつて白箔国にもうちを認めて貰いたいんだもの

「ファームさま」

振り返ると、レーへンが床に膝をついてこちらをじっと見上げていた。

「ワタシには人の心の深いところは理解できないかもしねない。でもワタシはファームさまをお守りしたいんです。あなたの心も含めて」
レーへんの口元は引き締められ、銀のまつ毛に縁どられた青灰色の瞳はまっすぐこちらを見つめている。

「どうか一人で抱え込まないでください」

「ありがとうございます、レーへん」

そう言ってくれるアナタや、みんながいるから、私はこの国を守りたいの。

「え、なんとしても守ってみせるわ

「私はくろやみ国を守るから、レーへん、アナタは私を守ってちょうだい」

「もちろんです」

「「」の辺でいいかしら」

「」の国はいつも畳りだから國土の「」も田圃たりもなにも関係ない。

なのでお城に近い、やや土が柔らかいあたりでシャベルを突き刺し、穴を掘る。ある程度掘り返したところで肥料とつやつやした灰色の種を入れ、土を被せる。

「がんばって芽を出してね」

特別に加工されたこの種が芽を出せば、本格的に國土の土壤回復を開始できるという合図になる。

「ファームさま、タグを」

「ええ」

ライナから植えた日付が書かれたタグを受け取り、土の上に指す。あたりには同じようなタグが無数に刺さっているけれど、芽が出ているものはひとつもない。

立ち上がり、空を見上げると以前は暗い灰色だつた雲は白いものに変わっていて、雲の層がずいぶんと薄くなっているのがわかつた。「さあ、これで出発前にやつておく事はひと通り終わったわね。ライナ、お城へ戻りましょう

お城に戻り、手を洗つてから王の間に入ると、漆黒の鎧を着込んだサヴァーとゲオルギがピンクのクッシュョンの上で丸まって眠るブルムを覗き込んでいた。

「顔は怖いけど寝ている分には十分に可愛いわね。一緒に遊んでたの？」

サヴァアがボールのようなものを持っていたので思わず尋ねてみた。

「いえ、ブルムの身体能力のテストをしていたのですが…」

そう言つてサヴァアは持つていたボールのようなものを前に出す。間近でみるとそれは弾力のあるものではなくて、鉄球だった。しかも、傷とへこみだらけで完全な球体ですらなくなっている。

「どうしたのこれ」

「反射神経を試すテストで使うものなのですが、途中で壊されました。普通は何をやっても中のシステムは故障しないようになつているはずなんですが…」

「この子、かなり強いつてこと?」

「ええ。すでに顎と爪の力はゲオルギ以上のようにまだ生まれたての竜なのに、すごいわね。」

「それと、古代竜の生体は俺も詳しく知らないのですが、手足の形から最終的にかなり大型の竜に成長しそうです」

「そうなの? まあお城に入れる大きさなら大丈夫じゃないかしらどこまで大きくなるのか楽しみね!」

「ブルムは力を持て余し気味なのですが、会合に連れて行つても大丈夫でしょうか」

サヴァアが珍しく心配そうに言つ。

「そうね…護衛役になりそだからいてほしいんだけど」

「ワタシとサヴァアさんで様子を見ていれば問題ないでしょう」

声に振り向くと背後には“くろの騎士”的銀色版がいた。

「?? 兄さんじゃない人?」

その声にライナが首を傾げ、サヴァアと交互に眺める。

「レーへン、どうしたのその姿」

そう言つて私は近寄つて銀色の仮面を見上げた。身長も変わつてるんじゃないかしらこれ

「これで顔に傷を付けず、服を汚す事も気にせずファームさまをお守りできます」

鈍く輝く銀色の姿になつた精靈は両手を軽く広げたあと、胸に手をあてて軽くお辞儀をする。

「これまでのレーへンの行動から綺麗な顔に傷つけるのは駄目！あと長旅になるから着替えを破いちや駄目！と散々注意した結果、自分なりに考え出した答えらしい。」

「もしかして、これって“やみの騎士”的じゃないの？」

銀色の鎧の周囲をぐるぐると周り、観察する。色は違うけれどサヴァの鎧とすごく似ている。

「はい。以前闘技場の大会で使わなかつた“やみの騎士”的鎧を利用してみました。これは真似ているだけの姿なので、特別な機能はありませんが」

そう言つと黒い鎧のサヴァの隣に並ぶ。サヴァは興味津々といつよりは冷静に銀色の鎧を観察している。

「そつくりね、目線の高さも、背格好も」

「この姿の時だけサヴァさんの体格に身体を調節しています。槍を持てばある程度動きもトレスできますよ。それに…」

軽く腕を振ると、全身が黒一色に変わる。

「警備の時にこいつして入れ替わることも出来ます。この間の一件で“くろの騎士”は大陸で有名になつたようですから、こいつして複数の“くろの騎士”がいると思わせれば我々の戦力の搅乱になるでしょう」

それからレーへンはもう一度腕を振つて元の鈍く光る銀色の鎧に戻つた。

「面白いな。あとで手合わせできるか？」

「いいですけど、出発前ですから軽くでお願いします」

仲良く喋る黒と銀の鎧を見て、守りの方は大丈夫そうだと安心できた。

「理由はわかつたわ。でも時々はいつものレーへンの姿になつてね」

あの綺麗な顔に会えないのは寂しいわ

「はい。ファムさま」

銀色の仮面の下から微笑んだ時のレーへンの声がした。

私たち、さらに胡散臭い集団になりそうねー。

「なあ、あの女王、本当に人間なのか？」

ジェスルは木にたわわに実るオレンジを収穫しながら傍らのシメオンに声をかける。

元々の育ちが育ちなのでなにもしない客への立場が落ち着かず、こうして自分から手伝いを申し出て労働にいそしんでいる。

「人間ですよ。だから今度の会合にも出席する必要があるんです。我々の存在を認めてもらうために」

シメオンはそう答えた。しばらく観察してわかつたがこの少年は翼の生えた少女の傍以外だと年齢不相応な喋り方をする。

「お二人とも、休憩にしましょう」

麦わらを編んで作られたつばの広い帽子をかぶった女性がバスケットを持ち現れた。

この女性もジェスルにとって謎だ。闘技場に現れたのはこの人物らしいが、あの時の結界の反応は精霊とも人間ともつかない曖昧なものだった。

さらに女王と同じ顔立ち、同じ声。しかも日によって髪の色が銀になったり黒になったりする。もしかしたら複数人居るのかもれない。

柔らかな草の上に座り、ジエスルは渡されたカップの中身をすする。果物の絞り汁を入れた炭酸水が喉を通り過ぎる。

広大な果樹園は場所によって温度や湿度、日差しも違う。おそらく植物の生態に合わせて変えていくのだらうが、具体的にどこをどう管理しているのか分からぬ。さきほどいたオレンジのあたりは日差しが強かつたが、朝方いたベリーの茂みあたりは涼しくらいだつた。

「本当に不思議だな、ここは」

見上げても、太陽は見えず雲もない真っ白な空。風も吹かず鳥の声もない。緑は生い茂り作物は豊かに実っているが、どこかぎこちない雰囲気を感じる。

「不自然なのは仕方ありません。ここは限定された環境ですもの。まだ城の外では作物は育ちませんの」

パウンドケーキを切り分けながらハーシュといふ名の女性が言う。「外は恋しくないのかい」

「え？」

ジエスルのかけた言葉に、ハーシュは不思議そうな顔をする。「あんたと、あの女王もだが、言葉のところどころに白箔国の訛りがある。元々この国の生まれじゃないだろ？」

首を傾げる相手に、ジエスルはさらに踏み込んでみた。

「ヴィルヘルムって男知ってるか？」

「ええ。白箔国の王様ですよね」

「知り合いか？」

「いいえ、直接は存じ上げません」

「そいつ、この国に興味を持っているんだ。ついでにいうと、この国にいるかも知れない、白箔国から来た黒髪の若い女に」

本人の口から詳しく述べたことはないが、彼が収集している情報を総合するとそういうことになる。

「どうして興味があるのでしょつか」

あの普段無口で何を考えているか読めない友人が、王といふ立場

を利用して何をしようとしているのかジェスルは気になっていた。

「さあな。何か貴族の起こした事件に関係しているんじゃないかと

俺は思うが」

白箔国は貴族の権力が強くこれまで見逃された犯罪行為も多かつたが、ヴィルヘルムス王が即位して一転、ことごとく暴かれ、そして裁かれている。すでに白箔国の貴族の半数は大小関係なく罪に問われ、爵位を剥奪されているときく。

ジェスルの言葉にハーシュは一瞬目を細めた。

「…確かに、以前白箔国にいた際、貴族に命を狙われたことがあります。ですが相手の爵位も知りませんし、証言できることは何も無いでしょう。ワタシはこの国の者ですし協力はできかねます」

ハーシュは自分の中にあるファームの記憶を探り、答えた。

「そうか」

パウンドケーキをかじり、ジェスルはシメオンの方を見るが少年は我れ関せずといった様子でオレンジをむいて食べている。以前黒髪の女のことを尋ねた時も、少年は「自分で調べてください」と情報提供を拒絶していた。

「あの女王はどうなんだ。双子か何かなんだろ」「

「の方は…このあたりはまだ国外の方にはご説明できません。今度の会合で承認を得て公開するか、しないかを決定する予定なのです」

ハーシュはそう言った。

意味するものはハーシュ自身の秘密に関わるものなのだが、ジェスルはその秘密にされた対象を女王自身のことだと考えた。仕方が無いといえば仕方がない。

多少髪の色が変化するが一般的女性と何ら変りない（ように見える）ハーシュと、瘴気のような気配をまとい、城のシステムを手に触れること無く操り、特級レベルの精霊達に口頭で命令を下す女王ではどちらが「人間離れしている」ように見えるか。

ジースルはもちろんヴィルヘルムスが「女」を探しているということにも注目していた。思いをかける相手を探している可能性も考えていたが、ここでまだ歳若い彼の価値観が作用した。「物静かなヴィルヘルムスが好きになるのはハーシェのように穏やかな女性に違いない」と。その思い込みと、女王の人間離れした様子が彼に考えの幅を広げさせなかつた。

後になつて彼は詰め寄られ、叫んだ。
「お前、あんな女が好みなのかよ！」
そして彼は締め上げられた。

冷凍していた誕生日祝い用に焼いていたスポンジケーキを出してきて、クリームとフルーツと、砂糖菓子の花で飾る。あとはライナが用意してくれた木の実入りのクッキーと、ハーシエが入れてくれたお茶で出発前最後のお茶会をひらいた。

「ライナ、留守中の国をよろしくね」

「はい。任せてください」

「くれぐれも無茶はしちゃ駄目よ。不安に思つたらすぐみんなを頼るのよ」

「わかりました！」

羽と角をもつ少女がまっすぐに答える。

私の留守中はライナが女王代理として国の守り手につくことになつていて。ベウォルクトがサポートに着くことで城のシステムもある程度動かせるようにしてある。

「シメオン、ライナを守るのよ」

「もちろん、わかってるよ」

「ちょっとすねたように少年が答える。

「ちゃんとあなた自身も無事でいるのよ。あなたがどうかなつちゃうとライナが泣いて泣いて、体調崩すわよ」

「うん…わかった…」

「ゲオルギ、一人を守つてね」

「ギューー！」

黒竜が元気いっぴい吠える。

「ブルム、サポートをお願いね」

『まかせてくださいな！』

銀色の鋭い尻尾を振り回しながら子竜が言つ。

「ハーシュ、もしもの時はちゃんと動けるわね」

「お任せください」

銀髪の女の子が答える。

「サヴァ、みんなを守つてね」

「はい」

黒いこの国の騎士服を着た青年が頷く。

「レーへン、国を代表する精靈としてしつかりするのよ」

「頑張ります」

銀髪の精靈が力を込めて答える。

「ジエスルは…船旅では大人しくしていてよね」

「わかつてゐるつて。またこの国來てもいいか？」

青い髪の青年が愉快げに言つ。

「気に入ってくれたのなら、來てもいいわ。まあ、一人で来れるものならね」

「ベウォルクト、あとは任せたわよ」

留守番組の闇の精靈はいつもどおりの布で隠れた顔で頷いた。

「かしこまりました。ファムさまも、くれぐれも無茶をなさらないよう

「わかつてゐるわよ。なるべく大人しくしてすぐに帰るつもりだし。
それに、私に何かあつてもみんながいるから大丈夫よ」

そう言つと、ジェスル以外の全員が私を見た。な、何よ…

「何かあつてからでは困ります」

レーへンが普段より強い調子で言つ。

「ち、ちゃんと生きて戻るつもりよ…ヴェールは脱がないし、体調
管理も気をつけるわ」

お茶会を終えて荷物の再確認とかをしているうちに沿岸に黒堤組
の船が確認された。

「じゃあ、行つてくるわね！」

私を含めた出発組は港まで直行の列車に乗り込んで、留守番組に
明るく手を振る。城内の駅ではライナとシメオンが手を振りかえし
てくれて、ゲオルギも尻尾で答えてくれた。

「よいしょ」

列車が外へ向かう地下トンネルに入ったところで例の黒いヴェー
ルをまとう。

ヴェールの下はぱつちり正装を着込んでいる。細身の長いベスト
は胸元と首周りの飾りに黒いレースのフリルが追加されて可愛くな
つて、ワンピースは腿のあたりからたっぷりとしたドレープが入つ
て歩きやすいように改良されている。まあ、全部ヴェールに隠れて
見えないんだけれどね…

ハーシェも膝上までのヴェールをまとい、お互に確認しあう。
うん、ばっちらりね。

「色々尋ねたいのは分かるけど、こっちも事情があるのよ
もの言いたげなジェスルの視線に思わず答える。

「無事に帰りたいのならここから先、私たちのやることを詮索しないでいてほしいわ」

私の言葉にジェスルはひとつ息を吐くと、頭の後ろで手を組んで座席深くもたれかかる。

「わかつた。俺個人としてはこの国とは友好的にいきたいからな、特にシメオンの事は言いふらすつもりはない。まあ、『くろの騎士』、騎士サヴァについては俺が黙つても速攻ばれるだろうな。……なんか増えてるけどよ」

ジェスルがうんざりした様子で見た先には、輝きのない黒い鎧とにぶく光る銀色の鎧が座席に並んで座っている。私たちの視線に気づいて銀色のほうが挨拶するように軽く片手をあげた。

一名ともくろやみ国の紋章が入った丈の長いケープを羽織っていて、黒い鎧は鈍く光る灰色に近い銀色を、銀の鎧は深い黒色になっている。黒い鎧の隣に積み上げられた荷物の上にはブルムがとまっていて、退屈そうにあぐびをしていた。

まだ到着までに時間があるわね
この時間を利用して一つ気になつてることを片付けておきましょうか

ジェスルから離れた位置に座り、集中するために眼を閉じる。ハーシュがジェスルに話しかける声が聞こえる、さらにその先へと意識を向ける。

「マルハレータ、元氣にしてる？」

『ああ？ なんだ？』

小声で話しかけると、頭の中で返事が返ってきた。

旅立つたマルハレータ達は、あちこちふらふらしながら赤麗国あたりを旅しているみたいだけど、最近なんだかもめているらしいので、あんまり話しかけないようになっていた。

一応、今度の会合のことはざつと伝えてあるけれど、余裕のあるうちにもう少し状況を確認しておきたかった。

「私たちこれから国を出るのよ。そっちはどう? 順調?」

『あー、海のあれか。ああ。わかつた。あんた弱いからやんと守つてもらえ、ちつ! てめえつ!』

声しか聞こえないから状況がわからないけれど、慌ただしい雰囲気が伝わってくる。

「だ、大丈夫? ピうしたの?」

『後にしろ。おれは、こいつを、殴るので、忙しいつー。』

「どうこうことなのよ…ちょっとロードヴェイク

『ああ? いま建て込んでんだ。くそつ、おい待てこりー。』相変わらずみたいね、あの二人。同じ場所にいるのよね? 何やつてるのかしら

ちょっと心配だけれど、彼らについてはしばらく後まわしにするしか無さそうね…

なんとも言えない気持ちになつて抱えている銀灰色の羽毛のかたまりを見つめると、かたまりは首をかしげて慰めるようにそっと見つめ返してくれた。

「ああ、ファムさまと兄さん達が戻るまでこの国を守らなくちゃ!
! よろしくね!」

背中の翼を大きく羽ばたかせ、腕に乗せた羽毛のかたまりをながらライナが力強く言つ。

「ライナ、羽根は大丈夫?」

別の羽毛のかたまりを肩に乗せたシメオンが心配そうに言った。

「こんなのが、ちょっと痛いだけだよ。また生えてくるし。飛行訓練はしばらく休むけど」

「もしかして、今回の影靈に使っていた羽根はライナさんのですか？」

頭の上に羽毛のかたまりを乗せたベウォルクトがもじやとこう風に尋ねる。

「はい。ファームさまと話しあつて私のを使つたんです」

今まで病弱で、何にも出来なずちっぽけな存在だったライナが自國の守りを任されたのだ。なんとしてもやりとげたい仕事だった。

女王いわく、「留守のサポートとしてあなたの指示もきいてくれる子にしなくちゃね」ということで、どんな影靈にするのか、姿や能力についてを女王や精靈達と話し合ひ、核に使うものを探した。その結果、自分の羽根にしようと決めたのだ。

決めれば後の行動は早かつた。速攻でシメオンの部屋に押し入り、彼がこつそり拾い集めていた彼女から抜け落ちた羽根をひとつかえほど押収した。

「ほんとうはシメオンが集めていたものを貰つたんですけど、新鮮なものもあつたほうがいいと思って、背中からも引き抜いたんです。私じゃ手の届かない所のはシメオンが手伝ってくれました」

最初は嫌がつた彼だったが、脅すようにして頼みこみ、最後は涙目で頼みを聞いてくれた。

「そうですか、羽根を…集めていたんですか？」

ベウォルクトは顔を赤くしつつバツの悪そうに遠くを見るシメオンを眺め、自分の羽根を幼なじみにこつそり収集されていたにも関わらずたいして気にしないどころか黙認していたライナを眺め、首

を傾げる。

頭部に止まつた羽毛も同じように首を傾げた。

「どうあえず、無理やり羽根を引き抜いたのでしたら傷の手当をしあしょうか」

「よお、迎えに来たぜ」

「道中よろしくね、カラノス、黒堤組のみなさん」

地下から出てきた列車から港に向かうと、すでに黒堤組が到着していた。黒ずくめの私の姿を見て、カラノスは片眉を上げて反応する。

「えらく厳重な格好だな」

「意外と中は快適よ」

でも足元は良く見えないので、黒い霧のようなヴォールを突き抜けるようにしてカラノスが差し出してきた手をとり、両手を広げた幅ほどの板を渡つて彼らの移動艇に乗り込む。

手を戻すと、ヴォールは何事もなかつたかのように隙間を閉じ、ふんわりとなめらかな表面に戻った。

私の後にハーシュとハーシュに抱えられたブルムが乗り込み、手ぶらのジェスルが続く。そして最後に黒と銀の鎧が荷物を抱いで乗り込んだ。

「青嶺の坊ちゃんはまだいたのか」

「いて悪いか」

「彼は途中で青嶺国に引き渡す予定よ。はいこれ、目的地の座標と航路」

むつとするジェスルを脇にどけて指先ほどの大さの黒い記憶ブロックをカラノスに渡す。

「あんたら、荷物少なくねえか？ 会場設営担当なんだろ？」

「設営機材はさつき別便で出発したわ。そつちにいろんな荷物も詰めたから、船旅には最小限の物だけ持つてきているのよ。この船で行くの？」

「いいや。銀鏡海を抜けた先に長距離移動用の船が待機している」話をしている間に船は発進していて、波の少ない灰色の海と灰色の空の下を勢い良く進んでいた。銀鏡海はとても静かで、私たちの乗った小型移動艇のエンジンの低い振動音だけあたりに響きわたり、鳥は一羽も飛んでいない。風に煽られながら後ろを振り返ると、暗い雲の下にたたずむお城が小さく見えた。

しばらく進んでいくと、周囲の色が変わった。海は少しづつ波が高くなり、青味が増して、透明感が出てきた。空も雲が薄くなり、陽の光が強くなり、そして――

「青空だわ！」

もう何ヶ月も見ていなかつた青い空が現れた。

思わず声をあげ、めいっぱい背を伸ばして空を仰ぐ。ヴェールは視界をさえぎること無く、本来の世界を見せてくれていた。どこまでも突き抜けるような底のない青い空に、白く輝く雲がちらほらと漂っている。

胸いっぱい空気を吸い込むと、少しべたつく潮風と、生き物の匂いが混じった温かい匂いがする。

「見て！ ハーシュ、魚もいるわ」

海面すれすれを泳ぐ影を見つけて隣に来た影靈に指し示す。

「まあ、こんな広いところを泳いで、疲れたらどこで休むのでしょうか」

船のふちに手をかけて軽く覗き込み、ハーシュは驚いたように言つ。

きらきらと光る波しぶきが眩しくて、思わずもう一度背後を見ると、空と海の間に一箇所だけ暗く雲がかかった黒い小さな大地があり、異質な風景を作り出していた。

「外からだとああいう感じに見えるのね」

「だいぶ慣れたつもりだけれど、陽の光の中から見るとすこく違和感があるわ。普通だつたら近づく氣にも慣れないくらい、陰気ね！「以前はもつと瘴氣が濃かつたので雲に覆われて何も見えなかつたんですよ」

隣に来た銀色の鎧がそつと教えてくれた。

「そのうち、お城からも青空が見えるようにしたいわね」「達成したい目標が増えたわ。

海がすっかり波と青さを取り戻したあたりで、待機していた黒堤組の別の船が現れた。船体の背後の部分が開いて、移動艇ごと中にに入る。

「おおきいわねえ」

家一軒分くらいの大きさだった移動艇が余裕で中に入ってしまうくらい、この船は大きかった。王の間とどちらが大きいのかしら？「長い航行用ですから物資も人員も多く載せられるようでかいんですわ。本隊の母船はもつとでかいですぜ」

黒いバンダナをした男性が教えてくれた。

「こつちだ。あんたたちの客室に案内するぜ。足元気をつけな」

一度足元のパイプにつまずいてこけそうになつたけれど、銀の鎧が支えてくれた。

「航路を見たが、到着まではざつと見積もつて三日だな」

「わかつたわ。予定通りにいきそうね」

客室に案内されて、海図と航路を見ながらカラノスから説明を受ける。

「こちらから渡した資料にざつと目を通すと、海賊の代表は面白そうにくろやみ国使節団を見渡して最後に私に目を戻した。

「今回のあんたは“単なる使者”って訳か」

「そうよ」

「あんたと似たような格好のと子竜は部下。んで護衛か。数は少ねえが“くろの騎士”一体はいい牽制になるだろうな」

「あら、知ってるの？」

「噂はかねがね。太空騎士団の陣地で派手に暴れたそุดな」

そう言つとカラノスは私の後ろを見ながらにやりと笑う。ちらりと背後を振り返ると、黒と銀の鎧がどちらも同じ姿勢で立っている。さらに眺め続けると、黒いほうがちょっと気まずそうに身じろぎした。

「大陸どじりか、海賊にまで名前が広まつてゐるのね

「そしておまけの青嶺国の王子と…。」こいつはあんたらと同じ扱いでいいか」

顔を軽くしかめ、カラノスは人員表をつづく。

「ええ。私たちの管轄下だから部屋も同室でいいわ」

ちなみにジェスルはハーシュと共に客室に一つある寝室と浴室部分の点検をしてまわつてゐる。なんだかもうすっかり私たちに馴染んで行動してくれているのよね。

カラノスは資料をさらに読み進める。

「それで、今回はまたそれぞれ役名がつくわけか」

「ええ。ハーシュとブルムは変わらないけれど、背後の鎧は黒い方がズヴァルトで銀色の方がジルヴァラ。使者の私がナハトよ」

名前を呼ばれるズヴァルトは頷くより、ジルヴァラは優雅にお辞儀をして答えてくれた。

「“黒”に“銀”に“夜”か。見たままの名前だな。じゃあナハト、ゆっくりつろいでくれ。夕食後にも船の中を案内する」

カラノスはそう言って微笑むと、部下を連れて客室を出て行つた。

彼らの足音が聞こえなくなると、私はヴォールの下に隠し持つて
いた、ふわふわの羽毛のかたまりを取り出してテーブルの上にそつ
と置いた。

「さて、通信状況はどうかしら」

眠っているかのように眼を閉じている影靈をそつとなると、明
るい灰色の目が開いた。

丸い頭にふかふかの銀灰色の羽。羽毛に覆われていない足の先と
嘴だけが縁がかった黄色をしている。

影靈はこちらを見上げ、それから一度首を傾げると、その尖った
口をひらいた。

「“接続”を維持中。ベウォルクトに交代しますか？」

「お願いするわ、サユカ」

私の答えを聞いて影靈のサユカはまたゆるゆると皿を開じ、再び
開いたときには瞳の色は暗い銀色になっていた。

「代わりました。ファムさま、お元気ですか」

かわいらしい声が一変して、ベウォルクトの落ち着いた声がする。
「元気よ。さつき別れたばかりじゃない。それとここはもう外だか
らコードネームで呼んでちょうだい」

「かしこまりました。ナハトさま」

「こちらは黒堤組の船の中よ。なかなか良い部屋を用意してくれた
みたいだわ」

「それはなにより。ジルヴァラ、氣密装置の具合は？」

爪のついた細い足を小さく動かし、羽毛のかたまりは銀色の鎧の
方を見る。

「うまい具合に動いていますよ」

見るとジルヴァラは黒い鎧のズヴァルトと共に床や天井の隅に四
角い装置を取り付けている。

「しかし羽毛の姿で喋ってもなかなか様になっていますね、ベウォ

ルクト「

「ふくろうつです」

ベウォルクトではなく、サユカ自身の声が答えた。

ジルヴァラが四角い装置の一つの表面のパネルを操作し、最後に黒いボタンを押すと、空気が震えるような感覚がした。

「これで大丈夫です。ファ、ナハトさま」

今間違えかけたわね。

「ありがとう、ジルヴァラ」

合図を受けてヴェールを取る。

「ふー、やつぱり何も無いほうが気が楽ね」

邪魔になるからと結い上げていた髪も解いて椅子の背にもたれかかり、軽く伸びをして一息つく。

「半日」とに身体データを録つてこちらへ送つてくださいね

銀灰色のふくろうつがくちばしをかちかち鳴らしながら言つ。

「わかつてゐるわよ。ハーシュ、ちょっと来てちょうだい」「はい』

ハーシュに声をかける、寝室からハーシュとブルムを肩に乗せたジェスルが現れた。

「海賊つていい物使つてんだな。アメニティも全部揃つてたぜ」用意してきた石鹼は必要なかつたらしく、ジェスルの手の中で転がされていた。

「そうなの、ありがとうございます。ところでジョスル、私たちこれから最終会議をしたいの」

「わかった。俺はちょっと散歩してくるわ。こいつを連れてけばいいんだろ」

そう言い、青い髪の青年は軽い動きで石鹼を荷物の中に放り込んで肩のブルムを指さす。

「ええ。一応あなたは青嶺国に引き渡すまでくろやみ国の一員扱い

だから、ぐれぐれも大人しくね。ブルムから離れないでちょうどいい

「ああ。世にも稀な銀竜だ。奪われないよう守つてやるさ」

そう言つとそつと指先でブルムの首筋をそつとなでる。竜が好きみたいね。

「ブルムも、ジェスルのことよろしくね」

『おまかせください。こいつがおかしな動きをしたら容赦なく脳天をかち割させていただきますわ!』

銀色の小さな古代竜はそう言つと田を細めて笑うように口を開き、尖った銀色の歯を見せた。

「お、笑うと結構かわいいなお前」

ブルムの言葉、ジェスルに聞こえなくてよかつたわ。

「みんなお前を見るな。あいつなんてヨダレ垂らしてるぜ」
ジエスルは陽気な足取りで廊下を歩き、時折すれ違う海賊に挨拶をしながら散歩を続けていた。

「お前のあんまりの美女つぱりに、俺嫉妬の視線で背中がいてえわ
一人で言つて一人でケラケラ笑いながら階段を登る。

『あんまり冗談が過ぎるとこの肩踏み抜きましてよ』

「おおそんなに興奮して嬉しいか、そうかそうか」

肩にとまる子竜が頭を低くし翼を広げる姿にジエスルは喜んでい
るのだと勝手に理解していたが、実際のそれはごく一般的な竜の威
嚇の姿勢なため、彼らの周囲に近寄る人間はいなかつた。

「俺の隊は竜いなくつてよ、ずっと憧れてたんだ。竜使いは竜に殺
されることがあるつていうが、こんなに大人しいのになんてだらう
な…よつと」

軽快な調子でジエスルが階段を登り終えると、たどり着いたのは
船の甲板だった。とは言つても貨物用の箱や運搬機材などが並べら
れあまり広々とはしていない。

ジエスルは甲板で働く黒堤組の海賊たちの邪魔をしないよう、端
に移動し手すりにもたれかかり、そして水平線を眺める“ふり”を
する。

「おー良い眺めだ。ソルに振り回された時よりずっといい。落ち着いて景色を楽しめる」

それから、雲の様子を確認するかのように、空を眺める。

それ待つていたかのように、小さな物体が接近してきた。親指大の身体に一对の翼を持ち、その全身は金色に輝いている。時折日光を反射して翼が輝く以外は音もなく、そして不自然だった。

「さすがつつーか、抜け目ないつつーか、あいつどんだけ人工精靈ばらまいてんだよ…よく精神が持ってるな」

灰色に塗装された金属製の手すりに頬杖を付き、ジェスルは船と並走する金色の物体を眺める。

金色の物体はしばらくジェスルを観察するかのように近くを飛んでいたが、しばらくすると羽ばたきを強め、空のかなたへ消えていった。

見送った視線で肩のブルムを見れば、子竜はジェスルを横目で見つめていた。

問い合わせるようなまなざしに、ジェスルは口を開く。

「不審がつて俺を始末してもいいぜ。お前の主もその許可をだしてるんだろう？」

子竜は無言で、尻尾を揺らすだけだった。尾の先は菱形のヒレのような形状になつてあり、その銀色の硬質な輝きからかなり鋭利だとわかる。尻尾を一瞬動かすだけでジェスルの息の根を止めることなど簡単だろう。

だがまるで死へ誘導するように揺れるそれを見てもジェスルの様子は変わること無く楽しそうに海と空を眺めている。

「あれは気にはしない。飛ぶことと映像を記録することしかできないやつだ。友人が俺の無事を確認しに来ただけだからよ、お前の主には影響ないさ」

『その言葉、違えることなきよつ』

「あれが美味そうにみえたのか？ 残念だがあれは精霊術だから食

えないぞ」

どうにもすれた会話しかできず、ブルムは諦めてそっぽを向いた。

『こいつ疲れる。さつさと帰って昼寝させていただきたいわ』

「腹減ったんだな。じゃあ厨房に菓子でも貰いに行くか」

苛立たしげに揺れる尻尾に背を叩かれながら、ジヒスルは歩き出した。

「これでひとつおり人間側の確認は終わったわね」

私はこめかみをさすりながら帆布が張られたソファにゆつたりと背を預け、みんなの顔を確認する。

「次をお願い、ベウォルクト」

「かしこまりました」

テーブルの上にちょこんと立つふくろうが言つ。

「我が国は現状では暗病国を上書きしただけの存在です。あらたにひとつの中にして各国を代表する特級精霊の…この場合、国精霊と呼びましょうか。この国精霊の会合で改めて存在を認められる必要があります。これはジルヴァラがやります。精霊同士の顔合わせとしてもいい機会でしょう」

「認めてもらうなんて、大丈夫なのかしら…」

「お任せください。これを見せれば皆納得しますよ」

そう言つて銀色の精霊は、手に持つていたこれまで銀色の箱状の鞄を見せる。

「ジルヴァラの私物つてそれだけよね。けっこつ頑丈そうな箱だけど、危ないものじゃないでしょうね？」

「危なくありませんよ。フ…ナハトさまにひとつてはおなじみのもの
です」

やけに胸をはって銀色の鎧が言ひ。

「国精靈の承認があれば問題が起きたときに精靈経由で他国と交渉
することができます」

「うちは交通の便が悪いから精靈の協力が得られるのは大事ね。と
ころで、青嶺国からもらつた時間表には精靈側の動きは載つていな
かつたわよ？」

「これには少々事情がありまして、別の時間枠で動いていきます。
このあたりは到着後に詳しく説明いたします」

「わかったわ」

手に持つていた資料を置いて、深く息を吐いた。なんだか息苦し
い。

「ナハトさま、大丈夫ですか？ 風色が悪くなっています」
向かいの席に座っていたハーシュが言ひ。

「ちょっと頭が重いだけよ」

すかさずジルヴァラが近づき、ひざまづいて私の額に手を当て、
次に首筋、手首と触れてくる。

「どうも船酔いのようですね」

「私乗り物酔いしない体質なんだけど」

「城を出て時間が経過したので体内のバランスが不安定になつてい
るようです」

ハーシュが部屋に用意されていたピッチャーからグラスに水を注
ぎ、一口飲んで中身を確認してから私に差し出す。

「ありがとう」

ゆっくりと一口飲んで、少し気分が落ち着いた。
ジルヴァラが立ち上がった。

「ちょっとこの船の設備を借りてきます」

「何をするの？」

「薬を作ります。この部屋の警備を頼みます。それと、寝室の氣密装置の数値を上げておいてください」

「わかった」

ハーシュに促されるままに私がソファに横になっている間に、ジル・ヴァラはズヴァルトに後を頼むと颯爽と部屋を出て行った。

黒堤組のマゾロ側近である二カノルは食堂で遅めの昼食を食べていた。

片付けねばならない仕事がまだ残っているのでさつと食べ終えてしまおうと行儀悪くパンを口に放りこみ、スープで一気に流しこもうと口に含んだところで騒ぎの気配を感じた。

その気配がなんなのか把握できず、何気なく開かれた扉の方を見た瞬間音もなく銀色の鎧姿が横切り、思わず飲んでいたスープを具ごと吹き出してしまった。

慌ててテーブルにあつた台ふきで顔をふくと、具の穀物のつぶが鼻に入った痛みで涙目になりながら立ち上がった。

「お、おい！」

単体で廊下をすたすた歩く銀の鎧を追いかけ、その背中に二カノルは声をかけた。

「はいなんでしょつ

声をかければ返事が返ってくるのはあたりまえのことだが、それが出来たことに軽く驚きを覚える。

振り返った鎧はやはり今現在客人として迎え入れているくろやみ

国という小国の使節団の一員だった。大陸の闘技場での“くるの騎士”的闘いぶりを聞き知っている二カノルは、たとえ色違いといえどその鎧姿に威圧感を覚えた。

「あ、あんた、客室は違う階だろ？ 何しに来たんだ？」

周囲の人間は皆こちらを見ているが誰も動かずにいるので、仕方なく二カノルが代表して尋ねた。

「医療器材があるのってどちらでしょ？ つか？」

「なんだ？ 何の用事があるんだ？」

「薬を作りたいんです」

「薬？ 待て」

二カノルは急いで壁についた取つ手を掴むと精霊術を立ち上げマグロの部屋に通信をつなげ、確認を取る。返事はすぐに返ってきた。

「許可が出た。こっちだ」

医務室へ向かう方を指差し、二カノルが歩き出すと銀の鎧も並んで歩き出した。やはり足音はなく、動きも酷く軽い。強いて音がするといえば羽織っているケープの衣擦れの音くらいだ。

「珍しい通信手段ですね」

案内されながら一定の間隔で壁につけられた取つ手を眺めて銀の鎧が言う。

「昔つからなのやつだ。元々はうちの組のシステムだったが、そのうちここいらの一帯の海賊船で使うようになつている」

「技術が漏れたんですか？」

「いや、昔売つたらしい。高値でな」

そうこうするうちに医務室についた。二カノルはそのまま銀の鎧を置いて仕事に戻ろうとしたが、医療員が怖がりしかたなく一緒にいてやることにした。

銀の鎧は断りを入れてなにやら熱心に棚の中や機材を検分している。

「おい、銀の鎧さんよ、おい」

熱心に探しものをしていた鎧は一度田の呼びかけで振り向いた。

「はいなんでしょう。それとできればジルヴァラと呼ばれると分かりやすいんですが」

「わかった。あー、ジルヴァラ、技術者を一人同席させていいか。あんたが何をやるのか興味がある」

これはマ、ヴィロから指示されていることだ。すでに一人こちらに呼んである。

「どうぞ、興味が有るのなら」皿田皿田に。少々薬剤を分けていただきたいので、その御礼がわりにしてもらえると助かります」

「わかった」

いくつかの箱の中をあけ瓶の中の薬剤を手に乗せて確認などをした後、ジルヴァラは田当てのものらしき薬剤をいくつか机の上に並べていく。

それからまた黒いケープを脱いで形を整えると丁寧にたたんで机の端に置いた。

「あといくつか欲しい物があるんですけど

「わかった。何が必要なのか告げてくれ。俺達で取つてくる」

あまうろつかれると騒ぎになると、二カノルが申し出る。

「それはありがとうござります」

食堂から必要な品物をとつてきた医療員と技術員が医務室に到着したのはほぼ同時だった。

技術員は一瞬医務室を占領する銀の鎧を見て驚いた表情を浮かべるが、その手元の動きを見てすぐに顔を引き締め、記録用の術を動かそうとする。

「法術はやめてください。法術は気脈に影響します。この薬に気脈を混ぜたくないんですね」

小皿に薬剤を取り分けていたジルヴァラが銀の仮面に包まれた顔をあげて言う。

「必要なら全部口頭で説明しますから」「わ、わかりました」

技術員は慌ててポケットから手帳とペンを取り出す。

ジルヴァラは二カノルも知っている一般的な手順とはまったく違う調剤をした。

薬剤をのせた小皿を指で軽く叩きながら鼻歌のようなものを歌うかと思えば、無造作に固形の薬剤を一列に並べて眺める。目分量で計量していくにもかかわらず技術員が計りを使って確認すればジルヴァラが言ったとおりの数値が出る。さらには食堂から持つてきた砂糖は鎧の手のひらで混ぜているうちに小さな銀色のカプセルに変わっていたりと、なにがなんだか分からない。

技術員は目の前の出来事に若干涙目になりながらも、必死にジルヴァラのやっていることを理解しようとして質問を続けていた。

「大体はそこにある機材で代用できますよ」

「精霊術だろうか？　だがそれにしては術の発動はなかつた。

「あんた、もしかして精霊なのか？」

もしやと思い、口にだしつつも思わず探知の精霊術を走らせるが、鎧の表面がすべて受け流し判別ができない。

「どうぞお構い無く。設備を貸していただいて感謝します」

銀の鎧はそう言つと薬を詰めた小瓶を大切そうに両手で持ち軽い足取りで密室へ戻つていった。

「作つてたのは何だつたんだ？」

「おそらく酔い止めだと思います。本来あんな短時間で作れるものじゃないんですが……」

「酔い止めが必要になるんだ。人間もいるんだろうな。どいつかわからんが」

乗船時みかけた使節団の姿を思い出しながら二カノルは言った。

「まあ、あれが精霊ってんなら色々納得できるが、とにかく悪い奴

「うじやなさそうだな」

ニカノルは疲れきった技術員と、いまだ怯える医療員と共に銀の鎧が去つていくのを見送った。

その日、ヴィルヘルムスはいつもどおり本の入った鞄を持ち通りを歩いていた。部屋を出たときから気分は沈み込み、灰色の空の下では目に映る何もかもに面白みを感じなかつた。三つ目の角を曲がつた時に足取りは最高潮に重くなり、突如として彼はいつもと反対の方角へ足を向けた。

行き着いた先には広場があつた。中央の芝生と樹木が植えられた区画をぐるりと巡るように石畳の通りがあり、それに沿うようにいくつかベンチも配置されていた。ヴィルヘルムスは芝生の上に鞄を放り出し、行儀悪く緑の草の上に座り込む。

それからポケットに入っていた紙を取り出して眺めた。

4歳の頃、まだ世界が小さな家とその周辺だけだと思っていたヴィルヘルムスはある日突然巨大な建物に連れて行かれ、そこで沢山の子供たちと一緒に暮らすようになつた。小さな家に戻る事は一度と無く、その頃まで彼を世話していた大人たちに会つことも一度と無かつた。

数年経つて物事の判断が自分でつけられるようになつた頃になり、よつやく彼は自分が養子に出された事を知つた。

そして今朝受け取つたこの紙には短い文面で産みの親が事故で死んだことが書いてある。

離れて暮らすようになつて以来一度も会つた事がない相手の死。一方的に渡されたこれに対してどう判断すべきなのか、ヴィルヘル

ムスにはまつたく分からなかつた。混乱とあきらめ、そして疲れの感情とともに紙をポケットへ戻すと、うつむいていた顔をあげる。

そして目に入ったものはこの国ではあまり見かけない黒色だった。

正確には自分とさして年齢の変わらない、黒髪の女性。

広場の片隅で小さな荷車の側に立ち、荷車に乗せた切り花を売っているようだ。道行く人に声をかけては売り込みの言葉をかけている。だがどれもうまくいっていないようで断られてばかりいる。

何人目かに断られた際、立ち去る男性に何かを言われたらしく彼女はしかめ面になる。だがその次に通り過ぎた女性に何かを告げられるべく、とたんに笑顔になつた。

ヴィルヘルムスは遠くからその様子をぼんやりと眺めていた。人はくやしければ怒り、嬉しければ笑うのだ。きっとあの女性は悲しければ泣くのだろう。

響いてくる女性の声にはどこか心地良いものがあり、ヴィルヘルムスはポケットの中身が軽くなつたような気がした。彼はしばらくその女性を眺めると鞄を持つて立ち上がり、本来向かうべきだった学院へ向けようやく歩き出した。

帰り道、思いついてまた同じ広場へ向かうと通りの途中に蜃間見た黒髪の女性がいた。荷車をひっくり返したらしく、通りに散らばる花を慌てて拾い集めている。

ヴィルヘルムスの足元にも切り花が散つていたので思わず一本拾いあげる。それから続けて何本か手にとって顔を上げると、彼女と目があつた。

「あ、ありがとう」

驚いたように目を見開き、女性は言った。深い黒い色をした瞳だつた。

その瞬間なぜだか耳のあたりがむずがゆくなり、ヴィルヘルムス

は何も言わず下を向いたまま花を拾い続けた。

しばらく一人で無言のままに花を回収し、全てを荷車の中のバケツに入れ終わると、彼女は再びヴィルヘルムスに声をかけた。

「あの、ありがとう！　すぐ助かりました」

満面といつていい笑顔でそう言われ、ヴィルヘルムスは硬直した。これまで何かを手伝って言われてきた言葉は「お手を煩わせてしまい申し訳ありません」「すみません」「恐れ多いことでございます」が大半を占め、まっすぐ目線を合わせ、しかも笑顔つきの「ありがとう」「う」には慣れていなかつた。

だから戸惑つてしまつたのだと、ヴィルヘルムスは自分に納得させた。

彼が固まつている間に、黒髪の彼女は荷車の中を漁つていた。

「残り物だけど、お礼をあげる！　好きな花は何？」

そう言つと、ヴィルヘルムスのきこちない答えと共に金色のリボンを手に取り、彼が適当に示した花と他の花や葉を束ねてあつという間に小さな花束を作つた。その手際のよさに、彼は目を丸くした。「どうぞ！」

笑顔と共に受け取つた花束はあまりに軽く、軽すぎて、風が吹くと飛んでいつてしまいそうだったので、ヴィルヘルムスは時々立ち止まって崩れていなか確認しながら花束を壊さないよう慎重に持ち帰つた。

見よう見まねで自室の水差しに水を入れて花束を入れて眺める。それから思いついて一本ほど花を抜きとり、朝受け取つた紙きれとともに窓辺に並べた。

星明かりに照らされたそれらを眺めるうちに彼の紙切れに対する気持ちはひととおり整理がついた。だが別の事に気がついた。

彼は彼女とほとんど会話していない。言葉はかけられたが自分からは一言しか発していない。その事に思い至つてから彼は消灯時間

を過ぎて隣室に注意されるまでずっと部屋の中をぐるぐる歩き回っていた。

「先日は花束をあ、ありがと」
ヴィルヘルムスがその言語を言えたのは数日たつてからだつた。
翌日さつそく広場に行つたのだが彼女が現れるることは無く、それ以来可能な限りこまめに足を運び、ようやく通りを歩く彼女を見つけた。

「ああ、あなたこないだ助けてくれた人ね！」
彼女は自分を忘れていた。

再び笑顔を向けられ、ヴィルヘルムスは今度は耳だけでなく頬までがむずがゆくなつた。

だがそのむずがゆさが心地よく、一言だけしか言葉を交わさないのもおかしいと感じたので多少どきまきしながらも会話を続けることにした。それはたつた一人を前にしているにもかかわらず数十人を一度に相手する時よりも緊張した。

天気の話から始まり、先日の花束に使われていた花の種類について、彼女の一挙一動に全神経を集中し、探り探りで話題をみつけては話を広げていった。

「いつもは花屋でバイトしているの。今月から時々お休みを貰つて広場でも個人で花を売つてるの。あんまり卖れないんだけどね」

そう言って彼女は苦笑する。

「いつもどれくらいの売上なんですか？」

「…まあ？ 売れるだけ売つてるから

「売れ残る分は？」

「えっと、バケツ一つ分くらい」

「花の仕入れ値は」

「うーんと、いつもその時々の値段で」

「原価計算は？」

「げんか…ええと、それ何？」

そこまできてヴィルヘルムスは相手の不安そうな表情に、いつも
の調子で話していた自分に気づいて慌てて取り繕う。

「そ、その。商売の知識をもう少し身につけたら売れりやつになる
と思います」

「ほんと!?

笑顔が一気に近づき、ヴィルヘルムスは頬が痛いほどに熱くなる
のを感じた。

広場の近くにはそこそこの規模の図書館がある。

その事を告げて目的の場所の説明をすると彼女は知らないと言つた。ヴィルヘルムスは案内を申し出た。

始めは遠慮され断られたが、あれこれ説明して彼女を納得させた。自分は何度もその図書館に行っているのでどこにどんな本があるのか把握している。必要な本がどれかも自分ならすぐわかる。それにすぐ近くだしそんなに時間もかからない。散歩ついでだからまつたくもって自分には迷惑でも手間でもない。

「じ、じゃあお願ひ

「ええ」

「私、図書館に初めて入るの」

図書館の重厚な木製扉を抜けたとき、声を潜めて彼女は言った。
「わざわざ柔らかいカーペットを踏むと、何度も足踏みをする。

「誰でも入れるところですが」

「じつて立派な建物ぢやない。彫刻とかいっぱい飾つてるし。貴族とか学者の人しか入れないかと思つてた」

何者かの目線を気にするように彼女はやや身を屈め、ヴィルヘルムスの後について歩く。

「立ち入り禁止の場所もありますが、ちゃんと掲示がでています」
そう言って掲示を指差せば、彼女はちいさく口を尖らせる。あきらかに取り繕うような顔つきだが、不快感は感じず、今度は胸の内がくすぐったくなつた。

ヴィルヘルムスは黒髪の女性とともに目的の書架にたどり着くと、棚の手に取りやすい位置にある厚みの少ない本を一冊手に取る。隣で彼女も似たようなものを手に取り、首をかしげながら頁をめくる。

「これを読めば花が売れるようになるの?」

「内容を理解すれば、ですが」

彼女はひとつの方をじっと睨んでいた。難しい内容なかもしない。見た所彼女は学院に通つてはいないようだし、詳しい解説があつたほうがいいのかもしね。隣で説明でもしようか。

ヴィルヘルムスがそう考へ、そして言葉を発する前に彼女は顔をあげた。

「なんとか読めそう。これ、すぐ役に立ちそうだわ」

その言葉をきいてヴィルヘルムスはどうしてだか残念な気持ちになつた。

「その、いくつか専門用語が出てくるかもしません。ほら、こことか」

そう言いながら彼女の開いている本の一箇所を指さす。近づいた拍子に彼女の髪からふわりと花の香りがした。

彼女はヴィルヘルムスの指差した箇所を見て睨む。それから顔をあげて彼の方を見る。

「あの、わからないところがあつたら、今度質問しても良い? 暫な時でいいから」

遠慮がちな様子ではあつたが、彼女からの申し出にヴィルヘルムスは強い喜びを覚えた。だがそれを表に出さず、当たり前のようになんか自分がそうする事が当然であるかのように振る舞う。

「ええ。わかつたこと、わからないことをそれぞれ書き残すといいですよ。それを見れば説明しやすくなります」

「うん」

彼女はまっすぐにヴィルヘルムスを見て笑顔を浮かべた。黒い髪に縁どられたその華やかな表情を彼は何時までも眺めくなる。胸の

内が暖かくなり、どうしようもなくむず痒くなるのを感じる。それは今すぐその場で声を上げ、爪をたて、搔きむしりたいくらいのものだった。

「やっぱりいい」

我に返ると彼女は暗い表情になつて、本を棚に戻していた。

「どうしてですか？」

ヴィルヘルムスが己のむず痒さに意識を向けている間に何があつたのだろうか。自分が何かしたのだろうかと不安になる。

「私、きっと本を借りれない。親死んじやつたし、この国で親類とかいないし」

彼女はヴィルヘルムスを見ること無く早口でそう言つと歩き出した。向かう先には図書館の出口しかなく、慌てて後を追う。

「後見人は？」

彼女は黙つて首を振る。それからまた微笑んだ。どこにも暗い感情がみえない、すつきりとした笑みをうかべる。

「まあしかたないか。いいの、ここに入れるつて知つただけで充分。時間見つけて読みに来るから」

ヴィルヘルムスもこの国の仕組みをそれなりに知つてゐる。身分を保障する血縁者や後見人がいないとどういった事になるのかも。彼女はずつとこうして生きてきたのだろうか。後見人や縁者がいないうことがどれだけ彼女を孤独で狭い世界に取り残させていたのだろう。なのに、なぜこうも

「教えてくれてありがとう。私のこと、あまり気にしないで。ここを知れただけでも、すごく助かつたんだから」

「大丈夫です。借りりますよ」

気がつけばヴィルヘルムスの口は勝手に動いていた。

「少しここで待つていてください」

彼女を閲覧席へ座らせ一人司書のいる貸し出しカウンターへ向か

い、司書官長に手紙を書き、受付にいた司書官にも同様の手紙を書き、それぞれに自分の名前と、自分に与えられた法術の“印”で王位継承候補である証を記入した。

「ただいま実習の試験政策の一環でこちらを利用しています。あちらにいる女性にこの本を貸してください」

ほとんど即興だったが、ヴィルヘルムスの表情の乏しさから受付は勘ぐること無く、継承候補の印を見て顔色を変えすぐに許可書の発行にとりかかった。

しばらくして彼は許可書と本を持ちしつかりとした足取りで彼女の待つ場所へ戻る。ヴィルヘルムス自身が自分で借りて彼女に渡すことも出来たが、そうすべきではないと感じ、そう感じたままの勢いで行動した。

「尋ねてみたら大丈夫だそうですよ。これを持つてカウンターへ行って手続きをしてきてください」

流れ任せて彼女の右手を掴むと本と許可書を渡す。そのささやかな暖かみと、初めて感じる女性の手特有のやわらかさに彼の心臓は跳ねるように鼓動を強めた。

彼女は目を見開いて受け取り、ヴィルヘルムスと手元を何度も見比べた。

「貸出期間は十日間。規約については発行される貸し出し証の裏に書いてあります。延長は一回だけ可能です。まあ」

彼女は促されるままにカウンターに向かい、しばらくすると貸出証と本を持って戻ってきた。

彼女は何も言わない。そのまま図書館の入り口へ向かい外へ出て行つたので、ヴィルヘルムスは慌ててその後を追つた。もしかして余計なことをして怒ったかもしれない不安になるが、図書館を出たすぐ脇の路地で彼女は勢い良く振り返りヴィルヘルムスを見た。興奮気味に頬を赤くしている。

「ありがとう！ちゃんと借りれたの！あなたの言ったとおりだつた。あなた本当に良い人ね！」

「ヴィルです」

「ヴィルさん！　ありがとー！　本当に！　私はファームっていうのよ」

「ファーム」

その名前を口の中で反芻するヴィルヘルムスの前で、飛び跳ねるよにして喜んでいた彼女はその勢いで腕を広げ彼を抱きしめた。

突然のことに驚き、次の瞬間には途方もない心地良さと、甘く夢見るような香りに包まれ彼は呆然とする。そして彼女との間に固い本が挟まっていた事を直感的に惜しんだ。

どうやら早足で図書館を出たのははしゃぐのを我慢していたかららしい。

「ご、ごめんね。いきなり飛びついちゃって」

「い、いえ」

ヴィルヘルムスが硬直したせいか、彼女はすぐに離れ取り繕つようになに髪を整える。

「そ、それじゃまたね！」

「あ、あの、次はいつ広場にいますか？」

「今度の休日はお店開いてるわ！　暇だつたら来てね！」

「ええ！　ではあの広場で」

「うん、広場でね！」

ファームという名の女性は大切そうに小さな本を抱えて、何度も振り返つて手を振りながら去つて行つた。

思わず手を振りかえして、彼女の後ろ姿が見えなくなつても、ヴィルヘルムスは小路から田が離せなかつた。彼女のいた痕跡を探すかのように立ち尽くしていると、いつの間にか彼の隣には光の精靈が立つていた。

『わざわざ出迎えですか。オーフ』

『このままだと門限を過ぎてしましますよ』

『わかっています。今度の改正課題の題目が決ましたんですね』

『もうですか？　早いですね』

『新しい国営図書館について考えていることがあります。早速今日
その試験的な試みを始めました』
ヴィルヘルムスは真っ直ぐに前を見つめ、今までとは違つものを
含んだその目の輝きにオーフは思わず目を見開いた。

ヴィルヘルムスにとつて次の休日までの時間はとても長かった。黒髪の女性、ファムと会ったときに何を話そうか、彼女は何の話なら興味を持つてくれるだろうかと、その事ばかりを考えていた。ようやくの休日になるとヴィルヘルムスはなるべく自然に通りがかつた風に見えるよう、鞄に本や筆記用具などを入れ、彼女がいるはずの広場に向かう。

「こんにちは」

「あ！ ヴィルさん。こないだはありがとうー、見て、本に書いてあつたことを参考にしてみたの」

そう言うとファムは笑顔で手に持つたカゴを見せてきた。

「あまり見かけない植物ですね」

花もあるが、草もある。このあいだ売っていたものとは違い、華やかさには欠けるものだった。

「今日は普通の店で扱わないものにしてみたの。見た目は地味だけど、これとか料理に使えるし、こっちはお風呂に入れるととってもいい香りがするのよ」

カゴの中はもう半分ほどなくなっていた。

「こっだけの話、実は全部うちの裏庭から取つてきたから元値タダなのよ！」

彼女はヴィルヘルムスの耳元に顔をよせ、得意げに、しかし秘密を打ち明けるように小声で言つた。ヴィルヘルムスは一瞬頭が真っ白になりながらも、なんとか「それは素敵ですね」と返すことに成功した。

「この広場は主婦がよく通るから、こういったもののほうがよく売れるみたい。こんなに売れるの初めてよ。もつ少ししたら売り切れちゃいそう」

彼女が本当に嬉しそうに言うので、ヴィルヘルムスは自分も嬉しくなり思わず微笑んだ。

「それはよかつた」

それから一言二言会話をした後、ファムから待望の言葉が出てくる。「あの、ヴィルさん今田の夕方は暇? できればこないだの本の内容で教えてもらいたい所があるんだけど…」

そう言いながらファムはカゴの底からノートを取り出す。どうやら本の内容について自分でまとめたものようだ。

「ええもちろん」

あまり意気込みすぎないよう、声の調子に氣をつけながらヴィルヘルムスは返事をした。夕方と言わず、今日一日全部あなたのために空けてあります。とはさすがに言わなかつた。

あつという間に夜になり、なんとかファムから次に会う約束をとりつけ、達成感と高揚した感情と共に帰宅したヴィルヘルムは知らせを受けて軍部へ向かった。

「あなたが先日の賊ですか」

案内された個人牢には拘束具をつけた状態でうずくまる男がいた。ヴィルヘルムスは鉄格子越しに声をかけると、持っていたランプに法術で明かりを灯すと足元に置いた。「この気配…あの結界はあなたのかい?」

「そうです」

ぐつたりしていた男は顔をあげる。

「学者の仕掛けの罠にしてはえげつかつたが…こんな坊ちゃんにやられたとは」

ランプに照らされたヴィルヘルムスの顔を見て、男は苦笑する。

「法術の研究部から機密情報を盗もうとする人物に手加減は必要ないんですよ。しかしあれを半分以上ぐぐりぬけた貴方もなかなかの腕前ですね」

「そいつはどうも。で、俺に何のようですかい？」

「あの結界の謝礼は農に引っかかった貴方です。今から私の配下になつてもらいます」

ヴィルヘルムスはその旨が書かれた書類を提示する。

白箔国の法術研究部は大陸でも最先端の研究が行なわれており、そこから情報を盗み他所へ売りつけようとする者は多い。男はヴィルヘルムスが試作した結界に引っかかった唯一の賊だつた。

その結界はあえて目立たず、重要そうにも見えないように作られているが、ある程度隠蔽術や特殊な法術に詳しい者が見ればかなり気になるような造りをしている。そのため引っかかるのは隠密行動が得意で、かつ、かなりの術者だけ。つまりヴィルヘルムスが必要としているような人間だけが捕まるような結界だつた。

男の出身は元々海賊だったが、そのうちより刺激を求めて大陸各地で単独で活動を始め、各国に情報を売つて渡り歩くようになったらしい。

「貴方の実力を買ってのスカウトです。有能に働いてくれるなら後々国の調査機関にも推薦しましょう。貴方の好奇心も満たせますし、それなりの危険とも戯れることができますよ」

ヴィルヘルムスの言葉に、男の表情が動く。

「この国の裏の世界に踏み込む気はありませんか？」

男はふたつ返事で了承した。ヴィルヘルムスはそれを受けて牢番に鍵を開けるよう指示を出す。

「名前は？」

「ルトガーだ」

「私はヴィルヘルムスといいます」

拘束具を外されるとルトガーはしつかりと立ち上がり、渡された書類にサインをした。現れた契約印にルトガーは眉を動かす。

「あんた王位継承候補か」

「そうです。そして貴方は今からその影の手先ですよ」

「そりや楽しみだ。で、俺は何をすればいいんで?」

軽く伸びをしてルトガーは言った。
「平民街にいる、ファムという黒髪の女性の周囲について調べてください」

そう言い、ヴィルヘルムスは機密保持の法術をかけた彼女についての資料を渡す。ルトガーはそれにざつと目を通すと空中に放り、資料は一瞬で煙と化した。

「ただの身辺調査ですが、裏に貴族がいます。それに上級精霊の気配がするので気付かれて消されないように」

ヴィルヘルムスの言葉にルトガーの目付きが変わった。

三日後、指定してあつた時間に、ヴィルヘルムスが地下書庫で一人読書をしていると、音もなく書類を抱えたルトガーが現れた。

「いやあ、旦那の依頼、驚きましたぜ。お陰でいくつか精霊の結界にも遭遇できましたよ」

「それは珍しい。記録は?」

「とつてありますぜ」

「あとで提出しておいてください。それで、彼女が後見人がいない理由は何かわかりましたか?」

ヴィルヘルムスは本を閉じて立ち上がり、ルトガーは目を細めた。

「旦那が気になつてたのはそこですか」

「ええ」

「じゃあ俺がやつかいな精霊に追いかけられる必要はなかつたわけですかい」

やれやれと言いながらルトガーは最寄りの机の上に地図や資料を広げた。ヴィルヘルムスは近寄り、黙つてそれを覗き込む。

「後見人の件、調べましたぜ。この女性、貴族の誘いを断つてます」「貴族の名前は？」

ルトガーは黙つて書類の一箇所を指し示す。

「俺より旦那のほうが詳しいんだろうが、ま、大物ですね」
ヴィルヘルムスが自分で調べても出でてはこなかつた名前だ。案の定、何十人といる王位継承候補の一人である自分ではとうてい太刀打ち出来ない立場の相手だつた。

「こいつに睨まれたせいで元々働いていた花屋を辞めさせられて、今は経営者同士が関わりある別の店で臨時雇い、アルバイトでやつです。店の正式な従業員として書類に名前が載るのがまずいらしくつて訳で。後見人がつかないのもこの存在のせいですね」

「そうですか」

いくら貴族と平民の身分差があるといえど、白箔国の制度は人々のためにひとつおり整えられている。この国で何年も暮らし、働いている人間に後見人がいないというのはおかしな話だつた。

親類も後見人もいないということは身分を証明することができないのと同じ。図書館だけでなく、一般的な生活を送るのでも支障が出でているだろうに、まったくそんな素振りを見せず彼女は笑顔で過ごしていた。

「貴族の誘いというのは、愛人ということですか？」

「まあその類いですが、もっとろくでもないものだつたようです。北の方の貴族は囮う愛人の数で権力を誇示するつてんで。まあ、個人向け娼館みたいなもんでしょう」

ルトガーの言葉に、思わず見知らぬ貴族のもとで無理やり組み敷かれ、泣き叫ぶファムの姿が脳裏に浮かんでくる。この国では一夫一妻が基本だが、貴族が配偶者以外の複数の恋人を持つのはよくあ

る話だ。だが実情についてまでヴィルヘルムスは知らなかつた。
周囲のランプが地下にも関わらず強風に吹かれたようにゆらいだ。

3

調査と貴族（後書き）

精霊のくだりは次回以降の説明になります。

普段はめったに参加しないのだが、ヴィルヘルムスは王宮で開かれる催しもののひとつに出てみることにした。王族や貴族達が交流するために開かれるそれは、高齢の国王があまり参加することがない分、勉学に支障が出ない範囲で王位継承候補者達も自由に参加することができる。

午後の日差しは温かく、何種類もの花が咲き乱れている西の庭園には多くの貴族があり、テーブルからめいめいにひとくちサイズの料理や菓子をつまみつつ、酒の入ったグラスを傾け話に華を咲かせている。そのなかにはヴィルヘルムスのライバルにあたる王位継承候補者達の顔もちらほらと存在している。彼らはこういった機会を利用して自身の売り込みにいそしんでいるのだ。

ヴィルヘルムスは会の始めて顔見知りの貴族や高官の何名かと挨拶と適当な雑談をこなすと、その後は会場を一望できるテーブル席に落ち着いた。そして風景を楽しむふりをしながら貴族達とその愛人を観察した。

夕食会などかしこまつた席ではない、こういった昼間の屋外での催しものは参加できる人数も多いために愛人同伴の貴族も多い。

男女問わず、愛人はひと目でわかつた。衣裳が派手なのだ。豪華な装飾品を身につけ、感情の見えない微笑みをする。貴族たちの権威を知らしめるにはいい宣伝塔になるのだろう。

足を組み、テーブルに頬杖をつきながらヴィルヘルムスは華やかな世界を眺めた。ひととおり観察した後は目の前の光景に興味がなくなり、気がつけば空を眺めていた。

半時ほどそうやって過ごすと、ヴィルヘルムスは主催者に挨拶を

して早々に庭園を退出した。

「よお、ヴィルヘルムス。元気にしてつつか?」

帰り道の途中で王宮の図書室へ寄りついとしたところで、ヴィルヘルムスは声をかけられた。

「ジエスル。こんなところに何の用事ですか?」

かつてヴィルヘルムスが青嶺国に留学していた時に親しくなった青い髪の友人は、図書室につながる王宮の外廊下にいるには珍しい相手だった。

「お前を探してたんだよ。どうしたんだそんな気取った格好して」行儀悪く手すりに腰掛けっていたジエスルは、面白そうに、ヴィルヘルムスの華やかな刺繡が施された上着を眺める。

「園遊会に出てみたんですよ」

「へえ。お前そんなのに出るのか」

「珍しく稀にですが」

「ふうん。ま、変わり者のお前も一応王位継承候補だもんな。俺んとこではそういうのできなきけどぞ」

「どうです、『青嶺国の王子』の身分は?」

「ひつでーのなんの。本当にいきなり放り出しあがつた。俺が何わめいてももう誰も見向きもしないんだぜ? とりあえず身体動かせる仕事を探したんだが、国の騎士団は田茶苦茶出世しにくいらしいんで、結局大空騎士団に入つたんだ」

彼は去年十五歳になり、彼の国の王族制度の一環として、『青嶺国の王子』として扱われることになつた。支援も援助もない生活に色々思い出すものがあるらしく、なにやら顔をしかめている。

「あそこは実力主義らしいですから自由にできるんじゃないですか? まあな。給料は低いが気楽でいいぜ。あちこち出かけられるし。

今回この国に来たのも大空の仕事だ」

そう言つとジエスルは背後の廊下の先を指さす。

「うちに発見された古書の写本を届けに来た。機甲術だつたか？」

前にお前が依頼していたやつだ。で、ほれ」

ジエスルはさりげなく柱の陰にヴィルヘルムスを誘導すると、懷から紐で雑に束ねた紙の束を取り出す。写本の写しのようだ。

「ちやつかりしてますね」

ヴィルヘルムスはそれを素早く受け取ると自分の懷にしまい、代わりにポケットから菓子が入っているような小さな紙の包みをジエスルに渡す。

「需要を把握してるだけだ。こんな大昔のわけわからん術の資料を欲しがるのなんてお前くらいだし。俺金欠だし。…しかしあ前ほんと顔に出ないな。せつかくの俺からの贈り物に少しは嬉しそうな顔をしちよ」

ジエスルは不満そうな口調とは裏腹に、傍目からは世間話をしているように見えるにこやかな表情でヴィルヘルムスの肩に手をかけてくる。

「嬉しいは嬉しいですよ。また期待しています」

ヴィルヘルムスはにこやかとは言えないが、いつもどおりの淡々とした調子で答える。

「あーあー、わかったよ。お前ってそういう奴だよな。で、それ何に使うんだ?」

「人工精靈に使おうかと。原理はわからなくて仕組みくらいなら応用できます」

「そんな事できるのか! 完成したら見せてくれよ

「ええ」

翌日は待ちに待つたファムとの約束の日だった。ヴィルヘルムスは前回と同じように鞄を持ったが、その中に結界を記録する道具も入れておいた。

「こんなにちは

「あ、ヴィルさん、こ、こんなにちは！」

いつもの広場にファームはいた。ヴィルヘルムスは思わず駆け足になりそうなところを我慢し、落ち着いて見えるような足取りで近づく。淡い空色のワンピースが彼女の黒髪にとても似合っている。それを口にしようとしたが、彼女のうわずった声の挨拶が気になつた。彼女はなにやら背後を気にしているようだ。

「どうしたんですか？」

「なんでもないの！　えつと、今日は私、花を売らないの」
それを聞いてヴィルヘルムスは嬉しくなつた。もしかしたら自分の為にわざわざ時間を作ってくれたのかもしれない。そう思つと腹の内がむずがゆくなる。

「それで、その、あのね実は…げつ」

落ち着かない様子のファームが背後に隠すように持つっていた力ゴを覗きこみ、表情を変える。

「げ？」

ファームの発した不思議な声と共に、ヴィルヘルムスの頭に衝撃と痛みが走つた。

「ひいい！　何やつてんのよアンタ！」

頭を抱えてうずくまるヴィルヘルムスの傍に悲鳴をあげながらファームが駆け寄つてくる。そして彼の頭上から何かを掴み上げた。

「…ナンデスカそれは」

「えつと、精霊…です」

ファームの右手に掴まれたそれはよくある民芸品の人形の姿をしていた。布でできており、子供の身代わりとして病や事故を肩代わりしてくれるという、古くからあるものだ。

だがそれは動いていた。ファームに背中を驚掴みされて身動きがとれないらしく、短い手足をじたばたさせている。

「…そんな精霊見たことないのですが…」

こんな街中にいるためには人の作ったものに擬態しているのだろう

うか？

「そうなの？　この国じゃ珍しいのかしら。街の外だとたまに見かけるわよ？　野原とか」

ヴィルヘルムスは頭痛と共に軽くぬまいがした。

民芸品の人形……飛騨高山のむらぼぼみたいたいなものをイメージしてます。あれ超かわいいと思つんだ。

ヴィルヘルムスやファムの暮らす白箔国は周辺の国と比較しても精霊の研究が進んでいるといわれている。精霊術者の数も多いし、国で確認される精霊の数も種類も多い。

そしてヴィルヘルムスはそんな国の高等教育機関で精霊について学んだ。成績も良く飛び級もした。論文を書いたことすらある。だが……

ファムの手から解放されたその人形のような姿をした精霊は地面に降りると小さな足ですっくと立ち、なにもついていない顔をヴィルヘルムスに向ける。

「……」ういした精霊を野原で見かけるのですか？

民芸品が野を歩きまわるなんて、そんな事例いままで聞いたことがない。

「え、ええ。ハーブを探しに出かけた時とか、ぶらついているのを見かけるの。あの、頭大丈夫？」

ヴィルヘルムスの驚きをよそにファムは彼を心配して頭に触れてくる。その指先の感覚に、ヴィルヘルムスは安堵感と、今優先すべきものが何かを思い出した。

「痛みは引きました。ありがとうございます。それで、どうして精霊を連れていたのですか？」

ヴィルヘルムスは頭に触れていたファムの手を自然な流れでそつと触れ、軽く握ることに成功した。

「えっと、あのね、この精霊迷子になっちゃって、街で仲間を探しているらしいの」

ファムは返答しながら握られたままの手を見て首をかしげ、何度

か手を引こうとしたが、彼はファムを見つめたまま手を離さない。

「仲間を探す？」

ヴィルヘルムスが改めて精靈を見ると、なにやら小さな身体で訴えかけているようだ。短い手を振り、飛び跳ね、語りかけてくる。彼は無言で精靈を見つめながら精靈術の初歩である精靈と会話する術を発動してみるが、さっぱり分からなかつた。ということは、人間と意思疎通できない三等級以下の精靈のはずだが、

「ファム、この精靈には精靈術でも会話できないようですが、どうやって意思疎通をしたのですか？」

「あなた精靈術が使えるの？ す、いーーー！」

ファムは受け答えしながら結局手を外すことを諦めて会話を続けだした。そのことにヴィルヘルムスは嬉しくなる。だが何事もない風を装い、そのまま表情を変えず話し続けた。

「ええ、多少はできます」

「あのね、私はいつもこつするの」

ファムは驚き、それから片手でカゴの中から黒い板と白い棒を取り出す。平民が初等教育で使う黒板と筆記棒のようだ。彼女はそれらを精靈に渡す。

「この人にもさつきと同じ説明をしてちょうだい」

精靈は小さな手でそれらを受け取ると一度ファムの方を見て、それから指もないのに器用に筆記棒をつかみ、黒板に何かを描きはじめる。

描きあがつたのは三つの一つだった。そしてそのうちの一つを叩き、次いで自分の身体を叩く。自分のことじー。

「他に一体がいるといつ」とですか

ヴィルヘルムスの言葉に精靈は一度飛びはねる。肯定のつもりらしい。それから今度は三つとも叩き、全身で空の一方方向を指示示す。「みんなでどこかに向かおうとしていたみたいなの」

今度はファムが言つ。精靈はまた飛び跳ね、それから自分の手で

黒板の線をこすつて消そうとするので、ファムが横から布で黒板を綺麗にしてやる。そうして精靈は再び黒板に向き直った。

「今度は地図のようですね」

線だけで構成されているが、この街の区画の建物や道などがひとつおり描かれているものだつた。家の幅と道の幅比率からして、縮尺は市販の地図よりも正確かもしない。

その一箇所に、精靈はぐりぐりと をつけた。

「ここにいるみたいですね」

「ええ。でも移動しているみたい。こいつを描いてもらつたのと違う場所だわ」

ファムは精靈の描いた地図を覗き込むと真剣な顔で言つ。思がけず彼女の顔が近くなりヴィルヘルムスの心臓は鼓動を早めた。二人して小さな精靈の描いた地図を覗き込んでいるので、いつの間にか近くなつていたらしい。

「もしかして、一緒に探すつもりですか？」

もしかして今日仕事を休んだのもそのためなのだろうか？

「ええ」

そう言つとファムは地面に立つて精靈を掴むと、元のようになにかゴの中に入れて上から布をかけた。

「野生の精靈でしょう？ わざわざあなたが手を貸さなくともそのうち自分で見つけるのでは？」

ヴィルヘルムスの問いかけに、ファムはカゴを持ち直し、口を開いた。

「確かにそなんだけどね… ヴィルさんも知つてるかも知れないけど、この街には精靈を一方的に捕まえて利用する貴族がいるのよ」

「確かにそういう貴族や組織の話は聞いたことがありますか…」

「だから、見つけてあげようと思つて。この子小さいから、捕まつたらきっと分解されるか改造されちゃうわ」

そう言ってファムはそつと布の上から精靈をなでる。

「それに一人ぼっちはさみしいのよ？ そのうち何とかするまで一

緒にいるわ

下を向いていたファムは前を向き、笑顔を浮かべた。

「というわけで、この手、離してくれない？」

ずっと繋がれていた手を掲げ、苦笑しながらファムは言つ。精靈が気になつて忘れていたのでしょうかけど、そろそろ離して欲しいと。

「いいえ、離しません」

ヴィルヘルムスは言った。

まだ数回会つただけで、会話もそう多くはしていないが、ルトガーからの情報と、目の前の状況から彼は直感的に悟つていた。

このままではこの人はいつか貴族か精靈の騒動に巻き込まれて自分の手の届かない所へ連れていかれるだろう。確信を持つて、ヴィルヘルムスはそう思った。そしてそんなことは絶対に避けたかった。

「私も同行します。精靈術ができるので、精靈探しの手伝いもできますよ」

「ええっと、一緒に探してくれるのは嬉しいけど、この手は？」

「探知術で必要なんです」

「そうなの？」

「そうです」

もちろん嘘です。

精靈の描いた地図とヴィルヘルムスの探知術もあって、仲間の精靈は半田経たず見つけることが出来た。

同じ民芸品の人形姿をした精靈が三体、ファムのカゴの中でひしめきあつてゐる。動物と違ひ音も声も発さないので、ヴィルヘルムスにとつて少々不気味だつたがファムは気にする様子がなく、むしろ可愛がつてゐるようだつた。

「これくらい小さいと精靈も可愛いものね」

そう言つてカゴの中の三体の頭をかわるがわるなでる。精靈達もどこかうれしそうにファムの手を受け入れていた。

まだ昼前なので、ついでだからと、一人は精靈達が行きたがつていた方角に歩き進んでみることにした。

「おそらく城壁を出ることになりますね」

「そう、じゃあお弁当買いましょうよ。そこにサンドイッチの美味しいパン屋があるの」

手を繋いだままの状態に何も言わなくなつたファムが笑顔で言う。一人はパン屋に入り、中で支払いをどうするかで一悶着あつたが、結局サンドイッチはヴィルヘルムスが、飲み物とデザートのクッキーをファムが買うことで落ち着いた。

「こういうのは自分でお金を出したほうが好きなものを買えていいじゃない」

始めにヴィルヘルムスが全部自分が払うと言い張つた事が不満らしく、ファムは口を尖らせながら精靈達の入つてゐるカゴに詰め込んだ食料を見つめる。

「持ちますよ」

「ヴィルヘルムスが繋いでいない方の手を差し出すが、ファムは力ゴを持つたままだ。

「途中で交代しますよ」

ヴィルヘルムスはそつとファムの顔をうかがう。機嫌を損ねたわけではないらしいが、どうもあまり彼に頼りたくないようになってしまった。

行き先はわかつてるので、一人は手を繋いだままだつたがあり会話なく歩く。

歩きながらヴィルヘルムスは考えた。

もしかしたらファムは貴族や権力者が嫌いなのかもしれない。これまで一方的に、散々な目に合わされてきた存在だ。

そしてもしかしたら彼が平民ではないことに感づいているのかもしれない。

正確にはヴィルヘルムスは王位継承候補者であり、現国王の養子だ。彼らは専用の建物で寮生活と、候補者としての教育をうけており、爵位はないが貴族階級に近い位置にいる。数年経つて彼らの中から王位を継ぐ者が決定すると、即位した王以外はほとんどが国の大要職に就くことになる。結果として大半以上が貴族になるが、彼自身はもしそうなった場合、自分がどう行動するかまだちゃんと考えていいなかつた。

ヴィルヘルムスは自分の身分について当分黙つていようと決めた。彼女に拒絶されるのが怖かつた。

まだ日中なので城壁の門は開いており、発行された許可証を受け取つて二人は外へ出た。許可証は出る際に必要なのではなく、夕方城壁の門が閉まつた後に戻る場合に必要になる。

「口づちの方向で間違いないみたいね」

「一体どこへ行くのでしょうかね」

「さあ…でも、でもわくわくするわね」

小さな精靈達が指示示す方向はなだらかな丘がずっと続いており、負担なく歩いていけそうだった。空も晴れており、時折暖かな風が二人を追い越してゆく。

探知術の口実はもう意味をなしていなかつたが、昼食を摂る時間になるまで、ヴィルヘルムスの手はずつとファムと繋がれたままだった。

「そういえば、ファムはずいぶんと精靈に詳しいんですね」

ちょうどいい場所にあつた切り株に座り、あまり食べ慣れない濃い味つけの揚げ物を挟んだサンドイッチを食べ終え、ヴィルヘルムスは気になつていたことを尋ねた。

「そう？ うち小さい頃から周りに精靈がよくいたから、ちょっと知つてることが多いだけだと思うけど」

ファムは、ヴィルヘルムスの隣の切り株に座り、店から借りた水筒から金属製のカップにお茶を注ぎながら彼を見る。

「小さい頃からですか」

「うーん、あんまり気にしたことなかつたけど、考えてみたらよく家に色んな精靈が来てたわ」

幼い頃の事を思い出しているのか、ファムはカップを両手で持ちながら空を見上げる。

「言葉を離す精靈もいたのですか？」

「ええ。人に似ていた姿のや、人と全くおんなじ姿のもいたわ。大体が言動がとぼけていたり、それでたからすぐに精靈だつてわかつたけど」

最近はあんまり現れないわねと、ファムは首をかしげて言う。

ヴィルヘルムスは彼女の話を聞きながら内心驚いていた。人の姿をした精靈は確実に一等級以上だ。さらに“人に似ていた姿”といふのは人間はめつたに遭遇することがない古い種類の精靈で、等級も定まっていない。いまだにその存在が謎に包まれている。

「もしかしたら、死んだうちの両親の仕事が関係あるのかも。確かに精霊に関わるものだつたらしいから」

カップの中身をひとくち飲んで、ファムが言った。

「ご両親の？」

「うん」

「それは一体…」

興味をそそられたヴィルヘルムスが身を乗り出すようにして続けようとした時、カゴの中で大人しくしていた精霊達が騒ぎ出した。それと共に、まばらに生えた木々がざわめくと共に轟音が響きわり、周囲が突風に包まれる。

「な、何つこれ？」

突然の突風にファムが荷物が吹き飛ばされないよう抑えながら驚きの声をあげる。一人は強風の中で座つていられず、切り株から降りて地面へうずくまる。

這うようにして、ヴィルヘルムスはファムに近寄り、風にあおられる黒髪をかき分けて彼女を守るように肩を抱く。そして感じるものがあり、彼は空を見上げた。

強風は吹き荒れているが空はどこまでも晴れ渡つてあり、あたたかそうな午後の光に満ちていた。そしてその中を何かの群れがゆつたりと横切つていた。かなりの高度を飛んでいるようで一つ一つは指先よりも小さく、細部はよく見えないが大まかにだが様々な大きさや姿形をしているのがわかる。どうやら鳥や虫の群れではないようだ。

「あれは…もしさ精霊？」

「ええ？ あんなに沢山いるのなんて、初めて見たわ！」

ヴィルヘルムスの声にファムも空を見上げて、吹き荒れる風にかき消されないように叫んで叫びつ。

「もしかして…」

ヴィルヘルムスはそう言つとカゴの中で騒いでいた精霊達を外に

出した。三体とも威勢よく地面を駆け、突風にあおられるよつて空中に飛び出し、どんどん上空へ向かつて飛んでいく。

「あの子達、あの群れに合流するつもりだったのね！」

豆粒よりも小さくなつた精靈達は、上空の精靈の群れらしきもの所へ到達すると、そのまま川の流れのようにゅうくつとびこかく向かつて飛び去つていつた。

精靈の群れが見えなくなるとだんだんと強風も弱くなり、しばらく経つと元の穏やかな丘に戻つた。あたりは何事もなかつたかのように静かになり、鳥の声さえ聞こえてきた。

しかしあたりの草花は折れ曲がり、地面には木の葉やファムの抱えていたカゴの中身が散らかっていることから先程の出来事が現実であつたことがわかる。

「あれ…なんだつたのかしら」

ファムは呆然とした様子でようようと切り株の上に座り直すと、風に煽られて前も後ろも分からぬ状態になつていた黒髪を一生懸命に手ぐしで整えはじめる。

ヴィルヘルムスは自身を落ち着けるためにゅうくりとした動きであたりに散つた荷物を拾い集めつつ、先程見た光景を思い返す。

「精靈が集団で移動しているようでしたが…」

カゴに全てを戻し終わると、彼は精靈の集団が飛んできた方向を見た。

「あの方向には…緑閑国がありますね」

今更になつてヴィルヘルムスはファムが保護していた小さな精靈の姿の特徴に気づいた。あの精靈達は皆くすんだ茶に近い赤色の身体をしていた。あれは緑閑国の中身に当たる色だ。では緑閑国から来た精靈達だったのだろうか

群れの規模からいつてもかなりの数の精靈がいたはずだ。まるで集団で移住するかのような規模だった。あの国で何か異変が起きているのだろうか？

「ふふつ、あ、あはははは」

ヴィルヘルムスがじっと空の向こうを見つめて考え込んでいると、突然ファムが声を上げて笑い出した。見るとなにやら彼を見ながらお腹を押さえて笑っている。

「どうしました？」

「し、真剣な顔して、そ、その頭つ！ ふふふ」

涙目になりながらも笑い続けるファムが、苦労しながらポケットから手鏡を取り出し、差し出してくる。大体予想はついていたが仕方なくヴィルヘルムスは受け取り、自分の顔を見た。

短めだがそこそこ長さのある頭髪はてんでばらばらの方向を向いており、適当に切った藁束のよつた有様だつた。手でなでつけ何か戾そうとするがけつこうな時間突風に煽られ続けていたため、なかなか元に戻らない。何度も整えて所々が飛び出してしまう。

「も、もどらない、なんて、あははは」

それがさらにファムの笑いのツボに入つたようで、咳き込みながらもさらに笑い続ける。あんまりに笑つたせいでせつかく整えていた彼女の髪もばらけ始め、風に煽られた時より酷い状態になつているが、彼女は気にせず笑い続けていた。

「ふつ」

その光景に思わずヴィルヘルムスも吹き出してしまつた。

「ふふ、はははは」

晴れ渡つた青空の下、一人はしばらく笑い続けていた。

ようやく笑いが收まり、目元の涙を拭きながらファムが言つた。

「あなたが声を上げて笑うの、初めて見た」

「そうですか？」

まだ余韻で笑いながらヴィルヘルムスは答えた。

「素敵なお顔ね」

そう言つて彼女は嬉しそうに笑い、彼は今まで一番幸せな気持

ちになつた。

「それじゃあ帰りましょ'つか…」

言葉が途切れ、一息つくとファームは立ち上がり、カゴを持ち上げて一步先に歩き出す。

彼女が自分から離れたその瞬間、ヴィルヘルムスの身のうちに圧倒的な感情が押し寄せてきた。

「好きです」

ほとんど、彼の内側から自然に零れ落ちるかのように、言葉が出てきた。

思いがけず、勢いのままに出てきた言葉だったがヴィルヘルムスはこれ幸いとそのまま続けた。

「どうか私と付き合つてくれませんか」

「あ、あの、ヴィルさん？」

先に歩き出そうとしていたファームはヴィルヘルムスの言葉に驚いて振り向いた姿勢のまま固まっていた。ヴィルヘルムスはその顔に触れたくてたまなくなつたが、話を続けるために我慢した。

「いきなり、び、どうしちゃつたの？」

「どうもしてません」

「なんで私？　ふざけてるの？」

ファームは震えていた。それから一気に頬を赤らめ、泣きそうな顔になる。首をかしげながら笑おうとしているが、泣き顔に近い。

「ふざけていません。物凄く大真面目です」

ヴィルヘルムスが一步近づくと、ファームは一步後ずさる。

「だつて、だつて、あなた」

「ヴィルです」

さらに一步近づくと、また一步後ずさる。

「ヴィルさんは…」

「ヴィル、です」

彼女をまっすぐ見つめながら彼は強く言った。そう呼んで欲しかった。

「ヴィ、ヴィルは」

「私は私です。あなたもあなたでしょ？　ファーム

彼はゆっくりと、ファムと目を合わせたまま、だが確實に一歩ずつ距離をつめ、そして彼女をそっと腕の中に収めた。腰の後ろに手をあて、力を込めすぎないように慎重に引き寄せる。

「あなたの事が好きなんです。ファム、どうか恋人になってくれませんか」

彼女に落ち着いているように見えるように、震えそうになる声を必死に抑えながら彼は言つ。

「もし嫌なら、この腕を振りほどいてください。そうすれば私は大人しくあなたの前から去ります。ただの他人に戻り、会うこともないでしよう」

「と、友達じゃダメなの？」

ファムはヴィルヘルムスの顔を見つめ、言つ。

「駄目です。友人ではこうしてあなたの近くで、あなたに触れられない」

友人としてファムに対し一定の距離を保つ。それはヴィルヘルムスにとって耐えられそうにないことだった。それならばいつそ彼女から見えない距離まで引き下がり、遠くから見守りつつ改めて時を待つ事を選ぶ。

「さあ、どうしますか」

「うう……」

ファムは下唇を噛み締めながら潤んだ瞳でヴィルヘルムスを見つめ、それから視線を彷徨わせ、触れるか触れないかどうかの距離にある彼の胸元と、自分の体との隙間を見つめる。

それはどのくらい時間だったのか分からぬが、ヴィルヘルムスにとつては一生のうちで一番長く期待と不安を味わう時間だった。最終的にファムはヴィルヘルムスの上着を掴み、額を彼の胸元へ押し付けた。

「…これは、受け入れてくれるということですか？」

「…」

「ファム？」

上から覗き込んだ彼女の耳は真っ赤だった。返事の代わりに上着をつかんだファムの手に力が入る。

ヴィルヘルムスは安心と喜びに包まれながら彼女を深く抱きしめようとするが、その気配に気づいたのかファムは腕から抜け出され、睨むかのようにまっすぐに彼を見つめる。

「い、いい、いいわ！ 私、あ、あなたの恋人になつてあげる…」

ファムの顔は真っ赤で、声はうわずっていた。

「…はい！」

対するヴィルヘルムスの返事は、彼自身も驚くほど明るく弾んだものだった。

「それで、約束をしましょ！」

そう言つとファムは田元に浮かんでいた涙を拭い、腕を組む。

「約束…ですか？」

「そうよ。お互いのどちらかが、もう無理だと思つたら別れること。その、事情とかそれぞれあるわけだし」

そう言いながら、ファムは驚きのあまり取り落としていたカゴを持ち上げ、再び歩き出す。ヴィルヘルムスはあわてて自分の鞄を拾い上げその後を追つ。

「あなたが無理だと思うのはどういう時ですか？」

「い、忙しくなった時とか？ ほら、仕事で残業とかあるし」

「会えるまで待ちますよ」

彼女を待たせないよう、時間調整には全力をかけようと、彼は密かに自分に誓つた。

「飽きちゃうとか？ 他に好きな相手ができるとか？」

「よそ見する暇なく、飽きさせないよう頑張ります」

ファムは早足で歩き続け、ヴィルヘルムスは必死に答える。お互い会話に夢中で余裕がなかつたらしく、二人はいつの間にか帰る道を外れて何もない草原の真ん中に立つていた。

「な、なんでそっちはかり頑張る話になるのよ。あなたが私に飽きちゃう可能性だってあるんだから。その時はちゃんと言つてよね？」

ファムは振り返り口を尖らせ、ヴィルヘルムスを軽く睨むが、その瞳はやさしさと、さみしさが含まれるものだった。

彼はたまらなくなつて、彼女に駆け寄ると今度こそ目一杯抱きしめた。

「あなたに飽きてしまう事なんてこの先ずっとあり得ません」

ヴィルヘルムスは確信を持つて言った。

会うたびに違う表情をして、その一瞬一瞬から目が離せなくなる人。いつもヴィルヘルムスに驚きと喜びを与えてくれる女性。彼にとって初めて目があつた瞬間から、彼女はただ一人の女性で、そしてまた自分が彼女のただ一人の男性になることを願つた相手。

「愛しています。ファム」

そしてヴィルヘルムスはいつも触れたいと見つめていた彼女の唇に「己」のそれを寄せた。

なんだかグッドエンディング。
後がいろいろあるのでアッサリくつついでもらいました。
そして過去パートはもうすこし続きを読む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8911o/>

くろやみ国の女王

2011年11月27日22時32分発行